

魔法少女リリカルなのは
はINNOCENT ～漆黒の
剣士～

夜神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦20XX年——夏。とあるゲームが衝撃と期待新星爆発のように現れる。その名はブレイブデュエル。その戦いはデュエルと呼ばれ、プレイヤーはデュエリストと呼ばれる。夜月翔はロケテストから参加しているデュエリストであり、ブレイブデュエルの一般解放される日から物語は幕を開ける。※連載中の魔法少女リリカルなのはく黒衣の魔導剣士のINNOSSENT版です。また今作は『暁』の方でも連載しています。

目次

第1話	「ホビーショップT&H」	1	第10話	「星光の殲滅者」	123
第2話	「初来店」	11	第11話	「スカイドツジ」	138
第3話	「カードローダー」	23	第12話	「お茶目なシユテル？」	149
第4話	「乱入者、そしてデュエリスト」	35	第13話	「終盤……だけど」	159
第5話	「放課後、T&Hへ」	45	第14話	「親戚、現る」	171
第6話	「コミュニケーション」	58	第15話	「T&Hのお姉さん？」	181
第7話	「ダークマテリアルズ」	77	第16話	「天才」	189
第8話	「小鴉丸からの招待状？」	96	外伝 第1話	「八神堂の店員」	199
第9話	「八神堂」	110	第17話	「チヴィット」	212
			第18話	「フローリアン姉妹」	222
			第19話	「小学生達の現状」	232

第1話 「ホビーシヨップT&H」

ふと見上げれば、いつもと変わらない青空に大きな入道雲が浮いていた。

空や雲に興味があったわけではないが、ここ最近つい見てしまうのは今日から始まるVR技術を用いたゲーム《ブレイブデュエル》の影響だろう。

ブレイブデュエルは簡潔に言えば、3Dで出来たキャラクターを自分の思ったとおりに動かして遊べるゲームだ。フィールドの中には『空』もあるため、大空を自由に飛ぶという現実では味わえない体験ができる。

このゲームを開発したのは、地方都市にいる研究者。ある意味では変わり者と呼べる人物だ。その人物の名前はグランツ・フロリアンといい、俺の知り合いでもある。知り合いの理由は俺の叔母が開発に携わった研究者のひとりだからだ。彼女も同様に変わり者だと呼べる性格をしている。

「……考え込んでる場合じゃないな」

ここ海鳴市にはT&H、八神堂、グランツ研究所と3箇所ブレイブデュエルが行える場所がある。今日の15時から一斉にスタートするらしいので、行えるという表現はまだ早いのだが。

叔母が開発に携わっていたために、俺はブレイブデュエルのロケテストに参加していた。そのためブレイブデュエルを行える3店舗の人達とは面識がある。今日は開店初日ということもあって、T&Hの店長達から手伝いを頼まれていたのだ。

なぜT&Hなのかというと、他の店舗にはロケテストに参加していた人物や実力者が多くいるのだが、T&Hにはふたりほどしかいない。おそらくだが手伝いの内容は、ブレイブデュエルのエキシビジョンマッチや説明になるだろう。

「すみません、遅くなりまし……」

「はーいごめんよ、どいてどいてー!」

T&Hに入ると、荷物を積んだ台車を勢い良く押す女性の姿が見えた。彼女を避けた店員達は、一斉に文句を言うが、それに対して彼女は「ごめんね」と軽く謝罪するだけだった。

女性の名前はエイミー・リミエツタ。T&Hの店員でありチーフを任されている。開店初日ということでも忙しいのは分かるが、張り切りすぎではないだろうか。転んだりして余計な仕事を増やすのではないか不安になる。

「空回りしなければいいけど……」

「そうね」

漏らした独り言に返ってきた言葉に、俺は声が出た方へと自然に視線を向けていた。

そこにいたのは緑色の長い髪をポニーテールにしている女性だった。彼女の名前はリンディ・ハラオウン。この店の店長を務めているひとりだ。

「凄く張り切ってるみたいだし……シヨウくん、何かあつたらフォロー頼めるかしら？」
「それは構いませんけど……臨時の手伝いにチーフのフォロー頼んでこれからやっていけるんですか？」

「これは耳が痛いわね」

苦笑いを浮かべるリンディさんから店員が身に付けるエプロンを受け取ると、この場に近づいてくる足音が聞こえた。

「あらシヨウくん、よく来てくれたわね」

声をかけてきたのは、プレシア・テストロツサというリンディさんと同じこの店の店長を務めている黒髪の女性だ。アリシアとフェイトというふたりのお子さんがいるのだが、子持ちには見えないほど若々しく見える。まあこの点はリンディさんも同じなのだ。

「約束してましたからね」

「ふふ、今日はお願いな……ただ」

にこりと微笑んだままなのだが、プレシアさんから発せられる雰囲気が変わった。この人の雰囲気が変わるのは、大抵範囲が決まっているのでこれから言われることは予想

できる。

「サボって私の娘達とイチヤイチャしたりなんかしたら……フッフ」

「はあ……そんなことしませんから安心してください」

「それは娘達に魅力がないということかしら？」

なぜそうなる？

正直に言つて、プレシアさんは親バカだ。その部分が出ると面倒臭くて仕方がない。というか、今の場合は否定したら終わるところだろう。否定してもさらにいちゃもんをつけられるのはおかしい。

「プレシア、バカなこと言つてないで仕事に戻るわよ。もう少しで下校時間なんだから」
「バカなこと？ リンディ、何を言っているの。アリシアはもう6年生、フェイトだつて4年生なのよ。女の子は早熟だつて言うし、好きな子が出来てもおかしくないわ。というか、あの子達に好きな子がいないとしても、あの子達を好きな子は絶対にいるはずよ。だつてあの子達可愛すぎるもの……」

黒いオーラのようなものを感じ始めた俺は、この場から離れたいという思いで胸が一杯になった。そんな想いをリンディさんは察したのか、目で俺に自分がプレシアさんの相手をするからと言つてくる。彼女の好意に素直に甘えることにした俺はそつと歩き始めた。

「フェイトっ。どう？ だいじょうぶ？」

「うん、ちゃんと動いてるよ」

手荷物を片付けエプロンを身に着けて作業していると、少女と思われる声が聞こえてきた。視線を向けてみると、金髪の少女がふたり視界に映る。背の高い少女は、ブレイブデュエルを行う際に入るカプセル型のシミュレーターに入っており、もうひとりの少女はその目の前に座っていた。

「もうすぐ稼働だからね、きつちりチェックしておかないと」

「そうだね。楽しく遊ぶためにもできることはしておこう、お姉ちゃん」

座っている少女の言葉にシミュレーターに入っている少女が返事をする。

見た目で言えば、シミュレーターに入っている背の高い少女が姉のように思えるが実際は逆だ。座っている少女——アリシア・テストロツサが姉。シミュレーターに入っている少女——フェイト・テストロツサが妹である。

これは予想だが、背丈や性格の問題もあって初対面の人間はフェイトのほうを姉だと思おうだろう。俺も最初はそうだったのだから。

「あっ……」

ふとフェイトと視線が重なった。俺が手伝いに来るということはリンデイさん達から聞いているはずなので問題はない。

作業の途中ということもあって軽く手で合図してこの場から離れようと思ったが、フエイトの声によって俺の存在に気が付いたアリシアが振り返った。こちらを見た彼女の顔は、先ほどまでよりも一段と笑顔になる。

「シヨウ、おっひさ〜」

手を振りながらそう言った後、アリシアはこっちに来いと手招きをする。

彼女達と面識がないわけでないし、別に行つてもいいのだが……さっきのプレシアさんの様子からして、一緒にいるところを見られると厄介なことになりそうだ。だがここで無視するとあとで絡んできそうだし、そこを見られたほうが面倒臭いような気がする。

「アリシアは今日も元気だな」

「もつちろん。何たって今日の15時から一般解放だからね。元気じゃないと1日持たないよ」

個人的にずっと元気を振りまいている方が疲れると思う。今の状態をキープできるあたり、さすがは子供だ。俺もアリシアとそう年は変わらないし、ただでさえ彼女は相手から実年齢よりも下に見られることが多い。子供と言うと間違いなく怒るだろう。口にしないのが賢明だ。

「まあ今までになかったゲームだから、かなりの人数が来店しそうだしな」

「そうですね。正直凄いと違います、このブレイブデュエル。こんなゲームは初めてです」

「ジャンルは体感シミュレーションってやつだね。ゲームが好きな子はもちろん、身体を動かすのが好きな子も絶対楽しめるよ」

アリシアは会話に参加しながらもきっちりと作業を進めている。何というか、将来は仕事ができる女性になりそうな雰囲気を感じた。余談だが、彼女の傍には愛犬であるアルフと愛猫であるリニス2世がいる。

「うん、私も凄く好きになっちゃったし……色んな人と遊べるといいな」

「その意気、その意気♪ フェイトはうちのエースなんだから頑張ってもらわなくっちゃ」

「う、うん、頑張るよ」

まだ小学生であるはずのふたりだが、考えていることは他の店員と変わらなさそうだ。正直に言っただけの立派な心がけをしていると言わざるを得ない。プレシアさんが可愛がるのも無理はないと思える。

「頑張るのはいいけど、ちゃんと相手に合わせて遊ばないと客が減るかもしれないよ。何たって君はロケテスト全国2位の実力者なんだから」

「は、はい」

「……まあ言ったものの、君なら問題ないと思ってるけどね。アリシアよりしつかりしているから」

「え……まさかここでわたしが貶される？」

くるりと顔をこちらに向けるアリシア。その顔はどことなく不機嫌そうだったので、謝罪の意味を込めて頭を軽く何度か叩いた。こういうことにあまり抵抗を感じないあたり、俺の中での彼女はフェイトよりも子供なのかもしれない。

「シヨウってこういう感じで女の子のことたらし込んでる？」

「もしそうだったら、今頃ここにはいないと思うぞ」

「だよね、というかシヨウって人付き合いとかあまり得意じゃないし」

確かに誰とでも仲良くなれるわけではないが、なぜそれをこの子に断定の形で言われなければならぬのだろう。

「お姉ちゃん、それはいくら何でも失礼だよ」

「大丈夫、大丈夫。わたしとシヨウの仲なら……ね！」

「ん、個人的にはそこまで親しくなった覚えはないけど」

「ええっ!？」

アリシア、俺は人付き合いがあまり得意ではないと君が言ったはずだ。

こんなに驚くということは、内心ではそのようなには思っていないかつたということなの

だろうか。もしそうなら今よりも彼女への心境は変わるかもしれない。微々たるものである可能性は否定しないが。

「結構おしゃべりしたのに……フェイトと一緒にこのお店の注目デュエリストとして頑張ってるからおうと頑張ってたのに」

「……嫌ってるつもりはなかったけど、今ので嫌いになってきたよ」

「ああ〜うそうそ、うそだから!」

立ち去ろうとした俺をアリシアは即座に引き止めた。現状をプレシアさんに見られでもすれば、間違いなく厄介な展開になるだろう。一般解放までの時間も着実に迫ってきているし強引に振り切るべきか。

「分かった、分かったから放してくれ。俺も自分の仕事しないとイケないんだ。時間もなくなってきたるし」

「本当に嫌ってない?」

「嫌ってるならそもそも話したりしない」

「ならOK。じゃあお仕事頑張ってるね」

「はいはい」

「フェイト、次のテストに行こうか」

「うん……」

「フェイト? ……ははくん、もうちよつとシヨウとしやべりたかったんだ」

「ち、違うよ! そんなんじや……!」

「ん? どうかしたのか?」

「な、何でもないです!」

第2話 「初来店」

空には雲が確認できるが、太陽を覆ってはいない。それに加えて今の季節は夏。外の気温は、何もしなくても汗ばんでしまうほど暑い。外にいるのはホビーショップT&Hの手伝いが終わった、からではない。店内には大人から子供まで様々な年代の人間で溢れており、現在進行形で手伝いの真っ最中だ。

中が賑わっているのに外にいることからサボりだと思われるかもしれないが、俺はブレイブデュエルの宣伝と客の案内のために外にいるのだ。充分に仕事と言えるだろう。

ただ本音を言えば、さっさと快適な温度に空調管理してある店内に戻りたい。だが戻ろうとすれば、すぐにバレてしまう。全く元気の衰えていないアリシアがすぐ傍にいるから。

「ねえねえ、次は誰に声をかけよっか」

「誰でもいいと思うけど」

「良くないよー」

振り返ったときは笑顔だったが、俺の返事で気分を害したのかアリシアの顔に怒りの色が現れた。彼女は、腰に手を当てながらこちらに身体を向けさらに続ける。

「変な人とか入れちゃったら、わたし達だけじゃなくてお客さんにも迷惑かけちゃうよ。そうだったら、うちの評判が最悪になっちゃうでしょ」

言っていることは正しいが、外見だけで変人だと分かる人間はそういないと思う。外見で判断が付くのならば、ここに来るまでに通報されて捕まっているだろうから。

「シヨウ、ちゃんと聞いてる?」

「聞いてるよ。というか……誰でもいいとは言ったけど、そこに変な人は入ってない。年齢は問わないって意味で言っただけだ」

「それは分かってるよ」

さらっと返事をしてきたアリシアに苛立ったのは言うまでもない。ただ年下……それも女の子に手を出すような真似をするつもりはない。ゲームなどなら話は別だが。

構ってほしいのか絶え間なく話しかけてくるアリシアの相手をしつつ、店に興味を示している人間を探していると、不意に服を引っ張られた。

「ねえねえ」

「今度は何だ?」

「あの子達とか良さそうじゃない?」

アリシアが示した先には、私立海聖小学校の制服を着た少女達が見えた。

ツインテールの栗毛の少女は、ひとりだけ遅れて走っていたのか息遣いが荒くなつて

いる。彼女の前には微笑んでいる紫がかった黒髪の少女。そして活発そうな印象の金髪の少女がT&Hを見て目を輝かせている。

「よくよく着いたわね。ホビーショップT&H、ここで間違いないわ」

何を言っているかはよく分からないが、看板を見ていることからT&Hに用があつてきたのは間違いないだろう。

普通に考えれば、ブレイブデュエルをに行いに来たと思われる。アリシアの言うとおり、あの子達に声をかけるのは問題がなさそうだ。

「さっそく噂のすっごいゲームを見に行くわよ」

「うん……でもこんなに大きいと探すのが大変じゃないかな」

「お店の人に案内を頼んだ方がいいかもしれないね」

声をかける相手も決まったため、アリシアに声をかけようと視線を向ける。が、先ほどまでいた場所に彼女の姿はなかった。

いったいどこへ行ったのか、と思いい周囲を見渡すと、少女達の元へ向かっているアリシアの姿があつた。こちらの返事を待たずにひとりで行くのならば、何故俺に声をかける必要があつたのか疑問でならない。

「ようこそT&Hへ♪ 何かお探しかな？ お姉さんが案内してあげるよ」

アリシアは太陽のような笑顔で話しかけたと思われるが、少女達の返答は沈黙だっ

た。彼女達の表情を見る限り、お姉さんというところに疑問を抱いているのだろう。はたから見ても少女達よりもアリシアのほうが背が低いため、無理もない話だ。

「お店のロゴが入ったエプロンしてるけど……」

「お店の子……なのかな？」

周囲に聞こえないように金髪と黒髪の少女が会話しているが、何となく会話の内容は理解できる。会話に参加していない栗毛の少女も分かっているような顔だ。ある意味苦笑いとも言えそうな顔だが。

——というか、何故アリシアは小首を傾げているんだ。少女達の思考は大抵の人間が分かることだぞ。これまでに年下だと間違われたことがないのなら理解できるが、俺の知る限りそれはないはずだ。

話が進まない可能性を考えた俺は足早に少女達の元へ近づいて行く。店の手伝いをしていなのか、アリシアの面倒を見ているのか分からなくなりつつあったが、その疑問は胸の深いところに仕舞っておくことにした。

「君達ちよつといいかな？」

声をかけると、全員の視線が一斉にこちらへ向いた。少女達の顔には焦りや緊張の色が見えたが、アリシアと同じエプロンを着けていることで店員だと判断したのかすぐに消えた。

「何だか戸惑ってる感じだったけど、この子が何か変なこと言った？」

「むう、わたし変なこととか言ってるよ」

「君には聞いてない」

俺とアリシアのやりとりが面白かったのか、少女達は笑い声を漏らした。俺達が視線を向けると、怒られるとも思ったのかすぐに口を閉じ返事をし始める。

「あ、あの、別に変なこととは言われてないです」

「ほら、わたし嘘言ってるよ。あつ、そういえば自己紹介がまだだったね。わたしはアリシア。アリシア・テスタロツサだよ」

ちんまりとした少女は、言い終わるところちらに視線で挨拶をするように促してくる。しっかりとしているように思える反面、実年齢を知らない人間からすれば背伸びをしているようにも見えなくもない。

「俺は夜月翔」

「もうちよつと愛想良く挨拶できないの？ そんなんじや覚えてもらえないよ」
「覚えてもらわなくていいよ」

俺は臨時の手伝いであつてT&Hの人間じゃない。下手に覚えられると誤解されてしまうではないか。

「そんなんだから友達が少ないんだよ……で、あなた達は？」

「えっ？ えっと、その……あの」

この子、自由だな。人に悪口言っておきながら他人に名前を聞くか普通。栗毛の子、予想してなかった出来事に完全に焦ってるじゃないか。

というか、そもそも何でアリシアは断定するのだろうか。ロケテストがあつたために顔見知りではあるが、交友関係が分かるほど交流があつた覚えはないのだが。

「高町なのはだよ。はじめましてアリシアちゃん……えっと」

「好きに呼んでくれていいよ」

「あつ、ありがとうございます。じゃあシヨウさんって呼ばせてもらいます」

好きに呼んでくれていいとは言つたが下の名前か……まあ小学生なら下の名前で呼ぶのに抵抗とかあまり感じなさそうだし普通と言えば普通なのか。

「あたしはアリサ・バニングスです」

「月村すずかです。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

印象としては全員礼儀正しい……いや、本来は標準レベルなのかもしれない。アリシアという存在がいるせいか、余計にそう感じてしまうだけで。

「それでは今日は何を見に来てくれたのかな？」

「えっとね……」

「あたし達、噂の凄いゲームを見に来たのよ」

「でもお店が大きくてどこにあるのか探すのに時間がかかりそうだし、案内してくれると助かるんだけど」

「なくんだ、それなら早く言ってくればいいのに」

言いたくても言えなかったのではないのか。何とまでは言わないが……口に出したらまた脱線する可能性が高いし。

アリシアを先頭にしてT&Hの中へと入り、高町達の目的のゲームがある最上階へと向かう。最上階には、体感シミュレーションゲーム《ブレイブデュエル》を中心に人だかりが出来ていた。外に出る前よりも増えているように感じるのは、ゲームをした人間も帰らずにまだ並んだりしているからだだろう。

「最上階のここが当店自慢の体感シミュレーションゲーム、その名もブレイブデュエルが遊べる場所だよ！」

「うわー、さすがが目玉商品だけあって凄い人ね」

「ほんとに……」

バニングスと月村は人の多さに素直な感想を述べる。まあ他の階層に比べれば人数が段違いなので無理もないだろう。ただ高町だけは、人の数に戸惑いや感心を見せる様子もなく口を開いた。

「これってどんなゲームなの？」

「簡単に言うと、3Dで出来たキャラを自分で身体を動かした通りに操って遊ぶゲームだよ。ばくちやるりありてい？　って感じの名前だったかな。そういうゲームの種類に入るみたい」

「な、何だか難しそうね」

「私達にできるかな……」

アリシアの説明に金髪と黒髪の少女は不安げな表情を浮かべる。今の説明では、ブレイブデュエルについてあまり理解できていないだろうからおかしくはない。とはいえ、アリシアを責めることもできないだろう。この手のものは口で説明するよりもやってみたほうが理解できるのだから。

「だいじょくぶ！　わたしの妹も凄く上手いんだから。とりあえず遊んでみようよ」

「それじゃあアリシアちゃん、遊び方教えてもらってもいいかな？」

「かしこまりっ♪」

元気に返事をしたアリシアは、周囲を見渡し始める。停止した彼女の視線の先には、話し合いをしている店員達の姿があった。おそらくゲームのために誰かに協力を頼むのだろう。

関係のない話になるが、少女達はアリシアの年齢を疑っていたはずだ。それなのに彼

女の妹がゲームが上手いという点はスルーした。早く遊びたいから気にならなかったのなら理解できるが、違った場合は予想が付かない。

「それでは助っ人さんを……エイミー」

「ん？ はいはい。呼ばれて駆けつけエイミーさんですよ」

こんな軽いノリで登場するのがチーフだなんて誰が思うだろうか。大抵の人間は親しみやすいお姉さんくらいで、チーフは別にいると思っているのでは？

「右からアリサ、すずか、なのは。ブレイブデュエルを遊びに来てくれたんだって」

アリシアに紹介された3人は一斉にエイミーに挨拶をする。元気な挨拶にエイミーは嬉しそうな表情を浮かべて感想を漏らし、アリシアとハイタッチ。このふたりのテンションについていける自信はない。

「案内を手伝ってほしいんだけど……だいじょぶ？」

「まっかせといて。ちやうど今手が空いてるところだし」

「よし、それじゃあわたし達がばっちり案内しちゃうから。みんなはしつかり聞いてね」

高町達は仲良くかつ元気に返事をした。それを見たエイミーはしみじみと何かを噛み締めているような表情を浮かべる。その間にアリシアは彼女達にそれぞれ2つのアイテムを渡した。

ひとつは《データカートリッジ》。プレイブデュエルのプレイヤーの証であり、様々なデータを記録できる大事なアイテムだ。

もうひとつは《プレイブホルダー》。カードデッキを保存するアイテムであり、例えるならばRPGゲームに登場する道具袋のようなものだ。

「ちなみに、なんと!」

「両方とも開店サービスでプレゼントしちゃうよ!」

「その代わりたくさん遊びに来てくれるとお姉さん嬉しいな」

「ありがとうございます」

「こーやって入りやすくしてお客を掴むのね……上手い商売だわ」

「もうアリサちゃん……」

最近の子供はマセていると聞くが、高町以外の少女達は多方面にマセ過ぎじゃないだろうか。小学生が商売なんて普通は考えないだろう。家の人が商売人なら話は変わってくるが。

「……エイミーが手伝うのなら俺は別のところに行くから」

「え? ダメだよ」

おかしなことは言っていないはずなのに、なぜ即行で否定されたのだろうか。3人いたところで説明できる内容は俺が抜けた場合と大差ないはずなのに。

「理由は？」

「なのは達は初めて遊ぶんだよ。だからシヨウは先輩としてアドバイス」

「適当な返答が来るかと思ったが、まさかのまともな理由だった。」

年齢的にフェイトのほうが適任だと思うが、彼女は今頃エキシビジョンマッチをしているはずだ。アリシアも経験者だが、ゲームの操作をするとなると俺が妥当だろう。

理解した、という返事をしようとした瞬間、遠くから歓声が聞こえてきた。自然と全員の見線が声がする方へと向く。見えたのは興奮して何かを見ている男女達だった。

「いったい何なのよ？」

「ちようどエキシビジョンマッチの最中だったみたいだね。ほら、あそこのスクリーンでプレイ状況が見えるよ」

アリシアが指した先には巨大なスクリーンがあり、黒衣を纏った少女が映っていた。彼女は漆黒の斧のようなデバイスを構え、雷光のような速さで男性プレイヤーに接近していく。

男性プレイヤーが反射的に《シユートバレット》と呼ばれる魔法を放つが、少女は一瞬にして斬り裂いてみせた。距離が近かったこともあって、男性プレイヤーは爆発に巻き込まれてダメージを負う。生じた隙を見逃さず黒衣の少女は、《プラズマスマッシュャー》という砲撃魔法を放った。その一撃によって勝敗が決した。

「あの子、勝っちゃった……」

「相手は大人なのに」

「あの子はね、うちの誇るエースなんだ。すごいでしょ」

バニングスと月村が驚いたことは理解できるが、ブレイブデュエルはゲームだ。ゲームは腕さえあれば勝てるものであるため、子供が大人に勝つことだって充分にできる。楽しみながらプレイしていれば、必然的に考えることも増えるだろう。この子達もプレイし続けていれば、いつかフェイトのように大人に勝つ日だって来るはずだ。

——それにしても、高町って子だけは違った反応をしているな。見惚れているとも言えいいだろうか。おかしな意味で見惚れているのではないとは思うが……いや、彼女とは今日会ったばかりだ。本人がどう思っているかと口を挟める立場じゃない。

「ね、面白そうでしょ?」

「うん」

「それじゃあ、次は必須アイテムを作りに行こうか」

第3話 「カードローダー」

「これは夢のスーパーマシン！」

「その名も《カードローダー》だよ！」

手で対象を注目させながら言われた言葉に少女達は声を漏らす。俺はなぜふたりで言う必要があったのか、と首を傾げる。

……ふと思ったが、俺はアリシア側に立っていいのだろうか。これといって質問されるわけでもなければ、話しかけられるわけでもない。そもそも異性の年上に話しかけるなら、アリシアやエイミーに話しかけるほうが少女達は気楽だろう。やはり俺がこの場にいる意味はないのではないだろうか。

「まずはなのはちゃんからやってみようか」

「あつ、はい」

「ここにカートリッジを入れてみて」

エイミーの指示に従って高町はカードローダーへと入り、カートリッジを差し込んだ。初めて経験する彼女は不安だったのかエイミーに確認を取る。

「これで大丈夫ですか？」

「うん、おっけー。そしたら次に……」

確かこの後は身長に体重、年齢、性別を入力するはずだ。

高町の年代なら身長や性別、年齢も気にしないだろうが、女子は男子よりも早熟と言われている。彼女達も体重を人に知られたくないはずだ。カードローダーは周囲から見えないように作られているが、少し離れていたほうが確実だろう。

「あつ、シヨウドどこに行くの？」

「別に少し離れるだけだよ」

「何で？」

「何で……って、他人の個人情報を知る趣味はないからだけど」

俺の言葉に何を思ったのか、アリシアの笑顔が一段と明るくなった。別におかしなこととは言っていないはずだが。

「うんうん、良い心がけだね。さすがわたしの彼氏」

アリシアの言葉によって一瞬全員の動きが止まった。そして、一斉に視線が俺に集まる。

——こいつ、いったい何を言うんだ。高町あたりは反応が薄いのが、バニングスって子は疑いの眼差しで俺のこと見てるぞ。エイミーなんか……いや、考えてないで耳を塞がなければ。

「か、かかか彼氏!? いいいつから、プププレシアさんは……!」
「エイミー、落ち着け」

「お、落ち着けるわけないよ。かなりの一大事なんだから!」

「一大事でも何でもなし。今のはアリシアの冗談だ。俺にはアリシアの彼氏になった覚えはない」

「いやいや一大事……って、冗談?」

今までが嘘のようにエイミーから慌しさが消える。彼女が視線で再度確認してきたため領き返すと、アリシアへと視線が移った。それに気が付いたアリシアは、舌を少し出しながら謝る。

「ごめんね♪」

「も、もう……驚かせないでよ」

アリシアが根本的に悪いが、エイミーも驚き過ぎだと思う。俺とアリシアの付き合いがどれくらいなのか、彼女はある程度知っているはずなのだから。

とうか……冷静に考えてみると、年齢的にはそう変わらないがアリシアの背丈は小学校低学年の子と大差がない。俺との身長差はかなりのものだ。一緒にいても兄妹や親戚にしか見えないのではないだろうか。

「えっと、じゃあ話を戻そうか。なのはちゃん、身長とか体重をちやちやつと入力し

ちゃって」

「あつ、はい」

「入力し終わったら動かないでね。カメラがトレースするから」

全ての工程が終了し、無事にカードが完成する。出来上がったカードに少女達は興味深々だ。

「これが私のカード……あのアリシアちゃん」

「カードのこと？」

「うん」

「そうだねえ、わたしが説明してもいいけど……そこにいるお兄さんに説明してもらって。あんまり話してないみたいだし」

気が遣える女、と言いたげな顔をするアリシア。別に俺が説明するのは構わないが、最後の部分は余計だろう。そもそも無理に話す必要がないのなら、話しづらい相手と話させる必要はないと思う。

「あのシヨウさん、説明してもらってもいいですか？」

「ああ、構わないよ。それはパーソナルカードと言って一番の基礎になるカード。プレイデュエルではカードの強さが自分の操るキャラクター……《アバター》って言うんだけど、その性能に関わってくるんだ」

説明のときにカードを拝見させてもらったが、高町のカードは制服姿のカードだった。ランクはN+のようだ。

「このN+って言うのは？」

「それはカードの強さを表す《カードランク》だよ」

カードランクには《N》、《N+》、《R》、《R+》の4段階があることが確認されている。この上にも存在しているらしいが、今のところ誰も入手できていない。このこともきちんと伝えて、さらに続ける。

「ちなみにNのカードはコレクション用に近いカードだから、ゲームで使うのはN+以上のものを使うようにしたほうがいいよ」

「それって、この武器みたいなものを持つてるからですか？」

「ああ、それはデバイスといってゲームの説明や君達の補助をしてくれる。簡単に言えば、相棒と言ったところかな」

プレイヤーデータをリセットしない限り自分のことを覚えていてくれるため、親しみやすいように名前を付けるプレイヤーもいる。

ということも言ってもいいのだが、少女達が早くやりたくて仕方がないとうずうずしているのは見ていて分かる。彼女達の気持ちは理解できるため、説明は最低限に抑えるべきだろう。

「N+にはそれ以外にも防具を着たものがあつたりするし、ランクが高くなればアバターの能力も高くなるからゲームを有利に進められる。ランクを上げるにはカードの合成や強化が必要になる……わけだけど、まあ遊んでるうちに覚えるだろうから説明はこれくらいにしようか」

すると、すぐさま少女達は肯定の意思を示す。特にバニングスは何度も頷いていたため、よほどやってみたいようだ。

高町以外のふたりのカードが出来上がると、俺は彼女達をカプセル型のゲーム機に案内し、アリスアとエイミーはそれぞれオペレーターの位置に着いた。きちんと真ん中に立つように伝えると、少女達から元気な返事が返ってくる。彼女達とは今日が初対面であるが、アリスアよりも好感が持てる子達かもしれない。

「あっちの準備はOKだ」

「よっしそれじゃあ……ブレイブシミュレーター」

「スイッチオン♪」

「あつ……私が押したかったのにい」

「にへへ」

エイミーはアリスアの肩を掴んで揺らし、揺らされる側は楽しそうに笑っている。

「バカやってないでさっさと進めろよ」

本来ならば高町達のほうに意識が向くはずなのだが、子供じみたやりとりをするアリシア達にそう言わずにはいられなかった。看板娘とチーフがこんなんで大丈夫なのか、と思いましたが今は言わないでおくことにする。ふたりの意識をこちらに向けると少女達が待つことになってしまっただろうから。

「みんな、どお〜？」

『凄いね。こうふわーっとして』

『まさかゲームで無重力体験しちゃうなんて驚きだわ』

『何だか不思議な感覚……』

高町や月村はいいとして……バニングスは驚いているというよりは楽しそうに見える。3人の中のリーダー格だと思っていたが、案外一番子供なのかもしれない。

アリシアは高町に『3人プレイ』で『フリートレーニング』、ステージは『雲海上空』を入力するように指示した。入力したと返事があると、次なる指示を出す。

「おっけー、それじゃあプレイブホルダーを胸の前にかかかってコールしてみて」

『コレを……』

『胸の前にかかげて……』

『プレイブデュエルスタンバイ！』

コール終了と同時にプレイヤースキャンが開始される。アリーナ上のランダムな位

置に少女達のアバターが生成され始め、続いて彼女達がそれにダイブされていく。

エイミーの前にあるディスプレイに無事全ての工程が完了したと表示されると、目を閉じていた高町達に指示が飛んだ。

『なっ……』

『え……』

『うそ……』

高町達が驚きの声を上げたのも無理もない。彼女達は今仮想とはいえ、広大な空の上にいるのだ。初めてプレイする人間ならば、大抵彼女達のような反応をするだろう。

『なにこれ……どどどどどなってるの、雲の上じゃない!?』

『わわわたしたち、う、浮いてるよアリサちゃん!』

『……』

栗毛と金髪の子、グランツ研究所の人間が見たら喜びそうなくらいに良い反応をしている。ひとりだけ落ち着いているように見えるが、あれはどちらかといえば呆気に取られているといったほうが正しいかもしれない。

「新鮮な反応ありがとう。これが当店目玉、体感シミュレーションの最新鋭にして最高峰の《BRAVE DUEL》!」

「なのはちゃんの視覚・感覚は今、シミュレーター中央のアーリーナにいるアバターと完全

にリンクしているんだよ！」

言っていることはいいとして……なぜ無駄にポーズを決めて言う必要があったのだろうか。そんなことをする暇があるのなら少女達に次の指示を出すなりすればいいものを。

……というか、あの子達もあんまりふたりの話を聞いているようには見えないな。風の感覚を味わつてたり、浮いてることに微妙な心境になつているように見えるし。

「……までくれば、あとは遊びだけだよ」

『……つて言われても』

「大丈夫だよ。デバイスが基本的なことは説明してくれるから」

『あつ、そうでした』

3人はそれぞれデバイスと話し始める。デバイスにも性格があるため、どのような説明の仕方をしているのかは分からないが内容的には同じはずだ。彼女達の性格ならば、理解できなかつた部分はあとで質問をしてくるだろう。

高町は唸つていたかと思うと飛び始め、才能があるのか初めてとは思えないほど自由自在に空を駆けている。月村はそれを見ながらも、デバイスからしっかりと説明を受けているようだ。バニングスはいえば、何を言われたのか剣を振り回しながら高町へと攻撃の意思表示をした。彼女が困惑したのは言うまでもない。

『ちよつと待つてよアリサちゃん』

『問答無用よ！ トリガーを引いてから……鞭を打つ感じで、斬る！』

バニングスが思いっきり剣を振ると、炎の刃が飛び出した。どうやら彼女のカードは炎の属性を持っているようだ。

迫り来る炎の刃に高町は慌てた様子だったが、案外さらりとかわして見せた。思ったよりも簡単に避けれると言ってしまったらしく、バニングスの顔に怒りの色が現れる。ムキなつた彼女に高町は何度も攻撃されるが、ものの見事に全て避ける。

『ちよつと！ 大人しく当たりなさいよ！』

『そんなの無茶だよ！』

『ああもう……これならどうよ！』

一度に3つの炎刃を飛ばすバニングス。さすがにそれには高町も動じてしまったよ。うでその場から動こうとしない。

直撃した——かに思えたが、爆煙が晴れると氷を纏ったシールドを展開している月村が現れた。どうやら彼女が高町を守ったらしい。

『もう、ダメだよアリサちゃん』

『た、対戦ゲームなんだし……いいじゃない練習よ！』

逆ギレしているようにも思えるが、動揺が見えることから先ほどの攻撃はさすがにや

りすぎたのだと自覚しているのだろう。

バニングスと月村は攻撃と防御に別れて練習を始めてしまい、残された高町はデバイスと話し始める。何を言われたのか分からないが、彼女は次第に落ち込んでいく。今のところふたりとの違いを上げるとすれば属性の有無だろう。落ち込んだのはそれが原因なのかもしれない。

とはいえ、高町はすぐに元氣を取り戻し楽しそうにデバイスと話し始める。立ち直りの早さから問題はないだろうと判断した矢先、アリーナ上に乱入者を知らせる表示が現れた。

「何で乱入者が現れ……最後の部分の説明」

「うん、早く始めたくてすっかり忘れてたよ。あはは」

「いや、お姉さんうっかりしてた」

笑って誤魔化すふたりには、怒りより呆れを感じてしまった。看板娘とチーフがこれでこの店はきちんとやっていけるのか不安になる。

とはいえ、そのことを話し合っても仕方がないため、俺はふたりに3人のサポートをするように言ってシミュレーターへ向かい始める。

——開店の初日から乱入なんてするのは腕に自信のあるロケテスト参加組くらいだ。おそらく乱入してきた人間は、同じロケテスト参加組だと思っているはず。そのまま

じゃ一方的にやられる展開になる可能性が高い。

それが原因であの子達に「もうブレイブデュエルをしない」と言われたら堪ったものではない。空いているシミュレーターを探すのは大変だがどうにかしなければ。フェイトはまだ現状を知らないはず。どうにかできるのは俺しかいないのだから。

第4話 「乱入者、そしてデュエリスト」

甲高いコールがなり始めたのは、私がレイジングハートからプレイ時間も限られていたのでアリサちゃん達と遊んだらと助言をもらった瞬間だった。

「な、なにになに？」

「このコールは……乱入者です」

レイジングハートが答えた直後、上空から閃光が降ってきた。最低高度まで到達すると大量の光と煙を撒き散らす。乱入者が現れたことに気が付いたアリサちゃん達は、光が落下した場所へと視線を向けた。

「乱入ですって!!」

「トレーニングモードにしてたはずだけど……」

「……なんだあ？」

現れたのは深紅の衣服に身を包んだ女の子と布を首に巻いたウサギのような人形だった。

「見ねー連中だな……お前らもテストプレイ組か？」

「テストプレイ組？ 何のことよ」

「アリサちゃん凄いや……あの子」

「すずかちゃんが凄いやと言ったのは、おそらくRクラスのカードで通り名を持っているからだろう。所属にベルカとあるが、それが何を意味しているのかは説明を受けていないために分からない。ただ彼女の言動やカードから察するに実力者だとは理解できる。」

「見たところN+が3人……弱いもんイジメは趣味じゃねえが記録更新のためだ。全力でブチのめす！」

「女の子はこちらに向かって接近を始めた。手に持たれているハンマーのようなデバイスで攻撃されるかと思うと……あんまり考えたくない。」

「ど、どうしようアリサちゃん。こっちに来るよ!?!」

「対戦ゲームなんだし乱入上等よ。行くわよフレイムアイズ！」

「アリサちゃんはこれといって戸惑った様子を見せず、剣を大きく振り下ろして炎の刃を飛ばした。すぐさま動くことができたのは彼女の性格が大きく影響しているのだろう。」

「しやらくせえ！」

「女の子は気合と共に迫ってきた炎の刃を殴りつけ破壊してみせた。回避や防御ではなく、破壊というまさかの出来事にアリサちゃんは驚愕する。」

「お返しと言わないばかりに女の子は鉄球を数個出現させ、持っていたデバイスで打ち

出した。爆発的な加速を得て接近してくる鉄球にアリサちゃんはどうすることもできずに直撃。爆発が収まったときには、彼女は宙に浮いたようにぐったりしていた。

「アリサちゃん！……はれ？ 何だか力が抜けて……」

アリサちゃんに続いてすずかちゃんも倒れてしまった。すずかちゃんは何もされていないように見えたけど、ウサギのような人形が近くに居るのは見えた。アレが何かしたのだろう。何をしたのかは現状では良く分からないけど。

「何だ、やっぱ大したことねえ……あとはお前か」

「どっ、どうしようレイジングハート」

「私を相手に向け、こちらのスキルを使ってください」

私はレイジングハートの指示に従って、先端を女の子の子に向けながらスキルを使用する。

「行くよ……ダイバインシューター！」

光の球体が4つ現れたかと思うと、女の子に向かって飛んで行く。避けられることはなかったけど、すずかちゃんがアリサちゃんの攻撃を防いだときのようにシールドを展開されてしまいダメージを与えることが出来なかった。それどころかすずさま反撃されてしまい、今度はこちらが飛来してくる鉄球の対処をしなければならぬ。

——今の私にできること……それは、レイジングハートが褒めてくれた空を飛ぶこと

を全力でやることだけだ。

動きを観察しながら逃げ回り始めると、鉄球に誘導性があつたこともあつて3個が衝突し自壊した。その調子で事は進み、全ての鉄球を自壊させることに成功する。避けきつたことに喜びを感じた私は、レイジングハートに話しかけた。

「やったよレイジングハート」

「上です！」

警告が聞こえた瞬間、私の身体は強い衝撃に襲われて吹き飛んだ。アリサちゃん達同様に動けなくなるかと思つたけど、どうにか生き残ることが出来ていた。

このまま何も出来ないで……負けちゃうの？ 一方的にやられて……そんなのは

「案外しぶてーなお前。だけどこいつでしまいだ」

そんなのは嫌だ！

と、強く思つても今の私には負けが決まるまでは諦めずに頑張ることしかできない。勝つための方法は残念ながらないと言える。

そんなことを考えていると、突如どこかで聞いたような声が私に話しかけてきた。

『制服の女の子、《ストライカーチェンジ》を使つて』

「ストライカー……チェンジ？」

『君のデッキにはN+のカードが2枚入っているはず。その2枚を出して……あとは君

のデバイスが補助してくれる』

誰かは分からないけれど、私は疑問を抱くことなく指示に従った。

すると制服姿だった私のアバターが白を基調とした衣服へと姿を変え、レイジングハートも槍を彷彿させる形へ変化していた。

「んげ!?! あいつ、セイグリットタイプだったのかよ。どおりでバカかてえと思った……って、白とか超の付くレアカラーじゃねえか!?!」

女の子が驚愕している理由は今の私には分からない。ただ先ほどまでよりも戦うことができないことは何となく理解していた。レイジングハートの指示に従って最後のカードを使用する。

「デイバイイン……バスター!」

先ほどの攻撃よりも直感的に強力だと分かる光線が女の子を飲み込み、爆発するのと同時に大量の煙を発生させた。放つ瞬間に見えた焦った顔から、もしかすると勝つことができたのかもしれない。

「勝った……の?」

「…………てめええええ!」

緊張感が途切れてしまった瞬間、煙の中から怒りを顕わにした女の子が現れた。多少なりともダメージを与えられたと思っていたけど、先ほどまでと変わっているのは帽子

の有無だけ。

急激な緊張と戸惑いで身体は硬直してしまい、言葉を発することしかできなかつた私は女の子が眼前にまで迫つたとき目を瞑つた。次の瞬間に来るであろう衝撃に備えて。

「……………あれ？」

いつまで待つても衝撃は襲つて来ず、何か硬いもの同士がぶつかるような音が聞こえた私はそつと下ろしていたまぶたを上げた。

「あつ…………」

私の視界に飛び込んできたのは、自分よりも頭一つ分ほど背の高い人の後姿。どちらかといえば細身の体型をしているけれど、その背中を見た私の中には安心感が芽生えていた。

シヨウ・ヤヅキ。所属はミッドチルダであり、使用しているカードはRクラス。黒のコートに同色のレザーパンツ、手に握られている剣型デバイスも黒。それが元になっているのか彼の通り名は《漆黒の剣士》になっている。

「悪いけど、このへんで終わりにしてもらえないか？」

一切焦りのない落ち着いた声が発せられた直後、金属音が響きシヨウさんと女の子の距離が開けた。彼の姿をきちんと見た女の子は驚愕の表情を浮かべた後、強気なように楽しそうな笑みを浮かべる。

「へ……冗談言うな。お前の乱入は予想外だったけど、ロケテストの時の借りを返す絶好の機会なんだ。そっちのヤローとまとめてぶっ飛ばしてやるぜ！」

「ヴィータ、お前はロケテストの全国ランキングで6位になった実力者だろ。初プレイの初心者不倒すのは気が引けるはずだ」

「お前だって相当な実力……初心者あ?！」

好戦的な顔から突如発せられた大声にはさすがに驚いた。

その直後、アリーナ上にスクリーンが現れてアリシアちゃんとエイミイさんが申し訳なさそうに謝罪する。どうやら現状に至ったのは、私が適当に押ししてしまったボタンが原因だったようだ。説明してくれなかったのも悪いとは思うけど、疑問に思ったのに聞かなかつた私も悪いので何も言わない。

この場にいる全員が事情を理解したものの、同意もなしに対戦をやめることはマナーを考えると良くないと言える。

とはいえ、いきなり戦いが始まると不安だった私は無意識にシヨウさんに隠れながら女の子に話しかけていた。

「えっと、その……」

「……油断してたとはいえ、あたしに一撃入れたんだ。次は手加減しねえかな」

「戦いたいなら俺が相手をしてもいいが?！」

「気が削がれたし、またの機会にする。お前に勝つにはもつと準備したほうがいいだろうしな」

女の子はそれを最後に消えてしまった。初めての光景に戸惑ってしまった私は、シヨウさんのほうへ自然と視線を移す。彼は穏やかな表情を浮かべており、手馴れた動きで剣を振るって背中にある鞘に納めた。この人にとっては何気ないことなのだろうが、スクリーンで見たあの女の子と同じように私は見惚れてしまう。

「ん？ その、ごめんね」

「え？」

「ちゃんと説明してればこんなことにならなかつたからさ……ブレイブデュエルを嫌いにならないでくれると助かるんだけど」

シヨウさんはアリシアちゃん達以上に気にしているのか、こちらの様子を窺うような顔で私のことを見ている。

——初めてのデュエル……びっくりしたり戸惑ったりしたし、あの子に負けそうになつたときは悔しかった。でも

「あの、楽しかったです。凄く楽しいって思いました。これからもやりたいです！」

「……そっか」

彼が穏やかな笑みを浮かべた瞬間、ちよつとだけ恥ずかしさのようなものがこみ上げ

てきて視線を外しそうになってしまった。今日会ったばかりなので緊張でもしているのだろうか。

「なら、今日から君もデュエリストだね」

「デュエリスト？」

「ああ、そういえば言っただけだね。プレイデュエルの戦いのことはデュエル、プレイヤーのことをデュエリストって言うんだ」

そっか……私もデュエリストなんだ。

胸の中に様々な想いが込み上げてくる。その中には、いつの日かさっきの子とまた対戦したいという思いもあった。

「……それとさっきの子のことなんだけど、許してあげてくれないかな？ 勝負にこだわりすぎるところがあるけど善い子だし、悪いのはこっちだからさ」

「あつ、はい……あ、あの、ありがとうございました」

「……言っただろ、悪いのはこっちだって。礼はいらないよ」

シヨウさんの返事は素っ気無かった。でも表情を見る限り、素直になれない性格なのか照れ隠しでそう言ったように思える。

友達であるアリサちゃんにも似た一面があるため、ちよつとだけ可愛らしく思ってしまった。年上、しかも男の人にその手のことを言うのはダメだと思うので口にはしな

かったけど。

不意にシヨウウさんは私から視線を外したけれど、すぐにこちらに戻した。どこことなく優しい表情を浮かべている彼はいったい何を考えているのだろうか。

「プレイ時間も残り少なくなってるし、外で君達に謝りたそうにしてる子がいるみたいだからさ……一度外に出てもらっていいかな？」

視線をシヨウウさんからスクリーンのほうに移すと、アリシアちゃんによく似ている女の子が申し訳なさそうにしていた。おそらくアリシアちゃんのお姉さんで、先ほど私に指示を出してくれた子だろう。

「はい、分かりました……あの、あとでまた出来ますか？」

「それはもちろん。まあ少し待ってもらおうことになるだろうけどね」

第5話 「放課後、T&Hへ」

ブレイブデュエルの一般解放が行われた次の日の放課後、俺はホビーシヨップT&Hへと歩いている。T&Hに向かっていている理由は、昨日は手伝いをしていたためにほとんどデュエルを行うことができなかったからだ。

今日も大勢の人間が来店するだろうが、昨日と違ってプレイヤー同士で教えあったりするはずだ。店員達も多少は昨日よりも楽が出来るのではないだろうか。

だが、また手伝ってくれと言われる可能性は充分にある。ただ昨日見ていた限り、T&Hに実力のある人間はテストロッサ姉妹くらいしかいない。そのためデュエルをしたとしても本気でやることはないと思われる。ブレイブデュエルに関するこの手伝いならば引き受けるのも悪くない。

「……あれは」

前方にどことなく見覚えのある後姿が4つ見えた。

1つは……背丈や髪の特徴からしてフェイトだろう。残りの3つは、昨日出会ったあの子達ではないだろうか。

かばんを背負ったままの少女達は、歩いている方向と昨日の様子から判断してT&H

に向かっていると思われる。小学生が放課後にゲームをプレイしに行っても良いのだろうか、と思いましたが、中学生でも大差がないといえなかったため、すぐに頭の中からその思考は消し去った。

追いつくつもりはないのだが、歩幅の違いからか徐々に距離は縮まっていく。距離を保とうかとも考えたが、下手をするとストーカーに間違われるかもしれない。そもそも、別に知らない相手でもないため話しかけられたなら話せばいいし、何事もなく追いついたのならそれはそれで問題ない。

「まさか会った次の日に転校してくるなんてね〜」

「しかもうちのクラス。すっごい偶然だよね」

「うん、嬉しいな」

どうやらフェイトは高町達と同じクラスになったらしい。その事実には安心感を覚えている自分がいた。他人の俺が思うのもあれだが、個人的にフェイトのことは心配だったのだ。彼女はデュエル中は凜とした印象なのだが、普段はどちらかといえば内気な子だと言える。そのため、学校やクラスに馴染めるのか不安に思ってしまったのだ。

昨日出会ったばかりだが、あの子達が悪い子ではないのは分かる。フェイトも彼女達と一緒に楽しい学校生活を送れるだろう。

これは余談だが、フェイトが転校したということは必然的に姉であるアリシアも転校

していることになる。だが彼女のことは、性格が性格なので全く心配していなかった。

「私も……転校はやっぱり不安だったから。みんながいてくれて凄く嬉しかった」

「フェイトちゃん……お家も近いみたいだし、これからは一緒に学校に行って、一緒にお昼ご飯を食べて、一緒に遊ぼうね」

フェイトは穏やかな笑みを浮かべていて嬉しそうに見える……が、隣にいる高町のほうが嬉しそうに見えるのは俺の気のせいだろうか。現状では横顔しか見えないわけだが、何とか発せられている雰囲気はバニングスや月村とは明らかに違うように思えるのだが……。

「それにしても、今のフェイトってプレイブデュエルの時とまるつきりイメージ違うわね」

「そう……かな？」

「初めて見たフェイトは凄くデユエリスト！ って感じだったし」

「大人の人に勝ってたもんね」

大人だからといって、全国ランキング2位のフェイトに勝てというのは厳しい注文だろう。

それにしても、会話が充分に聞こえる距離まで近づいているというのに気づかれないうのは、俺の存在感がないということだろうか。まあ存在感があるほうだとも思っ

てはいないし、話すことに夢中になっているようなので別に構いはしないのだが。

「なのには至っては、初めて見たときとかぼーつとしてたわよね。学校でもずっとフェイトのこと見てみたいだし」

「いやっ、あの……カッコよかったなあとか綺麗だなーって考えてただけで」

否定しようとしたんだろうが、この子墓穴を掘ってるな。いきなりのことで動揺して言ってしまっただけなのだろうが。

「う、うん、ありがとう」

「うう……もうアリサちゃん、ここでそれはひどいよ。私、フェイトちゃんのことばかり考えてないのに」

「へえ……ああ、それもそうよね。なのにはあの人もいたわけだし」

「あの人？」

フェイトのことばかり考えていないと自分で言ったのにも関わらず高町は首を傾げている。新しい人間であるバニングスに心当たりがあるのだから、彼女自身が知らないことではないはずだが……天然なのだろうか。

「何とぼけてるのよ。シヨウさんよ、シヨウさん……あんたにとって王子様みたいなものでしょうか」

「にやっ!?!」

奇妙な驚きの声を上げた高町は顔を赤く染めているのだろう。耳まで赤くなっているのだから、顔が赤くなっていないはずがない。

——今のくらいで赤くなるなんて純粋なんだな……何か俺まで恥ずかしくなってきた。そもそも王子様なんて柄じゃないし。というか、この子は俺の存在に気づいて一緒にからかっているんじゃないのか？

「あの子」

声をかけると、少女達の視線がこちらに集まった。バニングスは慌てた素振りを見せながら声を上げ、高町は体調が心配になるほど赤面する。

「シヨ、シヨウさん、いいいつの間に!」

「さつきから私達の後ろにいたよ。ねえ？」

「うん……私が気が付いたのはさつきだけだ」

「何ですって!?! ……って、さすがにフェイト、知ってたんなら教えなさいよ!」

バニングスはやる側かと思っていたが、実際はやられる側なのかもしれない。この反応の良さを見ると、俺でもからかってみたい衝動を覚えるのだから。

それと……月村って案外性格悪いんだな。見た感じ大人しそうで気遣いのできそうな子だから少々意外だ。

「シヨウさん、あの……カッ、カッコいいとは思いましたし、王子様と言われたら王子

様っぽいなあって思ったりするんですけど！　　って、そうじゃなくて……いや思ったのは本当であって！」

「……とりあえず落ち着こうか」

落ち着いてもらわないとこちらとしても困る。あまりこの手のやりとりはしてきたことがないため、正直に言って恥ずかしい。救いなのはこの子が年下であり、小学生であるということだ。同じ年だったならば、俺まで赤面していたかもしれない。

「自分で言っておいてなんだけど……ここまでやられると面白さを通り越して同情するわね」

「だったら最初からやらないであげようよ」

「……まで反応するとは思わなかった………というか、すずかが早くシヨウさんがいるって教えてくれてたら言っただけじゃなかったわよ」

あそこのふたりは仲が良いな。パーソナルカードは炎と氷っていう正反対の属性持ちだったのに……って、このへんは関係ないか。

でもふたりの性格の方向は明らかに違うよな。下手したらいじめられる側といじめられる側になってもおかしくなさそうなくらいに……高町がいたことでそうはならなかったのかもしれない。とはいえ、目の前の光景が現実であり、もしものことを考えても意味がない。

「そういえば……あのシヨウさん」

「ん？ 今度は俺のことをからかうの？」

「ち、違います。そもそもシヨウさんって、からかわれてもあつさりかわせるタイプじゃないですか」

そのようにはつきりと言われるほど接してはいないはずだが……アリシアとのやりとりを見ていたら、そう思われてしまつてもおかしくはない気がする。ただ

「バニングス、君に教えておいてあげるよ……人っていうのは慣れる生き物なんだ」

アリシアに八神堂の主に叔母、真面目そうに見えるあいつも似たタイプだよな。意味は違つてくるけど、プレシアさんも面倒なときがあるし……俺の知り合いつて厄介な人間ばかりな気がしてきたぞ。

負の思考が駆け巡りそうになったとき、ふとバニングスの視線に気が付く。彼女の瞳から伝わってくるのは、元気を出してくださいといったニュアンスのものだ。

「あの……えっと、その、さっきも言おうとしてたんですけど、私達の相手していいんですか？」

言動から察するに、俺は完全にこの子に気を遣わせてしまっている。大人びた一面がある子だとは感じていたが、小学生に気を遣われるというのは年上として精神的に来るものがある。

「気を遣わせて悪いね」

「いえ……その、それを抜きにしても気になってたことですから」

苦笑いを浮かべる彼女を見ながら思考を走らせると、店員ではなく手伝いだということと言っていないなかったことに気が付く。事実を伝えようとした瞬間、ほんのわずかだが俺よりも早く口を開いた人間がいた。

「アリサ、あのね……シヨウさんはT&Hの店員じゃないよ」

「え、そうなの？」

「うん……シヨウさんはロケテストに参加してたデュエリストのひとりなんだ。それに昨日はブレイブデュエル的一般解放。どれくらい来店するか分からなかったから手伝ってもらったんだ」

フエイトの説明にバニングスは納得の表情を浮かべる。

この表情を見た限り、今以上の説明は不要だろう。まあバニングスは聡明な子のように思えるし、フエイトの説明は要点を抑えつつ簡潔な説明だったので補う部分はこれといっていないのだが。

そんなことを考えていると、誰かが隣に來た気配を感じた。視線を向けると、こちらを見上げている黒髪の少女が視界に映る。

「どうかした？」

「えっと、ふと気になったことがあるんですけど質問いいですか？」

「どうぞ」

「フェイトちゃんは確かロケテストで全国2位だったんですよね。シヨウさんはどれくらいだったんですか？」

俺がフェイトよりも下だった場合、中学生が小学生に負けていることを意味する。普通に考えれば、それは相手に嫌な思いをさせかねないだろう。

月村は純粹に気になっているだけであって他意はなさそうに見えるが……こんな風に深読みするからアリシアなどに色々と言われてしまうのかもしれない。

「俺には全国で何位って称号はないよ」

「そうなんですか？」

「ああ……君達よりも経験があるってだけだから、王子様みたいな言動を求めないでくれると助かるよ」

「それって恥ずかしいからですか？」

「まあね。そういう扱いを受けたことがないし、そもそも柄じゃないから……正直、俺よりもフェイトのほうが王子様っぽいだろ？」

月村はきよとんとした後、くすくすと笑い始める。何気ない仕草に上品さが感じられるあたり、彼女は育ちがいいのかもしれない。

「シヨウウさん、フェイトちゃんは女の子ですよ」

「それは……いやまあ、女の子に王子様つてのも変な話だけど。ただデュエル中のあの子は凜としてるから」

「その気持ちは分かりますけど……やつぱり女の子は王子様よりはお姫様扱いされたいと思いますよ。それにシヨウウさんにだっていつかは誰かの王子様になるんでしょうし、今から頑張つてたほうがいいんじゃないですか？」

……この子、本当に小学生か？

背丈や服装はともかく、言動からは俺の学校の女子よりも大人っぽさを感じる。いったいどういう風に育つたならば、この年でここまでしっかりした子に育つのだろう。この子の性格をアリシア達に分けてやりたい。

「月村はしっかりしてるね……それとどことなくイイ性格をしているように思える。まあ、あのふたりと一緒にいたのなら理解できなくもないけど」

「最初のはまだしも、性格あたりからつて絶対良い意味で言つてませんよね。私はシヨウウさんのほうがイイ性格してると思いますよ」

「……君つて大人しそうに見えて意外と言うね」

笑いながら言うのと、月村は「そんなことないですよ」といった感じに微笑み返してきた。

この笑顔の裏にはいったい何があるのやら……今はまだしも、未来のこの子のことを考えると場合によって恐怖を感じる。

「なのは、さすががあんたのシヨウウさんにちよつかい出してるわよ」

「ア、アリサちゃん、シヨウウさんは別になのはのじゃないよ!」

「あのシヨウウさん、もし良かったら今日色々教えてもらっていいですか?」

「すずかちゃん、そういうのはみんなで教わろうよ!」

「……シヨウウさんが教えるなら私は他のこととしてようかな」

「フェイトちゃんからも色々教わりたいと思ってるからそんな顔しないで!」

「君らさ……高町で遊ぶのはそのへんにしてあげろよ」

見ていて面白くはあるが、俺も高町と同じようにからかわれたりすることがある。彼女のように見ていると面白くは思わせない——いやできそうにないが。

俺の言葉にからかった側の小学生達は元気な返事を返し、からかわれた側は「みんなひどいよお……」とポツリと漏らす。これが彼女達の日常的なやりとりなのだろうが、かわいそうに思った俺は高町の頭を軽く叩きながら話しかけた。

「まあ……元気出せよ」

「いや、その、別にいつものことですからそこまで気にしてないとか!」

「ならいいけど……顔が異常に赤いけど大丈夫?」

王子様といったからかいいもあって恥ずかしがっているのは分かるが、蒸気が出ていそうなほど真つ赤になっていいる姿を見るとさすがに心配になる。実際に高町の額を触つてみると、ほんの少しではあるが熱があるように感じた。

「ちよつと熱いようだけど」

「だ、大丈夫です！ そそそれよりも早くお店に行きましょう！」

「……行つちやつたな」

「シヨウさん、シヨウさんこそなのはで遊んでるじゃないですか」

「いや遊んだつもりはないんだけど……」

「慣れないうちは心配になるくらいの反応ですからね。まあなのはちゃんなら、すぐに落ち着くと思いますよ。伊達にアリサちゃんにからかわれてませんから」

「すずか、何でそこであたしを出す必要があんのよ！」

高町とは別の理由で顔を赤く染めたバニングスは月村へと接近するが、月村は笑いながら謝りつつ高町のあとを追うかのようにT&Hに向かつて走り始めた。彼女はもちらんあとを追って行ったため、この場には俺とフェイトだけが残される。

「……面白い子達だね」

「そうですね……あの、何で笑ってるんですか？」

「いやね、君に言われたらあの子達良い反応しそうだつて思つて」

「え、いやその……今のは秘密にしてもらえませんか？」

「それは別に構わないけど、意外とすんなり言う日が来るんじゃないかな。あの子達と一緒にいるときの君は楽しそうだし、出会って間もない割に打ち解けてるように見えるから」

「そうですか？」

「さあどうだろうね」

「え？ 言ったすぐ傍から惚けるのはひどいですよ」

「その調子できちんと言えるなら問題ないさ。それより俺達も急ごうか。多分あの子達、先に着いても中に入らないで待ってるだろうし」

第6話 「コミュニケーション」

合流した後、フエイトを先頭にしてT&Hの5階へと向かった。昨日はオープン初日だったために解放されていたのはシミュレーションルームだけだったが、プレイブデューエルを楽しむための部屋はひとつではない。

「T&Hの5階、ここがその……」

フエイトが説明を始めると、遠くからこちらに向かってくる足音が耳に届いた。追ってくる気配とこれまでの経験からある人物が俺の脳裏に浮かぶ。

「フエイト……来るぞ」

「え？」

「フエイト！」

俺の言葉に首を傾げた次の瞬間、フエイトは黒髪の女性に思いっきり抱きつかれた。彼女が驚きによって身体を震わせたのは言うまでもないだろう。

「学校は大丈夫だった？ 帰り道で変な人に会わなかった？ あなたは大人しいから母さん心配で心配で……」

この人は今日も親バカ全開だな……というか、ある意味あなたが変な人なのではない

か？

と、フェイトの顔を触りながら一気に言葉を投げかけるプレシアさんに対して思ってしまったのは普通のことだろう。彼女と初対面である高町達は、予想外の展開に呆気に取られてしまっているが。

「あ、あの……母さん大丈夫。なのはたちと一緒にだったから……それにシヨウさんもいたし」

「え……？」

プレシアさんの視線がフェイトからこちらへと移る。彼女の表情を見た限り、今ようやく俺達の存在に気が付いたようだ。

子供のことを心配するのは分かるが、この街は治安が悪いわけではない。むしろ良いほうに入るだろう。それなのにここまで心配するとは……過干渉・過保護は子供の成長に対して良くないと思うのだが。

それに今はまだしも、中学生くらいになれば性格の良いフェイトでも反抗期になってもおかしくない。今のままでは、その時期を迎えてしまったらこの人は立ち直れないほどのダメージを負うのではないだろうか。

「ようこそT&Hへ、フェイトの母で店長のプレシアよ。今日は何をお求めかしら？」

場の雰囲気や高町達の表情から察するに、彼女達は今きつとこう思ったに違いない。

な……なかったことにした!？」と。

プレシアさん本人は問題なさそうだが、娘であるフェイトの顔は夕日のように真っ赤になってしまっている。プレシアさんのような母親、というよりは親バカの一面を他人に見られるのは恥ずかしいものだろう。彼女の反応は当然だと言える。

「プレシア……急に消えたと思ったら」

「なのは達困つてるよ」

テスタロツサ親子に対して思考していると、新たにふたりの足音が聞こえてきた。ひとりはフェイトそっくりの高町達とも面識のある少女。もうひとりは子供のことになると仕事を投げ捨ててしまうプレシアさんとは違ってしつかりとしている女性だ。

「はじめまして、ようこそ当店へ。プレシアと同じく店長のリンディよ。よろしくね」

「やつほー、みんな」

「ア、アリシアあ」

プレシアさんは、人目があると理解しているはずなのにフェイトに続いてアリシアに抱きついた。長女は次女よりも慣れがあるようで「はいはい」と軽い反応をするだけ。体格に差があるせいか少々苦しそうではあるが。

——にしても……プレシアさんを相手するアリシアは面倒臭そうに見えなくもないが決して邪険に扱わないよな。人のことをからかってきたり、変な甘え方をしてくる彼

女に対して多々思うところはあつたが……この部分だけは尊敬できるかもしれない。俺があゝの立場だつたら多分軽くでも拒絶の言葉を発しているだろうから。

立ち話もなんだということ。俺達は《コミユルム》と呼ばれる部屋へと移動した。ブレイブデュエルはどうしても順番待ちになつてしまつたため、この部屋は自分の順番が回つてくるまでの時間潰しとして利用する部屋だ。そこにある軽食コーナーに俺達はそれぞれドリンクを持って座っている。

「おふたりで経営なさっているんですね」

「この店、雰囲気とか凄く良い店だと思います」

「あら、ありがとう。これからも気軽に遊びに来てちょうだい」

「娘達共々よろしく願ひするわ」

大人達ときちんと話す月村にバニングスの存在は驚きであるが、つい目線は幸せそうにドリンクを飲んでいる高町とアリシアに行つてしまう。

高町は純粋で良い子だからあれだけど、アリシアもこうしてれば可愛げのある子供なだけだな。口にしたら中途半端に怒るだろうけど。

「フェイトちゃんとアリシアちゃんはやっぱり姉妹さんだつたんだね」

「当つたり〜」

「私とアリシアは似てるから分かりやすいよね」

確かにこのふたりの外見はパツと見て姉妹だと分かるほど似た部分が多い。

それにしても……高町の言い方から察するにフェイトが上でアリシアが下だと思っ
ているんだろうな。まあフェイトのほうが背が高いし落ち着いているから無理もない
けど。

「ふたりともお店の手伝いしてて偉いというか凄いよね。特にアリシアちゃん」

月村の言葉にアリシアはきよんとした顔を浮かべ、疑問の声を発する。どうやら彼
女は月村が言いたいことを理解していないらしい。

「私達よりも小さいのに偉いなくってみんなで話してたのよ」

「……あのさ、みんなは4年生だよね？」

「うん、そうだよ」

「わたし……6年生なんだけど」

告げられた真実にフェイトを除いた4年生達の顔は驚愕で染まり、しばしの沈黙が流
れる。これから来るであろう出来事に備えて俺は静かに両耳を塞いだ。それとほぼ同
時に少女達から大声が上がり、アリシアは涙を浮かべながらフェイトに寄りかかる。

「また間違われた……」

「しよ、しよがないよアリシア……」

「それっ！ それだよフェイト！」

泣き顔から一変して力強い声を発したアリシアにフェイトは戸惑いを見せている。彼女の心境が理解できてしまうあたり、俺もそれなりにアリシアの相手をしているということか。

「何で最近お姉ちゃんって呼んでくれないの。そうすれば間違われぬのに！」

「そ、それは……みんなの前だと……何か恥ずかしいし」

もじもじしながら小声で呟くフェイトにアリシアは頬を膨らませ、『対フェイト用ひみつへくき』と書かれた一枚の紙を取り出した。それを見たフェイトの顔に動揺の色が現れる。

「私のお姉ちゃん——1年B組フェイト・テスタロツサ。私にはアリシアという大好きなお姉ちゃんがあります。お姉ちゃんは私と違って明るくて元気で……」

「わっ、わっ、わっ?! 何でそれをお姉ちゃんが!？」

何でって、それはどう考えてもプレシアさんが渡したからに決まってるだろう。ふたりのやりとりを見ながら恍惚とした顔を浮かべているし、紙に小さくだが『by母』と書いてある。

フェイト、こんな姉と母親を持つて大変だとは思いますが強く生きろ。愚痴くらいならいつでも聞いてやるから。まあ優しい性格の彼女がアリシア達の愚痴を言うとは考えにくい。

「アリシア、そのへんでやめてやれよ」

「むう……シヨウは何かフェイトには甘いよね。わたしには厳しいというか冷たいのに」

年上に対して平然と呼び捨て……これはいいとしても、理由もなくからかったりしてくる奴を甘やかせというのは無理な話だろう。それに

「そんな風に膨れるから余計に子供っぽく見えて姉だっと思われないうらや」

「もう、シヨウは大人気ないよ。年下をいじめて楽しいの！」

「いや、俺と君ってそんなに離れてないから。それに普段君って俺のこといじめてるよ？」

「え？ いじめてないよ？」

やる側とやられる側で認識にズレがあるからいじめてなくなるならないんだろうな。まあ俺とアリシアの場合、世間で問題視されるようないじめじゃないけど。

内心でやれやれ……と思っていると、くすくすと笑い声が聞こえてきた。俺とアリシアのやりとりがおかしかったのか4年生達が笑っている。個人的に笑うほどおかしい光景とは思わないのだが。

「みんな、何で笑ってるの？」

「いやね、ケンカしているように見えて……」

「ふたりって仲が良いんだなって思って」

その言葉に俺とアリシアは顔を見合わせる。

俺がアリシアと仲が良い？ 好感度で言えばアリシアよりもフェイトや高町達のほうが上なのだが。会話する回数は積極的に話しかけてくるアリシアが一番ではあるが。

「まあ、わたしとシヨウの仲だからね！」

「どういう仲だよ」

「シヨウくん……アリシアとはどういう関係なのかしら？」

「それは俺が聞きたいです」

なぜ俺はテストタロツサ親子にここまで絡まなければならないのだろうか。毎度のようによこも絡まれると他の店に行きたくなって仕方がないのだが……。

「ハイハイ、ふたりともそこまでよ。今日はなのはちゃん達にお店を案内するんでしょ？」

「あ、そうだったそうだった」

「ご、ごめんねみんな……私のせいで何かおかしな方向に話が行っちゃって」

「謝らなくていいよフェイトちゃん。フェイトちゃんがお姉ちゃん子だったって知れたし」

高町の言葉にフェイトの顔が赤く染まった。浮かべられている笑顔を見る限り、プレ

シアさんのように意図的に辱めようとしているわけではないようだが、それはそれで怒ったりできないために性質が悪い。

店長であるリンデイさんとプレシアさんは仕事に戻ることになり、高町達のこととはテスタロツサ姉妹に任せられた。のだが、リンデイさんは心配なのか全員のことを俺に頼んできた。

店の中に変質者がいるとは思えないが、可能性で言えばゼロではない。そのためリンデイさんに肯定の返事をする、彼女は笑顔を浮かべて去って行った。

「そ、それじゃあ気を取り直して……この部屋《コミュニケーション》について説明するね」
「BDシミュレーターはどうしても順番待ちになっちゃうでしょ。ここはその間に楽しんでもらおう部屋なんだ」

「ということ、フェイトちゃんが言ってた部屋ってここだったんだ」

「その割に見た感じ普通の休憩所って感じじゃない？ デパートのフードコートみたいな感じだけだ」

「そうだね。自販機にテーブル……あつ、でも窓の方に何かあるかも」

月村の発言にフェイトが説明しようとする素振りを見せたが、アリシアがそれを制止し順番に回りながら説明することになった。口だけの説明より実際に見ながらの説明の方が分かりやすいからだろう。

まず最初に向かったのはブレイブデュエルのデツキ考案スペースだった。ここは装置にブレイブホルダーとデータカートリッジを挿し込むことで、デツキに入れるスキルカードを選んだりアバターのステータスを確認できる場所だ。

次に向かったのは自販機と軽食コーナー。これといつて説明する必要はない場所ではあるが、このカレーはある人物のレシピを元にこだわりのある逸品に仕上がっているらしい。俺はまだ食べていないが、ブレイブデュエル関係で考えると知り合いの顔が浮かんでくる。

その間にも話は進み、カードローダーへと場所は移っていた。誰でも1日1枚新しいカードがもらえることになっており、バニングスが「何て太っ腹な……」と呟いていたが俺も同意見だ。小学生達はそれぞれカードローダーを使用し、新たなカードを手に入れる。

「ノーマル+ゲット!」

「あ、私も」

「私はスキルのカードだ」

高町を除いてノーマル+のカードを手に入れたようだ。ということとは、初期デツキに入っていたカードと合わせることで彼女達もストライカーチェンジが可能になったということになる。

初期デッキについて説明しておく、全員共通で4枚のカードが入っている。パーソナルカード以外はランダムであるため、高町のようにパーソナル1枚、N+カード1枚、スキルカード2枚というのはラッキーなパターンだ。セイクリッドのレアカラーだったことも含めて、彼女は何かしらに愛されているのかもしれない。

最後の部分を除いた内容をアリシア達が高町達に説明すると、すぐさまバニングスが口を開いた。

「できるならさっそくあのカツコいいのに変身したいわね!」

「でもシミュレーターを使うなら順番待ちをしないといけないんじゃないかな?」

月村が疑問の言葉を紡いだ後、「ふっ、ふっ、ふっ……」といった笑い声起きた。視線を向けるとまぶたを下ろしているアリシアと両手でテーブルを指しているフェイトの姿があった。

「そこで活躍するのがこのテーブルさんです」

アリシアの言葉に高町達は「え……コレが?」といった顔を浮かべた。まあ、このテーブルのことを知らないのだから当然だろう。

個人的には、テーブルや高町達の反応よりもアリシアの浮かべていた『どや顔』のほうが気になった。別に大層な話でもなければ、彼女が作ったわけでもない。自慢げに言うようなことではないと思う。

思考を巡らせている間にアリシアはテーブルのスイッチを押しただようで、テーブルは簡易シミュレーターに姿を変えていた。

「これこそ卓上でもブレイブデュエルを楽しめちゃう簡易シミュレーター、その名もエンタークン！」

「円卓……まんまね」

「そのまんま……だね」

「にやはは」

もつとさらつと説明していたならば、少女達は苦笑いしなかったのではないだろうか。しかし、根本的なことを言えば、このテーブルを開発した人物がもう少し商品らしい名前をつけていればよかったのだろう。

苦笑いを浮かべている高町達に気にすることなくテストアロツサ姉妹は説明を続け、バニングスと月村はエンタークンにブレイブホルダーをセットした。エンタークンの起動が完了すると、小さなアバター達が出現。ふたりの「リライズアップ！」という掛け声で姿を変える。

「あつ、服がすごく可愛くなってる」

「すずかのはプロフェッサータイプ。援護・索敵はもちろん、スキルの豊富さでは一番のタイプだね」

氷の属性を持っていたからか、それともただの偶然か月村のアバターは青色を基調とした衣服だ。髪型も普段とは違ってポニーテールになっている。

個人的な意見になるが、彼女は3人の中で最も冷静かつ気配りのできる性格をしていると思う。性格とアバターのタイプを考えると良い組み合わせだと言えるだろう。

ただスキルが豊富ということはメリットであると同時にデメリットにもなりうる。複数の選択肢の中から状況に合わせて最善の手を選ぶのは容易なことではないのだ。それにレベルの高い対戦になれば最善の手は読まれやすい手であるため、さらに考える必要が出てくる。まあ今すぐ言うことではないが。

「すっごい、コレがあたしのアバター!？」

「アリスのはフェンサータイプだね。中・近距離向きでトリツキーな機動が最大の持ち味かな」

バニングスのアバターのタイプは、手にしていたデバイスが剣型であったので何となく予想できていた。赤色を基調とした動きやすそうな衣服は彼女にとっても合っていると思う。まあ月村の方も大人しいというか淑女的で彼女に良く合っているが。

「おお、アリスよかったね」

「え……何が？」

「それはね、そこにいるお兄さんはアリスと同じフェンサータイプなのですよ」

バニングスだけでなく、少女達の視線がこちらに向いた。

アリシア……人の許可もなくアバターのタイプをばらすなよ。そのへんの情報はゲームの勝敗にだって関わってくることなんだから。この子達に知られたところでさすがに本気でやったのなら負けることはないだろうけど。

「そうなんですか？」

「まあね」

「付け加えてもうひとつ、みんなは知らないだろうけどこのお兄さんはすごいデュエリストなんだよ」

「ああうん、確かロケテストに参加してたんだよね。フェイトちゃんみたいに全国で何位ってのはないらしいけど」

月村の言葉にアリシアはきよんとした顔を浮かべ、そのあとこちらの方に意味深な視線を向けてきた。これから彼女が何を言おうとしているのか予想できた俺は、そつと視線を外すのだった。

「シヨウ、もう少しきちんと説明するべきだと思っうなあ」

「嘘は言っていないだろ」

「それは言っていないけど」

「えっと、どういうことなのかな？」

「そうよ、あたし達にも分かるように言ってほしいわね」

「簡単に言うと、このお兄さんはランキング戦に出てたなら全国で1番になってもおかしくなかった実力者だつてこと」

刹那の沈黙。そして絶叫にも似た声が響いた。

最初は疑問を抱いていたようだが、アリシアだけでなくフェイトも肯定したことによつて少女達の顔からは疑問の色が消えていく。それと同時に輝いて見える瞳がこちらに向けられた。正直に言つて、俺はこの手の目を向けられるのが苦手だ。

「そんなすごいこと何で黙つてたんですか」

「いや別に黙つてたわけじゃ……そもそも」

「シヨウレベルの人間の謙遜はかえつて相手に失礼だと思ふなあ」

この小さな6年生は俺をヒーローか何かに仕立て上げたいのか。ロケテスト時に上位の実力があつたとしても、すでにそのときから大分時間が経過しているんだぞ。今やれば順位の変動だつて充分に起こりえるはずだ。

「そういえば……昨日乱入してきた子がシヨウさんに借りを返すとか言つてたような」

「多分だけど、個人戦だけで言えば大抵の人がシヨウに借りがあると思うよ。勝敗が五分五分だったのは全国1位さんくらいじゃないかな?」

「あたし達つて何気に凄い人と知り合つてたのね」

「うん。でもそれって良いことだよね。特にアリサちゃんは教えてもらえること多いだろうし」

尊敬と期待に満ちたバニングスの瞳が再度こちらに向く。無意識の内に後退りしていたが、バニングスはこちらが下がった分だけ接近してきたため距離に変化はない。ずけずけと近づいて来ない辺り、俺のことも考えてくれているように思える。

「アバターの話をしたんじゃないの？ まあボクのが一番カッコいいけど」

突如聞こえた第3者の声に俺達の視線は自然と引き付けられた。視界に映ったのは、青色の長髪をツインテールにしている俺と同じ天中央中学校の制服を着た少女。大盛りになる。余談になるが、俺は彼女の知り合いとクラスが同じだ。

「レヴィ!? どうしてここに……」

「あ……へいと」

「フェ・イ・ト!」

「へいと?」

「だから……フェイトだってば」

きちんと名前を言わない……もしかすると言えないレヴィにフェイトは肩を落とし、やりとりを見た限り、会う度に同じようなやりとりをしているのにも関わらず『へ

いと』と呼ばれているのだろう。

まあレヴィは親しい人間をあだ名で呼ぶところがあるからな。フェイトに対する呼び方もその類なのかもしれない。あとでフェイトに教えておくか。

「お久しぶりだねレヴィ。今日は何しに来たの？」

「ん〜つとね……ごちそうさまでした。高町なにははつてのに会いに来ただけ……」

口に含まれていたドリンクを飲み込もうとしていた俺は、レヴィの間違いに思わず嘔き出しそうになった。周囲に少女達がいる手前、どうにか我慢することが出来たが盛大にむせる。

「高町なのはだよ、な・の・は！」

「なによ……何でもいいや」

「良くないよ!？」というか、みんなして笑うなんてひどい!」

笑っては悪いと思うが、『へいと』と比べると破壊力が段違い過ぎる。そもそも付き合いの長いバニングスや月村が笑っているのだから、笑うのを我慢しろというのは無理な注文だろう。本気で悪いとは思わうが……。

「あれ？ ショウド。何してるの？」

とレヴィは尋ねてきた。尋ねるまでもなくブレイブデュエル関係だと普通は分かる

はずだが。

いや、そんなことはどうでもいい。なぜこいつは人目があるのにも関わらず抱きついてくる。人目がなかった良いというわけでもないが……なんて考えている場合でもない。

「ん？ ショウが泣いてる……いったい何が」

「お前の間違いのせいでむせたんだ。というか離れるよ」

「うーん、別にいいじゃん。ボクとショウの仲間だし」

どういう仲だ、と言いたいところではあるが……叔母が知り合いだったこともあって、レヴィを含めた4人とは前からの知り合いなんだよな。頻繁に顔を合わせるようになったのはブレイブデュエルが本格的に始動してからだけど。

「良くない」

「何で？ ボクはショウと一緒にいたいし遊びたいけど……ショウはボクと一緒にいたり、遊んだりするの嫌なの？」

「いや、嫌とかじゃなくて……」

俺が言いたいのは距離感を保って接してほしい、ということだ。幼児や小学校低学年の子供が抱きつくのなら微笑ましい光景に見えるだろうが、現状はそんな光景には見えていないだろう。その証拠に高町達の顔は驚愕で染まっている。

「ちよつとレヴィ、色仕掛けでシヨウを誘惑するなんて卑怯だよ！」

「色……ねえシヨウ、アリシアは何を言ってるの？」

「まあ簡単に言うのと、さっさと離れろってことかな」

「そっか」

「……理解したのなら離れろよ。お前、俺じゃなくて高町に用があつてきたんだろ？」

「はっ!? そうだった」

俺から離れたレヴィは、人差し指で高町の方を指しながら口を開く。

「ヴィーたんをやつつけたっていう実力、このボクにも見せてもらおうか！」

「え……ええええええッ!？」

第7話 「ダークマテリアルズ」

フロア内の照明が落とされているが、一部だけスポットライトで照らされている。そこには制服から衣装換えしたT&Hの看板娘が円形の台の上に立っており、彼女を中心に人ごみが出来上がっていた。その理由は、今まさに口を開こうとしている看板娘の方向から説明があるだろう。

『れでいーす&じえんとるめん！ みなさん、こんにちわ。ホビーシヨップT&Hの看板娘、アリシア・テスタロツサです。昨日から本稼動したブレイブデュエル、みんなで仲良く楽しんでますか？』

アリシアの問いかけにフロア中から肯定の返事が発せられる。

フロアにはざっと見ただけでも数百人に上る人間が存在しているため大音量に聞こえる返事だった。デュエル中ならばそちらに集中するため気にならないだろうが、まだ始まっていない今はどうも胸の内が落ち着かない。

『今日はみなさんにブレイブデュエルの新しい魅力をお伝えしちゃうべくイベントデュエルをばーんと行いたいと思います』

アリシアのやつ……よくノリノリで司会進行ができるな。俺だったらあんな風にや

るのは無理だから、こういうときの彼女だけは素直に尊敬する。

今回行われる勝負は昨日から行われていたフリーバトルではなく、ファーストステージと呼ばれる《スピードレーシング》と呼ばれるものだ。

アリーナに表示された障害物コースを進み、チェックポイントを通ってゴールする。ブレイブターゲットと呼ばれる物体を破壊することで追加ポイントを得られる。主なルールはこのふたつくらいであり、着順のポイントとターゲットのブレイクで得られるポイントの合計で勝敗が決するデュエルとなっている。

『補足解説のチーフスタッフ、エイミーです。このデュエルにはスピードの他に飛行技術と攻撃精度、このふたつが重要になってくるんですねえ』

『なのです』

エイミーの言っていることは間違っていないが、チーフスタッフの部分は必要だったのだろうか。まさかだと思うが、チーフスタッフだと思われるから宣伝しているのでは。

『さて……それでは本レースの参加デュエリストを紹介しましょう。まずは当店のエースで我が妹、フェイト・テスタロッサが率いるチームT&H!』

「アリシア……」

「ノリノリね」

自分の部分を強調された説明だったからか、フェイトは顔を手で覆っている。他の3人は呆れているといった感じだろうか。

『対するはインダストリーからの刺客！ ロケテスト中の全国ランキング4位！』

「雷纏……強いぞ、すごいぞ、カツコイイ！ ダークマテリアルズ斬り込み隊長、レヴィ・ザ・スラッシュヤーとはボクのことだ！」

レヴィはアリシアの司会に負けず劣らずノリノリで名乗りを上げた。

彼女の補足説明をするならばスタイルはインダストリーでカードのレア度はR。通り名は《雷刃の襲撃者》である。

『おおーと、コレは凄い名乗りですね。ここら辺はうちのチームにも頑張っしてほしいものです』

フェイト達がレヴィのように名乗っていたら異常な光景に見えるし、人はそれぞれ性格が違うのだから、レヴィのような名乗りを求めるのは良くないと思う。

『気を取り直して……知っている人は知っている、知らない人はまあ知らないでしょう。昨日はT&Hのお手伝いだったが、今日はダークマテリアルズの助っ人！』

「なあアリシア、説明がどこことなく悪意に満ちてないか？」

『などと、いつもわたしに冷たい返しをする中学生で名前は夜月翔です。まあでも、好きな子にいじわるをして気を引きたいといったところでしょうから気にしてません♪』

思わず顔を手で覆ってしまった。

何で俺がアリシアに気があるようなでたらめな発言を大勢の前でするかな。誤解でもされようものなら、この店に来るのが億劫になるんだが……いやあまり気にしないでおう。俺があまり意識していなければ、アリシアが適当に言ったと思われるはずだから。

「……ん？」

不意に衣服の一部を引っ張られるような感覚を覚えた俺は視線を落とした。すると実際の背丈よりもずいぶん小さなレヴィの姿が視界に映る。

この小さなレヴィの正体は、フレンドNPCといってチーム戦で人数が足りないときに手持ちのカードから呼べる助っ人だ。今回の勝負はT&H側が4人、こちらが2人ということでレヴィが自分のカードから2体呼んでいる。

なぜ小さなレヴィ……チヴィが俺の注意を引いたかというのと、どうやらもう1体が持っているアメを自分もほしいと訴えたかからのようだ。レヴィのNPCだけあつて食い気がある。

「悪いけど我慢してくれ」

アメを出すことは出来ないため、チヴィの頭を撫でながらそう言った。効果があるとは期待していなかったが、どこか犬っぽいところが本人にあるせいかチヴィは笑顔にな

る。

そんなことをしている間にステージの説明は終わり、レースの開始が近づいていく。ふとT&H側に視線を向けたとき、バニングスが何か考えている素振りをしているのが見えた。

何を考えているか分からないが、今回の勝負を俺まで勝ちに行くのは経験の差を考えても卑怯だろう。あの子達の面倒でも見ながらやることにするか。

『みんな位置について……スピードレーシング、レディ！GO！』

開始の合図と共に一斉にスタートする。

まず先頭に立ったのはレヴィだ。彼女のアバターは《ライトニング》タイプと呼ばれるスピード重視の高機動型であるため、この競技に優れているアバターだと言える。また本人の技量も相まって俺達との距離は徐々にだが確実に開いていった。

『まず飛び出したのはレヴィ選手……後続をどんどん引き離していますが、プレイブターゲットは全て無視していますね。これは作戦でしょうか？』

ボク自身は1番でゴールを目指して、ショウやフレンドのボクらがポイントを取る。おそらくレヴィの頭の中にはそんな考えがあるのだろう。

俺がいるから作戦として問題ないだろうが、レヴィはフレンドNPCしかない状態でも同じような作戦をしそうだよな。元のプレイヤーが同じフレンドNPCだと考え

まで似たようなものになって弊害が起こることがあるし。

『おおーと、そんなレヴィ選手に近づくとつひとつ影が……T&Hのフェイト選手だ!』

と、アリシアは実況した後で「うちの自慢の妹もライトニングタイプ。スピードでは引けを取りません」と個人的なことを言う。おそらくだが、フェイトはきつと恥ずかしくて顔を赤くしていることだろう。

実況によるとレヴィは直線的な軌道、フェイトは空中ドリフトを駆使したなめらかな軌道で進んでいるらしい。同じライトニングタイプでも実に対極的なスタイルだ。まあ性格自体もふたりは真逆なので自然なことかもしれないが。

『ふたりから少し遅れて追いかけているデュエリストが……つて、何このコース取り!』
アリシアの驚愕の声が聞こえたかと思うと、何かが盛大に壊れる音がコース中に響いた。実況の説明によると、高町が障害物のビルを壊してショートカットしたらしい。

——初心者ならでは……というか、大抵の人間は考えない発想だな。これを見ている多くの人間が驚いているに違いない。ロケテストの経験者なら特に……それにしても、スキルでビルを壊すなんて高町は意外とパワフルだな。

『あれ? 軌道から察するにもしかしてアリサは空を飛んでないの?』

「浮かぶだけならまだしも……人間が、空を飛べるわけじゃないじゃない」

『頭固いよアリサ』

「うっさいー！」

などとアリシアと会話しながらも、バニングスは見事な跳躍で進みながらターゲットを破壊していく。

飛行しない……今のところできないが正しいか。スタートからこんな調子だったから、この子がきちんと進めるか心配だったがとりあえず問題はないみたいだな。ただ……

「次のターゲットは高い位置にあるけど大丈夫？」

「あつ、はい大丈夫です。すずか」

「了解、アリサちゃん」

月村はスキルカードを発動させ氷の盾で段差を作った。それをバニングスは素早い身のこなしで昇って行く。

攻撃スキルが豊富なバニングスがターゲットの破壊で、月村は彼女の補助。レイ達に追いつけないと理解して自分のできることに専念なんて、ブレイブデュエルを始めて間もない子供ができることじゃないんだけどな。

彼女達の年代の子供は基本的に自分が活躍したがるものだろう。きちんとチームプレイができている彼女達は同年代よりも成熟しているのかもしれない。

そんなことを思っている内にバニングス達はターゲットを破壊し下り始める。飛行

できないバニングスは飛び下りるのかと思ったが、月村がきちんと抱えていた。

「君達は本当に仲が良いね」

「友達ですから……あの、さつきから思ってたんですけど」

「私達と話してていいんですか？」

「良いか悪いかで言えば悪いかな。でもまあ……先輩として後輩がきちんとゴールできるか心配だったからさ」

「……アリサちゃん、早く飛べるようにならないと」

「い、言われなくても分かってるわよ！」

顔を真っ赤にしているバニングスと微笑みを浮かべている月村を見守りながら並走していると、チヴィ達がひとつのターゲットに固まっているという実況が耳に届いた。フレンドNPCではたまにあることであり、また元のプレイヤーがレヴィということもあって何ら不思議ではない。

さて……このままゴールするとレヴィに文句ばかり言われるだろうな。バニングス達には悪いけど、ここいらで見守るのは終わりにしよう……って、見守るっていうのも舐めてるようで失礼か。

「このままだとこっちが劣勢になりそうだから……残りのターゲットはもらうよ」

★

前半戦はレヴィが圧倒的な速さを見せ付ける形で1位を獲得したが、バニングス達のターゲット撃破や高町達の好プレーにより、82対83とT&H側が優勢という結果になった。

今は後半戦に入る前の休憩時間だ。T&H側は作戦会議を行っているようだが、こちらを頬を膨らませた子供の相手を行っている。

「もう、シヨウが真面目にやらないからボク達負けちゃってるじゃん!」

「ロケテストに参加して俺達が全力で初心者を叩き潰してどうするんだ。そもそもレヴィは高町の力量を確かめに来たんであって、自分の実力を見せ付けに来たわけじゃないだろ?」

「それはそうだけど……負けるのは嫌だよ。王さま達にも悪いし」

こいつも何も考えていないようでちゃんと考えているんだな。まあ前半戦であの子達も問題ないって分かったし、後半はレヴィのためにも真面目にやるか。あの子達には悪い気もするけど、あまり手を抜き過ぎるのも良くないだろうから。

「2周目も私となのはが高順位を狙って……」

「あたしとすずかが」

「ターゲットをきつちり狙う作戦だね……ただ問題はシヨウさんだよ。さつきも後半は全て取られちゃったし」

「すずかちゃん、弱気になっちゃダメだよ」

「うん。シヨウさんは凄いデュエリストだけどこれはチーム戦。私やなのはもできるだけターゲットを破壊すれば勝てる可能性は充分にあるはず」

「どんなことを言っているのかはよく分からないが、雰囲気からして作戦が無事に決まったのは分かる。」

「可能性として、基本的に前半と同様だがフェイト達も出来る限りターゲットを狙う作戦が高いな。レヴィは先ほどと同様に1位を狙ってもらうのが妥当だから必然的にターゲットは俺の担当……だが全員でターゲットを狙われるとなると厳しい部分があるな。」

「高順位を狙える速度でターゲットを破壊して行ってもいいが、それだとフェイトとの勝負になる。速度ではあちらが有利であり、彼女は全国ランキング2位の猛者だ。ポイント差をつけるのは難しいだろう。チヴィ達が先ほどのように固まってしまったら……」

「くつくつく……一度成功したからといって策も練らず、相手の力量も熟知しておらんとこのに同じ策に頼る。人はそれを短慮と言うのだ、このうつけめが！」

「突如ステージ内に響いた声に俺達の視線は上へと向いた。太陽の位置の関係ではつきりとは見えないが、ふたつの人影がビルの屋上にあるのは分かる。」

「だ、誰!？」

「ふん……貴様らに名乗る名前などないわ!」

「やつほ〜」

あの軽い感じ……ひとりにはアリシアか。もうひとりには声や口調からして彼女だよな。

などと思っていると、ふたつの人影はビルから飛び下りる。空中にいる間にそれぞれリライズアップを行い、着地と同時にポーズを決めた。それと同時に、ステージ内にアリシアの代わりに進行を務めることになったエイミーの声が響く。

これは関係ないのだが、ド派手に登場した姉に対して恥ずかしさを覚えているのかフェイトの顔は赤い。その隣にいる高町は拍手をしている。本当にこの子は純粋な子だ。

「というわけで後半戦は私アリシアと、ロケテスト時のチャンピオンチームのリーダーであるディアーチェを加えて行いたいと思います!」

おおい、プレイする側になったのに実況するのかよ……。

これを言葉に出さなかったのは、外でエイミーが実況の仕事を奪わないでほしいと言っているのが聞こえたからだ。

何故かエイミーの隣にプレシアさんがいるのも見えたが、またサボってるのだろうか。もしそうならリンディさん大変だな……何か彼女が黒い笑みを浮かべた後に叫び

声を上げたような気配がした。プレシアさんの身に危険が迫っているのではないかと、と思ったが結論から言うと彼女の自業自得であるためどうでもよかった。

「王さま!」

「ぬおっ!」

「王さま、王さま!」

「えええい、うつとおしい!」

ディアーチェの腰付近には元氣溢れるレヴィが抱きついているため、彼女から出た言葉は当然のものだろう。俺もレヴィに抱きつかれることがあるため、彼女が感じているであろう鬱陶しさは良く分かる。

「抱きつくでない……ん?」

「ごめん王さま……前半負けちゃった」

「……このたわけ」

呆れつつもどこことなく優しい声色でそう言いながら、ディアーチェはしょんぼりしたレヴィの額を指で弾く。レヴィは悲鳴を上げて額を手で押さえたが、そこまで強くやっただようには見えなかった。心配するようなことは何もないだろう。

「前半の負けがどうした。我と貴様が揃ったのだ、ちびひよことその一味なぞ恐るるに足らん。大差をつけてひっくり返してくれようぞ!」

「う、うん！」

「ディアーチエの励ましによってレヴィは元気を取り戻したようだ。」

「普段はあの元気の良さにうっとしきを感じたりするが、元気がないとそれはそれで嫌だよな。元気がないレヴィは見ていて心配にしかならないし……つと、ふたりの視線がこつちに向いたな。」

「大体シヨウが真面目にやらなかったから悪いんだぞ！」

「おいおい、失礼だな。俺は真面目にやってたぞ」

「真面目にやってたら負けてないよ！」

「レヴィ、やめんか。ごちやごちや言ったところで現状は変わらん」

俺に詰め寄ってくるレヴィに制止をかけながらディアーチエは視線をこちらに向けしてきた。彼女の瞳には、前半戦に関する事で責めるような思惑は見えない。何かを促すような気はしなくてもないが。

「悪いなディアーチエ」

「その謝罪はどつちの謝罪だ？」

どつちという言葉に惑いを覚えた俺は、一瞬ではあるが理解が遅れる。それによってディアーチエは呆れた表情を浮かべ続けて言った。

「我が理解しておらぬとも思っておるのか。さっさとせぬと後半戦が始まるぞ」

真意を理解した俺はきつと驚きの顔を浮かべていたことだろう。そうでなければ、目の前の彼女が「我を誰だと思っておる？」と言いたげな微笑を浮かべるはずがない。

——さっきのレヴィへの言動もそうだけど、本当にディーアーチエは人の気持ちを讀み取ることに長けてるよな。俺がやろうとしていることなんて普通なら怒ってもいいはずなのに。

「……お前には敵わないな」

「ふん、伊達に長く付き合っておらぬわ」

「え？ え？ 何だかボクだけ仲間はずれにされてるような……」

微笑を浮かべる俺達をよそにレヴィだけは困惑した顔を浮かべている。が、今は彼女に構っている時間はない。

「エイミィ」

『はいはく、どつたのシヨウくん？』

「後半戦だけど俺は参加しないから」

『ほいほい了解……ええっ!?!』

さらりと承諾したように見えたのもつかの間、エイミィはすぐさま驚愕の表情を浮かべた。予想外の事態に今のような反応をしたのだろうが、何故かエイミィがやるとわざとやっているようにも思える。日頃の行いが大事というのは、こういうときに疑われな

いために言われているのだろう。

『ちよつ、これからさらに盛り上がるってところだよ。じよ、冗談だよね?』

「冗談じゃない」

『……マ、マジっすか?』

「マジだよ」

俺が口を閉じると同時に、モニター越しに見えるエイミイはキョロキョロと周囲を見渡す。何をやっているのだろう、と見ていると彼女はぎりぎりまで顔を寄せて小声で話しかけてきた。

『こ、これから何か用事があったの?』

「何でひそひそと話す?」

『いやほら……デートとかだったらこの場で聞くのは不味いかないと思います』

そういう気遣いが出来る割に、顔には「あとで聞くけどね」って書いてあるように見えるんだが……人の恋路を心配する前に自分の方を気にするべきだろうに。

「そんなんじゃない。大体、仮にそうだったとしても別に不味くはないだろ」

『え……シヨウくんて意外と——』

「誰と行くとか絶対に今でも後でも言うつもりないし」

『——気さくに話してくれる……って、やっぱり君は私の思ってたとおりの子だったよ

「！」

何をひとりで盛り上がっているのだろうか。というか、そんなに声を張ったら今まで
のやりとりの意味がなくなるのでは。

「エイミイ、どうかしたの？」

『聞いてよアリシアちゃん。シヨウくんが後半戦に出ないって！』

エイミイに話しかけたアリシアだけでなく、T&H側全ての視線が俺に集中した。テ
スタロツサ姉妹は理由についてある程度予想がついているように見えるが、あの初心者
3人組には疑問しか見えない。

「シヨウさん……何か用事があるんですか？」

「それは……あるとは言えないけど」

「だったらどうして……」

「簡単なことよ」

少女達の声を遮ったのはディアーチェだった。腕組みをした状態で彼女は少女達を
真っ直ぐ見据え、淡々とした口調で話し始める。

「我らと貴様達とは実力が違うのだ。シヨウが参加しているは一方的な展開にしか
ならない」

「なっ……そっちがどれだけ凄いのかわからないけど、こっちはフェイトやアリシア

だっているのよ！　ふたりも黙ってないで何か言っただけなさい！」

と、話を振ったバニングスだったが、テストロッサ姉妹は微妙な表情を浮かべている。それに彼女が戸惑いを覚えたようで、表情から怒りが薄れて見えた。

「どうしたのよ？」

「……正直に言っただけで否定できない」

「な、何だよ？」

「それはねえ……実際のところ、レヴィとシヨウだけでも厳しいんだよね。前半はシヨウが本気じゃなかったから勝ち越せたのはアリサも分かるでしょ？」

「それは……」

「それに……ロケテの時のチーム戦、対ダークマテリアルズでの私達の勝率って2割くらいなんだ。全国で1位になれたかもしれないシヨウが入った状態で本気出されたら……言わなくても分かるでしょ？」

T & H側に暗い雰囲気が始めるが、俺やディアーチェがフォローする前にテストロッサ姉妹が動いた。

「まあ実際のところ、勝敗がどうこうって前にシヨウはダークマテリアルズの一員じゃないからね。みんながちゃんとできるか心配だったから参加しただけみたいだし……というか、それならこっち側で参加すればいいじゃん！」

「アリシア……そこで怒るのはおかしいんじゃないかな？」

「おかしくないよ！ ショウがあつちに取られちゃったら今後やばいんだから。それにフェイトだってショウと一緒にの方がいいでしょ？」

「え、いや別に私は……ショウさんがこつちに入ってたならレヴィが厳しくなってただろうし」

「もう、フェイトは気を遣いすぎ……そんなんじゃないや誰かに取られるよ」

アリシアが何か耳打ちすると同時に、フェイトの顔は真つ赤に染まった。俺に文句を言うアリシアをフェイトが宥めるといふ構図に見えていたのだが、いったいどういう会話に発展したのだろうか。

「べべ別に私はショウさんのことなんて……！」

「あれ、お姉ちゃんは何でショウなんて一言も言っていないだけだなあ」

「うう……」

「ライバルは……割と多いんだから頑張らないとね」

アリシアはほんのわずかな時間だが視線を高町のほうに向けた。距離が離れていたため、そのように見えただけかもしれないが。

「え……そうなの？」

「さあ？」

「……あんた達、話が逸れてるような気がするんだけど」

「ロケテじや5回に1回くらいしか勝てなかったけど今はみんなもいるし、それにわたし達もあのときよりもレベルアップしてるからね。頑張れば勝てないことはないよ!」

「何か強引に戻した!?!」

「うん、みんなで頑張ろう!」

「何で疑問もなくそうなるのよ!?!」

「なんだかんで、みんないつもどおりだね」

第8話 「小鴉丸からの招待状？」

T&H対ダークマテリアルズの対戦の結果だが、僅差ではあるもののT&H側が勝利を収めた。

後半戦が始まった当初は、ディアーチエの大魔法によってターゲットの大半が殲滅されダークマテリアルズ側が有利だった。しかし、2周目に出現した巨体型と高速型のエクストラターゲットによって状況は一変することになる。

高速型は高町が魔力弾を使って殲滅し、巨体型はアリシアがハリセンで粉碎。その姿に触発されたレヴィがゴールを目指すのやめてターゲット破壊に向かってしまい、T&H側が上位を占めることになった。結論から言えば、レヴィのミスでダークマテリアズは負けてしまったということになる。

——まあこんな日もあるよな。

対戦を終えた俺達は軽食コーナーへと移動した。ディアーチエは月村のことを気に入ったらしく、現在は楽しそうに話している。その姿を見ているバニングスはどことなく面白くなさそうだ。やきもちでも焼いているのだろう。

再度意識を会話中のふたりへ向けると、ディアーチエと目が合った。だが彼女は少し

慌てたように視線を月村へと向けてしまう。

対戦が終了してからというものディアアーチエはこのような反応ばかりしている。おそらく自分達でも勝てると言い切ってしまったのに負けたことが原因だろう。俺が彼女の立場だった場合、恥ずかしさとか何かしら言われるのではないかと不安に思っているような反応をするに違いない。

ただ俺としてはディアアーチエに何も言うつもりはない。どんな強者でも必ず勝利を収められるわけでもないし、対戦内容は充分に観客を沸かせるものだった。彼女のチームメイトでもない俺が責めたりするのはお門違いだ。

「ばあっー！」

「ぶっ……ぶっほっ、ぶっほっー！」

隣の方から聞こえた声に釣られて視線を向けると、むせているバニングスが視界に映った。彼女の隣には「につしっし」と笑っているレヴィがいる。どう考えてもレヴィが脅かしたに違いない。

「な……何なのよもう。なによはならあっちよ！」

ここであえて『なによは』と言うあたり、この子も月村同様いい性格をしている。まあ彼女のように笑顔の裏に何かがありそうなタイプではないので怖いといった感情は抱かないが。

「王さまは気に入った子と話すの好きだからね、イタダキマス」

レヴィ、それは謝るどころかバニングスの言葉に対する返事ですらないぞ。というか、対戦前に食事はしたはずなのにまた食うのか。しかもさっきと同じカレーを。

彼女がよく食べる人物であることは知っているが、せめて違うメニューを頼めよと思ってしまう俺は間違っていないだろう。

「アレでしょ、え〜と……焼きオモチ？」

「やきもちよ！ つて、ちつ、違うわよ。すずかに友達が増えることは良いことだし……！」

誤魔化そうとしてるけど必死すぎて墓穴を掘ってるな。まあ普段はからかつてる側みたいだし、慣れてないんだろう。

そう思う一方で、バニングスは素直になれない子なんだろうとも思う。個人的に彼女は悪い子ではないと思うため、そのへんも可愛らしく思えてしまう。会話相手のレヴィは、カレーを食べることに夢中で全く話を聞いていないが。

「第一私は……聞きなさいよ！」

「ん？」

「何なのよもう……その制服」

レヴィを見ていたバニングスの顔が俺のほうへと向いたが、彼女が何を考えているの

か予想がついた俺は無反応を決め込むことにした。

「もしかして……シヨウさんと同じ私立天央？」

「んう？ そだよ……そういえば自己紹介がまだだったね。ボクはレヴィ・ラッセル、天央中学校の留学生さ！」

元気なのは良いことではあるが、中学生なのだから小学生よりも状況に合わせた対応をしてほしいものだ。まあバニングスはレヴィの性格、容姿がフェイトと似ていること也有着て同い年と思っていたのか、やばいと思つた顔をしているので彼女の元気を煩わしいとは思っていないようだが。

「ちなみに王さまもおんなじガツコだよ」

「どうもご丁寧に。私立海聖小学校4年のアリサ・バニングスです」

お辞儀までするバニングスのほうがレヴィよりも格段に丁寧だろう。

それにしても、小学生にしては綺麗なお辞儀だな。彼女くらいの年で礼儀作法がここまでのレベルとなると……どこかのお嬢様という考えが真っ先に浮かぶな。

ただバニングスの言葉遣いを考えるとその考えに霧がかかってしまう。月村ならば問題なく納めができるのだが。口にするのは失礼だろうし、今会話しているのはバニングスとレヴィだ。第3者の俺は大人しく静観しておこう。

「えーと……レヴィさん？ それともレヴィ先輩って呼んだらいいですか？」

「レヴィ先輩？」

レヴィは先輩という呼び方が気に入ったのか、瞳を輝かせながら笑顔を浮かべた。彼女はバニングスに眼前まで顔を近づけながら返事をする。

「センパイ……なんかカツコイイ。ボク、センパイがいいな！」

「はあ……それがいいなら……」

レヴィの反応にバニングスは呆れてしまっている。おそらく「この人……何でこんなに喜んでいるんだろう？」とでも思っているのだろう。

先輩呼びにテンションが上がったレヴィは、強いだの凄いだの先輩だの言いながら凄まじい勢いでカレーを食していく。喋りながら食べているせいで口の周りが汚れてしまっているのは言うまでもないだろう。

「やれやれ……」

俺はレヴィの隣へと移動し、空いているイスに腰掛けながらレヴィの顔をこちらに向けた。彼女はきよよんとした顔を浮かべたが、俺は気にせず取り出したハンカチで口の周りを拭き始める。

「食べながら喋るなよ」

「えへへ、ありがと〜」

無邪気な笑みを浮かべるレヴィの顔は何ら昔と変わらない。それだけに、体はきちん

と成長しているのに精神年齢は変わっていないように思えてならないのだが。

ふと視線を横にずらすと、レヴィ越しにだがこちらを眺めているバニングスの姿が見えた。表情を見る限り、何かを思い出しているような感じである。

「前言撤回、やっぱりレヴィって呼ばせてもらおうね」

「なんでえ〜！ センパイ、センパイがいい！」

レヴィの駄々をバニングスは華麗に聞き流している。

この子、会ったばかりのはずなのにレヴィの扱いが上手いな。もしかして家で犬でも飼ってるのだろうか。レヴィは人間だけど犬っぽいところがあるし。

「シヨウ、何でこの子はボクのことをセンパイだと呼んでくれないの！」

それはお前に先輩だと呼べる要素がないから。

と、言ってしまうのは簡単であるが、レヴィはこう見えて傷つきやすい子だ。ぼつきり切り捨ててしまうと下手をすれば泣いてしまうかもしれない。現状で泣かれるのは困るので、俺は彼女の意識をカレートのほうへ戻すように促した。

作戦が功を奏したのか、自棄食いを始めたのかは分からないが結果から言ってレヴィは再びカレートを食べ始めた。

「レヴィの扱い慣れてるんですね」

「まあね。こいつやディアーチエとは昔からの付き合いだから」

「そうなんですか……あれ？ でもレヴィって留学生って言っていましたよね。ということは出身は海外のはずなんじゃ……」

バニングスの疑問は最もだ。

俺の名前はレヴィと違って漢字が用いられているし、見た目も黒髪に黒目。留学生である彼女と付き合がある理由は気になって当然だろう。

「ああ……俺の叔母が彼女達と知り合いだったんだよ。だから昔から何度か会う機会があつてね」

それに俺は、少し前まで海外で両親と一緒に暮らしていた。ただ生まれた頃からというわけではなく、小学生の途中からだ。

海外で暮らすことになった理由としては、父親が叔母やグラント博士にも負けない技術者であることに加え、母親がそれなりに有名なパティシエだからということが挙げられる。

日本に戻ってきたのは俺だけであり、両親は今も海外で暮らしているわけだが、別一人暮らしをしているわけではない。父さんの妹、つまり叔母と一緒にだ。

叔母は技術者としては優秀なのだが、家事といった能力は極めて低い。下手をすればそのへんの子供の方が上なのではないかと思うほどに。そのため俺は彼女のために日本に戻ることにしたとも言える。まあ純粋に日本の方が暮らしやすいことと、ブレイ

ブデュエルの件があったのも理由ではあるのだが。

「へえ、シヨウさんって帰国子女だったんですね。日本語以外にも話せたりするんですか？」

「少しは……でも暮らした時間がここもあつちも微妙だから。それに空いた分の勉強もしてる真つ最中だから、そのうちあつちの言葉は忘れるかも」

「何ていうか……大変ですね」

「まあね……今度勉強を教えてもらえると助かるんだけどな」

「あたし小学生なんですけど……」

「さつき言ったように俺は途中から海外だったからね。小学生で習う範囲のことが抜けてたりするんだよ」

「あつ……じゃあ、あたしに分かる範囲でいいなら。その代わりブレイブデュエルのこと教えてくださいよ」

「助かるよバニングス先輩」

「そつちのほう先輩なんですから先輩はやめてください」

やめろと言われたものの少女の顔には笑みがある。出会ってから一番話していなかったことに加え、年が離れているために不安もあつたが、どうやらそれなりには打ち解けられたらしい。

私生活や学校生活、ブレイブデュエルといった話題で話している内に名前でも呼ぶことを許可された。向こうから呼べと言っているのに呼ばないのもあれなので素直にアリスと呼ぶことにする。ただ急に変えるのは難しく、何度もバニングスと呼んだり言いかけてしまったが。

「な、なのはー！」

突然発せられた声に俺は意識を向ける。そこまで大きいものでもなかったのだが、声を出した人物がフェイトだけに気になったのだ。

「お、お願いがあるというか話が……あるんだけど」

「う、うん」

「わ……私のチームメイトになってくれないかな?」

その言葉に内心驚いた。

俺はT&Hのチームに入ってほしいと誘いの言葉を言われたことがある。だがそれは全てアリシアからのもので、フェイトから誘われたことは一度としてない。そんな彼女が自分から人をチームに誘うとは、高町に思うところがあったのだろうか。まあ才能がある子だとは俺も思っているが。

「あつ……ブレイブデュエルは元々個人競技と5人で一組のチーム競技があつて。T&Hは私とアリシアしかないから。それで……なのはと一緒になりたいんだけど

「……………ダメかな？」

「ダメじゃないよ。ダメじゃないけど……………私、フェイトちゃんみたいに上手くないし」

「そんなことない。さっきのデュエルだって凄かった。とても2回目だとは思えないし。何より空を飛んでるなのは姿は凄く楽しそうでもとても素敵で……………だから一緒にっつて！」

……………おかしい。

あの子達は女の子同士であるはずなのに、どうしてか王子様とお姫様のように見える。それにあそこから発せられる雰囲気も何とというか甘く感じる。俺の感覚が狂っているのか、それともあの子達が狂わせているのか……………。

「はいはいそこまで。ふたりの世界に入らないの」

「あやつらは……………何だ……………いつもこうなのか？」

「えーつと、会ったときからあんな感じだった気がするから……………そうかも？」

聞こえてきたダイアーチエ達の会話からすると、俺の感覚は正常のようだ。

乱入の一件の後はあの子達のことにはフェイトに任せて店の手伝いをしてたけど、その間に今みたいな感じになってたんだな。今はまだからかわれるくらいで済むだろうけど、大きくなってからもあれじゃあ周囲にだって本気で誤解する人が出てくるだろう

な。

アリサ、さっきからかわれたからかイイ顔してるな。まあフェイトもああ見えて良い反応するし、高町については言うまでもない。……にしても、何でレヴィはアリサに乗っかってるんだ？

「五人一組ってことは、あとふた〜り足りないんでしょ？ あたしたちは誘ってくれないのかしら？」

「誘ってくんないの〜？」

「そっ……そんなことないよ！ 2人にもお願いしようってアリシアと話して……つて、レヴィはもう別のチームに入ってるでしょ！」

慌てふためいてるときのフェイトは元気だな。普段からあれくらい元気なら周囲から人間関係やらで心配されることも少ないだろうに。まあ個人的にはアリシアほど元気なのは困るので今のフェイトのままでもいいのだが……。

ふと思ったが、アリシアはいつたいたいどこに行つたのだろうか。先ほどから妙に静かだとは思っていたが、周囲を見渡しても彼女の姿はない。

「なあディアーチェ」

「——っ!? きゅ、急に話しかけるでない！」

「……悪かった」

「いや、別に怒ってはおらん……それで用件は何だ？」

「ああ、アリシア見てないかって思ってたさ」

「ちびひよこか……そういえば先ほどから見かけんな」

「ディアーチェが見ていないなら一緒にいた月村も見えていないだろう。ふたりだけの世界に入っていた高町とフェイトは当然見えていないだろうし、やきもちを焼いていたアリサや食事に夢中だったレヴィも見えていないはずだ。」

「いつもは必要もないのにそのへんをウロチョロしているのに、こういうときに限っていないと不安になってしまう。何かしらの問題に巻き込まれた可能性は低いだろうが可能性はゼロではないのだから。」

「フェイトお、アリシア……アリシアがいないの。店内カメラのどこを……どこを見てもアリシアがいないのよ」

突然現れたプレシアさんに一番驚いたのは、彼女に抱きつかれたフェイトだろう。

「もしかしたら誘拐なんじゃないかって……いいえそうだわ。こんな急に消えるなんて」

「そ、そんなまさか……」

「アリシアの可愛さだもの……充分にありえるわ。あつ、もちろんフェイトも可愛いわ。母さんなら両方お持ち帰りだけど。でもアリシアの方がコンパクトだし……」

娘の姿が見えなくて不安なのは理解できるのだが、店内カメラでずっと娘の動向を見ているような発言や自分ならふたりとも連れ帰るといふ発言からして危ない人だと言わざるを得ない。

——何かブツブツ呟き始めたし、本格的にやばくなってきたよな。気の弱いフェイトじゃ正気を取り戻すのは難しいだろうし、俺がやると変な方向に拗れる可能性がある。こういうときあの人がいってくれたら助かるのだが。

そう思った直後、普段よりも格段に低い声でプレシアさんを呼ぶ声があった。その声の主は彼女の首根っこを掴むとこの場を去り始める。

「まったく……娘のことになるとこれだから」

「ちよつと待って！ 待ってちようだいリンディ。アリシアがいないの。本当に一大事なのよ！」

「それなら心配ないわよ。フェイトさん、そこに置いてある手紙を見てちようだい。居場所が分かるわ」

「あ、はい」

「ふえいとおく、お姉ちゃんのことよろしくね」

「ほら、事務処理とか溜まってるんだからさっさと歩く！」

リンディさん……本当に苦労してるな。

慣れのある俺はそのように思うが、他のメンツはというと呆気に取られてしまっている。プレシアさんの娘であるフェイトは、恥ずかしそうに顔を赤くしているが。

気を取り直した俺達は、とりあえず置かれている手紙を見ることにした。内容はというとうと

『いとしの王サマと剣士さんへ。T & Hの看板娘、八神堂が頂戴しました。by小鴉丸』
といったものだった。

八神堂の主の絵と「返してほしいなら遊びに来てね」というセリフも書いてあるのだが、アリシアが危ない目に遭っていないと分かったので遊びに行かなくても問題はないだろう。

でも遊びに行かなかった場合、あとで確実に文句を言われるだろうな……つて考えてないで耳を塞いでおかないと。

「……あのうつけええええええつ！」

第9話 「八神堂」

手紙に激怒したディアーチエだったが、なんだかんだ言いながらも小学生達を連れて八神堂へ赴くことを選んだ。

その道中で俺は八神堂の主への愚痴を聞かされたが、昔からの付き合いがあつたためにその手の話はこれまでに何度も聞いている。加えて、ディアーチエは人の愚痴を俺くらいにしか言わない。

——個人的な推測だが、元氣過ぎるレヴィや真面目そうに見えてお茶目な一面のあるあいつの相手を昔からしてきたもの同士だから、俺には弱いところを見せてもいいと思つてくれているのだろう。

ある意味では俺にだけは甘えてくれているとも解釈できる。そのためディアーチエの愚痴に付き合うのは個人的に嫌いではないし、俺の愚痴も聞いてもらつたりするため全く苦ではない。

「ようやく着いたか」

「とうちやくく！」

ホビーショップT&Hから八神堂までは、それなりに距離がある。気温は落ちてきて

いるものの、徒歩で移動したため体力を消費しないわけがない……はずだが、レヴィだけは全く疲れを感じさせない。本当に彼女は元気だ。まあだから人一倍食べても体型に影響しないのかもしれない。

「(ハハ)は……本屋さん？」

高町の疑問に答えるとすれば肯定の返事になる。入り口から見える店内は、どこからどう見ても本屋なのだから。

八神堂への反応を見る限り高町やアリスは初めて訪れたようだが、くすくすと笑っている月村はここを知っているようだ。

おそらくだがこの店の主がディアーチェに酷似した容姿をしていることを知っているのだろう。そして、ふたりを見たらきつと驚いたりするだろうな……とでも思っているはずだ。本当にこの子はイイ性格をしている。

「どうしたのすずか？」

「う、うん、ちよつと……シヨウさん、どうかしましたか？」

「いや別に……」

「そう言われると逆に気になっちゃうじゃないですか」

「……君みたいな子は嫌いじゃないって思っただけだよ」

「え……ふふ、私もシヨウさんみたいな人は嫌いじゃないですよ」

月村はこの中で最も清纯そうに見えるが小悪魔系かもしれない。今はまだ乗っかる程度でやっていただけかもしれないが、今後の育ち方によっては多くの男達が騙されそうな気がする。

勝手な想像で何とも言えない恐怖を感じつつも、とりあえず返事をしようとした矢先、ディアーチエが店内に向かって声を上げた。

「来たぞ小鶉！ さっさと出迎えんか、このうつけ！」

ここまでの道中で散々俺に愚痴をこぼしていたはずなのに、これほど怒声を出すとは俺の知らないところでディアーチエは八神堂の主からストレスを感じさせられているのかもしれない。

などと考えている間に、店内からたぬきのような耳が付いたフードを被った少女が出てくる。その後ろには長い銀髪的女性。少女のほうは俺達の前まで来るとフードを外しながら口を開いた。

「どうも八神堂にいらっしや〜い♪」

「……いくつですかアナタ？」

「おおっ、分かる人おった」

どうやらアリサは、八神堂の主が行ったことが何なのか理解しているらしい。彼女よりも長く生きている俺は正直に言ってさっぱり分かっていない。まあ俺だけでなく高

町達も分かっていないようだが。

「やつほく、小鴉つち」

「久しぶりやね〜」

「小鴉、我を使い走りにするとはいい度胸だの」

「そう言いながらちやんと連れてきてくれるから王さま好きやよ〜」

八神堂の主は、満面の笑みを浮かべてディアーチエに抱きつく。ただ現在は一方的な好意なのか、ディアーチエからは嫌がられている。

ディアーチエは、基本的にスキンシップを取りたがるほうじゃないからな。口調とかは尊大だけど、人一倍羞恥心があったりするし。

「我は嫌いだ。ええい、はなせ〜」

「ええ〜と……」

「ああ、ごめんな。八神堂の店長で八神はやて言います。こつちは家族のリインフォース」

「いらつしやいお嬢さん達。私のことはアインスと呼んでおくれ」

家族と称してはいるが、ふたりの容姿は似ても似つかないし、名前もはやてとアインスでは大分違う。一般的にディアーチエとのほうが血の繋がりがあると思われるもおかしくない。まあ家族というものが血の繋がりで決まるものとも思わないが。

「まったく……」

「お前も大変だな」

「そう思うなら助けぬか」

「あの手のやりとりは毎度のことみたいだし、邪魔するのも悪いかと思つてな」

「貴様、ただ単に面白がつておるだろ」

「それは……まあ否定はできないな」

素直に答えるとディアーチエは俺に呆れたような目を向け、「貴様は本当にあやつと似ておるよな」などと言つてきた。あやつというのは、ダークマテリアルズに所属している全国ランキング1位を指しているのだろう。個人的にはあいつよりはマシな性格をしていると思う。

「えつと……ふたりは姉妹なのかな？」

「そんなことあつてたまるか、おぞましい！」

「ええ、ひどいわあお姉ちゃん」

「誰がお姉ちゃんだ！ よいか、我と小鴉は赤の他人だ。まったく関係ない！」

このような反応をするからはやてにからかわれるのだろう、と思ひながら俺は肩で息をするディアーチエを落ち着かせる。もちろんはやてに視線で話を進めるように促すのも忘れない。

「まあおんなじ顔は世界に3人はおる……つてやつやね。フェイトちゃんとレヴィもそうやし。なのはちゃんも会えるかもしれへんよ?」

高町と同じ顔……ああ、あいつのことか。個人的にフェイトとレヴィ、はやてとディアーチェは似ていると思うが、高町とあいつはそこまで似ていないと思うんだけどな。

「ああ……あれ? 私の名前」

「お噂はかねがね聞いたよ。なあすずかちゃん」

「うん、こんにちわはやてちゃん」

予想していたとおり月村はここを知っていたようだ。ただ俺もよく利用していたり、店の手伝いをするのがあったが彼女を見かけた記憶がない。目的の本が毎日あるわけでもないのでも偶々そうなたただけだろうが。

「すずかが最近通ってる面白い本屋ってこのことだったのね」

「うん、すごく素敵なお店なの」

「いつもご贖罪してもらってます」

「……あつ、そういうえばディアーチェちゃん達と知り合いつてことはもしかして」

「ディアーチェでいいというのに……」

そうしてほしいのなら聞こえるように言えばいいのに。まあディアーチェらしいが。

「そのとおり、うちもブレイブデュエルやつとるんよ。すずかちゃん達のこと私が誘

おうと思つてたんやけど一足遅かつたなあ」

実にちゃっかりとしている子供だ。まあ飛び級してすでに社会人だから当然と言え
ば当然かもしれないわけだが。

それにしても、今日は俺には絡んでこないな。ディアーチェや月村達がいるからそつ
ちを優先してるだけなのか……何も起こらないから楽でいいけど。

「八神堂はヴィータが所属してるベルカスタイルのBDオーナーなんだ。ちなみにT&
H（うち）はミッドチルダスタイルのBDオーナーだよ」

「へえ〜」

「スタイルの説明は今度するとして……はやて、アリシアがここにいるって書き置きを
見てきたんだけど」

「おおつとそうやった。立ち話もなんやし中に入つて入つて」

はやての店内へと促す言葉には何の問題もない……が、俺の腕に抱きついてきたこと
については問題がある。

「なあはやて」

「何かな？」

「こんなことをされなくても入るんだが……」

「私がしたいからしとるだけや♪」

何とも自分勝手な理由だが、この手のことはアリシアやレヴィイで慣れがある。それにはやてを無下に扱うとアインスの機嫌が悪くなってしまうため、このままにしておいたほうが無難だろう。

「こゝ、小鴉、何をしておるのだ！」

「店の中に案内やけど？」

「そんなことを言っておるのではない。貴様、分かつててふざけておるだろ。我が言いたいのは、なぜ腕を組む必要があるかということだ！」

「私とシヨウウくんの仲なんやから別にええやん」

付き合いがないわけではないが、普段から腕を組む仲ではなかったと思う。

話は変わってしまうのだが、なぜディアーチェは慌てたように怒っているのだろうか。俺がこのようなことをされるのはアリシアやレヴィイで見慣れているはず。

もしかしてやきもち……いや待て、冷静に思い返せば小さい頃からレヴィイが抱きついたりしてきたら怒っていた。ディアーチェは常識人として節度を守れと注意しているのだろう。

そう考えるのが自然のはずだ。というか、そうでなければ変に意識してしまつてディアーチェと上手く話せなくなつてしまう。

「そこまで親しい関係だと聞いたことは一度としてないわ。そもそも貴様より我の方が

……」

「……王さまのほうか？」

「な、何でもないわ！ ショ、ショウも変な勘違いするでないぞ！」

「分かつてるから落ち着け」

会話をしているうちに店の中に入っているのだから騒ぐのは不味いだろう。表向きの八神堂は本屋なのだから。

——にしても、小学生組はクールとかドライとか……俺達の会話にまるで無関心だったな。高町とフェイトは心配なのか何度か視線を向けていた気もするけど、アリサと月村においては本を見て回ってたよな。

「ほんと王さまはショウくんのが好きやなあ」

「な……こ、小鴉！」

「あはは、冗談や冗談。そんなに怒らんといて」

「貴様が怒らせるようなことを言っておるのだろうが！」

気が付けばおいかけっこを始めたふたりに、俺は呆れつつも温かな目を向けていた。

このふたり、本当に仲が良いよな。これを言ったらディーアーチェは即行で否定しそうだけど、なんだかんだで無視せずに相手をしてるわけだから少なくとも嫌ってはいないだろう。

そんなことを考えていると、誰かが近づいてくる気配がしたので視線を向けてみると、申し訳なさそうな顔をしたアインスが立っていた。

「すまないね。君の前だと主はいつもよりも子供らしくなってしまおうで」

「別に気にしてないし、むしろあいつは子供なんだから良いことじゃないか」

「そう言ってもらえると助かるよ……また背が伸びたかい？」

「さあ？ 頻繁に測らないし……まあアインスがそう思うんなら伸びたんじゃないか。时期的にも伸びる時期だし」

アインスは八神家でも大人しいというか無口なほうだ。こうやって話せるのは、これまで何度か店の手伝いをしたおかげかもしれない。ただ彼女の出す雰囲気はとても穏やかなので、会話がなくても気まずさといったものは皆無なのだが。

近況報告のような世間話をしていると、ふとはやてがこちらを見ているのに気が付いた。

「どうかしたのか？」

「べつにく、ただええ雰囲気を出すなあと思っただけや」

「な……あ、主、別にそんなことは！」

アインス、ここで慌てたらかえって逆効果だ。からかわれるのに慣れていないのは分かるが。

というか、何でからかったんだ。アインスが通っているのは夜間学校で年齢的に大学生。俺は中学生なので、彼女からすれば子供もいいところだ。一般的に恋愛の対象としては見られないだろう。

「シヨ、シヨウ、君も何か言ってくれ！」

「とりあえず落ち着いたら？」

「私にじゃなくて主にだよ！」

アインスが落ち着けば終わると思うんだけどな……とはいえ、はやてに言わないことにはアインスの状態が変わらないだろう。

「はやて、あまりアインスをからかうなよ」

「それもそうやな。今日はアリシアちゃんのことを含めて案内せなあかんし……じゃあ上の店番よろしゅうな」

はやてはアインスとカウンターの傍にいたザフィーラに店番を任せると、俺達に四角く区切られている床の上に立つように指示を出した。準備ができたことをアインスに伝えると、俺達の周囲を柵が囲む。安全のためにあるものなのだろうが、逆に不安を煽りそうでもある。

ジェットコースターみたいなものかどうか確認しようとした矢先、体が浮遊感に襲われた。それと同時に沸き起こる少女達の悲鳴。1名ほど楽しんでいる者もいるようだ

が、人物が人物だけに深くは考えないでおく。

「どや？　ちよつとすごいやろ？」

「すすすごいどころじゃないわよ！　何よコレ！」

「はえ〜」

「博士め……悪ノリしおって」

このジェットコースターのような設計にしたのはグランツ博士なのか。普通に考えれば、こういうところに力を注ぐなら別のところに注ぐべきだろうに。そもそもこの設計は心臓に悪い。

「グランツさんにはお礼せんとなあ〜……とか言ってる間に終了や」

「だ、大丈夫アリサちゃん？」

「……ダイジョウブヨ」

「グランツさんってブレイブデュエルを開発した人だよな？　どんな人なのかな」

「ハカセ？　ハカセはすごいよ〜」

「まあ少々変わつてるところがあるのだが……」

「あれは少々なのか？」

「……とにかく立派な学者で人格者だ。どこその店主にも見習ってほしいわ」

「耳が痛いわ……さて到着」

目の前には八神堂と書かれた巨大な鉄の扉。少女達が「でかつ!？」と口にしたのは言うまでもない。開く方法が音声認証だったのだが、ここに至るまでに驚きの連続だったこともあつて感覚が麻痺したのかどうでもよくなっていた。

第10話 「星光の殲滅者」

八神堂の地下アリーナに到着した俺達を出迎えたのは、バニーガールの姿をしたアリシアだった。何やら円盤のようなものに乗って司会を行っている。

アリシアの説明によると、イベントデュエルが行われるようだ。競技は2ndステージとも呼ばれる『ゲートクラッシュャーズ』。競技内容はプレイヤーが一本道の端と端からゲートを壊して進み、真ん中にあるターゲットを先に破壊したほうが勝ちという簡単なものだ。

「何やってるのお姉ちゃん……何か飛んでるし」

「いや、さつきT&Hさんのデュエル見とつたらうちもやりたくなつてなあ。飛んでる原理は企業秘密や」

普通に考えればグランツ博士が絡んでいるのだろう……いや、もしかすると俺の叔母が関わっているという可能性も。身の回りに技術者が多いと余計なことを考えてしまうから困ってしまう。

「せっかくやからこの特等席で見てってーな」

ここで断る理由もない俺達は、イベントデュエルを観戦することにした。

行われる競技は分かっているが、それを誰が行うのかはまだ分からない。八神堂のイベントなのでひとりは八神家の一員である可能性が高いが、もうひとりは一体誰だろうか。

『さて、ここで参加選手の紹介です。八神堂の常連さんはご存知、鉄槌の騎士ヴィータ選手！』

『今日こそ負けねえかな』

紹介と同時に客席から歓声が沸き起こった。ヴィータは全国ランキングで上位に入る実力者であり、はやて曰く近所の小学校の人気者らしい。まあ人気者なのは前者のことが理由かもしれないが。

『続きまして、ロケテスト時個人戦全国1位！ ダークマテリアルズ、シユテル選手！』
ヴィータの対戦相手の名を聞いたとき、俺は思わず声を詰まらせた。

ロケテストでの勝率が五分五分であったことから、俺達は互いのことをライバルとして認識している。これはシユテルからライバル宣言のようなことを言われたことがあるので間違いないだろう。

ただ俺がロケテストのランキングを決める個人戦に出なかったことが原因で、シユテルとは今仲違いをしている。

彼女もディアーチェ達と同じ学校、つまり俺と同じ学校に通っているため、嫌でも顔

を合わせてしまう機会がある。視線が合うだけで顔を背けられてしまったりするため、非常に気まずい。ディアーチエ達が言うには別にもう怒ったり拗ねたりしていいならしいのだが……。

『ぶつつぶせええつ！』

ヴィータの気合の入った声によって意識がデュエルへと戻る。どうやら彼女はデバイスの形態を推進力を得られる形態に変えて、直接ゲートを破壊して行く方法でターゲットへ向かっているらしい。

『これはすごい！ ヴィータ選手、分厚い門を物ともせず先に進んでいく！』

「ヴィータちゃん、すごい」

「うん、これなら……」

「甘いね」

「ああ、この程度では揺るがんな。我らが槍は無敵だ」

ディアーチエが口を閉じるのとほぼ同時に、デバイスを構えていたシユテルの周囲から光弾が飛んで行き、ゲートの中心部を捉えた。

『屠れ、灼熱の尖角……』

放たれた集束砲撃《ブラストファイア》は、一瞬にして全てのゲートを走り抜けた。

あまりの威力に煙が立ち込めてターゲットが見えなくなっていたが、晴れていくと近

くにヴィータの姿が見えた。ただターゲットを撃ち抜いた砲撃に巻き込まれたようで、衣服がボロボロになっていいる。少しの間の後、気絶してしまったのは言うまでもない。

「ダメやったか〜」

「二回の攻撃であんな威力なんて……」

「今のは誘導弾との合わせ技と言ったところだ」

「ビームの道を小さな穴で開けてドドーンって感じ!」

レヴィの説明は擬音語があつたりして分かりづらくもあるが、まあ今回は実際に光景を見ているので少女達も理解できただろう。

「一直線上に誘導弾を当てて……そこに直射砲を通す精密射撃」

「どれだけやればそんなことができんのよ……」

「それを軽く魅せるが我が槍、我が臣下!」

「人呼んで星光の殲滅者、シユテル・ザ・デストラクター!」

凜と佇むシユテルの姿には、まさにデュエリストの頂点とも言える貫禄がある。ロケテストのときよりも格段に腕を上げていると窺えるほどに。今の彼女に勝つためには、俺の持てる全ての力と技を用いて挑むしかない。それでも勝てるかどうかは分からないのが現実だ。

デュエルが終わって間もなく、ヴィータがシユテルに納得いかないと文句を言い始め

た。それを見たはやては、すぐさま現場へと向かう。

「何だよ今の。卑怯だもつかいやれよ、このむつつりメガネ！」

「勝ちたければもう少し柔軟な思考を養ってきてください。私はイノシシを苛める趣味は持っていませんので」

何を言っているかまでは分からないが、ヴィータの気に障るようなことを言っているのは長年の経験から理解できる。

顔を真っ赤にさせたヴィータが動こうとした瞬間、はやてが彼女の頭を撫でながら話しかけた。実にナイスタイミングだ。

「まあまあヴィータ」

「は……はやて〜」

「はいはい、おしかったなあ……どうやらシユテル、武士の情けや思ってリターンマッチのテイク2とか」

「動物愛護の精神によりお断りいたします」

「あたしをイノシシ扱いすんじゃないやねえ！」

あいつも年下相手に容赦がないな、と思っていると、アリシアがシユテル達の元へと飛んでいくのが見えた。もしかするとデュエルが予定よりも早く終わってしまったのかも知れない。アリシアと会話したシユテルはしばし考える素振りを見せ、返事をし

た。

「そういうことでしたら……仕方ありませんね」

「越後屋……おぬしもやりおるのう」

「いえいえお代官さまほどでは……」

周囲の反応を見る限り、八神堂にとってプラスのものだったと思われる。

ただ……アリシアとはやては何をこそこそと話しているのか気になる。ふたりの性格が性格だけに、良くない話をしているんじゃないだろうか。

「その代わり……」

「その代わり?」

「次の対戦相手には、タカマチナノハを入れていただきましょう」

俺達の存在に気が付いていたのか、シユテルは振り返らずにこちらを指差した。

対戦の指名を受けた高町が最初驚愕したものの、すぐにわくわくしているような素振りを見せ始めた。全国1位から指名される経験は大抵の人間ができないことであり、ブレイブデュエルを始めたばかりの彼女にとってはまだ見ぬ世界を見れるチャンスなのだから当然といえば当然だと言える。

「なのはちゃんを入れるって言い方からしてチーム戦ってことやな?」

「そのとおりです」

「ヴィータはリターンマッチしたいやろうから入れるとして、あとのメンバーはどないする?」

「そうですね……」

シユテルは考える素振りをしながら視線を這わせる。高町達の近くに立っていたこともあつて、俺も彼女と目が合ったのだが、すぐに視線を外されてしまった。

これまでに何度も謝ったし、ランキング戦の埋め合わせはいつでももするとも伝えた。だがずっと今のような反応をされてしまう。全く話しかけないと「あなたの誠意はその程度なのですか?」といった目を向けられるのだが……シユテルは俺にどうしてほしいんだ?

「タカマチナノハの近くににいるふたりとあなたでどうでしょうか?」

「別に構わへんよ。そっちのチームはどないする?」

「ディアーチェとレヴィだけで構いません……と言いたいところですが、ちようど暇にしている人物もいるようだし、彼を加えることにしましょう」

どうやら両チームのメンバーが決まったようで、シユテル達がこちらへと足を運び始めた。ただ、俺はおそらく選ばれていないだろうから客席で観戦しようとその場を離れ始めると、すぐに呼び止める声が発せられた。

「どこに行くつもりですか?」

声の主はシュテル。予想していなかった人物だけに俺は戸惑ってしまった。だが返事をしないわけにもいかなかったため、頭をフル回転させてどうにか言葉を紡ぐ。

「ど、どこって客席だけど……何か問題があるのか？」

「問題があるかないかで言えばあります。あなたはこちらのチームメンバーですから」
あまりにもさらりと言われたために理解が遅れてしまった。

いつの間には俺はシュテルと同じチームになったのだろう。いや、その前にこちらの意思を確認せずに決定するのはどうなのだろうか。

というか……シュテルは俺のことを避けてるんじゃないやなかったのか。前から時々何を考えているのか分からないときはあつたが、最近はより神がかったている気がしてならぬい。

「それで、これがシュテルご指名のパーティー編成つてわけだね」

考えている間にチームごとに別れていたようで、こちらのメンバーはダークマテリアルズ十俺。対戦チームは最近ブレイブデュエルを始めたばかりの小学生組にはやてとヴィータとなっている。

「チーム名は……ダークマテリアルズ十漆黒の剣士と、あるじと愉快的仲間達つてところかな」

「そのへんはどうでもいいけど、なんで他のショップの奴らと組まなきゃならねえんだ

よ。はやてとふたりで充分だ！」

「不服ならやめても結構ですよ」

「うぐっ……」

八神堂側からシユテルに頼んでいる以上、立場は彼女の方が上だ。ヴィータは戦うためには指示に従うしかないだろう。

あちらのチームはヴィータを除いて楽しそうだが、こっちは……レヴィ以外は何とも言えないな。シユテルは無表情だし、イスに座っているディアーチエは無気力そうな顔をしている。シユテルからチームメンバーに選ばれた俺は、言うまでもなくこの状況に落ち着けるわけがない。

「あれれ〜？ 王さま、何だかやる気がないね」

「あー……我はそろそろ夕餉の支度に帰りたいのだが」

ディアーチエの言葉に腕に着けていた時計で時間を確認すると、確かに夕食の準備をし始める時間帯だった。

俺もディアーチエと同様に食事の用意をしなければならない立場にある。

作るのが遅れたからといって叔母から文句を言われたりすることはないだろうが、彼女は何日も平気で徹夜で仕事に没頭できる人なのだ。その間はまともに食事を取らなかったりするため、これまでに何度も倒れられたという話を聞いたことがある。

叔母の健康管理も兼ねて日本に戻ってきた以上、俺が責任を持ってきちんと彼女に食事を取らせなければならぬ。倒れられるのは正直に言つて困る。

「王……お願いできませんでしょうか？」

シユテルはディアーチエの前に跪き、メガネを外した状態で懇願した。先ほどの彼女と違い、今の顔には感情が溢れている。

見つめられているディアーチエは、おそらくシユテルを無下に扱うことはできない。言動とは裏腹に昔から彼女は近しい人間には甘いのだ。

「ぐぬぬ……ええい、分かった。だが一度きりだ、よいな！」

「王さまつて結構甘いわね」

「あつ、分かる〜？」

「見てれば大体ね」

先輩という呼び方がいいと駄々をこねていたはずだが、今ではすっかりいつものレヴィに戻っている。もしかして一瞬とはいえ先輩と呼ばれていたことを忘れてしまったのだろうか。彼女は子供のように目先のことに集中してしまうので、ありえない話では決してない。

「その代わり、夕餉の支度を手伝うのだぞ」

「喜んで」

「あ、あの……私はどうしたらいいのかな？」

シユテルにそう問いかけたのはフェイトだ。彼女はどちらのチームメンバーにも選ばれていないようなので、行動としては当然だと言える。可哀想なことにシユテルからは顔を背けられてしまったが。

シヨックを受けたフェイトは両膝を抱えた状態で座り込んでしまった。そんな彼女を見たアリシアは、頬を掻きながら話しかける。

「フェ、フェイトはお姉ちゃんと一緒に解説でもしよつか。シユテルも考えがあるんだろうし」

「それは……分かってるけど」

高町を対戦相手に指名したことからシユテルに何かしらの考えがあるとは思う。ただチーム戦は5人一組で行うものだ。こちら側にはあとひとり分の余裕があるのだから、こちらのチームに加えてもいいのではないだろうか。

単純な戦力で考えれば俺を加えてる時点で過剰になっているだろうし、フェイトが入ったところでそう問題はないはず。でも待てよ、彼女の性格を考えると色々アドバイスをしそうな気もする。それをされたくないからシユテルはフェイトを外した可能性も……。

「……あれ？ フェイト達はどこに行ったんだ？」

「ん、ふたりやったらお色直し中や。服装もきちんと揃えてたほうがええやろうし」

確かにそのとおりだとは思う……が、アリシアがバニーガールの格好をしていただけに嫌な予感しかない。恥ずかしがり屋のフェイトは大丈夫なのだろうか。

「あなたはずいぶんと妹氏のことを気にかけているようですね」

「え……別にそこまで気にかけてるつもりはないけど。でもアリシアと違って内気な性格をしているから心配になることは多いさ」

「それは気にかけているのと同義だと思いますがね」

「そう言われると……」

否定できない、と言おうとしたときにふと気が付いた。今俺は前のようにシユテルと会話してしまっている。決して悪いことではないがこれは俺からすればの話であって、シユテルからすればどうなのかは分からない。

「どうかしたのですか?」

「いや、その……」

「……こちらから話しかけてもそのような反応をするのですか」

いや、むしろシユテルから話しかけてきてるから今みたいな反応をしていると言えるんだが。

「いい機会ですから言っておきますが、私はランキング戦のことをとやかく言うつもり

はありません」

「え……でも」

「あなたの言いたいことは分かりますが、最近はおあなたが私と目が合うと気まずそうな顔をしていたから会話をしようとしなかっただけです」

……つまり、シユテルは俺のことを気遣って素っ気無い態度を取っていたと。それを俺が違う解釈をしてしまつて今までのことが起きていたというのか。

「あんなシユテル……」

「何です?」

「そういうことは……言つてくれないと分からないんだが。ずっと怒ってるんだとばかり……」

「私とおあなたは昔ながらの付き合いです。冷静に考えれば、あなたが理由もなく参加しなかったとは思えません。正直に言えば、ずっとあなたとデュエルしたかったのですよ」

穏やかな微笑を浮かべるシユテル。そんな彼女を見た瞬間、俺の中にあつたもやもやしたものが消えていくような気がした。

「俺だつてずっとお前とデュエルしたいと思つてたよ」

「何でしょう……謝罪ついでに言われていたせいか心に響きませんね」

「……上げて落とすのやめてくれないか？ 怒ってないんだろ？」

「とやかく言うつもりはないと言っただけで、思うところがないとは言っていません」
「は？ ……なのに一緒にデュエルするのか？」

「あれはあれ、これはこれです」

ドヤ顔を浮かべるシユテルに対して、やつぱり俺とこいつは似ていないと思った。だがその一方で、前にも似たようなやりとりがあつたことを思い出す。

そういえば昔からシユテルのお茶目な一面には度々困らされてきたっけ……。

ここ最近も似たようなことを考えていた気がするが、改めて考えると何となく笑えてきてしまった。そんな俺を見てシユテルは首を傾げている。

「やれやれ、ようやく仲直りしたか」

「今ので仲直りできたのかは分からないけど改善はできた気がする。心配かけて悪かったな」

「ふん……心配などしておらんわ」

素っ気無いが、ダイアーチェが素直に心配したと口にするとは思えない。というか、俺が本気で悩んでいたときにシユテルのことを教えてくれたのだから心配していかないというのは嘘だろう。心配していないのなら、そのような行動を取るわけがないのだから。

とはいえ、ここで茶化するのはディアーチエに悪い。これ以上は何も言わないでおこう——と思つた瞬間、誰かが急に抱きついてきた。

「つと……レヴィか。脅かすなよ」

「みんな仲良くが一番だね」

こちらの言葉に対する返事にはなっていないが、レヴィの言葉は最もだ。ただ抱きつくのだけはやめてもらいたい。現状だと周囲に面倒な人間が多すぎる。

「……ディアーチエ、ここは私達も行くべきなのでは？」

「——つ、真顔で何を言っておるのだ貴様は！ 普通はレヴィを引っぱがすところであらう！」

「とか何とか言つて、王さま本当は行きたいんやないの？」

「それは貴様のほうであらうが！」

「え、行つてええの♪」

「ダメに決まつておる。というか、いい加減にせんかこのうつけ共！」

第11話 「スカイドッジ」

『れでいーす&じえんとるめん！ 大変長らくお待たせしました』

ハツラツとした声と共にライトが円盤のような乗り物の上の人物達を照らす。そこにいるのは、チアリーダーのような衣装をしたアリシアとフェイトだ。

『ここからのデュエルは、実況は引き続きアリシア・テスタロツサと』

『解説は私、フェイト・テスタロツサでお、お送りします』

アリシアは全く動じずにノリノリでやっているが、フェイトの顔ははたから見ても分かるほどに赤面している。まあ部活動でもないのにチアリーダーの格好をすれば大抵の人間がああなるだろうが。彼女の性格を考えれば、あれを着てあそこに立っているだけでも褒めてあげたい。

『それでは、さつそく3rdステージであるスカイドッジのルール説明をしたいと思えます』

『お、いいよいよ、フェイトもやる気満々だね』

いや、どう考えても恥ずかしさを解説を頑張ることで誤魔化そうとしているだけだろう。アリシアだってそれくらい分かるはずだろうに、なぜフェイトを刺激するような真

似をするんだ。あまりやりすぎると黙り込んでもおかしくないのに。

『今までのデュエルと比べるとちよつとルールが多いのがこの競技。なので図を使って説明するよ!』

『まずは各チーム、コート内に《アタッカー》を3人。コート外に《バックス》を2人配置して始まります』

『コートは自陣と敵陣で範囲が決まってるけど、上のほうには自由に飛び回ってOK。空の上で戦うのがこのデュエルの醍醐味かな』

『競技は《ボールスフィア》という球を自コートから敵に向かって投げ……』

「ちよつとたんま。そこから先はこつちで実演しながら」

「説明した方がよいかと……ですがその前に」

「カードスラッシュや」

ふたりはリライズアップを行ってアバターを変化させた。制服姿だったシユテルは、高町と同じセイクリッドタイプ——その色違いである紫を基調とした防具を纏う。

一方はやてはというと

「なあなあ〜どやった?」

「すぐカツコよかったよ。あれ? そのアバター……王さまと一緒?」

「お、さすがさすがちちゃん」

何がさすがなのだろうか。色の違いしかないのだから見れば誰だって分かると思うのだが……。

『はやてのもディアーチエと同じ《R・O・G》タイプ。その純正カラーって言ったらいいのかな』

「へえ〜」

R・O・Gーロード・オブ・グロリーは希少な技能を持つと言われていたタイプだ。例を挙げるならばディアーチエの場合、紫天の書の特異能力によってスキルを所持制限を超えて持ち込み発動させることができる。同タイプであるはやても似たような技能を持つているはずだ。

『ちなみに王さまの《暗黒甲冑（デアポリカ）》は、ユーリの愛盛りだくさんの超☆魔改造品だよ』

「や、やかましいー！」

愛が盛りだくさんという言葉が恥ずかしかったのか、ディアーチエの顔は赤くなっている。

ユーリというのは、ディアーチエ達と同様にグラントツ研究所にお世話になっている留学生の名前だ。他のメンツと比べると日本語に慣れていないようで、難しい言葉だと理解に時間がかかる。それに体があまり丈夫ではないため、学校には通わずに研究所で手

伝いをしていたはずだ。

「大体小鴉、貴様は姿形だけでなくアバターまで真似しおってからに……」

「偶然やも〜ん♪」

「なのはとあつちの全国1位さんも色違いよね」

「うん、びつくり」

高町にシユテル、フェイトにレヴィ、はやてにディアーチエと容姿が似ているものは今のところ同じタイプになっている。

カードを作る際には色んな情報を打ち込んでいるはずだが、まさか容姿だけでアターのタイプが決定してはいないだろうか。

「……セイクリッド」

「え？ なになにヴィータちゃん」

「オメーのはあのむつつりと同じギガレアなセイクリッドタイプだつて言つてんだよ！」

タイプの特徴としては、防御が堅い上に豪火力。チーム戦の場合は遊撃を担当するこ
とで真価を発揮するだろう。

「しかも、なのはちゃんのはさらに珍しい限定色なんよ」

「オメーに一撃もらったのは性能のおかげっつーことだよ。勘違いすんなよな！」

「う、うん……?」

「おんやあく、相性や性能なんて戦い方でどうにでもなる〜言うとしたのは誰やったかな?」

「は……はやてえ」

はやての容姿はディアーチエによく似てはいるが、性格はかなり違うよな。まあ全く同じ人間なんていたら怖いけど。

「アバターやスタイルとの出会いは運命や。どう育てていくかはみんなの腕次第やし。楽しんで強くなろうってことやね」

「なるほど」

高町の瞳ははたから見ても分かるほどに輝いている。これまでの対戦からも分かる通り、彼女には才能がある。それにアバターの性能にも恵まれているため、きつと近いうちに有名なデュエリストになるだろう。

楽しむのが一番だけど、先輩として簡単に負けるわけにはいかないよな。あの子達もある程度ブレイブデュエルについて分かってきただろうし、これからは自分で考えて行動するようになるだろう。俺も自分のために動き始めるとしよう。

「ねえねえ、そろそろ始めようよ〜」

「おっと、そうやったそうやった」

「それでは僭越ながら、実演も含めてスフィアとルールのご説明をいたします」

シユテルはスカートの裾を摘んで一礼。いつ見ても淑女さを感じさせる動きだ。お茶目な部分がなく、もつと愛想が良かったならば非の打ち所もない少女だっただろうに。まあ彼女のことをよく知っている人間からすると、それはもうシユテルではないと思えるだろうが。

「まず……ゲームの開始はサーブから」

綺麗なフォームから打ち出されたサーブがレヴィへと向かっていく。強烈かつ正確無比なそのサーブに、慣れないものならば腰が引けてしまうだろう。しかし、レヴィはあのダークマテリアルズの一員だ。あれくらいのサーブならば、片手でも捕球でき

……

「あつ……」

……ああうん、まあここで落とすのもレヴィらしいよな。

このゲームにおいては、ボールに反応して手を前に出すと《グラブシールド》というものが発生してキャッチ判定される。片手でも上手くすれば取れるのだが、油断すれば今のレヴィのように落とす。

「敵が捕球しそこねると自陣に1得点。この時、ボールがそのままコートを出ると3得点となり、被弾者はボックスに下がることとなります。なお、最初からボックスの場合

はこのタイミングで《バック》のコールをすることで《アタッカー》になることができます」

「15点の先取、もしくは敵コート内の選手がゼロになった時点で自軍が勝利。あと、ボールの投げ返しは捕球した者のみの権利となるので覚えておけ。自軍アタッカー同士のパス回しは禁止だ」

「ちなみに補足。キャッチや打ち返しの時だけはデバイス使ってもええねんよ」

「いつ、今言おうと思っておったのだ！」

「デバイスでの打ち返しは成立後、投げ返したことで同義になりますのでご安心を」

シユテル達の説明に、初心者のはなるほどと頷いている。直後、キャッチを失敗して落ち込んでいたレヴィが急に「変身！」と叫んだ。バニングスがすぐさま「アバターが変わった!？」とツッコんだが、マントがなくなっただけのようなもので変身と云えるかは微妙である。

——投げるのに邪魔だったんだろうが……あいつには羞恥心つてもものがないのか。つて、あるわけないか。あるなら会うたびに抱きついてきたりしないだろうし。

「こーやって……投げた後に魔力を込めると! ……あ」

シユテルに向かつて投げたはずのボールは、大きく左に曲がって月村へと飛んで行った。予想外の事態に誰もが動けなかったが、月村は見事にグラブシールドを出現させ

て、バック宙を決めつつキャッチして見せた。

それを見たバニングスはさすがだと褒め、はやてやヴィータは感心している。人は見かけによらないというが、あの子の場合はそれが多い気がする。

「要領は誘導弾と一緒だかな。イメージの正確さとタイミングが重要だ」

「《魔力》を込めれば威力と速度は上がるけど、魔力には《限界値》があるから気をつけてなあ」

「説明は大体こんなところでしようか」

『ありがとう。ダークマテリアルズはメンバーあとひとりどうする？』

「よし、ここはボクの子ヴィーを！」

「待てい！ 今回は我のを出す。前回の二の舞になってたまるか！」

ディアーチエの発言にレヴィは文句を言うが、シュテルは表情はあまり変わっていないがホツとしているようだ。

コイントスの結果、ダークマテリアルズが先制でゲームがスタートすることになった。アタッカーはシュテル、レヴィ、ディアーチエ。バックスは俺とディアーチエのNPC——通称《王ちやま》だ。対する相手側は、アタッカーが高町、バニングス、ヴィータ。バックスに月村とはやてである。

「そんじやいっくぞー！」

レヴィは笑顔でボールを高々と放り投げると、あとを追うように跳躍する。

「滅殺！ 零七七式真・雷光サーブ！」

零なんたらの部分はともかく、まさしく雷光に等しいサーブは甲高い音を撒き散らしながら……高町とバニングスの間を通って敵陣のコートに着弾した。間近を通った高町の顔が一瞬「え？ ……何これ」のようになつた気がした。

「ありや……当たんなかった」

『これはスゴい！ まさに電撃サーブ！』

「ななな何よ今の……」

「わ……」

バニングスは怒り、高町は放心気味だ。ゲームとはいえ勝負なのだから……とも思いますが、確かに始めたばかりのプレイヤーに放つサーブではない。

敵側が誰も捕球できなかつたため、再度こちらのサーブになる。なおサーブは順番制なので、次のサーブはシユテルだ。

「では……参ります」

シユテルから溢れた魔力が灼熱の炎へと変化しボールを包み込んでいく。属性込みに加えて集束までかけるとは……レヴィよりも大人気ない。勝負事に熱くなる奴だとは知っているけれども。

放たれた炎球は大きく曲がりながらバニングス達へ襲い掛かる。潰せるのは定石ではあるが、全国1位が初心者をはじめいいものだろうか。

考えていることは大体分かるが……まあ実力を見せるのも務めではあるか。俺は今回と同じチーム、それも助っ人というか人数合わせでいるようなものだから静観しよう。

「アイゼン！」

バニングス達を助ける……ゲームに勝つためかもしれないが、ヴィータはデバイスを手に炎球に接近し、デバイスを思いつきり叩きつけた。だがシュテルのサーブの威力のほうに勝っていたようで、ヴィータは外野へと吹き飛んでいく。

これはアウトか、と思いましたが、凄まじい勢いで追いかけてきたバニングスが制止をかけたことで、ヴィータはコース内に留まることができた。

バニングス達に良い感情を抱いていないように見えたがヴィータだが、今バニングスに向けている顔は穏やかだ。助けてもらったことに礼を言っているのかもしれない。微笑ましい光景だとは思いますが……あの子達はボールのことを忘れていないのだろうか。

「……つて、ボール!?!」

「やべえ！ このままコート外に出ちまうと……」

やはり、というべき反応をしたふたりだったが、間一髪のところで高町が捕球した。先ほどはサーブに放心していたというのに、とつさにボールを追って空を駆けられるのは感心する。

高町は滞空したままボールに魔力を込め、シュテル目掛けて投げ返した。初めてにしては良い球ではあるが、あれくらいのボールではシュテルを仕留めることは……

「アクセルッ！」

「ッ……!?!」

高町の掛け声と共に、ボールは強烈な加速し左右にブレた。初心者が放てるものとは予想すら難しいそれに、シュテルも反応が遅れたのか側頭部に被弾。まさかの事態に、レイイやディアーチエからは驚愕が漏れ、敵側には驚きや喜びの反応が沸き起こる。

「……高町なのは……本当に面白い子だな」

第12話 「お茶目なシュテル？」

全国ノーデュエリストの称号を持つシュテルのヒット&アウトという大金星で、混成チーム優勢で始まったスカイドッジ。ダークマテリアルズはシュテルの抜けた穴を埋めるために、俺と共にバックスをしていた王ちやまをアタッカーに移すことにした。

補足しておくくと、スカイドッジでは各チーム2回まで《バック権》を使用することができる。これはバックスが2名以上いるときに使用でき、外野から内野に移動していい権利だ。また他にもバックスが敵のアタッカーを撃破することができれば、バック権を使用せずに自陣のアタッカーになることはできるが、ストックすることはできない。

「レヴィをよろしくお願いします」

アタッカーに移ろうとする王ちやまに真剣な顔で話しかけるシュテル。彼女を見たデアーチエの顔は、どことなく呆れているようだった。

こちらのチームのバック権は残り1回。あちらは2回。数だけで言えばあちらが有利の状況だ。ただシュテルが撃破されたことで、デアーチエ達は本気になったようである。現在作戦会議をしている。個人・集団においての戦力を考えた場合、あちらのチームに余裕はないだろう。

そんなことを考えていると、隣にシュテルがやってきた。普段よりも距離感が近いように感じるのだが、まあ気にすることはないだろう。現実ではメガネを掛けているシュテルだが、ゲーム内ではメガネがない状態だ。現実でメガネを掛けていないときの彼女もこれくらいの距離感なので、別におかしくはない。

「あれは初見じゃ厳しいよな」

「厳しい? あなたならば避けられたのではないですか。反応速度は私よりもあなたのほうが上なのですから」

確かに近接主体の俺のほうが射撃主体のシュテルよりは反応速度に優れてはいるだろう。だがどうして少し刺々しく言うのだろうか。

このデュエルに俺を引き込んだのはシュテルのほうだよな。過去のことと思うところはあるって言うってたけど、それはそれでこれはこれらしいし。

「……………」

「……………」

「…………何で付いて来るんだよ?」

「あなたと話すためですが?」

「いやいや、話すだけならもつと距離があってもできるよな。どうして今みたいにぴつたりと隣をキープする必要がある。」

「……そうか。でもこの距離感で話す必要はないよな?」

「いえ、ありますよ。思わぬ撃破に私の心は傷ついています。なので慰めてください」
「全く傷ついているように見えないんだが?」

「というか、内心は笑っている気がする。高町の潜在能力の高さにデュエリストとしての血が騒いでいそうだし。」

「傷ついています。方法は……そうですね、頭を撫でるといったもので構いませんよ」
「お前……真顔で何言ってるの?」

シユテルは昔から付き合いのある奴だけど、未だに掴めない部分がある奴だ。俺がかしいのか、それともシユテルがおかしいのか……多分後者だよな。俺は至って普通の中学生だし。

『ちよつとちよつと、デュエル中にイチャつくのはどうかと思うんだけど』

「姉氏、別にイチャついてはいません。私達なりのコミュニケーションです」

『そうか、って何でそこで腕に抱きつくの!?! 明らかに挑発というか意識向けさせてるよね!?!』

「何のことでしょう? 私と彼の仲はあなたも知っていますはずですが?」

うん……知っているとは思うけど、俺と同じで友人同士って認識だと思ふな。腕を組むような関係では決してないぞ。というか、からかうためだからって引つ付くのはやめ

ろ。一応俺だって男なんだから。

それにさ、さつきから凄くディアーチエが睨んでるんだけど。真面目にやれって感じで。レヴィは何か羨ましそうな顔してるし。お前は現実のほうで会うたびに引っ付いてるだろ。少しは我慢しなさい。

「こらシュテル、わたしのシヨウくんは何してるんや〜！抱きつくのはわたしの特権なんやで〜！」

反対側の外野から両腕をブンブン振りながら怒ってますと言いたげに声を上げるはやて。俺から言わせてもらうと、はやてのものになった覚えもなければ、はやてだけに抱きつくことを許した覚えはない。

「はやて、私の記憶が正しければシヨウは誰のものでもありません。故に今は同チームであり、隣にいる私のものです」

「シュテル、何でお前は時折ぶつとんだ理論を出すんだ？ どう考えてもそれはおかしいだろ」

「私にこうされるのは嫌なのですか？」

シュテルはディアーチエにお願いしたときのように上目遣いで聞いてきた。嫌か嫌じゃないかといえば、別に嫌ではない。嫌ならば近くに居るのを許していいだろうし。

「嫌じゃないけどさ……」

「ええい、いい加減離れぬか。今はデュエル中ぞ！ それに小学生も居るのだ。人目はちゃんと気にせぬか！」

「ディアーチエもああ言ってるしさ」

「大丈夫です。ディアーチエは嫉妬からあのように言っているだけです。前に寝ているときにですが、枕を抱きしめながらあなたの名前を呼んでいたことが……」

「な、ないことを捏造するではない！」

と言っている割には顔が赤いな。まあ寝てるときだから否定できない部分があるからな。でもあのディアーチエだし……多分シユテルの嘘だろう。

『ダークマテリアルズ、真面目にやってくれないとデュエルが進まないじゃん。実況できないうよ！ フェイトも何か言ってるよ！』

『え!? えつと……その、仲が良いのは良いことだと思っけど……今はデュエル中だから……』

『そうだよ。大体シヨウはフェイトのなんだから取っついているのはわたしだけ』

『ちよつ、お姉ちゃん!? ベベベ別にシヨウさんはわ、私のじゃないから。それに姉妹だから取るのはダメだよ!』

フェイトはともかくアリシア……お前も真面目にやるつもりないだろ。シユテルに

対抗意識燃やしてるみたいだし。

時間が止まったかのように沈黙が流れ始めたので。俺はそつとシュテルを引き剥がすとボールを持つていた高町に話しかけた。

「あー高町」

「え、あつ、はい」

「こつちから言うのもおかしいんだが、続きやっていいぞ」

「ああ、はい。……それじゃあ、高町なのは行きます！」

言い終わると同時に大量の魔力をボールに込める高町。その魔力量に俺を含めた経験者組は内心驚いたことだろう。

豪火力で鉄壁のセイクリッドに加え、飛行のセンス、それにあの魔力量か。潜在的な能力だけで言えば、隣にいる全国1位さんよりも上かもな。こいつはそんなに魔力が多いわけじゃないし。可能な限り無駄をなくすことで鉄壁と火力を得てる技巧派タイプだから。

『なのは、あんまり込めすぎると……!』

「妹氏、あなたは解説であつてセコンドではないはずですが？」

『フェイト、シュテルの言うとおりだよ。さすがにずるっこ』

シュテルとアリシアの言葉に肩を落とすフェイト。ただ今回ばかりはふたりのほう

が正しいので、彼女にフォローの言葉を掛けてしてやることはできない。

そうしている間にも高町は魔力を込め続け、その込められた魔力量にヴィータは驚きの声を上げている。ただこちらの内野はというと――

「なによはつてもしかしてシユテるんとおんなじ?」

「うむ、魔力集束の技術があるようだな」

――ただただ現実を直視しているようだ。だが身構える様子はない。先ほどまでは油断があつたかもしれないが、今のデイアーチエ達はどの程度かは分からないが、多少なりとも本気になっている。シユテルのときのようなことは起こらないだろう。

「それじゃ……行くよ、せーの!」

「お、ボクか……よつ、甘い甘くい!」

高町が放つたアクセルシユートは初心者とは思えない速度と誘導性のある玉だが、レヴィは機動性に優れたライトニングタイプ。それに全国で一桁に入る実力の持ち主だ。実況では紙一重で避けていると言っているが、本人からすれば余裕だろう。顔も笑っていることだし。

今のままで当たらないと思つたのか、高町はさらにボールを加速させた。それにはさすがのレヴィも驚いたようだが、直後には強気な表情が浮かんでいた。

「そんじゃボクも凄いのやつちゃうもんね!」

ボールが当たる直前、レヴィの姿が消える。いや正確には消えたのように見えるといふべきだろう。彼女は《スプライトムーブ》と呼ばれるスキルを発動させ、残像が見えるほどの高速で移動している。

今のレヴィに攻撃を当てるのはシュテルやディアーチェでも難しいだろうな。俺も動きは何とか追えるけど、防御はともかく反撃は厳しいし。

超高速移動のレヴィを高魔力のボールで追いかけることで、高町の魔力はみるみる減少していく。それは目に見える形で現れ、高町はどことなくふらつき始める。このゲームにおいて魔力は精神力でもあるため、枯渇すれば気絶してしまう。

「それならー」

今は当てることができないと判断したのか、ボールは急遽レヴィから向きを変えてディアーチェに飛んで行った。しかし、ディアーチェは動こうとはせずに指一本で高町の剛速球を受け止めた。止められた高町が驚愕の表情を浮かべたのは言うまでもない。

「悪魔の門より来よ闇の宵風……返礼だ」

詠唱のとおり、闇に飲まれたボールは悪魔のような門から射出されて高町に襲い掛かる。俺の記憶が正しければ、確か《デモンゲイト》と呼ばれる魔法だったはずだ。

直撃を受けた高町は凄まじい勢いでコース外まで飛んでいき、盛大に起きた爆発に巻き込まれた。場所を移動していなければ巻き添えになっていたかもしれない。彼女を

心配したチームメイト達は急いで駆け寄って行く。

『シユテル、DMSとの全開勝負なんて初心者なのは達にはまだ荷が重いよ。いきなりこんな差のある勝負なんてしちやったら……!』

フェイト、高町を心配する気持ちは分かるが今の君は解説のはずだろ。それと……シユテル、お前はうんざりとしたような顔をするな。その顔よりはまだ無表情のほうがマシだ。

「黒ひよこ、貴様は自分の仕事を続けよ」

『でもー』

「もう一度言う。よくモニターを見て仕事を続けよ」

ディアーチェの言葉にフェイトの意識は再度高町のほうに向いた。そこには、コース外には飛ばされたもののしっかりとボールをキャッチしている彼女の姿がある。フェイトに気が付いた彼女は、大丈夫と言わんばかりに拳を突き出してアピールをした。その後、元気にバックスに移動し始める。

「過保護にするだけでは雛鳥の成長を妨げるだけ……ということです」

『私はただ……みんなのことが心配で』

「過保護・過干渉は煙たがれますよ」

……シユテル、お前フェイトに何かあるのか。さつきから妙に冷たいというか、言動

がひどいように思うんだが。

というか、何でフェイトと会話しているのに俺の髪を触ったり、頬を引っ張ったりしてたんだ。いやまあ何となく分かるけど、暇だからって人で遊ぶなよ。NPCとは違うんだから。

「向かい風の中でしか見えない景色もある。その景色の中で羽ばたく彼女達の姿を私は見てみたい……」

「……シヨウ、あなたはエスパーですか？」

「いや、こういうときのお前の内心は割りと分かるから。それより、いい加減俺で遊ぶのやめろ。これ以上やるならさすがに怒るぞ」

第13話 「終盤……だけど」

試合は混成チームがバック権を使用し、月村がアタッカーに加わったことで再開された。

月村はまだまだ初心者であるが、話してみた感想としてはあの中でも頭が切れる部類に思える。小さな狸さんにも何か吹き込まれていたようなので油断は大敵だろう。

アリシアの実況が進行する中、月村はアタッカー達に何か吹き込む。その間サーブを行うレヴィは、これといって気にした様子もなく、体の至るところでリフティングして時間を潰していた。余談だが、彼女の頭の上には王ちゃまが乗っている。

『レヴィ選手のサーブから試合再開です。またも真・雷光サーブが火を噴く……もとい鳴り響くのでしょうか!』

「モチのロン、当たり前エダのクラッカーだね♪」

……あいつは何を言っているのだろう。

と、思っている間にレヴィは踵でボールを高々と打ち上げた。彼女はすぐさまあとを追っていく。無論、頭の上に居た王ちゃまも一緒にだ。チラリと敵コートに視線を送ると、アタッカー達は強気な表情を浮かべていた。

「ボクと王ちやまでオーバレイ！ 裏七七式、極・雷光サアアアブー！」

レヴィと王ちやまのふたり掛かりで放たれた雷光は、先ほどのサーブより格段に高い威力を誇っているように見える。全国ランカーが初心者に向かって放つには、正直大人げない。まあここに至るまでに、大人げないことは多々あったのだが。

混成チームは慌てずに行動を起こす。

まず月村が氷の盾を何重にも展開して雷光の威力を落とすが、相殺することができなかつた。それを見たバニングスは、己の拳に魔力を集中させ勢い良く振り抜き、雷光の上に打ち上げる。ヴィータが宙を駆けて後を追ひ、最上段からデバイスを使った一撃を叩き込む。

「どんな球が来ても……あれ？」

避けようとしたレヴィが突然へたりこんでしまった。ここまでの状況を振り返るに、おそらく魔力が切れてしまったのだろう。

流星のような返球が迫る中、レヴィは諦めたように立ち尽くす。そこに現れる小さな影が現れる。

「王ちやま!？」

そう、小さな影の正体は王ちやまだつたのだ。きつとシユテルに言われた言葉を守ろうと、自分の身を犠牲にしてレヴィを守ろうとしているのだろう。

王ちやま……お前って奴は。

と想いを馳せていたのだが、あまりの返球の威力に王ちやまは弾き飛ばされレヴィにも直撃した。ふたりがノックダウンしたことで、相手チームに一拳に6点もの点数が入る。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………無視ですか?」

いや、無視はした覚えはないんだが。気が付いたら傍に立っていたし、視線を向けてみても反応がなかったから黙ってただけで。

「今度は何の用だよ?」

「いえ、大したことではありません。ただ……あなたも見守ってばかりではなく、少しは楽しんだらどうかと思ひまして」

一応俺は全国ランキング1位さんと同等の実力があると評価されているし、本人からもライバル扱いされている。ついこの間始めたばかりの小学生相手にそれは……、と思ったりもした。だが

——確かにシュテルの言うとおりかもな。あの子達はシュテル達の力を目の当たりにしても、屈することなく立ち向かい続けている。成長の早さから考えて、きつと近いうちに強敵となって目の前に現れる違いない。

俺達デュエリストは、切磋琢磨して更なる高みを目指す存在だ。彼女達が目指したいと思う高みを示すことも先輩としての役目ではないだろうか。

……いや、あれこれと理由を並べるのはよそう。

俺はディアーチエ達からシュテルと似ていると言われることがある。普段は否定しているが、デュエリストとしての想いや思考に関しては似ているところが多いのも事実だ。彼女達が向かい風の中でどのように羽ばたいてくるのか、俺も見たい。

「ふふ……」

「何だよ？」

「別に何でもありませんよ」

そう言つてシュテルは、静かに微笑みながら俺の元から離れて行く。

訳が分からない……わけじゃないけどな。俺はあいつと同じデュエリストなんだから。シュテル、ありがとな。

ロケテストに参加したことで、俺はどこか遠慮してしまっていたのかもしれない。

自分は一般の人よりも先輩なのだから教える立場なのだ。いきなり強い力を見せ

てしまうと萎縮してしまう人々がいるのではないかと。

力を持つ者には責任が伴う。

アニメや漫画でも時折耳にする言葉だ。それらに出てくる力に比べれば、俺の持つ力なんて微々たるもの。はたからの評価なんてゲームが上手い中学生といったものだ。

だがそれでも、俺は力を持っている。見る者に憧れや興奮を抱かせることくらいはできるはず。

目立つことは正直に言っただけだ。だがすでに俺はアリシア達のせいで充分に認知されてしまっていることだろう。ならば開き直って純粹にゲームを楽しんだほうが得策と言えるだろう。

そう思う一方で、もしかすると嫉妬や恐怖のような感情を抱かせるかもしれないという想いはある。だが俺は神ではなく、ひとりの人間。ただのデュエリストなのだ。全ての者から好かれるわけではない。

思考する間にもデュエルが進む。進むに連れて俺の脳内はクリアになっていき、ロケテストの時に抱いていた感情だけが残った。

……そう、俺はただのデュエリストだ。テストプレイヤーだったからどうこう……、なんて考える必要はない。ただ、ひたむきにデュエルに挑むだけだ。

『さあ、デュエルも終盤に入ってきました。現在、コート内に残っているのは混ぜっこ

チームがアリサ選手にすずか選手、そしてはやて選手。対するDMSはディアーチエ選手とシヨウ選手です!」

アリシアの実況に補足説明を行うと、互いにバック権を1回ずつ残しており、サーブを行うのは俺だ。

さて……誰を狙うか。

定石で考えれば、経験値の少ないバニングスか月村を狙うべきだ。より可能性を高めるならば、防御力に劣っていそうなバニングスを狙うべきだろう。

だがこれまでの流れを見る限り、ディアーチエがシユテルのために膳立てを行つてい
る節がある。加えて、俺は今回タークマテリアルズのおまけとして参戦している身だ。

あいつは別にそんな見つもりはなかったんだろうが、全力じゃなく少しは楽しめと言われた以上、ここはあの小狸を狙うべきだよな。さつきから構つてアピールしてて少しウザいし。

「いやん、そんな見つめられたら恥ずかしいやないか」

「はやて……あんた余裕ね」

「はやてちゃん、何だかシヨウさんの機嫌がどんどん悪くなつていつてるように見えるんだけど」

「大丈夫、大丈夫。シヨウくんは一見冷たいように見えるけど、優しい性格をしとるん

や。それに照れ屋というか、素直に感情表現せんところがある。何よりわたしとシヨウくんの仲や。何も問題……」

話している途中で投げけるのもどうかと思つたが、ああもベラベラとナチュラルに馬鹿にされては苛立ちもする。年齢で言えばはやては小学生だが、ああ見えて大卒の社会人だ。俺は中学生なのだから何も問題あるまい。

俺はボールに魔力を込めつつ鋭く放つ。本来ならば高町のように急加速や旋回を取り入れたり、シユテル達のように集束や属性を付与して攻撃力を上げるところだ。が、俺は一刻も早くあの小狸の口を閉じたかったので、あえて直進するだけのボールを放つことにした。

俺の魔力を吸い込み黒い閃光と化したボールは、迷うことなくはやてへと突き進み直撃。彼女のオーバーとも言えそうな悲鳴がコート内に響いたのは言うまでもない。コート内に居たバニングス達が心配の声を上げるが……

「ぐす……わたし、傷もんにされてもうた。もうお嫁に行けへん」

などと、小狸はしっかりとボールを抱き締めながら泣き真似をする。チラチラとこちらの反応を窺ってくるのが実に癪に障る。

「おい、誤解を招くようなことを言うな。身も心もお前は健康だろう」

今小学生から《乳魔人》、《わがままボディ》と呼ばれる連中の耳に入ったらどうする

つもりだ。あいっらは主しLOVEなんだぞ。下手したらボコボコにされるだろうが。

「何を言うてるんや。今のでわたしのハートは……シヨウくんは……撃ち抜かれてもうたんで」

「ええい、いつまで小芝居をするつもりだ！ さっさとボールを投げぬか！」

「大丈夫、安心してや王様。わたし、王様のことも好きやで」

「誰がそんなことを申せと言った！ 我はボールを投げると言っておるのだ！」

「もう素直やないなあ。そんなんじやシヨウくんはわたしがもらってまうで」

「——つ、ベベ別に我はシヨウウのことなど何とも思つておらん！」

ズキツ！ という音が胸に響く。

わけもない。これまでこのようなやりとりはたくさんあったのだ。いちいち反応してはきりがない。

だからティアーチェ、俺の反応を窺うな。小学生達は目を輝かせたり、恥ずかしそうに顔を赤くしながらも聞きたいなってアピールはやめろ。

「とまあ、ふざけるのはここまでにしよか。これ以上は王様だけやのうて実況さんから怒られかねへんし……行くで！」

気合の声と共に、はやての顔がのほほんとしたものから凜としたものに変わる。これは本気で来る！ と思つた次の瞬間——

「シヨウくん、わたしの気持ち受け取って〜♪」

——満面の笑みで放たれたボールは、実にふわ〜という効果音が似合うほどゆつくりとしたものだった。魔力が込められているようにも見えず、ただ投げただけとしか言えない。

俺は静かに右手で漆黒の愛剣を抜き放ち、肩の高さで構え限界まで引き絞る。今放とうとしている魔法は、炎熱変換も同時に掛かるため集束される魔力が深紅色に変化する。

「え、ちよつ……!?!」

はやてが慌てたように声を漏らし、身振り手振りで落ち着けと訴えてくる。だが俺は止まりはしない。

前後に大きく開いていた両足で思いつきり地面を蹴り、生じた加速を回転力に変化。背中を經由させて右肩に伝え、回転を再び直進運動に変える。

魔法名《ブレイズストライク》。

ガードの固いセイクリッドタイプであろうと確実にダメージを与え、時として戦況を一撃で決め得るほどの威力を誇る魔法だ。真紅の魔力刃が刀身の約2倍ほどまで伸びるため、片手直剣にはあるまじき射程距離を誇る。限界まで伸ばされる右腕のリーチを含めれば、長槍型さえも凌駕する射程になるだろう。

撃ち出した剣は、深紅の奇跡を描きながらボールを直撃。ふわりと飛んできていたボールは、まるでジェットエンジンで加速されたかのように爆発的に速度を増し、慌てふためくはやてへと向かう。

「うー……！」

腹部に赤い彗星が直撃したはやては盛大に吹き飛び、転げ……仰向けの状態で力なく寝転がる。心優しい小学生達はそんな彼女に近寄り、代表してヴィータが彼女を抱きかかえた。

「はやてー！」

「……………みんな……………あとは頼んだで……………ガク」

直後、ヴィータの声がこだまする。

何やら俺が悪役の空気になりつつあるが、どう考えてもあそこで死に逝く仲間を演じている馬鹿のせいだよな。本当に気絶する奴は「ガク」なんて言わないし。

もしかしてあいつ、今の演技をするためにわざと受けたんじゃ……そう考えると、あいつのいい様に動かされた感じがして癪に障るな。見ている人間は楽しんでるだろうが。

『さすが《漆黒の剣士》の通り名を持つショウ選手、本気の一撃はハンパないです。そのあとの展開については……まあこのふたりのやりとりは夫婦漫才みたいところがあ

りますし、観客の皆さんは気にせず楽しんでください』

「もう、夫婦なんて照れるやないか」

『あ、はやて選手、イベントを盛り上げてくれるのはこちらとしても嬉しいんですけど、あまりイチャイチャされるのも困りますからね。イチャつくならデュエルが終わってからにしてください』

「りよ〜かい♪」

はやては何事もなかったように立ち上がり、集まっていたチームメイト達をコートの中へ戻す。

スカイドツチは無事に再開されたわけだが、どうにも緊張感が足りない。だがそれは俺だけのようで、先ほどの一撃のせいか、コートに残っているバニングスと月村の顔には緊張の色が見て取れる。

「全国レベルだつてのは聞いてたけど……」

「そうね……ちよつと大人気ない気もするけど」

「悪いな、今の俺はダークマテリアルズの一員なんだ。王に仇名す者に容赦はできない」
変に緊張されて実力を発揮されないのも困るので場の空気に乗ってみたのだが、慣れがないため内心恥ずかしく思ってしまう。けれど小学生達に効果はあったようで、緊張感を持ちながらも笑みを浮かべている。

「……ふと思ったのですが、今のはディアーチエへの告白なのでしょうか？」

「んな——シユテル、貴様は何を言っておるのだ！ せっかくの緊張感が台無しではないか！」

「すみません、ですが気になったもので」

ドヤ顔で言われても全然謝られてる気がしない。何ていうか……このメンツでの真剣勝負って今の段階じゃ無理なんじゃないのか。

第14話 「親戚、現る」

八神堂でのスカイドツチは、混成チームの勝利に終わった。

詳しく説明すると長くなるので簡単に言おうと、俺とデイアーチエがシュテルだけに任せてバックスに回り、彼女が目指すべき高みを体現していたのだが、混成チームの持てる全ての力を掛けた一撃を受け止めきれずに場外に出てしまったのだ。

高町はシュテルからライバル認定されてたし、高町を含めた小学生組は今度グランツ研究所に来てって誘われたっけ。その前にチーム名を決めないといけないと言っただけだ。

近々あの5人がチームになるのか……良いチームになるだろうな。

アバターのタイプもバラバラであるし、やる気や不屈さも充分にある。普段の仲の良さも考えれば、近いうちにチーム戦でも活躍するようになるのではないだろうか。あのダークマテリアルズに潜在的な力は認められているのだから。

「あの子達が有名になればT&Hも活気付く。八神堂やグランツ研究所にはすでに有名な連中がいるわけだから……ますますブレイブデュエルが世の中に広まるだろうな」

そう思うとロケテストに参加し、叔母が開発に関わっていた身としては実に嬉しい。

その一方で、あの子達にまでチームに入ってほしいと言われ始めるのでは……、と思うと少し憂鬱になる。

……いや、大丈夫かな。チームは5人1組だし、あの子達はちょうど5人なんだから。そのため誘ってくるのはダークマテリアルズくらいでは、と思いたいところだが、八神堂のことを考えると人数が居ても誘ってくる可能性はある。まあT&Hはアリシア、八神堂ははやとと特定の人間だけだろうが。

ディアーチエが誘ったことはないし、レヴィもじゃれついてくるくらいでチームに入れとはあまり言わない。シュテルは共闘も楽しそうではあるが、敵対するほうが楽しいと思っていそうな奴だ。あそこのチームが1番誘ってこないかもな。

「ということとは、これまででほとんど変わらないかもな」

良いことのように思えるが、考え方によつては味わう苦労も同じということだ。素直に喜べない。これ以上考えても気分が向上するわけではないので、コーヒーを飲みながら今日の予定を考えることにした。

確かレーネさんは帰りは遅くなる、最悪帰ってこないかもしれないと言っていた。食事は自分の分だけを用意すればいい。ならいつも以上にブレイブデュエルに時間を割いてもいいかもしれない……。

『シヨウ、デュエルをするなどは言わんがきちんと食事は取らぬか！ どうして貴様は

時折だらしくなるのだ!』

ふと脳裏にディアーチエが出てきてしまった。年齢的には俺のほうが少し上なのだが、昔から面倒見の良い性格だった彼女には時々説教されていたのだ。言っていることが正しいだけに反論できた覚えはない。

最近はなくなつたが……こつちに戻ってきてからは食事に誘われることがあるな。あいつの料理は上手いから食べたくはあるが、あそこは人数も多いし、たくさん食べる奴もいるからな。手間を増やしたくないって思うんだよな。

これをディアーチエに言つたところで、気にせず食べに来いというニュアンスの返事があるだけだろう。しかし、俺も家事をしている身であり、日頃の彼女の家事を除いた苦勞も理解できるため、あまり甘えたくはない。

「……ん?」

不意に室内に高めの音が響いた。来客を知らせるインターホンの音だ。

記憶を辿つてみても、今日誰かが来るといふ話は聞いていない。突発的に訪れそうな人間の心当たりはいくつかあるが……海外にいる両親が何か送ってきた可能性もある。ネガティブに考えるのはよそう。

「やつほー」

俺が玄関を開けると、来客が明るく無邪気な声で話しかけてきた。乳白色とでも言う

べき肌に鮮やか赤い瞳。長く伸びたストレートの髪は紫黒色だ。背丈は同年代と比べると小柄なほうに入るだろう。

目の前にいる少女の名前は東雲悠樹。普段はユウキと呼んでいる。

彼女は俺の母方の親戚であり、幼い頃から度々顔を合わせている間柄にある。運動はあまり得意ではないのだが、ゲームにおいては天性の才能を持っており、俺よりもあとに始めたはずなのにいつの間にか追い抜かれていたということが数え切れないほどあった。

この説明から分かるだろうが、俺とユウキは知らない間柄ではない。

それにも関わらず、俺が固まってしまっているのはユウキが住んでいるのがこの街ではなく海外だからだ。突発的に遊びに来ることは考えにくい。

「久しぶり………どうかした？ 僕の顔に何か付いてる？」

「いや………急に来たから」

「え？」

なぜユウキは驚いているのだろうか。………もしま

「レーネさんから聞いてないの？ 今日来るって言ってあったと思うんだけど」

やはりそうか。

俺が今一緒に暮らしているレーネという人物は、天才的な頭脳の持ち主であるのだ

が、一度仕事を始めると不眠不休で働くような仕事中毒の一面を持っている。そのため家事全般は不得意であるし、このように連絡事項を伝え忘れることが多々ある。

現状では俺の保護者的な立場にあるはずなんだが、彼女のことを知っている人間からすれば、俺が保護者の立場にいるように見えるのではないだろうか。すでにイイ大人なのだからもう少ししっかりしてほしいものだ。

「はあ……」

「え、僕まじい時に来ちゃった？ それとも来ること自体迷惑だったかな？」

「ああいや……レーネさんに思うところがあるだけで、お前にどうこうってわけじゃない。にしても、えらく今回は荷物が多いな」

「それはそうだよ。しばらくこの家でお世話になるんだし」

………は？

この家に世話になる？ つまり泊まるってことか。まあ親戚だから問題ないと言え
ばないわけだが……しばらくって言葉が気になって仕方がない。

「しばらくって……いつまでだ？」

「僕の父さん達がこっちに来るまでだね」

「………いつ来るんだ？」

「うーん……分かんないや。できるだけ早く来るって言ってたけど」

ユウキがここに来た経緯が上手く理解できない俺は素直に事情を説明し、詳しいことを聞いてみた。

ユウキが言うには、彼女の父親が転勤でこの街に来ることになったらしい。ただ残っている仕事があるため、すぐには行けないとのこと。ならば一緒に来れるまで待てばいいのではないかと、思い言ってみると――

「だって暇なんだもん。シヨウもシユテル達もみんなこつちに行つちやつてたし。それに2学期からシヨウと同じ学校に通う予定だからね。この街のこととか勉強とかしとかなないといけないから」

「……最大の理由は？」

「ブレイブデュエルがやりたいからー」

「だろうな……それでこそ俺の知るユウキだ。」

「ってことは、俺はユウキの両親が来るまで彼女の面倒を見なくちゃいけないってことか。期間は最長で2学期が始まる前まで。いくらレーネさんも一緒だからって、ほとんど仕事でいないわけだし。年頃の男女が長い時間一緒に暮らすのはまずいだろう。」

かといって、すでに話は通っているようなのでユウキを帰すわけにもいかない。レーネさんにはあとで説教しておくとして、とりあえず家に上げよう。いつまでも玄関で話すのもあれだ。

「お前が来た経緯については分かった……まあ上がれ」

「うん……その手は何？」

「荷物をよこせてことだよ。運んでやるから」

「いいよ別に」

「いいから」

俺は半ば強引にユウキから荷物を受け取った。普通このような真似をすれば怒られたりするだろうが、まあ俺とユウキには多少なりとも血の繋がりと共に過ごした時間がある。それに彼女は最近は何聞いていないが、昔はよく体調を崩していた。それだけに重たい荷物を持たせたくない。

「僕も一応女の子なんだけどな」

「安心しろ、お前くらいにしかしてないから」

「それって僕だけ特別扱いしてくれてるってこと？」

からかうような笑みを浮かべているユウキの額に、俺は無言で振り返るとでこピンを入れた。なかなか良い音がしたので痛かったらしく、彼女は両手で額を押さえる。むすつとした顔をこちらに向けてきたが、相手にしないことにした。

「もう、そういうところがシヨウの悪いところなんだよ。だから彼女が出来ないんだ」

「あいにく自分を偽ってまで作りたいとも思っていない。長続きはしないだろうし、作っ

たら騒ぎそんな人間がいるしな」

「ふーん……ま、シヨウらしいね」

興味なさそうな返事だな。お前の興味はブレイブデュエルのほうに行ってるわけか……まあ追求されるよりはマシだけど。親戚の異性と恋愛について語るなんて考えただけでも無理だ。

「そういえば、こつちに戻ってきたから新しい友達とか出来た？」

「ん？ まあ……仲良くなつた子は何人かいるな。店の手伝いとかで初心者のも面倒とか見たりすることがあるし。最近だと小学生達と親しくしてたかな」

「女の子？」

「そうだな」

「……シヨウってロリコン？」

何で小学生と親しくしてただけでそうなるんだよ。俺だつてついこの間まで小学生だったし、低学年と親しくしているわけじゃない。歳の差はあまりないんだぞ。

「ユウキ、お前俺に恨みでもあるのか？」

「別がないけどさ、やっぱり小学生の異性とつて聞くと……」

「お前と一緒にいるのをはたから見られれば、同じように思われると思うんだがな」

「僕はそんなに小さくないよ！」

「はいはい、そうだな。ユウキはまだまだこれからだもんな」

「もう伸びないというか、小さな子供をあしらうような言い方しないでよ。僕、シヨウと
同じ年なんだから！」

そうなんだよな……こう見えてユウキって俺と同じ年なんだよな。シユテル達のよ
うな年下がいるせいか、年下のように思ってしまうのが現状だけど。言葉遣いもレヴィ
に似たところがあるし……これが最大の理由かもしれない。

「分かった分かった」

「もう、適当な返事ばかり……」

「グダグダ言っていないで、さっさと荷物片付けるぞ。ブレイブデュエルしに行きたいだ
ろ？」

「え、ああうん！」

こうやって話題がすぐに逸らせるあたり、やっぱりレヴィに近い感覚を覚えてしま
う。まあ異性に対する意識はきちんとあるので心配はしていないが。

……一番の心配はブレイブデュエルの腕だよな。こいつの才能からすれば、圧倒的な
速度で全国ランカーに匹敵するレベルに上り詰めそうだし。過去の戦績だとユウキに
負け越してから……今まで以上に頑張らないとやばいかもしれない。

今度……ブレイブデュエルの総本山であるグランツ研究所に行ったほうがいいかも

しれないな。

第15話 「T&Hのお姉さん？」

俺はユウキを連れてホビーショップT&Hを訪れた。八神堂やグラントツ研究所にも追々連れて行くつもりだ。まあ彼女は子供ではないので、別に一緒に行く必要はないかもしれないが。街を自由に見て回りたいこともあるだろうから。

海外に住んでいたユウキには全てのものが珍しく見えるらしく、目を輝かせながら周囲を見渡している。一緒にいる身としては恥ずかしくもあるのだが、気持ちは分からないので我慢することにした。

ブレイブデュエルが設置してある最上階に到達すると、他のフロアより一段と人で溢れていた。今日も相変わらず賑わっているようだ。人ごみやそこから聞こえてくる歓声に驚いてしまったのか、気が付けばユウキが俺の服を軽く握っていた。

——……まあ初めて来る場所だし、この街自体が馴染みのない場所だもんな。

はぐれたりしたことを考えると不安になるのは無理もない。何でも言い合えるような間柄ではあるが、周囲の注目はデュエルのほうに向いているし、しばらくはこのままにしておいてやろう。

「お、思ってたより賑わってるみたいだね」

「まあな。日に日にプレイヤーの数は増えてるだろうし……まずはデュエルするのに必要なデータカートリッジとプレイブホルダーをもらいに行くか」

そう言って歩き始めると、進行方向とは逆に力が働いた。ユウキが服を掴んだまま出遅れたので引つ張られたのだ。自分で掴んでいることに気が付いていなかったのか、俺が視線を向けると彼女は頬を赤らめながら慌てて手を放した。

これまでの経験からして、ここでユウキに話しかけると状態が悪化する可能性が高い。ここは黙って彼女がデュエルをできるように話を進めるのが無難だろう。

そう思った俺は、フロア内を見渡して店員を探す。この店の人間とはほとんど知り合いいではあるが、話しやすさで言えば店長達と店長の子供達、それとチーフが圧倒的に高い。多忙な彼女達に話しかけるのは躊躇われもするが、ユウキの今後を考えると頼れる人間を作っておくのも大事だろう。

「えーと……ああ居た居た」

カードローダーの前に去って行く小学生達に手を振っているエイミイを見つけた。状況から考えるに、新たなデュエリストの誕生を手伝っていたのだろう。近づいていくところらの存在に気が付いたようで、人懐っこい笑みを浮かべながら挨拶をしてきた。

「いらつしやい……あれ？ 今日みんなと一緒じゃないの？」

「俺はあの子達の保護者じゃないんだけど」

「とか言う割りに気に掛けてるくせに……とところで」

エイミイの視線が俺の後方へと向く。距離感から近くに居たユウキを俺の知り合いだと理解したらしい。

「その子は……まさか彼女!？」

芸人並みのリアクションで驚くエイミイに俺は呆れると共に、周囲から視線を向けられていないか気になってしまった。だが後ろのほうからエイミイに負けない声が響いてきたため、それどころではなかった。

「え、ち、ちち違うよ！ ぼ、僕はシヨウの彼女なんかじゃなくて……」

先ほどの一件が尾を引いていたのか、ユウキはディアーチェに負けないレベルの反応をしている。

人間という生き物は、必死に否定されると疑いたく習性を持っているものだ。エイミイのように人の恋愛やらを見て楽しもうとする人間は特に。

「いやいやいや、こう見えてもお姉さんはシヨウくんの交流関係には詳しいほうだからね。仲の良い女の子は大体知っているのですよ。だけど君は見たことがないし、シヨウくんは彼女が出来ても私には言わないって言っていた。つまり、君はシヨウくんの彼女さんなんだよ！」

な、なんだって!？」

とは誰もならないよな。むしろ危険な人物に思われそう……なんで俺の周りにいる年上ってまともな奴が少ないんだろう。

「だから違うってば！ 話を聞いてよお姉さん。僕はこの街に来るのも数年ぶりだし、シヨウに会うのだったって久しぶりなんだよ……もう、シヨウも黙ってないで何か言つてよ！」

「エイミイ、最近クロノとはどうだよ？」

「クロノくん？」

「少しは進展はしてるのかと思つてさ」

「あはは、何言つてるのさ。クロノくんは弟みたいなのもんだよ。進展なんて……つて、話を逸らされてる!？」 それに、この子が言つてほしかったことつて今みたいなことじゃないよね!？」

いや、エイミイみたいな奴にまともに言つても効果がなさそうだったから。というか、お前がそこにツツコミを入れるんだな。

「今日もエイミイは元気だな」

「うん、まあ元気じゃないとお仕事できないからね……じゃなくて、何で私は君に年下扱いされてるようなことを言われれないといけないのかな。私、君よりお姉さんなんだけど!？」

「お姉さん？」

「何で首を傾げるの!？」

「それは……同年代と話してるような気分だから」

ガンー! といった効果音が合いそうな顔をエイミーは浮かべる。涙のようなものを見える気がするが、まあ顔芸のようなもので気にしないでおこう。

「よし、エイミーも落ち着いたな」

「いやあ……落ち着いたというより落ち込んでるんじゃ」

「気にするな。すぐに回復するし、気にしたらこの街じゃやつていけない」

真剣に言うとうウキは怯えるように後退りながら顔を引き攣らせた。この街で生活できるか不安を募らせているのだろう。後ろでエイミーが「私は変な人じゃないよ!」とアピールしている気がするが、やはり気にしない方向で行く。

「じゃあ、改めて紹介と行こう。この人はエイミー・リミエツタ、ここのスタッフのチーフの自称お姉さんだ」

「よろしく、困ったことがあればいつでも声を掛けてね……つて、自称じゃないよ!?! 君とかからすれば普通にお姉さんだよ!」

こういう反応するあたりが自称を付けたくなる理由なんだけどな。落ち着きもあるほうじゃないし、クロノから小言を言われているのも何度か見たことがあるから。

「こっちは俺の親戚で東雲悠樹」

「ど、どうも東雲悠樹です。いつもシヨウがお世話になってます」

「いえいえ、こちらこそシヨウくんにはお世話になってます」

保護者のような挨拶をするユウキにも思うところがあるが、彼女と同じように頭を下げるエイミイもどうなのだろう。確かに俺はたまに店の手伝いをしているわけだが、トータルで見れば大した時間働いているわけではないのだが。

「それで今日は何しに来たの？ 彼氏彼女じゃないってのは分かったけど……むふふ、デートですかな？」

「ユウキ、この人に頼ろうとした俺が馬鹿だった……」

「ごめん、ごめんってば。もうふざけないからお姉さんを頼つてよ〜」

うん、やっぱり年上のようには見えない……ふと思つたが、シユテルと似てるって言われるのはこういうところが原因なのだろうか。そう考えると直したほうがいいよな……。

「お客様、今日は何の御用でしょうか？」

「……ふざけてるのか？」

「ふざけてないよ、私真面目にやってたよね!」

それはそうだけど、エイミイのキャラ的に真面目な口調で話されたほうがふざけたよ

うに感じるから。

「まあいいや。今日はユウキがブレイブデュエルを始めたと言って言うから来たんだ。ホルダーとか設備の説明してやってほしいんだけど」

「それはもちろん喜んで……あれ？ でもシヨウくんが教えてもいいんじゃない……」

「ユウキはこの街にはほとんど知り合いがない。だから交流関係を広げる意味でも、頼れる人間を作るためにもお願いしてるんだよ」

俺の言葉を聞いたエイミーは、何度かまばたきを繰り返すと急に満面の笑みを浮かべる。そして、レヴィのような元気を撒き散らしながら話し始めた。

「そっかそっか、冷たいことを言ったりするけどシヨウくんは私のこと信頼してくれてるんだね。うん、この子のことは私に任せてよ！」

「分かったから叩くのはやめてくれ。本気で痛いから」

まったく……年下に頼られただけでこんなに喜ぶか普通。にしても、背中がヒリヒリするな。あとで腫れたりしないか不安になってきた。

そんなことを考える俺をよそに、エイミーはいつの間にかデータカードリッジとブレイブホルダーを両手に持ち、それをユウキに渡していた。エイミーの勢いというか熱さが凄まじいせい、彼女はどことなく引いているように見える。だがエイミーは気にしていないようだ。

「よし、じゃあどんどん説明していくよ。ついて来てユウキちゃん！」

「は、はい！」

「ユウキ、俺は別のところに行つて大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ。最後まで一緒に居てよ！」

第16話 「天才」

「よし、やっと僕の番だね。シヨウ、ちゃんと見ててよ」

無邪気な笑顔を浮かべながらユウキはシミュレーターの中に入っていく。ここに至るまでにそれなりに長い時間を有し疲労していたはずだが、デュエルが出来るとなれば吹っ飛んだらしい。

エイミイの熱血っぷり凄かったもんな。一通り教えた後なんか燃え尽きてたし。ただ仕事があるんだから考えろとも思ったけど、まあユウキのためにはなったから感謝するでしょう。

スクリーンに意識を移すと、徐々にフィールドが映り始める。デュエルを行う場所はシンプルな空のようだ。初心者であるユウキにはありがたい場所かもしれない。

『おお……つて、空あああ!?!』

と思ったのだが、ブレイブデュエルでは視点と感覚がアバターと完全にリンクするため、空の上に立っているような気分を味わうことになる。高所恐怖症ではない人間でもいきなりあそこに放り込まれれば、ユウキのような反応をするのも無理はない。

とはいえ、ユウキはあらゆるジャンルのゲームで天性の才能を発揮する奴だ。エイ

ミイから説明を受けていたこともあって落ち着きを取り戻したのか、すでにそよ風を味わっているように見える。

「それにしても……」

最初のカードローダーでRを当てるなんて運が良いよな。一般の初心者、いや上位の人間が聞いても羨ましがることだろう。

防具の類は胸にある黒曜石のようなアーマーくらいであり、その下にあるチュニツクとロングスカートは青紫色だ。腰には黒く細い鞘があり、同色の剣が納められている。

剣を所持していることから分かるとおり、ユウキのアバターは接近戦タイプだ。スタイルがベルカだったので、俺やアリサ以上に近接での戦闘能力は高いと思われる。まあアバターの性能がデュエルの勝敗を必ず決めるわけではないので、初デュエルである今の戦闘力はそのへんの初心者と変わらないだろうが。

「……何か嫌な気配がするな」

普通は複数の初心者がまとまってフリートレーニングに参加し、感覚を養ってからデュエルへと移行していく。だがユウキが映っているスクリーンには、彼女の周囲に他のプレイヤーは確認できない。経験から推測するに……他のプレイヤー達はフリートレーニングを行っているが、彼女だけは普通にデュエルをやっているのではないだろうか。

直後、忍のような騎士服に身を包み、赤いマフラーを巻いた少女がユウキの前に姿を現した。

……嘘だろ。

スタイルの良い体に刺激が強そうな騎士服。艶やかな長い黒髪をポニーテールまとめた大和撫子のような少女には心当たりがある。俺の記憶が正しければ、『風雪の忍』という通り名で知られ始めている中堅デュエリストだったはずだ。

本気でデュエルをされたら、いくら天才のユウキであっても敵うはずがない。しかし、乱入は許可されていないと思われるので助けに入るのは不可能だ。そもそもシミユレーターが埋まってしまっている。

『ん、お姉さんが僕の相手?』

『……そう』

『そっか。にしてもお姉さん、凄い格好してるね』

ユウキの言葉に忍者の頬が真っ赤に染まる。どうやら本人も気にしているというか、人並みの羞恥心は持っているらしい。ただアバターとの出会いは運命のようなものなのでどうすることもできない。

馬鹿……お前は自分には似合いそうにないって意味で言ってるのかもしれないけど。スタイルが良い人間ってのは、意外と自分のスタイルにコンプレックスがあったり

するんだぞ。知り合いの乳魔人さんとかわがままボディさんがそうだし。

ユウキの言葉は、おそらく火に油を注いだようなものだろう。彼女はこれまで数多のゲームをやってきたため、ここで負けたからといってブレイブデュエルをやめたりはしないだろうが……今の俺にできることは見守ることだけか。ひどく負けたならば、慰めるくらいのはしてやろう。

『えつと、お姉さんを倒せば僕の勝ちになるんだよね?』

『そう……勝てたらだけど!』

忍者はクナイのような魔力弾を出現させたかと思うと、ユウキ目掛けて投擲した。ユウキは持ち前の常人離れた反応速度で回避したものの、まだ上手く飛べないため宙を転げるように移動していく。

『うわあ、びっくり……つて、ちよっ?!』

敵を倒すことがルールの単純なデュエルであるため、連続で攻撃を仕掛ける忍者の行動は咎められるはずがない。ただ彼女は、ユウキが不恰好ながらも攻撃を避け続けているせいか少し苛立っているように見える。

『えつと……確か移動は飛びたい方向に意識を集中だっけ!』

ユウキの背中に半透明な黒い羽が生えたかと思うと、これまでの転がるような回避と一変して高速移動で避け始める。強張っていた顔が笑みに変わっていつているあたり、

今の状況さえ楽しんでいらしい。

ユウキの最も優れた才能は、どんな状況でさえも楽しむことができることかもしれないな。

スクリーンで見ているも、圧倒的な速度でユウキの技術は上昇していつているのが分かる。おそらく相対している少女は、彼女の異常と言えそうな成長速度に恐怖を覚えていることだろう。故に――

『なら……これで！』

――これまで以上に攻撃を加えるのも必然とも言える。

女忍者は両手にクナイ状の魔力弾を持ち、微かな時間差を付けて投擲する。ユウキはすぐさま回避行動を起こすが、これまでのクナイとは違って追跡を行っている。

飛び続けるユウキは魔力を消費し続けるし、ホーミングする魔力弾を維持する女忍者も魔力は消費する。消費している魔力で言えば、攻撃していた女忍者のほうが上だろうが、あれは保有魔力が優れているからこそ取れた行動ではないだろうか。通り名を持つほどのデュエリストが考えもなしに攻撃を続けるとは思えないのだから。

『逃げてばかりじゃ勝てないよね』

ユウキの口元がわずかばかりだが動いた気がした。何を言ったのかまでは分からなかったが、彼女の行動には内に秘められている思考が顕著に現れていた。

彼女は急停止を掛けたかと思うと、左腰にあった剣に右手を伸ばす。振り向くのと同時に抜剣し、飛来していた最前に魔力弾を迎撃——いや《斬った》。返した剣で2発目を斬り捨てる、流れるような剣技で全ての魔力弾を無力化した。

発生した煙によつてユウキの姿が隠れるが、偶然にも突風が吹いたのか一瞬で煙は霧散する。同時に現れた彼女の顔は笑っている。女忍者に対する恐れを微塵も感じさせない不敵な顔だ。

ユウキは不敵な笑みを崩すことなく、黒曜石のような色合いの剣の先端を女忍者に向けてながら口を開いた。

『お姉さん、今度は僕から行くよー!』

言い終わると同時に、ユウキは女忍者に向かって飛翔する。女忍者はクナイ状の魔力弾を放つが、それは稲妻のような速度で煌く剣によつて粉碎されてしまう。通常の魔力弾ではユウキを止めることは不可能だろう。

『ならば……!』

女忍者は左手でクナイ状の魔力弾を放った後、右手で腰にあった刀を引き抜き、鎖鎌のような形態に変化させる。魔力弾の迎撃に意識を裂かれたユウキは、それに一瞬気づくのが遅れてしまい、気が付いたときには鎖が彼女の周囲を円を描くように飛び回っていた。

『ぐっ……』

急激な方向転換で回避しようとしたユウキだったが、鎖のほうが早く彼女の左腕を捕らえた。直後、女忍者は追撃を加えようと左手に魔力を集め巨大な手裏剣を生成する。

『沈め！』

投擲された巨大な手裏剣は、回転を強めながらユウキへと向かっていく。当然ユウキは回避しようとするが、左腕を捕縛されているため大した行動ができない。手裏剣にもホーミング機能が付加されているらしく、回避することは絶望的に思える。だが——ユウキの目は死んではいない。

『僕は絶対に……！』

ユウキは両足を大きく開きながら右腕を肩の高さで引き絞る。黒曜石のような刀身に魔力が集束され、徐々に紅蓮の炎へと変化。それを飛来する手裏剣に向けて撃ち出す。雷のような速度のせいにか、赤い稲妻が疾ったかのように見えた。

彼女が放った技は《ブレイズストライク》。俺が愛用する単発重撃技であり、餞別として俺が彼女に渡しておいたスキルカードだ。強固な防御力を誇る敵にだろうと有効なダメージを与える技であるだけに、手裏剣を粉碎することは可能だろう。

だがしかし、敵が放っていた手裏剣にもそれなりの魔力が込められている。強力な魔法のぶつかり合いは、必然的にそれ相応の爆発を引き起こすものだ。目の前で爆発が起

こるユウキは無傷ではすまない。

爆発と轟音。

生じた大量の煙によってユウキの姿が確認できなくなる。エリア内に終了の表示がされないことから、戦闘不能にはなっていない。だが大規模な爆発だっただけに、彼女が負ったダメージはかなりのものなのだろう。

『……最後まで諦めたりしない！』

煙を突き破るように現れたユウキの騎士服は、誰から見てもボロボロとしか言えない状態だった。しかし、彼女の瞳には鋭い気迫が宿ったままだ。

先ほどの一撃で魔力を大きく消費したのか、女忍者は投擲できているのはクナイ状の魔力弾だけだ。だがそれではユウキを止めることはできない。

女忍者は逃げようとする素振りも見せるが、ユウキはほぼトップスピードに乗っている。勝負を決めようと大攻撃をしたせいで一時的に速度がゼロになっていた彼女では、今から加速して逃げ切れることは不可能だろう。

『やあつー！』

女忍者の眼前に迫ったユウキは、気合を発しながら愛剣を雷のような速度で振るう。圧倒的な速度で襲い掛かってくる刃を女忍者も防ぎきることはできず、ついに体勢を崩されてしまった。

そのチャンスを逃すことなく、ユウキは通常攻撃を連続で放ち……そして。
『これで決める!』

バックモーションの少ない垂直斬りから上下のコンビネーション、最上段から決めの一撃を放った。高速4連撃《バーチカル・フォース》。

絶え間ない斬撃の嵐を受けた女忍者は、静かに空から消えて行った。ユウキが勝利し、デュエルが終了したのだ。

……マジかよ。

ユウキのセンスは誰よりも知っている。でもだからといって通り名を持つデュエリスト相手に初プレイで勝利できるなんて思っていなかった。彼女の才能を俺は侮っていたのだ。

「シヨウ、勝ったよ!」

小走りでやってきたユウキは笑みを浮かべながらVサインをした。そんな彼女を見た俺の胸中には、呆れの混じった驚愕と、強敵の出現による歓喜があった。

俺はユウキに近づくと、微妙な笑みを浮かべながら彼女の頭を何度か軽く叩いた。

「まったく……お前を見てると、一緒のゲームはやりたくなくなるな」

「ええー!? 僕は他の誰よりもシヨウと戦いたいのに。やめたら絶交するからね!」

「やめるかよ。昔から思ってたんだ、お前に勝ちたいって。それに俺のことをライバル

だって思ってくれている奴もいるし、何より他のゲームはまだしもこのゲームに限っては誰にも負けたくない」

スピードレーシングやスカイドッジでは小学生達に負けてしまっているわけなのだが、あくまであれはおまけや人数合わせで参加したようなものだ。正式に俺に対して挑まれたなら負けるような戦いをするつもりはない。

「はは、シヨウがそういうこと言ってくれるのは初めてだね。すつごく嬉しいよ。でも僕は、誰よりもシヨウに勝ちたいからね。今すぐは無理だと思うけど、必ず勝ってみせるよ！」

「そうか、じゃあ俺も負けたくないから今後は別行動ということだ」

「うわああ、待ってよ！ 僕、まだここに慣れてないんだからひとりにしないでっつてば！」

外伝 第1話 「八神堂の店員」

「飛び級で大卒の社会人!」

店内に響く高い声。意識を向けてみると、この店の主の前にふたりの小学生の姿があった。ひとりは前からよくここを利用していた月村すずかという子だ。もうひとりは、最近来るようになった彼女の友人でアリサ・バニングスといったか。

聞こえてきた言葉からして、この主の経歴を聞いて驚いているんだろうな。まあ俺も最初は驚いたし、気持ちはよく分かる。

「恥ずかしながら社会人1年目。古書店店長をやらせてもらってます」

「だからずつとお店にいたんだね」

「そうなんよ。あつ、ちなみにマテリアルズの3人も飛び級の中学生さんや」

はやてののんびりとした言葉に金髪の少女が驚愕の声を上げる。わざとやっているわけではないだろうが、リアクションの大きい子だ。はやての漫才の相手としてはちやうどいいのではないだろうか。

本棚の整理を少し進めて意識をまた向けてみると、バニングスという子は絶望しているかのような顔をしていた。いったい何を考えているのだろうか。別に飛び級云々で

あんな顔をするような年齢ではないと思うのだが。

「ま、まさか……あたしのヴィータもスーパー小学生ってことは」

「あたしはふつーの小学生。だいたい、いつからアリサのになったんだよ」

「それは……」

「いや、やっぱり答えなくていい。話の続きだけど、はやて以外はふつーにみんな学生だよ。シグナムは大学行きながら剣道場の師範代。シャマルは医大生、アインスは夜間学校で建築学の勉強中」

うーん……俺の感覚だとアインスはともかく、シグナムやシャマルは普通ではないと思うんだけどな。普通に分類される学生は剣道の師範代なんてしてないし、医大に入る人間って割り限られてるから。

だが彼女達が凄いののは、きちんと自分の進みたい道を決めていることだ。俺も今は決めてはいるが、高校生の頃は毎日適当に過ごしていた。そのうえ、3年の頃に自主退学してしまっている。まあ体や金銭面と色々な問題があったわけだが。ただ単位はほとんど取っていたので、先生の勧めもあつて、高校卒業程度の学力はあると認定される試験を受け、無事に合格している。

「実はな、アインスが建築学を勉強してるんはいつかわたしに理想の家を作ってくれる……」

途中で、はやての言葉を遮るように誰かが大声を被せる。

声を発したのは、おぼんでおやつを運んできていたアインスだった。どうやら自分の夢を誰かに知られるのが恥ずかしくなってきたらしい。可愛らしく思える一面だ。

アインスは何事もなかったかのように振舞いながら話しかけるが、どこか笑みがぎこちないものに見えた。

「さ、さあみんなおやつのおはぎだよ」

「これがヴィータの言ってた」

「アインスさんも目がない……キガうまおはぎ！」

おはぎに小学生ふたりは大喜びのようだ。はたから見てもいつも以上に数がある。おそらくはやてがふたりが来るということで多めに作ったのだろう。あの歳でよくあそこまで家事全般がこなせるものだ。一人暮らしの身からすると、彼女の家事能力が羨ましく思う。

余談だが、はやての後ろでおはぎを食べているヴィータをアインスが揺すっている。あまり人に言わないでくれ、とアインスは言いたいのだろう。

「リヨウくん、一緒にどうや？ リヨウくんの分も作つとるんで」

意識を向けているのを食べたいと思われたのか、はやてが話しかけてきた。小学生達のことを考えると、あまり親しみのない俺が近くに行くのは躊躇われたのだが、ヴィー

夕に「早く来いよ。じゃないとアインスがお前の分も食べちまうぜ」と言われてしまつては行くしかあるまい。

「少しだけお邪魔させてもらうよ」

金髪と黒髪の小学生に声を掛けて、はやてとアインスの間に座らせてもらった。はやてや小学生達は笑顔で迎え入れてくれたが、アインスはヴィータの言葉が恥ずかしかつたのか俯いてしまった。

「えつと、そういえば君達ときちんと話すのは初めてだったよね。俺は白石涼介、よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。あたしはアリサ・バニングスと言います」

「私は月村すずかです。よろしくお願ひします白石さん」

年齢の割りにしつかりとした挨拶をする子達だ。お嬢様のような雰囲気があるので、もしかすると英才教育を受けて育っている子達なのかもしれない。

「あの白石さん」

「何かな月村さん？」

「すずかでいいですよ。私のほうがずっと年下ですし」

「なら俺も下の名前で構わないよ。はやてやヴィータ達にも下の名前で呼ばれているからね」

彼女の隣に座っているバニングスにもそう伝えると、ならば自分も名前でもらって構わないと返事が来た。こうも簡単に名前呼び合えるところが子供の凄いところかもしれない。年を重ねるほどこのような真似はできなくなる人間が多いのだから。

「じゃあ、えつと涼介さんでいいですか？」

「ああ。それで何が聞きたいんだい？」

「その、はやてちゃん達とはどういう関係なんですか？ 結構前からここで働いてますよね？」

働いている、というのは少しニュアンスが違ってくる。俺はただ暇な時間が多いから手伝いをしているだけで、別にバイトをしているわけではないのだ。

「確かに気になりますね。はやてもくん付けで呼んでましたし」

「はやては誰にでもそんな感じだと思うんだけどな。ほら、デュエルが上手いって言う中学生の男の子。確か夜月くんだったっけ？ あの子も年上だけどくん付けで呼んでたでしよっ。」

「ああ……確かに」

「誤解されるんは困るなあ。わたしが特別扱いしてるんは、シヨウくとリヨウくんだけやで」

そこは夜月くんだけに絞ったほうがいいんじゃないだろうか。そうすれば、もう少し彼もこの勧誘を受ける気にもなってくれそうと俺は思うのだが。まあふたりの関係を見てみると、その程度のことでは何も変わらないようにも思えるが。

「えっと、はやて達との関係だったよね。まあ……簡単に言えば、暇な時間が多いから手伝いをさせてもらってる感じかな」

「え、結構毎日のようにいる気がするんですけど。そんなに暇な時間多いんですか？」
「俺の通ってる学校は種別で言えば専門学校なんだけど、基本的に1日にあたり3、4時間くらいしか授業がないところなんだ」

「それでも大変やろうし、わたしは無理して手伝わんでええって言うてるんやけどな」
「俺が好きで手伝ってるんだから手伝わせてくれよ。ここの手伝いは楽しいし、今みたいに美味しいものにありつけるんだから」

素直な気持ちを口にしてみると、食い意地が張っているや現金な奴だといったニュアンスの言葉を次々と言われた。自分でもそう思いもするが

「仕方ないだろ。ひとり暮らししてるから多少は料理作れるけど、はやての味には到底敵わないんだから」

「もう、そう言われると作ってあげたくなくなるやないか」

「はは、そう言ってくれるのはありがたいけど……そういうのはいつか出来る大切な人

だけに言うべきだよ」

「ひどいなあ、わたしはリヨウくんのこと大切に思ってるで〜」

「大人をからかうのはやめなさい」

俺は、からかうような笑みを浮かべているはやての口にスプーンに刺していたおはぎを押し込んだ。そのあと俺もおはぎを自分の口に運ぶと、「間接キスやな」という言葉が聞こえてきたが、俺はすでに成人している。小学生くらいの年代の子と間接キスをしたからといって何とも思いはしない。

「リヨウ、あまり主とイチャつくのは頂けないな」

隣から鋭く冷たい視線を浴びせられる。

忘れていた……アインスははやてのことが大好きな——愛しているといつても過言じゃない奴だった。いったいどうやって彼女の機嫌を直せばいいだろうか。

「リイン、そう妬かんと。リヨウくんのが好きなんは分かるけど」

はやてのさらつと放った一言に俺は理解が追いつかなかつたのだが、アインスは一気に赤面した。

「ななな何を言っているんですか!? べ、べべ別に私はリヨ、リヨウのことを……!?!」

「アインス、少し落ち着いたら……」

「こつちを見ないでくれ!」

思いっきり突き出されたアインスの手が、相撲の突っ張りのような形で顔に入った。おはぎを口にしていなかったから良かったものの、もしも口に含んでいたのならばどうなっていたことだろうか。

などと考えている余裕はなかった。あまりに強い衝撃を受けてしまったため、イスごと倒れてしまい床に打ち付けられてしまったのだ。

「え、あ、すまない!」

俺が床に倒れたのを見て我に返ったのか、アインスが近づいて俺を起こそうとする。整った顔立ちと豊満な胸が眼前に迫り、女性特有の甘い匂いに鼻腔をくすぐられた俺の体は一気に熱くなった。

「いや、心配するな。大丈夫だから!」

「だが……本当にすまない」

「……ああもう、あまり自分を責めるなよ。別に怪我もしてないし、お前のそういう顔は見たくないんだから」

「リョウ……」

せこい言い方だったかもしれないが、今のようない方でなければアインスは止まってくれなかっただろう。

アインスは普段は大人しくて優しい性格なのだが、どうも人一倍恥ずかしがり屋であ

るため、人からからかわれたりすると今のような行動を取ってしまうことがある。今のところ物理的なダメージを受けたことがあるのは俺くらいだろうが、夜月くんあたりにいつか被害が出ないか不安になる。

——怪我をするほどじゃないが……結構痛いからな。被害者が俺だけで済むのならそれに越したことはない。

「あのふたりええ感じやろ？」

「うん、確かに」

「性格的にも相性良さそうだし、お似合いかも」

「あたしはそういうのあんま分かんねえ」

「ヴィータは分からなくていいの。いつまでも今のままのヴィータで居て！」

いつの間にか小学生達が密集して話している。

ヴィータとそのあとのアリサの声しか聞こえなかったが、経験からしてあまり良くないことを言っていただろうな。それ以上にアリサの発言が気になって仕方がないが……ある意味では変態とも取れそうな発言だし。

何はともあれ、落ち着きを取り戻した俺達はきちんとテーブルに座り直し、おはぎを食べ始める。話題は俺のことからアリサ達のことへ移った。

「そーいえば、すずかちゃん達チーム名で悩んでるんやっつて？」

「うん……みんなで相談したんだけどまとまらなくて」

「あたしも考えてみたんだけど浮かばなくてさ」

なるほど、それで彼女達をここに連れてきたわけか。

なぜこのように分かったかというところ、アリサがここに連れてきてくれたと言いながらヴィータの頭を撫で始めたからだ。

ヴィータは強気な性格で口の悪いところもあるが、根は優しい良い奴だからな。今ではタメ語で話すけど、俺にも最初は敬語で話してたからな。

「うーん……パツとは浮かばんなあ。アインスは何かええ案ない？」

はやてに投げかけられたアインスだったが、おはぎに夢中のように聞こえていないようだ。俺が肩を揺さぶって状況を教えてやると、再び顔を赤くしながら慌てた様子で話し始める。

「え……こほん、君達はシヨップの代表チームだからね。お店の名前を入れるのもひとつの手なんじゃないかな？」

「そういえば、八神堂さんも《チーム八神堂》でしたよね」

「そのまんまといえはそのまんまだけど、ピタツとはまってカッコいいのよね」

それは分からなくもないが、ここのチームの構成が八神家だからというのも理由に入っている気がする。八神堂のようにそのままというのは、アリサ達のチームには合わ

ないのではないだろうか。

「アイディアを採用したら代わりにおはぎを要求されるぜきつと」

「それは困るわね」

「ヴィ、ヴィーター！」

はやてやヴィーターといった下の子からも弄られ、シグナムといった同年代からも弄られる。ある意味では愛されているとも言えるが、アインスが大変なものに変わりはない。頑張れアインス、俺は応援しているぞ。

「涼介さんは何かありませんか？」

「ん、俺？ うーん、あまりそういうのは得意じゃないからな。おはぎの件は俺がどうにかするから、遠慮なくアインスのアイディアを使ってくれていいよ」

「ひどい、リヨウは味方だと思っていたのに！ シグナムといいリヨウといい、最近いじわるだ！」

シグナムと一緒にされるのは困るんだが。あいつはああ見えて、親しい人間のことはからかったりする一面がある奴だし。俺は別にからかうつもりで言ったんじゃないんだが。

「リヨウくん、アインスの機嫌が悪くなってもうたで。はよ機嫌なおして」

「俺が？ 事の発端はヴィーターなんじゃ……機嫌を直すたって言ってもな」

「今度アインスをデートにでも誘ったらええやん♪」

はやての言葉に俺とアインスはほぼ同時に「デ、デート!？」と口にし、必然的に顔を見合わせた。

デートというからにはふたりでどこかに行くということだろう。ふたりつきりというのは、これまでに何度も経験しているが、それは八神堂内での話。八神堂内と外では話が違ってくる。

お互いに似たような想像をしたのか、俺達の頬は赤く染まった。俺の目に確認できるのはアインスのだけだが、顔の熱さから言って赤くなっているに違いない。

「あ、ああ主、何を言っているのですか!? だ、大体私には店の手伝いが……」

「それは大丈夫や。シグナム達も協力してくれるやろうし……まあアインスが何が何でも嫌ってことなら仕方ないけどな」

「べ、別に嫌ということはない……」

そこで再び視線が重なる。俺がすぐさま顔を背けてしまったのは言うまでもないだろう。俺はアインスのことを友人として好きだし、異性としてももちろん意識しているのだから。

「ああもう、ふたりとも可愛いな。いつそのこと付き合つてええのに♪」

「はやて、頼むからもうやめてくれ。これ以上されたらまともに話せなくなる!」

「ええやないの〜」

「ダメよ、ダメダメ！」

「さすがリヨウくん、ノリがええな」

「やらないとお前は余計に悪ノリしてくるだろ！」

「それは心外やな。もう1回ええ？」

「嫌に決まってるだろ、恥ずかしい！」

第17話 「チヴィット」

デュエルに夢中になったユウキは、気が付けば俺がいなくても問題なく動き回るようになっていた。ただ街そのものに慣れたわけではないため、家からT&Hといった限定的な場所だけではあるのだが。まあ彼女の性格ならば学校に通い始めるまでには俺がいなくても大丈夫になっているだろう。

今日俺は、ひとりでグランツ研究所を訪れている。何でも小学生達のチーム名が決まったとのことで、ユーリやデアーチエがお祝いをしたいそうだ。その手伝いをしてほしいと頼まれたのである。

ユウキも連れて行こうかと思ったのだが、最初のデュエルで通り名のあるデュエリストを撃破。その後も凄まじい勢いで勝ち続ける彼女にホビーショップT&Hからオファーがあつたらしい。何でも小学生組の代わりにイベントデュエルに出てほしいとのこと。

「結果的に引き受けたそうだが……」

多分エイミーあたりに押し切られたんだろうな。まあ何でも楽しむ奴だから問題ないだろうけど。リンデイさんとかにもユウキのことはお願いしておいたし。

とはいえ、ここ最近常に一緒に居たせいか心配になる。張り切り過ぎて失敗しそうなエイミーに何か迷惑を掛けられていないだろうか。エイミーに電話して釘を刺しておくべきか……クロノに頼んでおいたほうが確実かもしれないな。

そんなことを考えている間に、グランツ研究所の玄関が見えてきた。青空が広がっているだけにここまでの道中は暑かった。さっさと中に入って涼むとしよう。

「……………」

中に入ると、見慣れた少女達の姿が見えた。内訳としては制服を着た小学生が5人に制服姿のディアーチェ、それと私服のユーリだ。

ユーリは高町と話しているようだが、なぜ顔を赤らめているのだろうか。転んで鼻でも打ったのだろうか……割と転ぶ子なのでありえなくはないな。でも盛大に転んだのならディアーチェが慌ててるだろうし……転びそうになったところを高町が受け止めたのかもな。

「なのはさんとまた会えて嬉しいです」

「うん、私もまた会えて嬉しいな」

笑顔で会話するふたりの姿は見ていて微笑ましくある。のだが、彼女達を見ているフェイトとディアーチェは微妙な顔をしている。フェイトは高町を、ディアーチェはユーリを大切に思っていそうなのでやきもちでも妬いているのだろう。

遠巻きで見ているのもあれなので、俺はひそひそと話しているアリシア達に近づくと。

「アリシアちゃん、あのふたりって……」

「色々あるんだよ、イロイロと……」

「見た目に反してよく分かってるな」

気配は殺さずに近づいたつもりだが、そのへんを歩くスタッフとでも思われたのかアリシアとバニングスの体が一瞬震えた。全く動じなかった月村は俺に気が付いていたようだが……。

「うわ、びつくりした……何でショウさんがここに」

「別にここに来てもおかしくはないと思うんだけど？」

「ここはブレイブデュエルの総本山だし、ここの人達とは前から付き合いがあるんだから。」

「うん、まあショウもデュエリストだからね。ここに来るのはおかしくないし、わたし達を見て自分から挨拶をしてくれたのは嬉しいことだよ。でもね……さっきのはどうかのかな、さらりとわたしのこと侮辱してたよね！」

「侮辱？ 失礼な言い方だな。小さくて可愛いつてことを暗に表現しただけだろ」

「まだこれから大きくなるし。というか、暗にじゃなくて素直に表現してよ！」

頬を膨らませてそっぽを向くアリシアの頭を「悪かった」と言いながら軽く何度か叩

く。完全に機嫌は直らなかつたが、まあ口を利いてくれないことはなさそうだ。

意識を他に向けてみると、アリシアが大きな声を出したせいも視線が集まっていた。俺とアリシアのやりとりが大体の人間が知っているのも基本的な問題はないのだが、留学中の中学生に関しては問題があるようだ。不機嫌そうにこちらを睨んでいるし。

「ディアーチエ、お前の言いたいことは分かる。いくら親しい間柄でも礼儀を弁えろとか、小学生だからといって異性に気軽に触れるなつて言いたいんだろ。気を付けるから機嫌を直してくれ。」

長年の付き合いがあるだけに言葉がなくなると俺の気持ちを理解したのか、顔を逸らされてしまった。普通は悪化したように思えるかもしれないが、あれは「今後は気を付けろ」といった表現だ。なので問題ない……はず。

「話が本筋から逸れてしまっているな。ユーリ、言うことがあるのだろうか」
「あつ、はい……みなさん」

真剣な顔で小学生達に話しかけたかと思うと、「えいつ」という掛け声と共に何かのスイツチを押した。

すると、天井に付けられていたくす球が開き、『祝　チームT&Hエレメンツ結成おめでとう』という文字が現れる。同時に周囲から拍手が起こり、小学生達は慌てながら感謝の言葉を述べ始めた。

「ささやかながらうやく殻の取れた雛鳥への祝いだ」

「みなさんに贈り物もあるんです」

ユーリの後ろにあつた巨大な箱から現れたのは、小学生達のチヴィットだった。

チヴィットは本来ブレイブデュエルのA I—N P Cなのだが、グランツ博士が現実でも遊ばせたいとそれぞれに専用のロボットを作ってしまったのだ。なぜ知っているかと言えば、前に来たときにシユテル達のチヴィット達と遊び、そのときに話を聞いたのである。

「わあ」

「可愛い」

「この子達つてまさか……」

「はい、皆さんのデータを元にして作らせていただいたチヴィットです」

「給仕のみならずデュエルサポートを行える優れものぞ。ありがたく受け取るがいい」

小学生達の声が一段と元気になる。その声や表情を見る限り、とても喜んでいようだ。作つたユーリ達も嬉しそうである。

いつの間にか保護者的な立ち位置で見ている自分にツツコミを入れた矢先、誰かにズボンの太ももあたりを引っ張られた。視線を落としてみると、そこには小学生達のチヴィットとは別のチヴィットが居た。

「お前も来てたのか」

足元に居たチヴィットを俺は抱きかかえて目線の高さまで持つてくる。

他の素体に比べて愛想のない顔立ちに黒ずくめの衣装……そう、俺のチヴィットである。名前は確か《クロ》だったか。

いつもはユーリに抱きかかえられたり、シユテゆ達の面倒を見ていた気がするが……今日は小学生達のチヴィットの面倒を見てたのかもな。

そう考えると微笑ましい気持ちにもなるが、無愛想とはいえクロはチヴィットだけあって可愛い姿をしている。それだけに中学生の俺が持っているのは少々恥ずかしい。手の空いているユーリかディアーチエに渡そうと思った直後、こちらをじつと見ている少女が居た。

「それ……シヨウさんのですか？」

その少女は高町のチヴィットを抱きかかえているフェイトだ。顔を赤らめているが、それは高町のチヴィットを抱き締めたときからなので、おそらく人前で可愛いものを抱き締めている姿を見られるのが恥ずかしいのだろう。

しかし、恥ずかしくても可愛いものに触りたい。そんな感情がフェイトの中にはあると見えた。まあアリシアよりも大人っぽいのが、彼女も小学4年生。そういう気持ちはあつて当然だろう。

「ああ……触る？」

「いい、いいんですか？」

「もちろん、自分で自分のを抱いてるのも何かあれだし」

というところで俺はフェイトにクロを差し出す。ただ2体のチヴィットを持つのは、まだフェイトには無理なようなので彼女が抱いていた高町のチヴィットを預かる。

「あ……あの、この子抱き締めても大丈夫ですか？」

「大丈夫だと思うよ。ユーリとかによく抱き締められてるみたいだし」

俺がそう言うのとフェイトは一度深呼吸し、そつとクロを抱き締めた。一般的なチヴィットならば笑顔を浮かべる状況なのだろうが、クロは照れたような顔でそつぽを向いている。俺のデータを使っているだけあって、素直に喜べるタイプではないようだ。

「……にしても」

俺なんかには持たれて嬉しいのかね。

抱きかかえている高町のチヴィットは、何が嬉しいのかずつと笑顔を浮かべている。頭を撫でたりしているわけではないのに……いや、彼女のチヴィットと考えれば何となく理解もできるか。

「なのは……あんたのチヴィット、シヨウさんが持つてるわよ」

「え……」

「なのはちゃんの子ヴィット、すごく嬉しそうだね」

「ち、ちが……そんなんじや!」

あそこの小学生達は何を騒いでいるのだろうか……1名顔が異常に赤いのだが。それに俺のほうをやたらと見ては、視線が合うと顔を背ける……という行動を繰り返している。

……ああ、自分の子ヴィットが男に持たれてるっていうのが恥ずかしいのか。確かに俺もクロが誰かに持たれてるのを見ると恥ずかしいしな。ここはフェイトに返す……のは無理そうだな。何だかクロに夢中みたいだし。となると……

「………ディアーチエ」

「ん?」

「この子預かってくれ」

「は? なぜ我なのだ。ユーリの手も空いておるだろう」

「いや、お前ってこういうの好きだと思って」

実年齢よりも大人びているが、ディアーチエもまだまだ年頃の女の子だ。可愛いものに興味はあるだろう。

そう思つての発言だったのだが、誤解をさせてしまったのかディアーチエは顔を真っ赤にしながら怒り始める。

「ば、馬鹿者！ わ、我はもうそのようなものを愛でるような年ではないわ！」

「あれ？ ディアーチエ、このまえ……」

「なっ!? ユ、ユーリ見ておったのか。ちち違うぞ、あれはあちらのほうから構ってほし

いと近づいてきたのだ。決して我から近づいたというわけではなく……!」

相変わらずディアーチエはユーリに弱いな。……という俺もユーリには弱いのだが。

一般的に恥ずかしいこともストレートに言う子だから。

「……この子どうするかな」

「シヨ、シヨウさん、私の持つてるフェイトちゃんのと変えましょう!」

「え、ちよつなのは!」

「止めないでフェイトちゃん!」

「ううん、止めるよ!」

……この子達は何をしてるんだろうか。

自分のチヴィットをそんなに持たれたくないのか。まあ早い子なら思春期を迎え始める頃かもしれないし、年上の男に持たれるのは嫌かもしれないが。

でも……それならクロを俺に返してくれば丸く収まると思うんだよな。そんな簡単なことが分からないほど慌ててるみたいだけど。俺が話しかけると余計にパニックになりそうだし……。

「アリシア達、誰かチヴィットを変えてくれ」

「しようがないなく、ならわたしのチヴィットと変えてあげよう。わたしのチヴィット可愛いでしょう?」

「そうだな」

「うんうん……わたしは?」

「アリシア・テストアロツサ」

「そのとおり!　って違うよ、可愛いかどうか聞いたんだよ。分かかって惚けるのはひどい!」

「ああ……カワイイカワイイ、小さくてカワイイ」

「投げやりに言うなああッ!」

第18話 「フローリアン姉妹」

アリシアが落ち着きを取り戻した頃、特撮のヒーローのような掛け声が響いてくる。声が出た方へ顔を向けると

「グラントツ研究所へ」

「ようこそくん」

と、海聖小学校の制服を着た少女達が立っていた。

毛先にウエーブの掛かっている少女のほうは至って平気そうな顔をしているが、もうひとりの赤毛の少女は顔を真っ赤に染めている。

そんな彼女達を見ている俺達は、全員呆気にとられた顔をしている。理由は単純にして明快だ。

目の前にいる海聖小学校の制服を着た人物達は、高町達のように海聖小学校に通う児童ではない。エルトリア・ガールズ・ハイスクールに通う学生なのだ。ハイスクールという言葉から分かるとおり、彼女達は高校生。

つまり、今俺達の目の前には小学生のコスプレをしている高校生が立っていることになる。初対面であろう小学生組はもちろん、長年の付き合いがある俺やディアーチェ達

でも何とも言えない気持ちになるだろう。

「どどどうするんですかキリエ！ あなたが親睦を深めるには同じ格好をするのが一番よん♪」と言うからこんな格好をしましたが、みなさん呆然としてるではありませんか！」

「あれくん？」

「おふたりとも」

「年をわきまえよ」

「はう！……シヨ、シヨウさん、無言で立ち去らないでください！」

いやいや、ここで引き止めずに立ち去らせてくれよ。小学生のコスプレをする高校生と知り合いだなんて思われたくないんだから。まあ話しかけられた時点でアウトなんだろうけど。

「……いいか君達、ああいう大人になっちゃいけないぞ」

「あう！ シヨウさくん、ですからこれはキリエが……」

「お姉ちゃん、確かに言ったのは私だけど、着ることを決めたのはお姉ちゃんの意味よん。人のせいにするのはどうかと思うわ」

「そ、それはそうですが……というか、なぜキリエはそんなに平然としているのですか！」

「恥ずかしくないからに決まってるじゃない。私のキャラ的にお姉ちゃんに向けられる反応はされないし」

確かにアミタよりはキリエのほうが違和感ないけども……もう少し羞恥心は持ったほうがいいと思うのだが。まあ研究所の周りにある花壇を褒めたりすると照れるんだけど。

「お姉ちゃんと違って若いからねん♪」

「わ、私だつてまだ若いです！」

「でもこの中では最年長よ」

「それはそうですが、私はまだ高校2年生です！」

そうだな。アミタは高校2年生だから世間で言えばまだまだ若いよな……でもさ、俺やディアーチエは中学生だからまだいいとして、高町達からすれば高校生って結構年上だと思ふんだよな。小学生のコスプレをするのはどうかと思う。というか、着替えるか話を進めるべきじゃないかな。

俺と視線が合ったキリエはこちらの内心を察したのか、アミタに話を進めるように促した。

「あ……改めまして、グランツ研究所へようこそ。私はアミティエⅡフローリアン。ディアーチエ達の就学の手伝いをしている家のものです。気軽にアミタって呼んでく

ださい」

「私はキリエーフローリアンよ。いわゆるザ・ホストファミリー、T・H・Fってやつね」
「は、はじめまして……」

「なんでうちの制服を……」

「むしろどこで手に入れたかのほうが気になるわ」

うん、バニングスの言葉は最もだな。原本は海聖小学校に通わなければ手に入らないはずだし、高校生サイズのものが売っているとは考えにくい。もしかして……

「それは言いっこなしでお願いよん。すずかちゃんにアリサちゃん」

「何で私達の名前を？」

「ま、まさか……」

「海聖小学校のマニアだったのか？」

それならば制服を手作りしてしまうのも、月村達の名前を知っているのも頷ける。俺の言葉にバニングスは大いに共感してくれているようだし、これは

「違います！ ショウさん、いじめるのはやめてください！」

いじめるだなんて失礼な。アマタがコスプレなんてしたのがそもその原因だろうに。

というか、年下相手に弄られるのはどうなのよ。赤面に加えて目元に涙が見えるから

これ以上はしないけどさ。

「まあまあお姉ちゃん落ち着いて。シヨウ君はあまり人のことをいじめたりする子じゃないのよ。考え方を変えれば、お姉ちゃんは特別ってこと。ほら、気になる子には素直になれずにいじめちゃう子っているじゃない」

「ななな、いや確かにそのような方もいらっしやるとは思いますが……シヨ、シヨウさんがわわ私を」

キリエ、落ち着けて言っておきながらからかうのはやめろよ。というか、誤解を招くようなこと言わないでくれるか。別に好きな相手にいたずらしたりしないから。素直じゃないって部分は……まあ認めないけど。

「アミタ」

「は、はいー」

「……とりあえず落ち着こうな。別に特別扱いとかしてるつもりはないから。今の場合は弄ったほうがこの子達に受け入れられるかと思ってることだし」

「シヨウ君、それはかえってお姉ちゃんを傷つけてるんじゃないかしら」

それをきっぱりと言ったキリエのほうがアミタを傷つけてると思うぞ。そもそも、お前が変なこと言わなければ今のも口にしてないから。最も悪いのはお前だぞ。

「話がおかしな方向に逸れているが、ここはブレイブデュエルの総本山とも呼べる場所

だ。当然急上昇中の新チームの情報は入ってくる。仮にも貴様らは我らに土をつけたのだからな。注目されるのも当然と言えよう」

「うちに来る子達にもなのはさん達はすごく人気なんですよ」

「デイアーチエとユーリが見事にフロリーアン姉妹が壊してしまつた空気を修復してくれる。さすがは我が校でも屈指の優等生と頑張り屋な子だ。シユテルやレヴィ、フロリーアン姉妹と癖の強い人間が多いのここが無事に回っているのは彼女達の頑張りがあつてこそだろう。」

「そうなんです！　ですからみなさん、ぜひ遊んでいきませんか！」

「いいんですか？」

「もちろん、熱烈歓迎です！」

「アミタさん、今日も熱いですな……さすがは学校で風紀お姉ちゃん《あみたん》の名称で慕われているだけのことはある。ちなみにこの手の情報を教えてくれるのはキリエだ。」

「別に俺は聞きたいと思つていないのだが、何かあればすぐに教えてくれる。はたから見れば、アミタをからかうための下準備なのだろうが、キリエはなんだかんだでアミタのことが好きな子だ。アミタと接するためにそういうことをしているのだろう。」

「あらん、シヨウ君そんなにお姉さんのこと見つめちゃつて。もしかしてお姉さんの魅

力に気づいちゃったのかしらん？」

「何言ってるんだよ。キリエの良いところは前からそれなりに知ってる」

「え、あつ……その返しは考えてなかったわ」

キリエは言い淀んだあと、こちらに背中を向けた。おそらく俺の返答を予想していなかったため、照れているのだろう。今までに散々玩具にされたことがあるだけに、俺もどのように返せば効果的か理解しているのだ。まああまりやると誤解を招きかねないので、いつもはできないだろうが……

「そこは何をイチャついておるのだ」

……うわあ、何か王さま怒ってるよ。付き合いが長いだけに声だけで、見なくても表情が分かってしまう。ここ最近やたらと睨まれたりしている気がするけど……。

まさかディアーチェは俺のことを……そんなわけないよな。あいつが怒ってるのって、アリシアとかはやてとかシユテルとか、男女の距離感を意図的に無視して接してくる連中と関わってるときだけだし。今のも集団の和を乱してるから言っただけだろうからな。

「あらん、王さまやきもちかしら♪」

「や、やきもちなぞ焼いておらぬわ!」

「あらそう。でも、ディアーチェとシヨウ君って少し前まで許婚じゃなかったかしら

ん」

……キリエ、仕返しとばかりに何て話題を持ち出すんだ。俺やディアーチェだけでなく、恋愛に興味津々な小学生達の表情も変わってるじゃないか。せつかく落ち着いたのにまた騒がしくなるぞ。

「ええ、ちよつとそんなの聞いてないよ。いったいどういうことなの！」

「ちびひよこ、落ち着かぬか！」

「落ち着けるわけじゃないでしょ。そりや前から何だか距離感近いなあつとか思ってたけどさ。シヨウは将来うちのお店を担っていく大切な人なんだからね！」

アリシア、落ち着けないのは分かるが、最後のはいくらなんでもおかしいだろ。勝手に人の将来を決めないでほしいんだが。

それとフェイト、今のはアリシアが勝手に言ってるだけだから鵜呑みにしないでくれ。別に君やアリシアと結婚したりする話なんて出てないから。

そもそも、プレシアさんに娘さんをくださいとか言えないからね。今でさえ何だかマークされてるんだから。というか、リンデイさん達だっているんだからクロノとエイミイあたりがやっついていく可能性が一番高いんじゃないかな。

「後半部分に言いたいことはあるが、よく聞け。我とシヨウがい、許婚という関係にあつたことは一度としてない。我らの親が知り合いだつた故に、酒の席でそのような話が冗

談で出ただけだ！」

「冗談？ 割と本気だったんじゃないの？」

「そのようなことは……」

「本気であれ冗談であれ、許婚の話はなかったことになっている。それが事実だ」

「ディアーチェが怯んでしまったので代わりに答えたが、話の内容が内容だけにアリシア達は納得してくれていないようだ。」

「信じてない目をしてるな。その話をしていたのは俺達の父さんで大分酔ってたと聞いてるし、前に俺がはつきり許婚の件については断ってる。俺もディアーチェも自分の相手は自分で決めるってな……ディアーチェには確認してなかったけど」

「いや……我も同じ考えだ。それにすでに終わった話なのだから、今更あれこれ言っても仕方がなからう」

「ありがとな」

「ふん、別に礼を言われるようなことではないわ」

昔からだけど本当に素直じゃないよな。まあこういうところもこいつの可愛いところだし、これぞディアーチェって感じなんだけど。

これで一段落……かと思いきや、まだまだ小学生組は納得してないみたいだな。どうしたものか……

「……あ、桃子さんに聞いてみればいい」

「え、桃子さんって……私のお母さんですか？」

「ああ。俺の母さんもパティシエしてて、確か君のお母さんとは昔からの知り合いだったはずだ。最近はあるけど前は年に何度かは訪ねてたはずだし、この話についても知ってると思うけど」

必要以上のことを話されてしまう可能性もあるが、まあ桃子さんは常識人だしさじ加減はきちんとしてくれるだろう。

「……というか、今日はこんな話をしに来たわけじゃないだろ。いい加減に話を進めないか？」

「あ、はい、それもそうですね。では、奥のほうへと向かいましょう！」

「あ、私は着替えてくるから先に行つといてねん」

「わ、私も着替えてきますので皆さん後ほど！ チヴィットは受付で預けちゃってくださいー！」

第19話 「小学生達の現状」

その後、フロリーアン姉妹の策略によりチームT&Hエレメンツは急遽イベントデュエルに参加することになった。

対戦したのはディアーチェ&ユーリにチヴィット達。デュエルの内容はスピードレーシングでコースは大森林だった。このコースは視界を遮る木々の存在にどう対応してターゲットを破壊するのか技量が問われる。また自然破壊を行うとペナルティがある。

ちなみにT&Hの少女達は、自然を燃やせないなど発言したり、プロテクションしながら進むのは無理そうだな、という顔を浮かべたりしていた。可愛い顔をして物騒な思考をする子供達である。

勝敗については……あまり触れると機嫌を損ねそうな人物がいるので大声では言えないが、勝ったのはT&Hだ。その際、王さまがシユテル達がいれば……いやユーリだけということに不満があるわけではないぞ。と、ユーリへのLOVEが分かるやりとりがあったりした。まあ彼女のユーリへの愛は誰もが知っていると思うのでこれ以上は触れない。

「ふむ……そろそろ開戦のようだな」

現在、俺はデИАーチェと共に小学生達のデュエルを観察している。

ここに至った経緯は、小学生達が壁を感じていると相談してきたため、デИАーチェが研究所にある《プロトタイプシミュレーター》と呼ばれる新しい設定を盛り込む際に使われる機械に内蔵されている《エクストラトレーニングモード》を使わせることにしたのだ。

ちなみにこのモードは、現在フリーバトルしか行えないが技の出力やアバターの状態といった様々なデータをプレイヤーも確認することができる。

各々の持ち味を確認するため、高町とアリシアはアミタ&モモキリ。バニングス、月村、フェイトはキリエ&ユーリ&王ちやまとデュエルを行うようだ。場所は前者が空中で後者が地上である。

「空中戦と地上戦に分けたんだね。各々の持ち味を再度確認するためのステージ選択とあったところかな」

「ん？ 博士いらっしやったのですか」

画面を覗き込んでいた俺達のところには、デИАーチェの博士という言葉からも分かる通り、この責任者であるグランツ博士だ。研究熱心なせいか痩せ気味ではあるが、人の良い人物である。知っている人も多いだろうが、アミタ達の父親でもあ

る。

「データ取りは僕にしても助かるからね。微力ながらお手伝いに来たのさ。まあ君としてはユーリが居てくれたほうが良かったかもしれないが」

「なっ……何を言いますやら!」

「ははは、冗談だよ。ここにはシヨウくんもいるしね」

笑いながら発せられた言葉にディアーチェの顔はさらに真っ赤になる。先ほど許婚やらで良い意味でも悪い意味でも盛り上がっていただけに、この手の話題はクリティカルしやすいようだ。

「博士、俺達をからかうのはやめてください。大人なんですから」

「はは、手厳しいが正当な意見だね。あ、それよりディアーチェはそろそろ準備に行ったほうがいいんじゃないかい?」

「む、もうそのような時間でしたか」

グラランツ博士に促されたディアーチェは、俺達にデータ取りを頼むと準備が済み次第迎えに来ると言って出て行ってしまった。この場に残された俺はというと、必然的に博士と共に小学生達のデュエルを見ることになる。

「いやはや楽しみだね。さて、デュエルのほうはどうなっているかな」

意識を画面に戻すと、アミタの射撃を避け後方に回っていた高町の姿が見えた。彼女

はそのまま攻撃を加えようとしたが、アミタが背後を確認することなく精密な射撃を行ったため、回避を余儀なくされてしまった。

そんな高町にアリシアが声を飛ばしながら、アミタの銃撃を防ぎ懐に飛び込む。しかし、モモキリが現れて攻撃を許さない。すかさずアミタが銃撃を加えるが、アリシアも魔法を展開してガードしてみせる。高町が強烈な砲撃を放つが

「このタイミングでは通らないだろうな」

俺の予測どおり、放たれた桃色の砲撃はアミタによつて斬つて捨てられた。ビームを斬るなんてさすがは風紀お姉ちゃん《あみたん》である。

嘘、冗談だ。ここに学校での愛称は関係ない。純粹に彼女のデュエリストとしての力量が高いだけだ。

一方他の3人はというと、見事なまでに消耗していた。対しているキリエ達の顔は涼しいままだ。

『わくお、ビーム斬っちゃった。砲撃・銃撃戦は派手よねえ〜』
『青にピンクに綺麗です』

などと、あちらのデュエルを気にする余裕さえある。

その言葉にこれまでのように攻めても無駄だと判断したのか、小学生達は小声で何か話した後、一斉に動き始める。

まずはバニングスが炎を鞭のようにしならせながらキリエを攻撃。しかし、命中率は0パーセント。それに苛立ちを覚えたバニングスが声を上げるが、キリエ曰く「お姉さんへのタッチは簡単ではないのようん」とのこと。

ならばと月村がキリエの足を凍らせて機動力を奪い、バニングスがフェイトと共に追撃を掛ける。だがその攻撃もユーリと王ちやまに防がれてしまった。

「ふむ……シヨウくん、君は彼女達をどう評価するかな?」

「俺ですか? そうですね……まずアリシアですが、臨機応変な対応力はさすがだと言えると思います。センターガードとして活躍できるでしょう……でもガンナータイプという特性上、やはり決定力に欠けますね」

モモキリがガードを固めながら真正面から突撃しているのだが、アリシアは止められていない。このように力押しで来られたときにどうするかが今後の課題だろう。

「僕も同意見だね。次になのはくんはどうか?」 彼女はシユテルと同じセイクリッドタイプのようだけど」

「あの子は空を飛ぶことに関して才能があるみたいですからセイクリッドと相性が良いと思いますよ。まあ現段階ではスペックの高さが仇となっているのか、位置取りが甘くて思いきりが足りてませんね。まだまだ隙が多いです」

「ははは、君は本人がいないとズバズバと言うんだね」

「本人がいても言つてほしいなら言いますけどね」

言わないのだけが優しきではないって母さんも言つていたし。

今関係はないけど、俺の母さんつてよく考えると不思議な人だよな。感じとしてはシグナムに近いのにパティシエやつてるんだから。まあ父さんがだらしが無い人だから相性は良いんだろうけど。今でも「ごちそうさま」つて言いたくなる言動してるし。

下が増えるなんて未来もありそうだよな……もしもそんな未来がきてしまつたらどうするか。年齢が離れているだけに……仮定の話を考えても仕方がないか。

「次にアリサくんだけど、一言で言うなら切り込み隊長やこれぞフォワード！ といったところかな」

「ですね。もう少し視野を広く持つてリスク管理できないとダメでしょうけど」

「そうだね。僕個人としては彼女のようなプレイは好きなんだけど」

「まあ俺も好きですよ」

デュエルを始めた頃の自分によく似ているし。今では先輩としてあれこれ教えている身であつたり、何でもこなすような位置でプレイしているけど、本来の俺のスタイルは攻撃は最大の防御って感じだからな。まあシユテルくらいにしかそのへんは見せたことないんだけど。

「フェイトくんはキリエと同じワイドウィング……のレヴィよりかな？ 視野は比較的

広いみたいだし、機動に関しては文句のつけどころがないね。ただ」

「仲間に合わせすぎて遊撃としては微妙なところですよね」

まあ彼女の性格を考えると無理もないと思うが……もうチームメイトなんだから、あの子達にくらい自分の正直な気持ちをつづけてもいいと思うんだがな。

「最後にすずかくん、ポジションはユーリや王ちやまみたいで、ディフェンダーなんだろうけど……動体視力や身体能力が高いんだろね。普通はあそこまでサポートできないよ」

「ええ、ある意味一番ギャップがあります。……けど、それ故に仲間——今回の場合は特にバニングスへ意識を大きく割いている印象があります。まあ付き合いの長さや性格を考えると分からなくもないですが」

ちやうどデュエルも終わったらしく、アミタが俺と博士のような解説を次々と述べ始める。しかし、見事にボロ負けしたT&Hの面々には聞こえていない。アミタ、熱血は君の良いところだけでももう少し冷静さも持ちましょう。

「さて、僕はまだあの子達と顔を合わせたことがないし挨拶にでも行ってこようかな。シヨウくん、君はどうする?」

「行ってもいいですけど、そろそろユーリ発案のお祝い企画の第2部が始まるでしょうし、俺もそつちの準備に取り掛かりますよ」

「そうかい。……ところで、今日はいったいどうするつもりなんだい？　僕としては、久しぶりに君の全力全開を見てみたいんだがね」

全力全開が意味するのは、シユテル戦でしか使ったことがないアレを見たいってことだよな。あまり人前では使いたくないんだが、今後に待ち受けているユウキとのデュエルを考えればもつと練度を上げておく必要がある。まあ……

「それは……あの子達次第ですね」

第20話 「T&HエレメンツVS漆黒の剣士」

「ディーアーチエちゃんの計らい？ によって、私達は夕食のあるダイニングに向けてグランツ研究所の所員の方々とデュエルを行った。予定では次のデュエルで最後だ。」

「やっと次で終わるわね」

「そうだね。まったく手が出ないわけじゃないけど、所員の人達凄かったね」

「フェイトちゃんの言うとおり、対戦した所員の人達は作ってる側だからか今の私じゃ考え付かないような動きを取ってきた。色んな動きを見ることが出来て楽しかったし、何より勉強になった。」

「うん、動くポジション取るのが上手い人もいたよ。あんな風に動けたらなあ……」

「私はあの槍を持ったお姉さんが印象的だったわ。少し躊躇っただけで接近されてやられちゃったし。マンツーマンでの対応も今後は必要よね」

「だね。でも……ひよんなことから上手くタイミングがあつたりして」

「なのはちゃんとアリサちゃんは難しい顔を浮かべながら唸っている。やることは見えてきたけど、その解決策というのは簡単に浮かぶものでもない。それは私だけでなくなのはちゃん達も同じように、肩を落としたり「むきー！」と声を上げている。」

「まあ……みんなもうお腹ペコペコだもんね。無意識に動いたりしちやっただろうし」

「うん。次で最後だし、ご飯を食べた後でみんなに相談してみたらいいんじゃないかな？」

「そうね。みんな、次でラストなんだから全力で行くわよ！」

次で終わりということもあって、全員拳を突き上げながら元氣良く声を出す。疲れや空腹はあるけど、この団結力なら最後は良い感じに終われそうな気がする。

次の相手がどんな人なのか、どういうデュエルを行うか話し合いながら先に進んでいると、角を曲がった先にシヨウさんが壁に寄りかかっていた。

「あれ、シヨウじゃん。どうしたの？ あっ……もしかして、わたしに会いたくなって来ちゃったとか？」

「5人の中で言えば、お前には1番会いたくないな」

切れ味鋭い返事にアリシアちゃんは両手で胸を押さえる。見た目はあれだけど、私達よりシヨウさんと年齢が離れていないこともあってこのような漫才染みたやりとりができるのだろう。

シヨウさんのほうは少し嫌そうな顔をしてるけど……多分演技だよ。そうじゃないとアリシアちゃんが可哀想だし。

「もう、今のわたしは疲れてるんだよ。少しくらいデレてくれたっていいじゃん」
「これから戦う相手に笑顔振り撒いてどうするんだよ」

シヨウさんの言葉に私だけじゃなく他の子達の表情も固まる。聞き間違いでなければ、今シヨウさんは私達とデュエルすると言った気が……。

「あ、あの……私達の最後の相手ってシヨウさんなんですか？」

「ああ。ただ……疲労と空腹で無理ってことならしなくてもいい。このまま奥に進んで食事にしよう」

優しい声で言われた内容は、今の私達にとつては非常に魅力的なものだ。だけど、私はシヨウさんとデュエルがしたいと思った。

シヨウさんとはこれまで何度かデュエルをしたことがあるけど、それはあくまでチーム戦の手伝いって感じだった。多分今回が初めてシヨウさんって存在にぶつかるデュエルになる。

実力はシユテルちゃんレベルだって話だけど、今の私じゃシユテルちゃんの底を知ることができない。だから多分私——ううん、私達とシヨウさんとの間にはいくつもの差があるんだと思う。

勝てるかどうかは分からない。でも、やりたい。

誰もがそんな気持ちを抱いているのか、私達は真っ直ぐにシヨウさんを見つめた。

「確かに疲れてるしご飯も食べたいけど」

「せっかくシヨウさんとデュエルできるんだから」

「やらないなんて選択肢はないわよね」

「シヨウさん、全力全開で行くので」

「よろしくお願いします」

以心伝心したかのように順番に気持ちいを伝えた私達に、シヨウさんは優しげな笑みを向けてくれた。なのはちゃんやフェイトちゃんは何だか顔を赤くしてるけど、ふたりの気持ちは分からなくもない。

シヨウさんってあまり笑ったりする人じゃないから、今みたいな顔されるとドキッとするよね。まあ私達がいつも女の子ばかりにいるから男の人に慣れてないだけかもしれないけど。

ただ……なのはちゃんは助けてもらった日からシヨウさんのこと意識してるよね。フェイトちゃんも性格なのか、昔から付き合いがあるみたいだし特別な想いがあるのかはつきりしないけど……まあこういうのは見守るのが一番だよな。

「じゃあ、元氣のあるうちに始めようか」

そう言ってシヨウさんは近くのシミュレータのある部屋へと向かう。私達をすぐあとを追ひ、それぞれシミュレータに入ってプレイブホルダーを胸の前に抱えた。

次の瞬間には、私達は制服からそれぞれのバリアジャケットに姿を変え、四方を崖で囲まれた平地に舞い降りる。障害物の類は存在しておらず、純粋なデュエリストの腕が試されるフィールドだ。

少し遅れて私達よりも頭ひとつ分ほど高いデュエリストが現れる。やや長めの髪と鋭い瞳は共に漆黒。黒革のようなロングコートに身を包み、手には指貫きのグローブ、足にはブーツ。背中には一本の長剣型のデバイス。《漆黒の剣士》という通り名にふさわしいアバターだ。

シヨウさんは静かに背中にある剣に右手を伸ばしてゆつくりと抜き放つ。ただの開戦の準備としか言えない動作だったが、私は気が付けば両手を握り締め身構えていた。

——これが……本当のシヨウさん。

シヨウさんのこれまでの印象は、どこか不器用そうで表情に乏しいところがあるけど、優しいお兄さんといったものだった。

デュエルするときも敵対している私達を気にしてくれていたため、感じる雰囲気もどこか優しいものだった。

でもこうして敵として向き合って……実力がある程度高まった今だからこそ分かる。

シヨウさんはただ剣を持って自然体で立っているだけ。一見隙だらけに見えるけれど、迂闊に攻撃すれば次の瞬間には返り討ちに遭っているビジョンしか見えてこない。

体から発せられている圧力は凄まじく、もしも自分ひとりでこの場に居たとすれば、気が付いたときにはデュエルが終わっている……なんてことになっていたかもしれない。それくらい個人的な力量の差を肌と感じた。

直後。

1発の魔力弾が静寂を破る。それは真つ直ぐにシヨウさんへと向かい……漆黒の長剣に斬り裂かれた。

「いきなり顔を狙うなんてえげつないな」

「あつさり斬ったくせによく言うね。けどまあ許してよ。みんな疲れもあつてシヨウの圧力に怖気づいてたみたいだし」

「小さくてもお姉さんだな」

「小さいは余計だよ」

アリシアちゃんは頬を膨らませる。これまでに何度も見た光景に緊張は薄れ、私だけじゃなく他のみんなの顔にも笑みが現れる。

突然発砲するから驚いたけど、私達のためにやってくれたんだ。やつぱり私達より早く生まれてるだけに、こういうときは頼りになるなあ。

「みんな、シヨウなんかさつさとやつつけてご飯を食べよう！」

「そうね。あんまり長引かせてたら空腹で倒れそうだな。一気に決めちゃいませよ！」

「アリサ、焦りは禁物だよ。さっきの攻撃、不意打ちに近かったはずなのに簡単に防がれた。私達よりも格上なのは間違いないよ」

「でもそれで怯んでたら勝利なんてものは訪れないよ。胸を借りるつもりで、全力全開で挑もう！」

「うん、私は精一杯サポートするね！」

大きく頷きあつた私達は、それぞれ行動に移った。まずアリサちゃんはシヨウさんに向かつて真正面から接近。フェイトちゃんは横に回りこむようにしながら移動する。ふたりから意識を遠ざけるべく、アリシアちゃんが銃を構えた。

「シヨウ、行くよー！」

アリシアちゃんは次々と魔力弾を放つて牽制する。が、シヨウさんは迫り来る魔力弾を全く力感のない動きで全て叩き斬る。かなり重量のありそうなデバイスに見えるのに、あれだけ滑らかに斬撃を放てるのは彼の努力の賜物か。

しかし、シヨウさんがどんなに優れたデュエリストでも目の前で爆発が起これば一瞬視界がゼロになる。そのタイミングでアリサちゃんは見事に飛び込んでいた。

「そっつー！」

アリサちゃんの剣型デバイス《フレイムアイズ》の先端がシヨウさんの胸部を捉えた

「っ……っ！」

——ように思ったが、シヨウさんは圧倒的な反応速度で体を捻ってアリサちゃんの攻撃をかわす。彼の動きはそれだけに留まらず、素早く体勢を整え剣を構えた。回避から攻撃までのタイムロスがなさすぎる。

「やらせない！」

気合のこもった声と共にフェイトちゃんが間に割って入り、漆黒の長剣を受け止めた。だが体重の差からか、フェイトちゃんのほうが押し返される。

でも動きが止まった。このタイミングで……！

私は動きを止めようとシヨウさんの足元を凍らせ始める。あともう少して足を取れる！　と思った矢先、再び彼は超反応を見せ、強引にフェイトちゃんを押し返すと、剣を地面に突き立て跳躍した。

前にフェンサータイプはトリツキーな機動が持ち味と教わったが、シヨウさんの動きはこれまでに見たどのフェンサータイプよりもトリツキーだ。

だけどあんな無茶な避け方をした直後なら、そう易々と連続で回避行動は取れないはず。

「ダイバイイン……バスターー！」

私達の中で最も火力のあるのはちゃんの砲撃がシヨウさんを狙い撃つ。簡単に直

撃をもらってくれるとは思えないが、少なくとも今浮かんでいる彼の顔には焦りのような感情が見える。

だが——次の瞬間。

シヨウさんの瞳には諦めではなく抗いの意思が宿っていた。

彼は迫り来る桃色の閃光を見つめながら可能な限り体勢を整え、右腕を引き絞るように肩に引き付ける。それとほぼ同時に漆黒の刀身に集束されていた魔力が弾け、紅蓮の炎へと姿を変えた。

シヨウさんの愛用している魔法《ブレイズストライク》。時として一撃で勝負を決め得る威力を秘めているだけになのはちゃん砲撃を食い破る可能性は高い。

「う…………お……………」

かすかに漏れた雄叫びと共に真紅の流星が宙を翔ける。なのはちゃんの砲撃とは全く関係のない方向に。

狙いをミスしたのかと思ったが、今のシヨウさんは空中に居る。強力な魔法というのはそれ相応の反動があるもので、撃ち出す方向とは逆向きの力が働くものだ。踏ん張りを効かせずに放てば、必然的に体はその方向へと進み始める。

結果から言って、シヨウさんはブレイズストライクの反動で砲撃の範囲から脱出した。ただ反動が強すぎるあまり、すぐに止まることはできず、何度も地面を転がる。

人によつては無様な避け方だと言うかも知れないが、なのはちゃんの砲撃は防御魔法を使つてもなかなか受け止めきれぬものではない。攻撃範囲から逃れるのが最も効果的だ。だからといって、普通のデュエリストはあの状況下で回避という選択肢は取れないだろう。

私達が呆然と立ち尽くす中、シヨウさんは剣を地面に突き刺して制止を掛け体勢を立て直した。こちらの動きに注意を払いつつ剣を地面に刺したまま立ち上がると、体のあちこちを叩き始める。

「やれやれ……ついこの間始めたばかりだつて言うのに。……これは俺も本気でやらないと勝てそうにないな」

本気。

その言葉に驚愕と動揺が走る。

デュエルが始まつて間もないが、シヨウさんの実力の高さは充分に理解させられた。先手を譲つてもらえたことで有利に運べたわけだが、あちらから攻められたらどうなるか分からない。

なのに彼にはまだ余力があるというのか。もしそうならば、私達の勝てる可能性は限りなく低くなる。

そんな私の思いとは裏腹に、シヨウさんは左手を背中のように伸ばし始める。すると

左肩あたりに新たな剣が出現。それをしっかりと握ったかと思うと、ゆつくりと鞘から抜き放った。

刀身部分は薄く、レイピアほどではないが細い。刃の色は一本目の剣とは対照的に純白であり、眩い光を放っている。柄の部分は青味がかつた銀色。簡潔にこの剣を表現するなら『やや華奢で美しい剣』といったものになるだろう。

シヨウさんは突き刺していた漆黒の剣を右手に取る。左右の手に握った漆黒と純白の剣をクルクルと回転させ——握り締めたと思つた直後、一気に切り払った。

「……行くぞ」

低い声が耳に届いたかと思うと、シヨウさんは右足を大きく踏み出し、まるで砲撃で撃ち出された如き速度でこちらに迫ってきた。

第21話 「歓迎会」

「コングラッチレイション！」

「お疲れ様でした」

デュエルを終えた俺達を迎えてくれたのは、レヴィとシユテルだ。彼女達がこうして出迎えたということは、どうやらあちら側の準備は済んでいるらしい。

全員腹を空かせるだろうし、デИАーチエの料理を目の前にしたらがつつきそうだな。

と思つて視線を小学生組に向けてみると、何やらアリシアが怯えた様子でシユテル達を見ていた。いったいどうしたのだろうか。

「まさか……最後にふたりとデュエルなんてことは」

ああなるほど、そういうことか。確かに研究員ではない俺ともデュエルをしたので、今のように思つてもおかしくはない。

「ええ!?」 流石に限界よあたしたち。主に兵糧的な意味で!？」

俺とのデュエルを終えた時点でぐったりしていたのだからそうだろう。ここに来るまでの足取りもかなり重たいものだったし。

にしても……バニングスは小学生の割りに難しい言葉を知ってるな。普通小学生は兵糧なんて言葉は使わないだろうに。

まあそれは置いておくとして、さすがにデュエル好きのシュテルやレヴィでも今からやろうとは言わないだろう。そんな俺の思考をあざ笑うかのようにシュテルは小さく笑い、ブレイブホルダーを構えた。

「今の私達は云わばコンシエルジュ……お望みとあらば一戦交えますが?」

真剣な顔で何を言っているんだこいつは。どこからどう見ても小学生達は疲れてるだろ。おそらく冗談で言ってるんだろうが……高町だけは目を輝かせてるな。可愛い顔して意外と戦闘狂なのだろうか。まあお兄さん達が武術をしているから可能性はゼロじゃないだろうけど。

「ええっ!? ボクもお腹空いたよシュテルん。み、みんな……ご飯ゆーせんだよね?」

慌てたレヴィの問いかけにアリシアとバニングスは大きく首を縦に振りながら、シュテルの耳にも届くであろう音量で腹の虫を鳴らした。

「ふふ、小粋なジョークといったところですよ」

「いや、今の状況じゃ笑えないだろ」

「まあまあ気を取り直して、会場にご案内〜!」

レヴィを先頭に会場に入ると、そこには豪華な夕食が並べられていた。空腹が限界ま

で来ていた小学生達の表情が煌びやかなものに変わったのは言うまでもない。

「よくぞ辿り着いた」

「ようこそいらつしやいました」

ディアーチエやユーリが代表で歓迎の言葉を述べてくれたが、フローリアン姉妹やグランツ博士の姿もある。足りないメンツはいないようだ。

「ディアーチエ、えらく頑張つて作ったな」

「え……これディアーチエちゃんが？」

「別に我ひとりで作ったわけではない。それに急で時間もなかったのな。あまり豪華なものを用意できなかった、許せ」

ターキーまで用意しといて何を謙遜してるんだか。充分にパーティーとして通用する品数だし、時間があつたらどれだけハイレベルなものを用意するつもりなんだろ。それはそれで見たくもあるな。

「そんなことないよ。どれも綺麗で美味しそうで……ありがとう！」

「む……なら良い」

「しかし……本当に美味しそうね」

「うん。どんどん睡が溢れてくるよ」

「みなさんすでに限界のようですし、冷めないうちに頂きましようか」

アミタの発言にディアーチエが博士に挨拶を促し、全員手を合わせて食前の言葉を述べる。

俺はディアーチエの腕前を知っているだけに、限界まで腹を空かせた小学生達がどのような反応をするのか気になった。なのでチラリと横を見ると、ちょうど料理を口に運んだバニングスと月村が見える。

「こ、これは……パリパリの皮にふつくら焼き上がったお肉」

「ほのかに付いている風味からして……表面にごま油を塗ってるのね!」

「それだけじゃないよ。中に香草だけじゃなくてきのこや蒸したお野菜も一緒に入ってる」

「お肉の旨味がしつとり上品に行き渡って……本当に美味しい」

「お口の中がしあわせ♪」

さすがはお嬢様方、小学生なのにずいぶんと味覚が発達していらつしやる。それに食レポとリアクションも完璧なようで……どういふ風に君達は育ってきたんだ。

残りの小学生に意識を向けてみると、高町↓フェイト、アリシア↓高町、フェイト↓アリシアといったように代わる代わる食べさせ合いつこをしていた。こちらはお嬢様方と違って何とも子供らしい光景である。

「……………」

料理を皿に取っていると、幸せそうな表情を浮かべる高町を見つめているシュテルが視界に入った。彼女の顔は至って平常運転に見えるが、付き合いが長いせいかな何を考えているのか何となく分かる。

多分……高町達みたいにお食べさせ合いつこをしたんだろ。ああ見えて構ってちゃんというか、人と接したいと思う奴だし。まあ猫みたいに気まぐれだったりもするんだけど。

予想はどうやら当たっていたらしく、シュテルは近くでガツガツと音を立てて食べていたレヴィへと意識を向けた。

「レヴィ、私達も……」

「んう？ なに？」

「……何でもありません」

確かに相手にディアーチェではなくレヴィを選んだ点は良い。彼女ならば『あく』といったことでも抵抗なくさせてくれただろう。が、食べ始める前にしないとダメだ。

というか、やりたいくせに押しが弱いな。あれか、やりたいけど自分のキャラ的に恥ずかしいのか。恥ずかしいと思うなら諦めればいいのに……あのシュテルさん、何でもこつちに近づいてくるんですか？

「……………」

「いや、無言でやるなよ。それにやらないぞ」

「私の恥ずかしい姿を見たではないですか」

「それはお前の自業自得——んぐ!？」

問答無用と言わんばかりにシユテルは肉を刺していたフォークを俺の口の中に捻じ込んできた。味が最高なのは分かっているが、突然の出来事に味わう余裕はなく、俺は大いに咳き込む。

……この野郎、何で俺には押しが強いんだよ。他の人間にもそれくらいで行けよ。

なんて思つて睨む俺を華麗にスルーし、シユテルは何事もなかったように食事を始める。どうやら彼女の内にあつた欲求は満たされたらしい。本来したかつたこととは別のはずなのに、何とも代用が利くものだ。

「こつちのもめちやくちや美味しいじゃない」

「うちのママがいないときは王様がうちのコック長なのよ」

「凄いな、ディアーチェちゃん」

「世話になっておる故な。まだまだ母上殿には及ばぬが……」

ディアーチェ以上に凄いつて……グラント博士の奥さん何者なんだろう。博士達とは昔から付き合ひがあるけど、何でか会えた試しがないんだよな。うちの両親とか叔母さんは会つてゐるらしいけど。

まあ会ったらあつたで面倒な展開になりそうなのだが……。

これは俺の経験に基づく勘だ。俺には桃子さんやリンデイさん、プレシアさんと意外と母親をやっている知り合いが多い。年頃の子供を持つせいなのか、あの人達は何かと色々な想像を巡らせてしまうのだ。

まったく……何で母親ってああなんだろう。うちの母さんもあの人達と会っているときは色々と話してるのかね。

そんなことを思っていると、ふとグランツ博士のほうに歩いていく高町が見えた。先ほど挨拶は済ませているが、知り合ったばかりの人間に躊躇なく近づけるのは凄いなと思う。だがあれが子供らしさと呼べるものなのかもしれない。

「あのグランツ博士」

「ん、何だい？」

「さつき訓練室をいつでも使ってくれていいって言ってくれたお話なんですけど」

「ああ、もちろん構わないよ」

「ありがとうございます。……えーと、その」

どうやら高町の本題は礼とは別にあるらしい。しかも言いづらいことなのか、言い淀んでしまっている。

あの子……いやあの子達は現在進行形で壁にぶつかってるわけだからな。これまで

は自分達だけでやってきただけに、誰かしらにコーチでもしてもらいたいんだろう。そう思った俺が助け舟を出そうとした矢先、俺よりも先に口を開いた人間が居た。

「何か困っていることがあるのなら、そこにいるふたりにコーチしてもらえばいいのではないか？」

発言したのはデИАーチエ。彼女が言ったふたりというのはフローリアン姉妹だ。

何となくではあるが、デИАーチエの考えたシナリオの全容が見えてきた。現状の理解と打開するための手段を与える。それが彼女なりの祝福のようだ。相変わらず面倒見の良い奴……。

「お、それは名案だね！」

「えええ!? デュ、デュエルの相手ならともかく……わ、私達が教えるだなんて」

「そ、そーよ。私達よりもっと得意そうな人が……ほらその彼とか」

キリエ、人を売るような真似をするなよ……まあ彼女達と先に知り合ったのは俺だから理不尽とまでは言わないけど。

「いや俺は……」

「シヨウ、謙遜は良くないと思うな。さつきわたし達のことギツタンギツタンにしたんだから」

アリシアの発言を皮切りに次々と小学生達の口が開いていく。

「そうよね……今思い返してみてもさっきのデュエルのシヨウさんは凄かったわ」
「うん……最初は行けるかもって思ったけど」

「2本目を抜いてからは一方的な展開だった」

「そうだね、みんなあつという間にやられちゃったし」

「いやそれは……君達のデュエルを見てたから苦手な分野とか穴が分かってただけで、今日初めてデュエルしてたのなら多分勝てなかったと思うんだけど。」

「なんて言ってもこの流れは変えられるわけもないか。……はあ、気が重たいけどはつきり言う他にないよな。」

「悪いけど、いくら頼まれても君達のコーチをするつもりはないよ」

「ええ、今まではなんだかんだで付き合ってくれてたんじゃん。何で？」

「……弱いから」

アリシアだけでなく、この場に居た全ての人間の表情が凍る。それに一瞬遅れて、自分が言葉足らずで発言してしまったことに気づく。

「ああいや、今のは君達が弱いからって意味じゃなくて俺がつてことだから」

「え？ 弱いってシヨウウさん、すつごく強いじゃないですか？」

確かにバニングス達から見れば俺は強く見えるのだろう。

でも俺は最初から強かったわけじゃない。どちらかといえば、最初は負けることが多

かった。負けても楽しくはあったけど、やっぱり悔しくて……強くなるために考えて考えて考え抜いて、勝つても負けてもそれを繰り返してやっと今の力を付けたんだ。

けどあいつは……初めてのデュエルで通り名持ちに勝つてみせた。もちろん、相手に油断はあっただろう。だが勝ったんだ。

あいつの成長速度を考えれば、おそらくすでにこの子達に近いレベルに到達しているだろう。遠くない未来、きつと今の俺くらいになる。この子達の面倒を見ていけば、間違ひなく勝率は下がるはずだ。

「……現状で満足するわけにはいかないんだ。俺にはどうしても勝ちたい奴がいる……だから、もつと先へ進みたい」

俺の言葉に小学生達の視線がシユテルに集まる。だが彼女は涼しい顔で佇んだままだ。

「彼が言っているのは、おそらく私ではありませんよ……私に対して今ほどの熱を向けてくれたことはありませんから」

「いや、シユテル……お前にも勝ちたいって思ってるんだけど」

「私に『も』ですか。そうですか……」

ああ……間違いなく機嫌が悪くなっていらいらっしやる。目を合わせてくれないどころか背中向け始めたし、声もどことなくいつもより低くなつてたし。

「……まあそれにコーチみたいな役をすでに引き受けてるからさ」

「それって八神堂さんとか？」

「いや……最近ブレイブデュエル始めたばかりの」

「……女の子？」

「そうだけど……」

アリシア、何でそんなジト目でこつちを見るんだよ。……いや、他の連中もアリシアほどじゃないけど何かこつち見てるし。別に不埒なことしてるわけでもないのに理不尽だろ。

「それって誰なの？」

「誰って……まあ一言で言えば従妹だけど」

「従妹？ 王さま知ってる？」

「ん、ああ。確かにシヨウにはユウキという従妹がおるぞ……それにしても、あやつこつちに来ておったのか？」

「まあな」

ユウキの存在は小学生組以外は知っていたため、この場に漂っていた善からぬ空気が霧散し始める。だが今度は別の意味で不機嫌そうな目を向けられてしまった。

「シヨウよ、ユウキが来ておるのなら何故ここに連れてこないのだ？」

「それは……こつちに來たの数日前だし、叔母から前もって知らされてなかったからゴタゴタしてたんだよ」

「はあ……あの人は相変わらず仕事以外はどこか抜けておるな。だが、ならば今日連れてくればよかつたではないか？」

「あいにく今日あいつは用事があつたんだよ。アリシア達がいなくてことで急遽T＆Hからイベントデュエルに参加してくれて頼まれたんだとさ」

俺のした説明に一瞬ディアーチェは納得しかけたが、すぐさま怪訝そうな顔を作る。

「ちよつと待て……私の記憶が正しければ、あやつはデュエルの経験はなかつたはずだが？」

「そうだな。初めてデュエルをしたのは数日前だ」

「……なのにイベントデュエルに出ておるのか？」

「ああ……」

ディアーチェは全て理解したらしく、ユウキのゲームに関する才能の高さに感心するどころか呆れているようで顔を手で覆っている。シユテル達も彼女のことを知っているだけに理解できたようで、首を傾げているのは小学生組だけだ。

「えつと……デュエル初めて数日でイベントデュエルに参加できる子っているの？」

「さあ？ 初心者を対象にしたものならできそうだけど」

「私はそういうのは聞いてないけど……お姉ちゃんは？」

「わたしも聞いてないよ。でも……何か超凄い新人が現れたって話は聞いたかな」

「じゃあその人はシヨウさんの従妹ってこと？」

全ての疑問は解決できていないようだが、まあ俺がコーチを出来ない理由は理解してくれただろう。これであればフローリアン姉妹にコーチをしてくれるように話を進めれば万事解決……

「ああ、言い忘れていたけどユウキくんは2学期からシヨウくん達と同じ学校に通うぞうだよ。彼女のご両親がこっちに来るのはまだ先らしいけどね」

「え……それってつまり」

「親御さんが来るまではシヨウくんの家で厄介になるってことかしら？」

「そうなるね」

そうなるね……って、グランツ博士笑い事じゃないんですけど。あなたは悪気はないんでしょうけど、何でこのタイミングで言っちゃうんですか。また俺に周囲の視線が……

「あれ？ ……僕、何か不味いこと言っちゃったかな？」

「不味いことは言っていないですよ……言うタイミングが不味かっただけで」

「あはは……すまない、シヨウくん頑張って」

「こんなことで頑張りたくないです」

第22話 「従妹は思春期」

小学生達のチーム《T&Hエレメンツ》の歓迎会は色々騒がしくなる場面もあったものの無事に終了し、アミタとキリエがコーチとして彼女達を鍛えることになった。

あの子達の成長の速さを考えると、おそらく今度デュエルを行うときは記憶にあるものよりも数段上の実力になっているに違いない。

「……まあ」

成長の速さだけでいえば、すぐそばにあの子達以上に速い人間がいるのだが。その人物の名前は、東雲悠樹。俺の従妹である。

ユウキはブレイブデュエルを始めてからまだ日も浅いのだが、歓迎会の日に行われたホビーショップT&Hのイベントデュエルでも大活躍したらしく、凄まじい勢いでデュエリストの間で知名度が上がっているらしい。

今日俺はユウキを新たなデュエルの舞台《八神堂》に連れて行くこうとしている。故に彼女の知名度の広がりには更なる加速が掛かることだろう。

そうなる……必然的に血の繋がりのある俺にも注目が浴びせられるんだろうな。まあ全国ランカーに知り合いが多いし、イベントの手伝いやらもしてるから今更目立た

ないようにしても無意味なんだろうけど。というか、多分目立たないようにデュエルしてたら一向に成長しないよな。

ユウキに勝つために……更なる高みを目指すために小学生達のコーチの話を断つたのだ。真剣にデュエルの腕前を磨かなければ彼女達にも悪いだろう。もしも不真面目なデュエルをしているのをシュテルあたりにでも見られたら……。

「確か八神堂つてベルカスタイルのオーナー店なんだよね。T&Hとは違ったデュエリストが多そうだし、ほんと楽しみ……シヨウ、どうかした？」

「え？ ああ、いや別にどうもしてないけど」

「ほんとに？ 何か元気ないように見えるよ」

「それは……」

本当の理由は別にあるがそれを正直に口にするのは良くないだろう。

また勉強のことやら家事のことを理由にするのもダメだ。その手の話をすれば、きつとユウキが我が侷を言つてごめんね、のような発言をするに違いない。

今のユウキは大丈夫そうに見えるが、前は病弱でよく寝込んだりしていた。そのときは俺も小さかったので本格的な看病をしていたわけではないが、見舞いに行つたときは毎度のように「ごめん」や「ありがとう」という言葉を申し訳なさそうな顔で言われたものだ。

血の繋がりがあからなのか、知り合いのそういう顔は見たくないと思うのか……ユウキの元気のない顔は見たいとは思わない。多少機嫌が悪くなる可能性もあるが、ここはそれらしいことで誤魔化そう。

「これだけ気温が高いと元気もなくなるだろ。ユウキみたいに八神堂に初めて行くわけでもないからテンションも上がらないし」

「む……何かその言い方は僕を子供扱いしてる気がする」

「別にしてるつもりはないさ……まあ俺とお前じゃ俺のほうが落ち着いてるとは言われるだろうけど」

言い終わってから視線を向けてみると、ユウキの顔がやや不機嫌そうな目でこちらを睨んでいた。遠回しに彼女の方が子供だと言ったようなもので無理もない。

やってしまった……後半は言わなければよかった。

そのように後悔が芽生えもしたが、今更取り消すこともできない。変に誤魔化そうとすればさらにユウキの機嫌を損ねる可能性もある。ここは彼女の反応を見てどうにか対応するしかないだろう。

「……確かにシヨウの方が落ち着いてるけどさ、僕だつて落ち着いてきてるし。というか、大体シヨウが口数が少なくて会話が続かないから僕がその分話すようになったんじゃない」

「あんまり拗ねるなよ。てか、そっちだつて人の過去をどうこう言ってるじゃないか。言つとくけど、前は目的も理由もないのに会話する必要性をあまり感じてなかったただだ」

「うわあ……子供らしくない。まあ確かに小さい頃のシヨウはそんな感じだったけど……正直近づきにくいというか、一緒に居ると緊張したし」

ユウキがそのように言うのも仕方がないだろう。俺の父さんや叔母は一般人からすればかなり優れた頭脳の持ち主である。つまり俺にも具体的な割合は分からないがその遺伝子があるわけで、物心つくのも早ければ同年代よりも勉強というか物覚えも良かった。

それだけに同年代と遊ぶよりも大人から知識を教えてもらう方が楽しいと思つていた時期がある。いや、もつと簡潔にあの頃の自分を表現するならば冷めてしまったというか、心が錆び付いていたというべきかもしれない。

けれどシユテルやレヴィ、ディアーチエ達に出会うことで変わることが出来た。彼女達は俺よりも優れた頭脳も持つているが、とても輝いた目をしていたので。それが俺には眩しく見えた。それだけに……近づきたい気持ちと近づきたくない気持ちを抱いたものだ。

——まあディアーチエに貴様も我らと共に遊ぶがいいみたいと言われ、レヴィに抱き

つかれながら遊ぼうとせがまれ、シユテルから静かに諦めて遊ぶべきだと諭され選択肢はひとつしかなかったんだけど。

「けど……シユテル達と会った頃からかな。少しずつだけシヨウは変わって行ったよね。優しくなったというか……いや優しいところはあつたけど、分かりにくかったのか。感情があまりにも表に出てなかつたし」

「……何か話がずれてないか？」

「おっと……。うーん、そうだなあ……。じゃあ、子供らしくなつたつてことで」

「それはさっきの仕返しか？」

「さあ、それはどうだろうね」

ユウキは笑顔を浮かべてくると、少し先を歩き始める。

そのような逃げ方をするようになったあたり、ユウキも確実に年齢を重ねているという事か。シユテル達があまり使わない手段ということを考えてると、彼女の方が大人っぽいとも思えなくもない。

……というか、今でさえ厄介なあのメンツがユウキのような笑って誤魔化すなんて芸当——もとい逃げ方を覚えられると非常に面倒になるな。今でさえかなり面倒なときがあるし。

「あつ……。そういえば、こっちに来てからまだシユテル達に会ってないや」

「そういやそうだな。ま、近いうちに連れて行ってやるよ……俺は送り届けたら別のところに行くかもしれないけど」

「もう、何でそういう余計なことをつけるかな。……まあショウらしいけどさ。みんな元気にしてる？」

「ああ」

「そっか……あ、あのさ」

ユウキの顔がこれまでと打って変わってこちらの顔色を窺うようなものになる。指先をもじもじさせているあたり、俺はこれからなかなかいいことを聞かれるのだろうか。

「何だよ？」

「えっと、その……シヨウはちゃんとみんなと仲良く出来てる？」

「……は？」

ユウキはどういう意味で聞いているのだろうか。

まず最初に考えられるのは、単純に学校生活や私生活を含めて親しくできているかということだが……こちらに来る前に大きなケンカをしたなんてこともないのに聞くのだろうか。……俺の性格を考えると否定できない部分はあるか。

他の可能性としては、ユウキの年代的にシユテル達の誰かしらとこれまでと違った関

係になった。のようなものが考えられる。しかし、唐突にそのような話題を振ってくるだろうか。好きな異性のタイプ、といった話題でしゃべっていたわけでもないし。

「うーん……まあそれなりに」

「それなりって……どれくらいなのさ。例えを出してよ」

「例えって言われてもな……最近はブレイブデュエルに關することばかりだし、あいつらよりブレイブデュエルを始めたばかりの小学生達と一緒に居ることが多かったからな」

「なるほど……ねえシヨウ、シヨウってやつぱり」

「ロリコンじゃねえよ」

何で小学生って単語を使っただけでそうなるんだ。俺が大人——いや高校生くらいの年齢ならそのように思われても仕方がないかもしれない。だが俺はまだ中学生であり、あの子達との歳の差は数年だ。世の中に数歳差の恋人は数多く居るだろうし、ロリコンだと言われるのは許容できるものではない。

「じゃ、じゃあさ……そのシユテル達とはどうなの？」

「どうなのって……どういう意味だよ？」

「それはその……ほら、例えば僕らも少しは大人になったわけだしさ。昔みたいに何をするのもみんな一緒みたいな感じじゃなくなってきたもおかしくないわけで……」

「要するにシユテル達とふたりだけで出かけたりにしてののかって言いたいのか？」
「う、うん……そうなるかな」

ずいぶんと顔を赤くしているが、まあユウキも思春期の女の子だ。俺は従兄とはいえ彼女にとっては身近な異性のひとりであり、また俺の近くには昔から異性の友人が居たのだ。恋愛に関することが気になってしまふのは分からなくもない。修学旅行の夜や女子だけで集まって話してくれとも思う話題ではあるが。

「まあ下手に隠して誤解されるのも困るしな。……とはいえ、今もあまり昔と変わらな
いといえは変わらないと思うぞ。大体あいつらは一緒に行動してるし……ただ」
「ただ？」

「ディアーチェとは買い出しの手伝いとかでふたりになったりすることはある。レヴィ
とは……ディアーチェ達に予定があるときは一緒に遊んでくれて言われたりするな」

「シユテルは？」
「シユテルは……」

今はこれといって問題ないがつい最近まで疎遠になっていたというか、すれ違いみた
いなのが起きてたから他のふたりと比べると何も無いんだよな。

まあそのへんはすでに解消してるし、静かに本を読める場所がないかって聞かれたか
ら今度翠屋でも紹介しようかなとは思ってるけど。こつちに戻ってきてからあまり桃

子さん達とも顔を合わせてないし。ちなみに翠屋というのは高町の両親が経営している喫茶店のことだ。

「今度暇があれば出かけるかもしれないな」

「そそそれってデート?!」

「そんなんじゃない」

とは言ったものの、男女がふたりで出かける程度の意味合いで言えばデートと呼ぶこともあるかもしれない。

しかし、組み合わせは俺とシユテルだ。互いに口数は多い方ではないし、はやてやレヴィのようにすぐ誰かに引っ付くタイプでもない。一緒に歩いてきたからといってデートと思う人間はそういないのではないだろうか。

そもそも……俺はあいつのことを異性として認識しているが、昔から付き合いがあるだけに普通に会話する分には何の緊張もしない。お茶目な部分もありはするが、基本的に言葉だけなのでよほどの身体的接触がなければ顔を赤らめたりすることもないだろう。

というか、シユテルは俺のことを異性として見ているのだろうか。最低限はしてそうではあるが、デИАーチエなどと比べると本当に最低限のような気がする。感情が表に出にくい奴なので実際はどうなのか分かりはしないのだが……だからといって直接聞

くのも悪手に思える。

そんなことをすれば、俺がシユテルに気があるように思われるかもしれないし、そうならなくても高い確率でからかわれるだろう。彼女の性格的に事あるごとにやってきそうなので面倒なことこの上ない。

「ああもう……普段の振る舞いから見ればディアーチエとかの方が積極的に思えるけど、ディアーチエは奥手というか乙女だし。レヴィは好きの違いか分かってなさそうだからしばらくは問題ないとして……やつぱりシユテルは油断できないや」

「ユウキ、何をブツブツ言ってるんだ？」

「な、何でもないよ!? シユテルとのデートで失敗でもしたら色々と心に刺さるようなことを言われるんだろうなって思ってただけで。うん、本当に他意はないから!」

慌てるのもあれだが……他意なんて言葉が出ると他意があるように思えてならないのだが。

とはいえ、俺自身考え事をしていた意識を割いていたし、周囲から聞こえてくる音でユウキの独り言を聞いたわけではない。

証拠もないのに問い詰めるのもあれだし、ユウキは割と拗ねやすかったりする。それにユウキが何を言っていたのか気になるかといえば、そこまで気になるわけでもない。ここは流しておいたほうが何事もないだろう。

「そんなことより早く八神堂に行こうよ。T & Hとは違ったデュエリスト達がたくさん居るだろうし、せつかく自由な時間が多い生活を送ってるからね。思いつきデュエルを楽しみたいよ」

「そうか、なら八神堂に着いたら別行動だな」

「何でそうなるの!? 僕は今日が初めてなんだから一緒に居てよ!」

「いや俺もデュエルしたいし、お前を置いて別のところに行くつもりはないから安心しろよ」

本当はこっさりといなくなるつもりなんじゃないのか、とも思っているのか、ユウキの目は俺に対する疑いを持ったままだ。また唇が若干尖っているところを見るに何かしら文句があるのかもしれない。例えば……「ショウって何でそういう言い回しばかりするかな。そんなんだから友達が増えないんだよ」とか。

「何か言いたいことでもあるのか?」

「別に……ただ置いて行ったりしたら怒るからね」

「しないって言ってるだろ。急な用事が出来た場合は別だが」

「そういうときも一言声を掛けてからにしてよ」

「はいはい」

第23話 「従妹VS小狸」

「えつと……八神堂つてベルカスタイルのオーナー店のはずだよな？」

「ああ」

「そ、そうだよな……あのさシヨウ、僕の目がおかしくないならどう見てもここは本屋だ
と思うんだ」

ユウキの言葉は最もである。

何故ならユウキの中の八神堂はベルカスタイルのオーナー店ではないのだから。
事前にブレイブデュエルだけでなく普通に本屋も経営しているとも伝えていなかった
し。

このようなことを言うと、俺のことを意地悪な人間だとか言う人物が居るかもしれない
いが、別に意図的に教えなかったわけではない。俺は別にこの店長やシユテルのよう
に人のことを積極的にかからかう趣味はないのだから。単純に聞かれなかったから現状
に至っているだけだ。

「その認識で合ってるぞ。ここは表向きは本屋をやってる店だからな」

「ああそういうこと」

「うん、そうなんよ」

不意に聞こえた第三者の声にユウキの肩が震える。

どうして俺の知っている茶目っ気のある人物は、こうも気配を感じさせないというか突然現れるのだろうか。神出鬼没のスキルでも習得しているのか？

と思う一方で、これまでに培ってきた……味わってきた経験からか、大抵のことでは動じない人間になってしまっている。いや、それどころか日に日に気配を感じ取れるようになってきている気さえする。

「だ、誰?! ……デイ、デИАーチエ?!」

……あ、そういやこの街にはデИАーチエ達にそっくりな人間が居るって言うの伝えてなかった。まあいいか、昔からデИАーチエ達とは付き合いがあるわけだからすぐに慣れるだろうし。

「あはは、驚かしてごめんなあ。私は八神はやて、ここの店長や。よく似てるとは言われるけど、王さまとは別人なんよ」

「は、はあ……似すぎてて怖いくらいなんだけど、世の中には自分とそっくりな人が3人は居るって聞くし。ということは、僕にもそっくりな人間が……って、こんなこと考えてる場合じゃない。僕は東雲悠樹、よろしく……そういえば店長って聞こえたんだけど、それって僕の聞き間違いかな？」

同年代よりも下に見られることがあるユウキだが、はやては確実にそのユウキよりも幼い。たぬきフードの服を着ていても違和感がないどころか、むしろかわいらしく見えるくらいに。

それだけにユウキが店長という言葉に疑問を抱くのも無理はないだろう。この店にはアインスやシグナム、シャマルと大人組はそれなりに居るのだ。まだユウキは彼女達を見たことがないだろうが、はやてと一緒に誰かしら現れていたならそちらを店長だと思つたに違いない。

「ううん、聞き間違いやないよ」

「そ、そっか……」

「あ、その顔は信じてくれないみたいやね」

「えっと……子供の僕が言うのもあれだけど……はやてちゃんだったっけ？ 君は僕以上に子供に見えるし、信じろって方が難しいと思うんだけど」

「ユウキ、その考えは最もだが……こう見えてこいつはすでに大学を出てる。店長らしいかと言われたら店長らしくはないが、この店の人間はこいつを店長だと認めてるから店長という事実は覆せないぞ」

俺の言葉にユウキは驚き「う、嘘……もう大学出てるの」などと呟き始めるが、まあ世の中に天才というものは存在しているし、俺やユウキの血筋は頭脳明晰な人間が多

い。また彼女はシユテル達とも交流があるので、すぐにはやてが店長ということを認めることだろう。

「それにしても……なあシヨウくん、シヨウくんが好きなたに意地悪をしたがるんは知つとるよ。でもな、もう少し優しくしてくれても罰は当たらんと思うんや」

「あのなはやて、さも当たり前のように言つたが俺は別に好きな子に意地悪をする趣味はないぞ」

「さつきもうちのお店は表向きは本屋とか裏がありそうなこと言うとなつたし」

「人の話を聞け」

何故か得意気で話すはやてに俺はでこピンを敢行した。大して力を入れてないのだが、彼女は両手ででこを押さえる。

「もう、そういうところが意地悪やつて言うんや。私を店長やのうて普通の女の子として扱つてくれるんなら、年上として甘やかしてくれてもええと思うぞ」

「基本的に店長として扱つてはないが、普通の女の子としても扱つてはない」
「ちよつ、それは何でもひどいで!?!」

ガーン! という音が聞こえてきそうなほど盛大にショックを受けた顔を浮かべたはやては、ヘナヘナとその場に座り込む。店の外で座るのはどうかと思うが、チラチラとこちらの様子を窺うというか構つてアピールをしてくるだけに実に無視したい気持

ちになってくる。

……しかし、この状況を他のメンツに見られると面倒な事になりかねない。

ヴィータやシャマルははやてが構ってほしいだけだと思ってくれるだろうし、シグナムもやれやれと言いたげな顔を浮かべるくらいだろう。

問題なのはアインスだ。基本的に大人しい人物ではあるが、はやての事になると豹変するし……ここはさっさと立たせるべきか。

「はあ……外で座り込むな、服が汚れるだろ」

「キユン……もうそうやって不意に優しくするのは反則や。何度私の心を奪えば気が済むんよ、まったくシヨウくんはアメとムチの使い分けが上手いなあ。まあそういうところも含めて好きなんやけど」

「クネクネしてないでさっさと立て」

「ブーブー、女の子が好きやって言っとるんやから恥ずかしくてもええやん」

「キユン、なんて口で言うような奴の言葉で恥ずかしくなるわけないだろ。そもそも、お前は俺に対して冗談を言い過ぎだ」

俺の言葉に納得するかのようにはやてはこちらの手を取って立ち上がる。

まったく……本当にこいつは世話が焼けるよな。大卒という経歴を考えれば、思考とかは俺よりも大人びていてもおかしくないのに。……まあ真面目というか常に気を

張って遠慮ばかりするようなはやてなんて考えたくもないけど。俺にとっては今日の前に居るはやてがはやてだし。

「ん？ どうしたんそんなに見つめて……もしかして」

「それはない」

「まだ何も言うてないやん?!」

いや、言わなくても何となく理解できるし。

つい数秒前に今のままでいいなんて考えたけど、やっぱりもう少しまともになってくれたほうが嬉しいかもしれない。

「やれやれ、鈍感なのもダメやけど鋭すぎるのもダメやと思うで」

「はいはい、分かったからいい加減店の中に入れてくれ。今日はデュエルしに来たんだから」

「むう……そう言われたら店主として話を進めなあかんやん。本当シヨウくんはずるいなあ……まあシヨウくんがデュエルしてくれたら盛り上がるやろうし、カッコいい姿を見るから嬉しいことの方が多いんやけど」

そう言っってはやては笑顔を浮かべながらいつものように俺の腕に自分の腕を絡めると、店の方へと歩き始めた。

これまでに何度か注意したもののこれといって効果がなかったことに加え、人間とい

うものは慣れる生き物だ。なので彼女に対する言葉は特に浮かんでこない。ディアーチェが居たならば、つい先日も怒られたので何かしら行動を取っていた気がするが。

「……つて、ちよつと待って！」

「急に大声出してどないしたん？」

「どうしたもこうしたもないよ。何でふたりは腕を組んで歩いてるのさー！」

「え、そんなん私がショウウくとそういう仲やからや」

ディアーチェに対して言うときの冗談だと分かる笑顔とは打って変わって、今のはやてはさも当たり前のことを言っているような顔をしている。

状況から推測するに……グランツ研究所の誰かしらからユウキの存在を聞いてたな。そうでなければ、俺がユウキと一緒に店に来た時点でこの前のアリスアのようなことになっていても不思議ではないし。それにここに至るまでの言動でユウキが意外と良い反応をしそうなのは見抜いてそうだから。

「いやいやいや、確かにショウウは昔から自分よりも『年下』のディアーチェ達と接してたけどー！」

「別に年下を強調する必要はないんじゃないか？」

「最近は小学生達と仲良くしてたって聞いたし、年上の友達なんてアミタ達しかいないんじゃないかって思ったりもするけどさー！」

「おいユウキ、人の話を聞いてるか？」

「でも、だからって小学生くらいの子とそういう関係になるような人間になったなんて思いたくないよ。従兄がロリコンだなんて……叔母さん達になんて報告すればいいのさー！」

「ユウキさん……とりあえず落ち着いてもらっていいかな？」

別にはやてとお前が思ってるような関係になつてないし、俺の親にも報告しなくていいから。

というか、そういう言葉が出るつてことは何かしら言われて来てたのか？ まあ可能性はあつてもおかしくないけど、俺の両親は基本的に俺が選んだ相手なら誰でも良いみたいだなスタンスだった気がするんだが。

いや待てよ……それは俺の近くにはディアーチェといった母さん達もよく知る女の子しかいなかったからだろうか。ディアーチェ達を除けば、母さん達が知っていたのは高町やテストタロツサ姉妹くらいになるだろうし。

もし仮にそのへんと裏工作があつたとして……高町の母親である桃子さんとは仲良くやっていけると思うが、テストタロツサ姉妹の母親……プレシアさんにはそもそも娘さんを僕にくださいなんて言える気がしないな。

「シヨウ、実際のところどうなのさー！」

「どうもこうもはやてとは何もねえよ」

「その言い方は何か癪やけど今はまだ友達やからな。腕くんだりするのも本気でやつてるわけやないし」

「はやてちゃんは女の子なんだから本気でもないのにああいうことしちやダメだよ！

男っていうのはすぐ勘違いしたりするし、簡単に密着したりするのは……その、違うと思っ！」

かつてここまではやてに必死に常識を説いた人間が居ただろうか？

……おそらくディアーチエくらいだろうな。最近は何度もやってきたり、アインストかのガードが入ったりするから漫才的な流れで終息してしまうけど。

「そこまで言うんなら……会ったら日に最低でも3回は引っ付くという目標を2回に減らす。これでええやろ？」

「うん……って、全然良くないよ!? そもそも引っ付くのもやめよう、というかそんな心掛け別にいらなから！」

「えー、ユウキちゃんはいけずやなあ。私とシヨウくんなりのスキンシップなのに」

「シヨウは多分望んでないから、ある程度好きにさせてから言った方が効果的だとか、単純に慣れて何も言おうとしてないだけだから。というか、はやてちゃんは大学出てるんだよね？ この店の店長さんなんだよね？ 店長さんがそんなに良いと思うの？」

大声を出し過ぎて疲れたのか、常識的な問いかけで説得する方向性に変えたようだ。おそらくだが、俺の予想でははやての回答は斜め上に行く気がしてならない。

「そんなんでええかつて？ そんなんええと思つとるよ！」

「そうだよね……えええッ!? 何でそうなるのさ！」

「ええかユウキちゃん、シヨウくんは凄腕のデュエリストなんやで。凄腕のデュエリストが通つてくれる店なら活気も出てくるやろうし、うちのお店のチームの強化にも繋がれる。そして何より、本屋の仕事にブレイブデュエル、家事全般出来るお婿さんもゲットできるんや！ 現状から想定できる人生設計で最高のプランやないか！」

前半や本屋の仕事とかに関しては店長としての立場からの発言だと思えるが、お婿さん云々は少なくとも当人が居る前と言うものではないだろう……

「つてユウキ、お前は何を説得されそうになつてるんだ。俺の意志を全く度外視した話に納得しようとするな。それとはやて、お前これ以上は何も言うな。これ以上やると俺の従妹がもたないから」

「しゃーないな、まあ十分に楽しめたからええとしよか。じゃあふたり共、そろそろお店の中に入るか。今日はたくさんデュエルして楽しんでいってな♪」

「……僕、すでに結構疲労困憊なんだけど」

「ユウキ……そんなんだとこの街じゃやっていけないぞ」

「——っ、もう！　こんなときくらい現実突きつけないで優しい言葉を掛けてよね！」

第24話 「漆黒の剣士VS白刃の騎士」

はやてに連れられて俺とユウキは八神堂の地下にあるデュエル会場へと移動した。そこに至るまでにユウキが八神堂の仕様に驚いたり、嘔然したりする場面があったのだが想像はたやすいだろうから説明は割愛しておく。

大分はやてとのやりとりで疲れていたユウキだが、デュエル会場へ到着するとホビーショップT&Hとは違ったデュエリストと戦えるとあつてテンションが上がリ、喜々として人混みの中に姿を消して行った。こういう切り替えがあるから子ども扱いしたくなるのだ。

ちなみにははやてはというと、今日は上で本屋の仕事をするらしいので俺達を送り届けるとさっさと姿を消した。

「……俺がデュエルする時には戻ると言ってたが」

普通はどのタイミングで俺の番が来るかなんて分からないはずだよな。ただあいつはすでに大卒だし、頭の回転も一般人より格段に良い。ジャストタイミングで現れたとしても「まあはやてだし」と納得できる自分が居る。

「……くだらないことを考えてないで俺もデュエルをしよう」

あまりユウキにデュエルしているところを見られたくはないが、俺ばかりユウキのデュエルを見るのもフェアではない。彼女は驚異的な勢いで成長しているが、経験値的には俺が遥かに勝っているのだから。

そもそも……俺はただユウキに勝ちたいわけじゃない。小細工なしの真つ向勝負で戦って勝利を収めたいんだ。それにあれこれデュエルに関係のないことを考えながらデュエルをやつても楽しくはないし、わずかな油断が敗北に繋がる可能性もある。今はただデュエルのことに集中しよう。

「……………つと」

人につつからないように進んでいたのだが、不意に人影の奥からさらに人が現れた。ただその人物がその場に止まり、こちらが方向を変えながら移動したこともあつて衝突はなかった。互いに避けようとしていればぶつかっていた可能性はあるだけに、ある意味運が良かったと言える。

「すみません」

「いや、こちらこそ……あれ、夜月くんじゃないか」

ぶつかつたわけじゃないので謝罪してすぐに立ち去ろうとしたのだが、名前を呼ばれたので改めて意識を向ける。視界に映つたのは、白いジャケットを着た長身の男性。黒髪で穏やかな雰囲気、のせいか見た目以上に大人びて見えるが、年齢はシグナム達と同じ

くらいのはずだ。

この人……どこかで。

記憶を遡ってみるとすぐに思い浮かぶ人物が出てきた。

その人物の名前は白石涼介。はやて達から耳にした情報や俺の記憶に間違いがなければ、確か何かしらの専門学校に通っている人で、授業時間が短いこともあってよく八神堂の手伝いをしていたはずだ。

「白石さん、でしたよね？」

「うん……俺ははやて達から聞いて知ってたけど、君も俺の名前知ってたんだね」

「まあ俺もはやて達と話しますし、社員でもないのに毎日この手伝いしてる人が居れば気になりますよ」

毎日手伝ってるわけじゃないんだけどな、と白石さんは笑う。

どことなく自分に近いものを感じていたが、どうやらそれは間違いだったらしい。この人は俺と違って口数が少なくても明るいとか穏やかで人当たりの良い人だ。というか、口数も人並みにあるんだろう。はやて達が多いから少ないと思えるだけで。

「それにしても珍しいですね。白石さんがこっちに居るなんて」

「そうでもないんだけどね。俺もそれなりにデュエルはやってるから……まあ頻度的にはアインスやシグナムと変わらないくらいだろうけど。何だかよくここに來る子達か

らは普通に店員だと思われてるみたいだし」

「あれだけ店の手伝いをしていれば誰だってそういう認識になりますよ」

年齢もシグナム達と変わらないだろうし、そのへんと仲良く話してるところを見られてるだろうから。距離感的に店員と客とは思われないうらう。

「聞けばバイト代とかもらつてないそうですけど、あいつらと同じ時間働くなら何か報酬をもらわないとダメだと思いますよ。メンツ的に体力だつて居るんですから」

「ははは、確かに一般的にはそうなんだけど俺が自分からやつてるのもあるからね。特に予定がなければここの手伝いをしている方が有意義な時間を過ごせるし。それにはやての手料理とかご馳走になったり、お客さんが引いた後でデュエルとかさせてもらえるからね。報酬はちゃんともらつてるよ」

そんな報酬で満足だなんて白石さんは人が好過ぎる。偶に手伝うくらいなら十分な報酬なんだろうが、どう考えてもほぼ毎日手伝っている彼には足りてないだろう。はやてあたりもそのへんを考えてバイト代くらい出すと言つていそうな気はするが、おそらくこの人はもらわないんだろうな。

「ところで夜月くん、ひとつ提案なんだけど？」

「何です？」

「ここにこうして会つて話したのも何か縁だと思うんだ。よければ1戦やらないかい

「？」

「それは……断る理由もないですし、もちろん構いませんよ」

今日八神堂に来た目的は誰かの指導をするためでもなければ、本屋の手伝いをしに来たわけでもない。ただ単純にデュエルを行いに来たのだ。

そもそも、デュエリストである以上デュエルに誘われたならば受けるしかあるまい。と思うことはあるが、おそらくイベントといった場でもない限りは口にしないだろう。何かしら予定があれば断るだろうし、どういうデュエリストでありたいかはその人が自分で決めればいいだけなのだから。

「じゃあ決まりだ。いやはや、あの《漆黒の剣士》とやれると思うと楽しみな一方で緊張するね。胸を借りるつもりで挑ませてもらうよ」

「あまり持ち上げられるのはあれですけど、まあご期待に添えるようベストは尽くします」

正直なところ、デュエルである以上100パーセント勝てる保証はない。

ただ経験値やカードの総合的なステータスで言えば、おそらくこちらに分があるだろう。だが……俺の勘になってしまふ部分もあるが、この人はシグナムやアインスに近いタイプのように見える。

どういうタイプかと言うと、簡単に言えばカードのステータス云々の前に本人が強い

タイプだ。ブレイブデュエルは現実と同じように自分の意志でアバターを自由に動かせ、またデバイスは武器になるものが多い。故に現実で武道といったものを行っている人間はその経験が活きやすいのだろう。

それに……少し聞いた話だが、この人はシグナムと剣道を行えて良い勝負をするらしい。デュエルの腕を耳にすることは少ないが、下手という話を聞いたことはない。動きを見切るために様子見は行っても油断はないようにしなければ。

そんなことを考えている間に俺と白石さんの順番が回ってきた。お互い経験者なだけにフィールドやルールの設定はスムーズに進行し、意識を戦闘モードに切り替え終わる頃にはアリーナにデュエルフィールドの形成が終了しアバターとなった自分がそこへ降り立っていた。

「……………」

あれが白石さんの……今回の俺の対戦相手か。

目の前に立っているのは先ほどまで見ていた私服姿の白石さんではない。純白のコートに身を包み、手には鞆に納められた反りのあるデバイスが確認できる。

所属はベルカ、使用しているカードはRクラス……通り名は《白刃の騎士》。ベルカスタイルで手には刀型のデバイス、それに通り名からして近接戦闘がメインだろう。問題なのは近接戦闘の技量がどれほどのものなのか、だ。

俺は射撃魔法も可能なミッドチルダスタイルではあるがメインとなる攻撃は近接攻撃……シグナムとデュエルをした場合、カードのステータス差もあってどうにか打ち負けることはないが、逆に言えばカードのステータスに差がない場合は近接では分が悪いということだ。つまり……現実でシグナムとやり合えるこの人に近接戦闘で油断はできない。

それに八神堂の手伝いをしていれば客がいなくなつてからもデュエルが出来る可能性がある。今日のように客として利用することも考えれば、この人はシグナム以上にデュエルの経験があるかもしれない。となれば……

「最低でも……」

シグナムに匹敵すると考えてデュエルを行うべきだろう。

そう意識しただけに俺の中の緊張感は自然と高まつていく。しかし、その一方で早く剣を交えたいと思っている自分も存在していた。そうでなければ、このどうにも落ち着かない気持ちに説明が付かない。

とはいえ、俺はデュエルに慣れていない新人ではないし、一部の人間は俺がシユテルと同等のデュエリストだと認識している。

勝負事なんだから全戦全勝できるとは思っていない。が、少なくとも自分らしい戦い方で勝ちに行く気持ちを捨てるともりはない。勝つにしても負けるにしても、自分らし

く戦うことが出来れば納得できるのだから。

両手を背中に伸ばし、右手で黒い肉厚の剣を、左手で白い華奢な剣を引き抜く。

「剣を2本……これまでに見たことがないスタイルだけど、おそらくそれが君の本気なんだろうね。俺なんかと本気でやってくれるとは……嬉しいと思う反面、少しは花を持たしてほしいと思ってしまうよ」

「何を言ってるんですか、八神堂の面々とデュエルしてそんな人に手加減なんかできるわけじゃないでしょう。そもそも……今の俺は少し前にもっと強くなろうと決めてこの場に居ますから。相手が誰であろうと戦い方を変えるつもりはありませんよ」

「なら……俺も覚悟を決めるしかないようだね」

穏やかな口調とは裏腹に確かな戦意が白石さんの目には見て取れる。彼は無駄のない動きで鞘に納められているデバイスを引き抜いていく。姿を現した白銀の刀身から確かな武器としての輝きと共に恐怖してしまうほどの美しさも感じられた。

この場に関係のない話になってしまいかもしれないが、日本刀が美術品として扱われるのも今の俺のようにこういう感情を抱く人が居るからかもしれない。

「……………」

俺達は互いに開始地点から動くことはせずに相手の動きを観察する。

——俺も白石さんも剣を使って戦う。つまり得意とする距離はクロスレンジ……こ

こを制した方が勝利を取めると言っていないだろう。

しかし、迂闊に攻めるわけにはいかない。

俺の本来の戦い方は両手の剣を用いて攻撃は最大の防御と云わんばかりに攻めることだ。だが俺は白石さんの力量を把握していないどころか、彼が戦っている姿を見たことがない。

シグナムと同等だろうという予想はあるし、刀を使って戦う騎士だということは見た目から判断できる。が、同じ剣を扱う者でも戦い方は異なる。もしも白石さんがカウンターを得意とする剣士だった場合、下手に攻めれば返り討ちに遭うだけだ。

……かといって、このまま様子見をしているだけではいたずらに時間が過ぎるだけだ。それにリスクばかり考えては何も始まらない。俺はユウキに勝つために……今の自分よりも更なる高みへ行くために2本目の剣を常時使うことを決めたんだ。こういうときこそ……自分から踏み込まなくてどうする！

「……ッ！」

無声の気合を発しながら地面を強く踏み切る。今回のデュエルステージは、これと違って障害物の存在しない荒野のような場所だ。頼れるのは己のデュエリストとしての力量のみ。

爆発的な加速を得た俺は、地面を滑空するかのように白刃の騎士へと接近する。こち

らのスピードが予想よりも速かったのか、それとも真正面から突っ込んでくるとは思っていないかったのか、彼の顔には驚愕の色が見て取れた。

だがシグナムの相手を出来るだけに度胸は据わっているらしく、一瞬の内に余計な感情を消し去ると踏み込みながら白銀の刃を振るってきた。こちらにも負けじと左の剣を振るう。

「っ……いー」「く……いー」

純白の刃と白銀の刃が交わると同時に火花と甲高い音を撒き散らす。

カードのステータスや剣の重量的にはこちらが上だと思われるが、こちらは片手持ちで振るっているのに対しあちらは両手持ち。今の一撃を見ても剣速はあちらに分がある。

そのため、俺達の一撃は互いの攻撃を相殺する形で終わり優劣を付ける展開にはならなかった。つまりここからどう戦うかが大切ということになる。

俺はすぐさま体勢を立て直しながら今度は右の剣を振るう。

だがあちらも体勢をすでに整えていたため、最小限のバックステップで回避するとすぐさま反撃を行ってきた。襲い掛かってくる剣閃を反対側の剣で迎え撃つ。

それを皮切りに互いに足を止めて斬撃を繰り返していく。

手数としては2本の剣を用いているこちらが上だが、あちらの攻撃を受け流す柔の技

と華麗な体捌きで有効打を与えられない。こちらもあちらの素早い斬撃を体重移動や剣の描く軌道から予測しパライヤ回避を行う。

高速の剣劇が開始してからしばらく……俺の持つ黒い剣と白石さんの持つ白銀の刃が交差し競り合う形になった。

「……さすがは《星光の殲滅者》のライバル。一瞬も気が抜けないよ」

「気が抜けないのはこっちも同じです。シグナムとやり合えるのも領けますよ」

「君だつてシグナムとやり合えると思うけどね」

「デュエルでならまだしも現実じゃ無理でしょうけどね」

半ば強引に押しながら左の剣を足を払うような軌道で振り抜く。白石さんは素早く何度かバックステップを行つて距離を取った。すぐにまた突っ込んでくるかとも思ったが、どうやら一旦距離を取つて仕切り直すつもりらしい。

……どうやらあつちも俺と同じ感想のようだな。

正直なところ、あのままクロスレンジを維持しても意味を成さない。連続で攻撃を行つても決め手どころか体勢を崩すことさえできなかったからだ。こちらにはブレイズストライクといった高威力の魔法があるわけだが、あれだけ撃ち合つて優勢に立てないのであれば単発で撃つてもまず当たらないだろう。

となると、まずは体勢を崩すことが必要になってくる。だが純粋な近接戦闘だけでは

先ほどと同じような流れになって体力を消費するだけだ。体力勝負に持ち込むのも手ではあるが、あちらは現実でも体を動かす機会がある。それだけに体力面では俺が劣っているだろう。

「……なら」

これまで以上の攻撃であの人の守りを破るしかない。

俺が今回デッキに入れている魔法は単発重撃技の《ブレイズストライク》に高速4連撃である《バーチカル・フォース》、二刀流突進技である《ドラゴサーキュラー》……それに俺の持つカードの中で最大の手数と威力を誇るあの魔法になる。

愛用している《ブレイズストライク》や剣士系が使うことが多い《バーチカル・フォース》は読まれやすいと考えるべきだろう。二刀流の魔法はこれまで人前で使うことがほぼなかっただけに有効打になりえる可能性は十分にある。無論、使いどころを間違わなければだが……。

——なんてグダグダ考えるのはやめよう。

この勝負に勝ちたいとは思うが、負けられない戦いじゃない。更なる高みに行くための戦いだ。だったら今浮かんでいる方法を実行すればいい。それが使えるかどうかはこの勝負が終わればはつきりするのだから。

そのように思い愛剣達を握り直した直後、白石さんにも変化が現れる。抜刀状態だっ

たデバイスを鞘の中に納め、体を捻りながら構えたのだ。

「……………」

構えからして白石さんの次の一撃は居合系に属するものだろう。もしも魔法を併用した一撃だった場合、これまで以上の鋭い一撃が繰り出されることになる。

だが……構えからして攻撃が来る方向は限られる。それに片手での一撃だ。魔法を併用したものだとしても、多少なりとも勢いを殺すことは可能はず。わずかでも時間が出れば、その瞬間にブレイズストライクを撃ち込むことが出来る。

直後。

白石さんが地面を蹴って接近を始めた。俺も同じように地面を蹴って距離を詰める。

右の剣で相手の攻撃を迎え撃ち、生じるであろうわずかな時間を使って左の剣でブレイズストライクを叩き込む。それが俺のプランだ。

自分の考えを信じ右の剣を振ろうとした矢先、白石さんと視線が重なった。そこから感じられた気迫と直感的に感じた恐怖から俺は自身の体に制止を掛ける。

「——雷切」

静かに呟かれた言葉が耳に届いた瞬間には、すでに白銀の刃が振り抜かれていた。俺の目に映ったのは同色の剣閃のみ。今の一撃の速さを言葉にするならば雷という言葉が相応しいだろう。

超高速の一撃をもらった俺は後方へと吹き飛び何度も地面を転がる。意識が刈り取られてはいなかったのですぐさま体勢を整え、両手の剣を使って制止を掛けつつ立ち上がった。

「はあ……はあ……」

「夜月くん、君は本当に凄いな。シグナムだって初見じゃ俺の雷切は見切れなかったのに」

見切った？ 冗談じゃない。

浅くとはいえ俺の胸部は斬り裂かれダメージを受けたのだ。あのとき一瞬でも視線が合うのが遅ければ今頃深手を負って勝負が着いている可能性もある。

だが現状で最大の問題はそこではない。決め手であろう《雷切》という魔法を直撃できなかつたはずなのに白石さんには焦りが無い。それどころか冷静にこちらを観察している。次こそ《雷切》を直撃させるために。

穏やかな感じに接してくる癖にとんだデュエリストだ。

正直……あの《雷切》とかいう魔法を防ぐ手段はない。今回デツキに防御系の魔法は入っていないし、攻撃速度が違い過ぎるだけに魔法をぶつけて相殺するのも難しい。

全体的な攻撃速度はユウキに通ずる部分があるが……あの一撃に関してはユウキよりも遥かに上だ。フェイトやレヴィといった高速戦闘を得意とするデュエリストとの

対戦経験があるだけに、目で追えないことはない。だが微かに追えているだけだ。見てから動いたのでは間に合わないだろう。さて……どうしたものか。

あれこれ考えている間にも白石さんは再びデバイスを鞘へと納め始めている。彼の中でのプランとしては《雷切》を用いて体勢を崩し、連続攻撃を仕掛けるまたは再度《雷切》を放つといったものだろう。現状の俺には《雷切》を完全に防ぐ方法がないだけに最も堅実で有効な戦法と言えるだろう。

「……なら」

こちらの覚悟は決まったようなものだ。有効な防御や回避手段がないのなら肉を切らせてでも骨を断つだけ。

幸いこちらには両手に剣がある。一本腕を断ち切られようともう片方で攻撃は出来るのだ。勝つために必要なリスクならばいくらでも負ってやる。

俺は左右の手に握った黒と白の長剣をクルクルと回転させ、ジャリイーン！ と音を立てながら切り払う。

「……次で終わらせる」

この交錯が終わりを迎えた時、立っているのはただひとりだ。

俺は右足を大きく踏み出すと、突進技である《ドラゴサーキュラー》を発動させる。黒と白の刀身に魔力が集まり、爆ぜて紅蓮の炎へと姿を変える。それと同時に俺の体は、

まるで砲撃で撃ち出されたかのような加速を得て前方へと飛翔した。

今回のデュエルで最速の突進に白石さんの顔に緊張が走るが、雷に等しい速さの一撃を持つ人だけあってこちらの動きは見えているようだ。冷静に《雷切》の発射体勢に入る。

——あの技が発射されてからは少しでも威力を削ぐための行動しかできない。だが居合である以上、鞘に近い段階で止めれば止めるほど威力は収まるはずだ。

俺は体をくるりと回転させながら右手の黒い剣を下から猛然と斬り上げる。その際、刀身に発生していた炎が螺旋を描き出す。

「う……おおッ！」

「はああああッ！」

紅蓮と雷光の一撃は交差し、視界はスパークで覆いつくす。だが右手から伝わってくる凄まじい圧力が敵の存在を確かに教えてくれるだけに気持ちに余裕はない。

——……不味い、この感覚からして剣の競り合いが崩れる。

撃ち込む角度が浅かったか、それとも敵の凄まじい一撃に軌道をずらされてしまったのか。何にせよこのままでは俺の剣は支えを失って宙を翔け、雷と化している白刃が俺を斬り裂くだろう。

だが……そんな未来は訪れはしない。俺の放った《ドラゴサーキュラー》という魔法

は、右手の黒い剣にごくわずか遅れる形で左手の白い剣を描かれた軌道にクロスさせる形で振り抜く2連撃技だ。右手の黒い剣が外れたとしても左手の白い剣で迎え撃てる。

余談になってしまいが、高速の突進と螺旋を描く炎にそれを纏った2連撃。これらの一連の流れが、敵からは火竜の吐息のように見えることからこの魔法は竜の名を関しているのかもしれない。

「らあ……ッー！」

燃え盛る炎を纏った2撃目が雷刃を弾き飛ばし、敵の体勢を崩した。このチャンスに逃げれば、俺はこのデュエル最大の勝機を失うことになるだろう。

体勢を完全に立て直せたわけではなかったが、半ば強引に高速4連撃である《バーチカル・フォース》を敢行。それによって与えられたダメージは普段に比べれば劣ってしまいが、この魔法は云わば本命の繋ぎだ。《バーチカル・フォース》を繰り出した場合、繰り出したのと反対側の腕は最終的に折りたたんだ状態で肩に引き付けられる。ここから少し身体を捻ることで、あの技の構えに等しくなる。

「これで……最後だ！」

純白の刀身を真紅の炎が包み、技術と魔法で腕を加速させて撃ち出す。それと同時に爆音が鳴り響き、撃ち出された真紅の一撃は白刃の騎士の体を深々と貫いた。俺がこのデュエルで最後に見た顔は、悔いのなさそうな顔で笑っている穏やかな笑顔だった。

外伝 第2話 「真夏の公園で」

……話は聞いていたけど、本当にやってるんだな。

俺は今公園の前に居るわけだが、スポーツチャンバラ用とでも呼べそうな棒を持って戦っている集団が確認できる。集団の内容としては、学校指定であろう体操服を着ている小学生が2人とランニングにジャージという動きやすい恰好をしている大人が1人だ。

小学生の方は……ひとりはこの前からちよくちよく店に来るようになったアリサちゃんだろう。もうひとりの方は確か……T&Hのところの子だったかな。

あそこの姉妹は背の小さい方がお姉さんでアリシアって名前だったはずだ。今アリサちゃんと居る子はさほど背丈が変わらないように見えるので妹であるフェイトちゃんになるのだろう。フェイトちゃんの棒だけ長いのはブレイブデュエルにおいて使うデバイスが剣型ではないからと思われる。

そのふたりと相對しているのは、八神堂の一員で大学生であるシグナムだ。年齢は俺とさほど変わらないが、剣道場で師範を務めるほどの腕前を持っている。普段は一刀流のはずだが、今日は小学生達をひとりで相手をしているからか両手に棒を持っている。

「さあ……機を見てばかりだと逆に相手にチャンスを与えるぞ?」

シグナムの言葉に小学生達はアイコンタクトで作戦を決めたらしく、まずアリサちゃんも踏み込んで行く。なかなか鋭い踏み込みではあるが、シグナムは余裕で彼女の攻撃を受け流す。

その間にフェイトちゃんがシグナムの後ろに回り込み、体勢を立て直したアリサちゃんと同時に攻撃を仕掛けようとする。しかし、シグナムの表情に緊張や焦りの色は全くといっていいほどない。

「タイピングは良いが……攻める気が逸るところなる!」

シグナムが両手の棒を振り抜くと同時にスパアン! と実に良い音が小学生達のお尻から鳴り響いた。あれだけ良い音がしたのだから、少なくともしばらくはヒリヒリとした痛みを感じるに違いない。

大人が子供相手に本気で打ち込むな、と言いたくもなるが……おそらく加減はしているのだろう。

体育会系だから普通よりも力が強いだけできつと加減はしているはず。小学生達が良い動きをするから熱くなって本気でやってしまったということはないはずだ……多分。

いったん区切りが着いたらしく、3人は日陰にあるイスへと移動する。小学生達はお

尻を時折擦っているが、ブレイブデュエルだけでは体が覚ええないということで彼女達からシグナムをお願いしたらしいので負の感情は抱いていないように思える。

「ん？ おおリヨウじゃねえか。お前も見に来たのか？」

「外に出たついでにな……この暑い中でシグナムとチャンバラしてるって聞いたら心配にもなるし」

「ああ……まあそうだよな。シグナムって大人のくせに熱くなりやすいところがあるし」

ヴィータもまだ小学生ではあるが、シグナムと一緒に暮らしているだけあって彼女のことはよく分かっている。

ただまあ……ヴィータはヴィータでシグナムがヴィータのことを自分で思っている以上に好きと思っているのに気づいていないだろうけど。

シグナムが普段ヴィータに対してあれこれと口うるさく言うのはヴィータのことが好きだからだ。前にヴィータがシグナムに対してもう少し家に居てもいいと思うと言った時に、シグナムは笑いながらヴィータの頭を撫でたらしいので間違いないだろう。そういうときくらい恥ずかしがらずにシグナムも自分の気持ちを言えればいいだろうに。

「何だよ？ あたしとシグナムを見ながらため息吐きやがって。シグナムはともかく、

あたしはそこまで熱くなったりしねえだろ」

「そういうことでため息を吐いたわけじゃないけど……デュエルに関してはシグナムより君の方が熱くなってると思うよ」

「う、うっせえ！ ショッププレイヤーとして強くないといけないんだから熱くなるのは当然のことだろ！」

口は悪いが小学生なのに店のことを考えているのは偉いと思うし、年が離れていることもあつて微笑ましく思える。なのでヴィータの頭を撫でてしまう俺はおかしくないだろう。ヴィータは恥ずかしいのか「撫でんじゃねえ！」と言ってくるが、手を払おうとしないあたり別に嫌ではないようだ。こういうところもヴィータの可愛らしいところである。

「ふたりとも踏み込みが鋭くなってきたな。どうだ？ 本格的に道場で学んでみては」

「そ、その件は……」

「前向きに検討させていただきます」

「そうか……残念だ」

「なんだ、また振られてんのかよシグナム」

ヴィータが声を掛けたことで3人の視線がこちらへと向く。先ほど来たばかりの俺に多少なりとも驚いた素振りを見せたのはもちろんだが、それ以上に『俺に頭を撫でら

れているヴィータ』という構図にシグナムはともかく小学生組は驚いたように思える。

「あ、リヨウさんずるい！ ヴィータ〜♪」

「今日のアリサは汗掻いてるからくつつくの禁止！」

「ええ、少しくらいいいじゃない。リヨウさんみたいに頭撫でるだけ、ね？」

「ダメったらダメ……にしてもお前らもよくやるよなあ。ブレイブデュエルだけじゃ体が覚えられねえからって」

その言葉に面倒を見ているシグナムは師匠から公認されているらしいが、荒っぽい特訓をしていることは理解しているらしく、小学生達に変な癖が付かないか心配する。フエイトちゃんは大丈夫と返事をするが、俺はそれ以上に彼女の頭を撫でるシグナムの方が気になってしまった。

「何だ涼介、私の顔に何か付いてるか？」

「いや別に……」

「その言い方からして何かあるだろう。知らない仲じゃないんだ。素直に言ったらどうだ？」

シグナムって見た目の割に子供が好きだよな。面倒見良いよな、と言うのは簡単だ。ただ彼女は八神家の中でも意地悪をする方というか、されるよりもする側の人間だ。

故に下手なことを言ってしまうと、恥ずかしかつてすぐ近くにある棒で叩いてくるか

もしれない。とはいえ、このまま黙ったままというのも機嫌を損ねてしまう……ここは。

「なら言わせてもらうが……もう少し女らしい恰好をしたらどうだ？」

「なっ……うるさい、別にどんな恰好をするのも私の自由だろう。大体今日は体を動かす予定で外に出たのだからこの格好で問題ないはずだ！」

「それはそうだが……お前って今日みたいな予定がなくても普段からジャージばかり着てる気がするんだが？」

ジャージ以外の恰好は買い出しに行くときとか店の手伝いをしてるときくらいにしか見ない気がする。最近は大会が近かったり、防犯訓練の手伝いをしていることもあつたらしいので、比率で言えば確実にジャージ姿の方が多いただろう。

「そんなんだといくらお前が美人でも異性にモテないぞ」

「——っ、お前は何をさらりと齒の浮きそうなセリフを言っているのだ。お前まさか誰にでもそのようなことを言っているのではないだろうな。剣を取れ涼介、お前のその根性私が叩き直してやる！」

「落ち着けシグナム、チャンバラ用だろうとお前に本気で殴られたら最悪失神してもおかしくない。というか、何で今日はそんなに怒るんだ？　こんなやりとり前にも何度かしただろ！」

俺の記憶が正しければ、そのときは涼しい顔をしていたはずなのだが。顔はほぼ毎日合わせているようなものだし、押し倒したりして気まづくなるようなことがあったわけでもない。

「ああーリヨウ、それは多分あれだな。アリサとかにリヨウとあたしらの関係を聞かれてその流れでリヨウのことをどう思ってるかって話になったからだろうぜ」

「おいヴィータ、その話は……!」

「別にいいじゃねえかよ。あたしはあんまし分かんねえけど、シグナムだつてそういう話でアインスのことからかったりしてるみてえだし、リヨウだつて状況が分かんねえだろうしさ」

ああなるほど、俺が来る前にそういうやりとりがあったのならシグナムの反応にも納得が出来る。男勝りというか大抵の男よりも男らしい奴ではあるが、シグナムは正真正銘の女だ。周囲から『乳魔神』と呼ばれることがあるくらい、とても女性らしい体つきもしているし。

ただ恋愛に関する話などはするにしても自分ではなく他人のものに参加するくらいだろうし、俺が知る限りこれまでシグナムは男性と付き合った経験はなかったはずだ。小学生の純粋な興味で質問されたら無下にすることもできないだろうから、きつと追い込まれたに違いない。

「そうか……ちゃんとシグナムにも女らしい一面があったんだな」

「っ、私にも女らしい一面があったというのはどういう意味だ。お前は私を何だと思っているんだ！」

「簡単に言うなら……いつもジャージ着てて割と口うるさい乳魔神とかじゃねえの？」

「ヴィータ、それはお前の中の私だろう。というか、お前は私のことをそんな風に思っていたのか！」

「だって事実じゃん」

さすがにシグナムのことが可哀想になつてきたのでフォローに入ろうかと思つていたのだが、一緒に暮らしているヴィータが事実だと言つてしまつては俺や小学生組ではどうにもできない。これがきっかけでシグナムの機嫌は悪くならなければいいが……。

「え、えつと……シグナムさんは今のままで十分魅力的だと思います。その、将来的にそうなれたらなつて憧れるくらいスタイル良いですし。それに私達のわがままに毎日のように付き合ってくれる優しい人ですし……それから！」

「フェイト、やめなさい！ この状況であんたの必死なフォローはかえつてシグナムさんを苦しめるわ。時として見守ることも大切よ！」

「アリサちゃん……正しいことだとは思うけど、小学生の君が言うには早いと思つてしまふのは俺だけだろうか。普通その年で優しさが時として人を傷つけるみたいな発言

はしないと思うんだけど。今どきの小学生は俺の頃とは違うんだな……。

などと考えていたらアリサちゃんの奮闘もあつてか、どうにか事態は終息へ向かい始めていた。

アリサちゃんはいつもこんな風に頑張っているのかと思うと、彼女こそ大人組は甘やかすべきなのではないと考えてしまう。冷静に思い返すとシグナムがおかしくなった発端は彼女にあるので、彼女は彼女なりに責任を感じて奮闘しただけのようにも思えてしまうのだが。

「ふう………どうにか落ち着いたわね。……八神堂の大人の恋愛に興味の示すのは危険だわ」

「あはは………そういうことを言われると落ち着かせてくれたことへのお礼を言いづらくなるね。というか、恋愛に興味があるのは分かるけど……アリサちゃんからすれば俺達よりも夜月くんとかの方が興味をそそられるんじゃないの？」

「否定はできませんけど、シヨウさんつてこの手の話題になつても上手くかわすというか大して反応しないじゃないですか。それにあの人の周囲に居る人つて……あれですし」

あれ、という言葉が何を言おうとしているかはアリサちゃんの何とも言いにくい顔から察しは付いた。

確かに冷静に考えてみると、夜月くんによくちよつかいを出すというか気を引こうとする子ってアリシアちゃんとかはやてとかなんだよな。俺はあまり話したことがないけど、聞く話によればグランツ研究所の面々にも妙な絡まれ方をしているらしい。恋愛って感じの空気にはならないかもしれないな。

「夜月くんの周りには癖のある子も意外と多いからね。まあ……素直に気が引けないからああいうことをしてそうな子も居そうだけだ」

はやてやアリシアちゃんも接し方を変えればもつと違うと思うんだけどな。変に冗談ばかり言ったりしてからかうから冷たくされるんだろうし。……ただああいうやりとりが彼らしいと言えれば彼らしくもあるし、一概に悪いとは言えないだろうけど。

「あ、分かります。他にも自分の気持ちに鈍い子も居たりして……背中を押してあげようと思っても下手に押しとテンパって自滅しそうですし」

そういう子も居るだろうな。それに告白をしたりすれば成功しても失敗しても関係性に変化が起こりえるわけだし。それが告白した側とされた側だけならまだしも、下手をすれば周囲にも及ぶわけで。

まあだからといってそれを恐れて何もできない人物は想い人の隣に立つ可能性は低いんだろうけど。よく一緒に遊んだりして相手の方から告白でもされない限り……。

そういうところで言えば、フェイトちゃんは分が悪そうだ。先ほどから夜月くんの名

前が出るだけでも結構反応しているし、彼に気がありそうなのは何となく分かるが性格的に自分から動けそうな子ではない。

デュエルをしているときのフェイトちゃんは凜として印象があるんだけど……でもそれを考えると一度決心してしまえば突き進むことが出来る子なのかもしれない。正直俺は彼女のことをよく知っているわけじゃないし、ただでさえこの年代の子達は親からあれこれと言われている気がする。相談された場合は乗るべきなのだろうが、積極的に口出しするべきではないだろう。

「ま、周りが下手にとやかく言うのも面倒なことになりかねないし……結局は当人の気持ちの強さ次第じゃないかな」

「ですね。……見ててじれったくなりそうですけど」

「そうかもしれないけど、君だって誰かを好きになつたら友達からそう思われるようになるかもしれないよ。今はまだいないんだろうけど、もしかすると夜月くんに特別な好意を抱く日が来るかもしれない。彼は君とアバターのタイプが同じだろうから聞けることも多いだろうし、何よりあの強さだからね」

「そこでシヨウさんを出されるのはあれですけど、まあ身近な異性で考えれば妥当ですし、可能性としては否定できないですけど……というか、リヨウさんってシヨウさんと戦ったことあるんですか？」

「ああ、ちょうど昨日偶々顔を合わせてね。前々から1戦してみたいと思ってたし、流れてデュエルに誘ったんだ。いやはや、強いデュエリストだとは分かっていたけど二刀流の彼は別格だね」

と言った直後、アリサちゃんだけでなくその場に居た全員が食いつくように距離を詰めてきた。どうやら二刀流という言葉が興味を引いてしまったらしい。

「おいリョウ、二刀流って何だよ？ ショウの新しいカードか？」

「いや多分カードは今までと一緒だと思うけど。二刀流の状態が本気ってだけで」

「ふむ……つまり私やヴィータが相手をしたことがあるのは本気のショウではなかったということか」

「あたしやフェイトは二刀流のショウさんを見たことありますけど、あの時の強さは別格ですからね。あたし達はチームで挑んだのに瞬殺されちゃいましたし」

「涼介さん……あの、よかつたらデュエルの内容をもっと詳しく教えてもらえませんか？」

負けたデュエルではあるが、《漆黒の剣士》の本気を見ることが出来たデュエルなので話すことに嫌気は感じない。なので可能な限り事細かに話すことにした。

夜月くんが悪いかなとも思ったが、あのデュエルは店のモニターに映っていた可能性もあるし、はやてが録画したなんて言っていたような気もする。また彼は二刀流で戦い

続けるのような発言をしていたので、遅かれ早かれ周囲には知られることになるだろう。無駄に罪悪感を感じる必要はないはずだ。

「教えるのは構わないけど……俺も彼と同じで近接戦メインだからね。正直なところ、彼の方が上手だったっていう話にしかないよ」

「ちよつと待てよ、お前はシグナムとやり合えるくらい近接戦の技量は高いじゃねえか。それに雷切だってあるしよ」

「雷切？」

「涼介の愛用する魔法のひとつだ。簡単に言えば、目で追いきれないほどの超高速の斬撃……正直あれを近距離で回避するのは至難の業だ。防ぐにしても基本的に防御系魔法は使うしかないだろう」

シグナムが言うようにこれまで相對してきたデュエリストはそうだった。劍の達人であるシグナムだって初見では見切れなかった。何度も見ている今では雷切を使わせないような立ち回りや相殺できるタイミングを見極めつつあるが……。

「へえ、そんな凄い魔法があるんですね。だったらシヨウさんとも良い勝負したんじゃないですか」

「どうだろうね……一度目の雷切も直撃とはならなかったし、二度目に関しては真正面から破られたから。そのあとはラッシュで決められちゃったし」

「嘘だろ、つて言いたいところだけど……あいつの反応速度は異常だからな」

「それに動作も最適化したような感じで無駄もなく一撃も重い」

「他にも普通の人がしなさそうなことも平気でやるしね」

「あの、もうそのへんでいいんじゃないかな」

夜月くんはおかしいと言わんばかりの流れをフェイトちゃんがやんわりとだが断ち切る。

人柄的に悪口を言えないからなのか、それとも彼に好意があるからなのか……まあ何せよここで止めに入るあたり、彼女は良い性格をしていると思う。夜月くんのためにもこういう子が隣に居た方がいいのではなからうか。

「えつと……涼介さん、どうかしました？」

「いや何でもないよ……そうだ、フェイトちゃんにアリサちゃん。この暑い中、シグナムと特訓してたんだから大分汗掻いただろ？ 何かおごつてあげるよ」

「え、いえ大丈夫です。シグナムさんにお願したのは私達の方ですから」

「そうですよ。それにおごつてもらおうのも悪いですし」

「頑張ってる君らへのご褒美だよ。それに俺はおごれる時にしかおごらないんだから断ると損するよ」

「ふたりともここは素直に甘えるといい。その方が大人も嬉しいものだ」

「じゃああたしは……コーラでいいや」

「涼介はお前におごるとは言っていないだろう。というか、お前は少しは遠慮というものを覚えろ」

第25話 「星光とのお出かけ」

ブレイブデュエルが正式稼働を始めてしばらく経とうとしている。日に日にデュエリスト人口は増えているだろうし、今日もきつと白熱したデュエルがそれぞれの店舗で行われているに違いない。店内の熱気は実に凄まじいものだろう。

だが真夏の外を歩く際に感じる熱気はそれの比ではない。

そもそもの話……その熱気と比べるものではないだろうと言われてしまうかもしれない。そう言われてしまうとそれとおおり……だが、そんなことを考えてしまうほど外は暑いのだ。

にも関わらずどうして外を歩いているかという点、前にシユテルと出かけるという約束を果たすためだ。ただ誤解がないように言っておくが、別にシユテルとデートというわけではない。

事の経緯を簡単に説明すると、ユウキも大分この街に慣れてきた。また昔から付き合いのあるあるディアーチエ達が会いたがっていたこともありグランツ研究所に連れて行くかと思っていたのだ。しかし、ディアーチエがユウキのための食事などの準備がしたいということであるのは夕方にしてほしいと言ってきた。

俺はそもそもシユテルと出かける用事があり、どうせ夕方にグランツ研究所に行くのならユウキも連れて行こうと考えていた。

だがユウキはホビーショップT&Hから特訓でないフェイトやアリシアの代わりに店側のデュエリストをやってくれないかと頼まれていたらしく、結果的にシユテルとふたりだけで夕方まで時間を潰すことになったわけである。

「……はあ」

「そのため息は暑さに対するため息ですか？ それとも私とふたりだけで外出するのが嫌だといったニュアンスのものですか？」

「そのどちらかでないえば前者だ」

別にシユテルとは昔から付き合いがあるだけに一緒に居ても緊張は覚えないうし、相手をするのが面倒だなと思うときはあるものの彼女のことを嫌いと思ったことはないのだ。

「なるほど……あなたにちよっかいを出しても構わないということですね」

「今の答えをどう解釈したらそうなるんだよ」

「簡単なことですよ。いくら昔から付き合いがあるとはいえ、私達もそれなりに年頃の男女です。ふたりだけで出かけるという行為は緊張してしまうではないですか」

「つまり照れ隠しの意味合いでやるってのか？」

「そのとおりです」

キリッ！ という擬音語が聞こえそうな顔を浮かべるシユテル。今日はコンタクトをしているはずなのにメガネの位置を直す仕事をやってしまったのはまあメガネを掛けている人物なら起こり得ることなので仕方ないだろう。

だが……そこで恥ずかしがるならば可愛げもあるのだが、こいつの場合はわざとやっている感じがしてならない。外の暑さも相まって苛立ちを覚えてしまうのは当然だと
言えるだろう。

「常に涼しい顔をしている人間が言っても説得力がまるでないんだが」

「何を言っているんですか。私はただ無駄な体力を使わないようにしているだけです。私の内側は様々な感情で溢れていますよ」

「ああ……確かに人のことをからかいたって感情はあるみたいだな」

俺の目に映っている八神堂の店主と同等にムカつくドヤ顔がその証拠だろう。

出会った頃から何を考えているのか読みにくい奴だったが、正直今のこいつの方が分からない時がある。昔は今ののように表情は変わらなくても疑問に思ったことはすぐに聞くといい素直な一面もあったのだが。……今もそういう一面はあるように思えるが、少なくとも今は基本的に茶目っ気が混じっているのではあ頃と同一の素直さではないだろう。

「時にシヨウ、ひとつ聞いておきたいのですが」

「何だよ?」

「あなたは私をどこに連れて行くこうとしているのですか?」

「簡単に言えば喫茶店だな」

喫茶店の名前は翠屋。高町の家族が営んでいることもあって昔から利用している店だ。

今日シユテルをここに連れて行くこうと思つた理由は彼女がのんびりと読書をできる場所がないか、と以前聞いてきたことがあつたからというのが最大の理由になる。まあ個人的にこここのところ桃子さん達と顔を合わせていなかったことのも理由ではあるが。

俺達の共通でハマっていることで考えれば、ホビーシヨップT&Hや八神堂でデュエルをするのが無難な手ではある。が、真つ先にその手を使うとシユテルの機嫌が悪くなりそうなんだよな。

——せつかくふたりで出かけているのにデュエルですか……いえ別に構いませんよ。私はデュエルが好きですし、まだ見ぬ強敵と戦える可能性を考えれば胸が躍りますから。私やあなたのことを考えれば当然の選択ですね……。

—みたいないなことを顔を合わせようとはせず喜びが感じられない声で言いそうだし。拗ねてもあまり表に出さない。でもそれを分かつて構つてほしい……ある意味レヴィヤ

ディアーチェより手間の掛かる奴だよな。本気で拗ねられるとそれぞれにそれぞれの面倒があるのが現実だが。

「……お前は何で固まってるんだ？ 別におかしなことは言っていないはずだが」

「いえ……あなたが私とふたりだけの状況でそのような場に行くとは思っていませんでしたので」

人のことを何だと思っているんだ、と思わなくもないがシュテルの気持ちも理解できない。

ふたりだけの状況で喫茶店に行けば、シュテルはデートだのなんだの言ってからかってくる可能性があるわけだ。

それは俺も理解しているし、シュテル自身も自分がどのような行動を取りそうか理解しているだけに今の反応をしているのだろう。理解しているならばやるなど言いたいところではあるが、こいつを含めた茶目っ気の強い人間には意味を成さないのも分かっている。俺が心の底からやめろと言えば別ではあるのだろうか。

「まあ確かにその見解は間違いじゃないな……おい、お前が言ったことを肯定しただけだろ。露骨に顔を逸らして拗ねるのはやめろ。というか、本当に拗ねてもないのに拗ねる真似をするな。次の話に行くまでの過程が長くなる」

「やれやれ、その過程が私達なりのスキンシップではありませんか。ただでさえ私やあ

あなたは周囲に比べると口数が少ないタイプです。もしも無駄な過程をなくしてしまつたら会話がなくなつてしまいますよ」

デュエルにおいては無駄なものを極力省いて戦うタイプの癖に何故それが現実には反映されないんだ。そもそも無駄な会話がスキンシップって……意味のある会話でスキンシップを取つた方が有意義ではないのか。分かん、やっぱりこいつの心の内は他の知り合いに比べても読めん。

ただし、今の会話にも確かなものは存在している。それは俺とシュテルの口数についてだ。確かに俺達の口数は人よりも少ない方なのだろう。周囲に居る人間が口数が多いただけなのではないか、とも思えてしまうが……。

などと考えながらも、シュテルの言うところの俺達なりのスキンシップを取っている内に目的地である翠屋に到着する。

「ここが目的の喫茶店ですか？」

「ああ。店の名前は翠屋、俺が小さい頃から利用しているところで高町の家族が経営しているところでもある」

「ほう……」

……なぜ俺はシュテルからジト目というか意味ありげな視線を向けられているのだろう。

考えられるとすれば、俺はシュテルとは小さい頃から交流がある。だが彼女は日本に居るときの俺をよくは知らないわけで……しかもそこに最近親しくなったはずの高町の名前が上がりれば妙な疑いを持つ可能性は無きしもあらず。

しかし、そこに触れると面倒な展開になる可能性の方が高い。また店の前に居ては店側にも客側にも迷惑になる。ここはさつきと中に入るべきだろう。

「いいからさつきと入るぞ。ここに立っていたら邪魔になる」

反論があるかと思つたが、シュテルは大人しく俺の後に付いてくる。おそらく俺に迷惑を掛けるというか自分のペースに持ち込むのは良いと思つているのだろうが、他人を巻き込むのはダメだと思つているのだろう。

基本的にシュテルは近しい相手にしか茶目つ気を出さない。それだけに……きつと俺のような近しい人間と外見くらいしか知らない周囲では彼女に対する認識の差があるの違いない。

「いらつしやいませ……あら、シヨウくんじゃない」

店内に入つてまず声を掛けてきたのは、高町の母親である桃子さんだった。

桃子さんの立場は店長に等しいだろうし、パティシエなので店の奥で作業をしている印象が強かつただけに真つ先に顔を合わせるとは思つてもみなかつた。事前で来店すると言つていた場合は別であるが。たまたまアルバイトが少ない日なのか、恭也さん達

が一時的に店から離れているためにフロアも兼ねているのかもしれない。

「久しぶりね。最近はまだ顔を出してくれてなかったけど……うちのなのはが迷惑掛けちゃったかしら？」

桃子さんの顔にわずかながら喜びのような色も見えるあたり、高町は毎日のようにその日にあつたことを家族に報告しているのかもしれない。というか……そうでなければ、ここで高町が俺に迷惑を掛けたという言葉は出てこないだろう。俺と彼女の繋がりにあってブレイブデュエル関連しかないのだから。

「別に迷惑を掛けられた覚えはないですよ。最近顔を出せてなかった理由は色々ありますけど……まあ最大なのは身内関係ですね。叔母が何も教えてくれなかったので……」

「そう……レーネさんらしいと言えばレーネさんらしいけど、今はシヨウクんの保護者代わりなんだからもう少ししっかりしてほしいわね」

桃子さん、そう言いたくなる気持ちは分かりますけど……あれでもレーネさんは成長してるんですよ。自室はともかく、前のように廊下やりビングに服を脱ぎっぱなしにすることはしなくなっただからです。

「ところでそつちの子は……ふふ、シヨウクんの彼女かしら？」

「違います。会う度にそういう冗談を言うのやめてください」

まったく……何で大人はすぐ子供の恋愛事情に首を突っ込みたがるのだろうか。俺

は桃子さんの息子というわけでもないのだが。

ただ桃子さんとは昔から付き合いがあるし、うちの母さんは桃子さんの親友だ。故に俺は時として彼女に息子のように可愛がってもらっている。あまり強くやめろとも言いにくいのが現状だ。

「彼女は……」

「はじめまして、私はシュテル・スタークスと申します」

小さい頃から淑女としての礼儀作法やらを教え込まれていただけに実に様になっている挨拶だ。普段のこいつを知っている身としては、いつも淑女的な言動をすればいいとも思ってしまうのだが。

「彼が言ったように私は彼女は彼女ではありません。彼女では決してありませんので……ええ断じてシヨウの彼女では」

「俺にとつてありがたい返答だし、大切なことでもあるけどもう言わなくていい。一度言えば伝わる」

だからチラチラとこつちを見るな。彼女じゃないと即答したことに対して茶目つ気のあるお前は何かしら思ったのかもしれないが、実際のところ俺達は彼氏彼女の関係でもないんだから。

「ふふ、なのはから色々と聞いてたけど思っていた以上にふたりは仲良しなのね」

「昔から付き合いがあるだけ……おい、何でこっちに近づいてくる？ 別に引付く理由なんてないだろ」

「大した理由はありません。たまにはレヴィイのように親しさをアピールしてみようかと思っただけです」

「やらんでいい」

レヴィイのスキンシップはレヴィイだから許されているというか、こちらとしても許容できているのであって、シユテルにそれをやられると困る。

というか……お前つて至近距離まで近づくのは大丈夫でも実際に触れ合ったりするのはダメな奴だろ。そっちから一方的に触れる分には大丈夫だろうけど。仲良しって言葉が嬉しかったのか、真夏の暑さにやられたのかは知らないが、もう少し自制しろ。

「ふふ、うちのなのはともそれくらい仲良くしてくれると嬉しいんだけど」

「あの子が良い子なのは分かってますから個人的に親しくなるのは構わないんですけど……こいつとのやりとりみたいなのを期待されるのは困りますよ」

シユテルと高町は容姿や声に酷似した部分があるが、性格は360度とまではいかなくても270度くらいは違う気がする。同じような接し方になる可能性は極めて低いだろう。

それに……シユテルを含めた昔から付き合いがあるメンツは飛び級で中学生扱いさ

れているから大丈夫なんだが、小学生達と親しくしていると茶化してくる奴が居るからなあ。そんなに年の差があるわけでもないのにロリコンだとか言われるのは困る。

「にしても……まあ分かつていたこともありすが、桃子さんはシユテルと高町を間違えないんですね」

「だってあの子の母親だもの。確かに声とかは似てるなあと思うけど、髪形や瞳の色……あと性格も大分違うみたいだしね。……ねえシヨウくん」

「何です?」

「出来ればだけど、なのはのことはなのはって呼んであげてほしいわ。単純に私達家族も反応しちゃうからってのもあるけど、あの子の話にはシヨウくんがよく出てくるから。きっとシヨウくんもつと仲良くなりたいたいと思うてると思うの」

桃子さんの言い分は理解できるのだが、本人がいないところで今のような話をしていいのだろうか。まあ居たら居たであの子がテンパリながらも桃子さんを止めようとするだろうが。

「えつと……急に名前前で呼ぶとなると恥ずかしさやらを覚えますし、個人的にですけどこつちから急に下の名前前で呼んだらあの子は慌てそうなんですが」

「ふふ、確かにそうなりそうだけどやっちゃって大丈夫よ」

「いやいや、大丈夫じゃないでしょ。」

桃子さんはまともな母親だと思っていたのに、まさかプレシアさんとは別の方向だろうが彼女のように危ない人なのだろうか。

「あの子も小学4年生……女の子は早熟だつていうし、男の子を意識し始めてもおかしくないと思うの。だけどあの子は同じ年の子よりも性別の壁がないというか、誰にでも同じように接するのよね。それ自体は良いことだと思っただけ……」

ああ……確かに普段のあの子は小学生組の中でも誰にでも平等というか、異性意識は持つていない方に思える。ただ俺には異性を意識しているような反応をする時があるので、桃子さんとしてはあの子の成長を促してほしいのだろう。俺にも反動がありそうでならないが……。

「まあ正直に言う……あの子はショウウくと親しくなりたがつてるし、年もそんなに離れてない。ショウウくんはアスカや偶に私からお菓子作りを教わつてる。だから将来的に一緒に翠屋を継いでくれないかしら……なんて考えたりしてるだけなんだけど」

……さりととんでもないことを言われたような、いや確実に言つたよな。自分の娘と結婚してこの店を継いでほしいみたいなことを絶対言つたよな。

ああもう、何で俺の知り合つてる親つてこういう人が多いんだ。まあうちの親も悪いんだけど……父さんの方ではディーラーチェとの許嫁の話があつたりしたし、母さんの方ではたつた今とんでもない話を聞かされたわけだから。

ちなみに桃子さんが言ったアスカというのは俺の母さんの名前だ。苗字は言わなくても分かっているとと思うが、フルネームだと夜月明華になる。

「いやはや、モテモテですね。これは帰ったらすぐさま報告しなければなりません」

「少し……いや結構脚色して言いそうな顔で言うのやめろ。桃子さんも唐突に変なことを言うのはやめてください」

「別に変なことを言ったつもりはないわよ。なのははシヨウくんのお嫁さんになるって言うってた頃もあるんだから」

「……はい？」

「ふふ、シヨウくんが分からないのも無理はないわよ。ふたりが小さい頃の話だから……なのはも自分が言ってたことなんて覚えてないでしょうけどね。シヨウくんのこととも最近会った感じに話すから」

よく思い返してみれば、小さい頃に親に連れられて桃子さん達に会いに行った覚えはある。具体的な内容までは覚えていないが、そのときに自分よりも小さい子と一緒に遊んだ覚えもある。きっとその子が高町なんだろう。

でも……当事者達が忘れているなら言わないでほしかった。そういう話を聞かされると何とも言い難い感情が沸き上がってきてしまうから。

俺はともかくあの子にはしないほしい。絶対とっていいほど普通に接してくれ

るようになるまで時間が掛かりそうだし。

「……って、ごめんなさいね。席にも案内せずに立ち話に付き合わせちゃって。今日はそこまでお客さんは来なさそうだからゆっくりしていつて。なのはやアリシアちゃんは道場の方に居るからあとでこっちに顔を出すかもしれないし」

桃子さんはいつもどおり温かい笑顔を浮かべているのだが、正直再び桃子さんがきつかけで何かしら起こると思うと恐ろしくもある。

高町が混じるだけでも大変なことになりそうなのに、アリシアまで居るとなると力才すな未来しか見えない。こういうことはあまり考えたくはないが……感じる流れるに個人的に嫌な方になる気がする。俺は無事に翠屋から出ることが出来るのだろうか……。

第26話 「好敵手は災いの元？」

……はたから俺達はどう見えてるんだろうな。

そのように考えてしまうのは、俺とシユテルが向かい合う形でテーブルに座っているからではない。確かに喫茶店で男女が向かい合つて座っていれば誤解する人間も居るかもしれないが、おそらくそういう誤解をしている人間は少ないと思われる。

何故ならば……俺達は互いに注文したコーヒーと紅茶を飲みながら本を読んでいるからだ。会話という会話はこれと違ってない。店が混んでいて相席を余儀なくされたのなら話は違うだろうが、今日の翠屋は比較的空いている。故に周囲が俺達を見てどう思うか考えてしまつているというわけだ。

「……まあどうでもいいか」

俺達と付き合いがない人間がどのように思ったとしても大した問題ではない。同じ学校の生徒に見つかると面倒になる可能性もあるが、俺とシユテルは学校で同じクラスだ。学校でも比較的一緒に居ることは多いため、見られたところでこれといって何もない気がする。

……何かあるとすれば。

例えば俺の目の前に座っている少女に想いを寄せている男子に見られた場合だろうか。

シユテルを含め留学生組はうちの学校でも知っている人間は多い。何故ならディアーチエは学年主席であり、シユテルもそれに次ぐ秀才なのだから。レヴィは俺達より学年がひとつ下であるが、数学と体育の成績は満点に等しいし、そもそも普段の言動的に目立つ存在だ。

付き合いの長い俺はこいつらのことを他人よりも知っているからあれだが、学校の人間は良いところとか目立ってる部分くらいしか知らないだろうな。それに……本を読んでいるときのシユテルは絵になる。俺に絡むときは茶目っ気を出してくるので認めたくない部分もあるが。

「……先ほどから本ではなく私の方を見ていますけどどうかしましたか?」

「別に……お前とふたりでのんびりしているのが新鮮だなんて思っただけだ」

素直に考えていたことを言わなかったのは……言わなくても分かりそうだが、簡単に言えばシユテルが面倒な流れにしそうだからだ。

こいつのことだからきつと……私の隣に自分以外の異性が居るのが嫌ということですか、みたいなことを言うてからかかってくるに決まっている。

俺から言わせれば、俺以外の男子ともつと絡めと言いたい。事務的な会話や何かしら

の作業と一緒にするときには話している姿を見るが、それ以外では常に俺かディアーチェ達の傍に居るイメージじゃないし。

「よくもまあさりと嘘が言えますね。本当は私が面倒な流れにするなどと思っ
ていようこ」

「……別に」

「やれやれ……あなたはもう少し素直になった方がいいですよ」

どこか呆れながらもシユテルの顔には笑みが浮かべられている。まるであなたが私の考えを読めるように私だってあなたの考えは読めます、と言いたげに。

「まあ今口にした言葉も思ったことではあるんですが……実際に私も似たような想いを抱いていますし。私達の近くには昔からレヴィやディアーチェが居ましたから」

「ディアーチェは準備があるから無理だろうが、レヴィは呼べばすぐにでも来そうだけどな。呼びたいなら呼べばいいんじゃないか？」

「それは……やめておきましょう。今後、私達は自分の道を見つけて歩んでいきます。常に一緒に居ることはできなくなるでしょう。それに一緒に居ることが多い私達です
が交流している相手には差が存在しています。時として各々の時間を過ごすのも大切
ですよ」

確かにシユテルの言うことは最もだ。ただ……俺から言わせれば、彼女の方がもう少

し素直になるべきだと思う。

お茶目な部分はあるが、そこを除けばいつも冷静沈着で大人じみた対応ばかりしてる。人が恋しいだとか寂しいと思っけていても自分のキャラじゃないとか思っけて素直に甘えられない。小さい頃からそういう節はあつたけど、年々それが顕著になつてくるよな……。

学年で言えばシュテルは俺と同じ中学2年生だ。けれど彼女は留学生であり、また飛び級をしている。精神年齢は優れた頭腦の持ち主なので実年齢よりも高いわけだが、だからといって子供らしく振舞うのがダメだと言うのはおかしい。

ただそういうことをシュテルに対して思うのは小さい頃から付き合ひのある俺だけであり、また甘やかしてあげられるのも俺だけなのかもしれない。調子に乗られるのも困るが、どことなく寂しそうにしている彼女に何もしないのも年上としてどうなのだろうか。

そんなことを考えている内に俺の手は自然とシュテルの方へと伸び、彼女の頭を軽めに何度か叩いて撫で始めていた。

「——なっ……何をやってるのですか!？」

「いや、寂しそうだから慰めてやろうかと思っけて」

「だ、だからといって急にしないでください。別に寂しいなどと思っけていませんから!」

顔を赤くして慌てふためくシユテルの姿は普段の彼女からかけ離れているだけあって面白くもある。今の姿が、性格が大分違うが近い見えた目をしている高町とダブって見えることもありさらに面白い。

俺は別にからかつているつもりはないが、うちの叔母やはやて達が人のことをからかうのはこういう気持ちを抱くからだろうか。多少なりとも彼女達への理解が深まるが、まあ俺は頻繁にすることはあるまい。ただでさえ、今でも俺のことを意地悪だの冷たいだの言ってくる子はいるのだから。

「あいにくお前との付き合いは長いからな」

「う……ディアーチェに知られたら気軽に異性に触るものではないと怒られますよ」

「普通ならそうだがお前が寂しそうにしてたのなら話は別だろ。というか、嫌なら振り払うなりすればいい。俺としては……まあ多少恥ずかしくもあるが、昔何度かやった覚えがあるだけに懐かしくもあるが」

「もうあの頃とは違うのですから……子供扱いするのはやめてください」

シユテルは顔をこちらからやや背けるが、俺の手を自分の頭から退かそうという素振りは見せない。それがどことなく小さい頃の彼女と重なり可愛く思えた。普段から今のような感じならば、俺ももう少し兄貴分的な行動をしてやりたいと思う。

とはいえ、今日はもうここまでにしておこう。

桃子さんに見られても微笑ましく思われるだけだろうが、ここは高町達も利用する場所だ。顔を合わせたことはないものの、先ほどあとで顔を出すかもしれないと言われたのでここで引いておいて損はない。

「……………あ」

と俺が手を退けた瞬間にシユテルが声を漏らす。人に甘えることが少ないだけにもう少しやつてほしいいでも思ったのかもしれない。まあこちらと視線が重なった瞬間、これまで以上に顔を真っ赤にして俯いてしまったのが現状だが。

ここでまた撫でるのも何か言うのも今のシユテルには悪手だろう。そう思った俺は、静かに読みかけだった本を手取る。

ちなみに何の本かというと、簡単に言ってしまうえば工学系のものだ。父親や叔母といった技術者が近くに居たため、幼い頃から興味を持ってしまうのは仕方がないだろう。ならばお菓子作りも……と思うかもしれないが、そこに至っては下手な本を読むより母さんや桃子さんに聞いた方がいいので手を出していない。

「……………そういえば」

「ん?」

「最近はずいぶんと暴れ回っているらしいじゃないですか。デュエリストの間で噂になっていますよ」

「マジか……」

まあ高町達の特訓の話を蹴ってからはユウキと一緒にデュエルばつかやってるからな。通り名持ちのデュエリストも何人も食い破ってしまったし。それを除いても最近はいイベントデュエルの手伝いもしていた。

八神堂に至っては、イベントデュエルではないが白石さんとのデュエルを見ている人間が予想以上に居たらしく認知度が上がってしまったている。率先して目立ちたいとは思わないが、実力のある人間が注目を集めてしまう世界なだけに仕方がないかもしれない。

「マジですよ。……そもそも、あなた程のデュエリストが本気で戦えば注目を集めるのは必然というものでしょう。ロケテスト時、私にしか使っていなかった二本目も常時抜いていると耳にしていますし。あなたのことを本当の意味で本気にさせられるのは私だけだと思っていたのですが……」

シユテルの顔には先ほどまでの赤味もなければ、唇を尖らせたリ頬を膨らませるといった露骨な感情表現も確認できない。しかし、声にどことなく拗ねているというかある意味焼きもちを妬いているかのように思えたのは俺の気のせいだろうか。

「デュエリスト人口は日に日に増加しているし、通り名持ちのデュエリストも増えてきてる。二本目を抜かないと勝てなくなってきたらんだから仕方ないだろ」

「それはそうなんでしょうが、今のあなたがこれまで隠してきた二本目を常時使つてまで腕を磨くのは更なる高みへ上りたいから……いえ、そこに辿り着けなければユウキに勝てないからではないですか?」

「それは……」

「まあ理由でどうあれ……あなたが更なる高みへ上がるのは私としても喜ばしいことです。あなた以上に私のことを熱くしてくれるデュエリストはいないのでから」

「こちらに真つすぐ向けられたシュテルの目には、静かだが激しく燃える炎が見える。」

それは普段俺に向ける目ではない。自分と同等の存在……最も自分が勝ちたいと思う相手に向けるデュエリストの目だ。ここからのセリフはシュテル・スタークスではなく、ロケテストー位シュテル・ザ・デストラクターとしてのものだろう。

「故に……私も更なる高みを目指します。今後おそらく最強のデュエリストを決めるイベントも行われることでしょう。そこで私はどんな戦いであろうと、あなたと雌雄を決するまで負けるつもりはありません。だから……」

「俺もお前と当たるまで負けるなつてか?」

「はい」

日に日にデュエリスト達の実力も上がっているというのに、俺の好敵手は難題をさらりと saying してくれるものだ。

デュエルは勝負事だ。絶対に勝てる保証はない……しかし、ここで燃えない奴はデュエリストではないだろう。

確かに今の俺はシユテルの言うようにユウキに勝ちたいという想いで強くなろうとしている。

だが最大のライバルが誰かと聞かれれば、ユウキではなくシユテルと答える。シユテルから自分と相對するまで負けるなど言われたならば、可能な限り努力するべきだろう。彼女の好敵手として。

「お前と本気でやり合うなら色々と準備もしたいし、可能な限り別ブロックであることを祈りたい」

「私は同じブロックであろうと、初戦の相手であろうと構いませんよ。私にとつての決戦はあなたとのデュエルなのですから。故に……未来の決戦をより良い形で迎えるために今度別の街へ足を運んでみませんか？」

話の方向性が一気に変わったかのように思えるが、ブレイブデュエルを行える場所はこの街だけではない。この街にある各店舗がスタイルごとの総本山ではあるだろうが、他の街にもブレイブデュエルを稼働させている店は存在している。

シユテルは強敵とのデュエルを望む性分だからな……まあ俺も似たようなところはあるけど。それにレーネさんが他の街の稼働状況とかが知りたいって言っていたし、

シユテルもグランツ博士の方から何か言われたのかもしれない。

ユウキもこの街に大分慣れてきたし、グランツ研究所に連れて行けばこの街にあるブレイブデュエルを稼働させている店には全て連れて行ったことになる。T & Hからはイベントデュエルの手伝いを頼まれたりしているし、俺ひとりで動ける日も増えてくるだろう。なら……

「別に構わないが、今すぐにはさすがに無理だぞ」

「分かっていますよ。私も今は日に日に成長するなのは達の姿を最後まで見届けたいので」

「そんなに成長してるのか?」

「ええまあ……コーチ役を断ったあなたには秘密ですが」

いじわるな笑みを浮かべるシユテルに対して思うところはあったものの、あの子達のコーチ役を断ったことについて引け目が全くないわけではない。

それに……シユテルが認めるほど成長しているならば、むしろデュエリストとしては次に会うのが楽しみというものだ。ここは無理やり聞くようなことはせず、今後の楽しみとして話を終わらせよう。

そんな風に思いコーヒーを口に含んだ直後、背後から聞き覚えのある声が響いてきた。振り返ってみると、そこには道着姿のアリシアと高町が確認できた。

「ちよつとシヨウ、シユテルとふたりで何してるのさ!」

「何つて……他愛のない話をしてるだけだか?」

「嘘だ! 年頃の男女が喫茶店にふたりで居るのに他愛のない話をするわけない。というか、他愛のない話だとしてもデートじゃん。わたしとはデートしてくれないくせに!」

小学4年生よりも年下に見える小学6年生は今日も相変わらずうるさい。いや、最近顔を合わせていなかっただけに前以上にうるさくなっているかもしれない。

「シユテルとデートしている覚えはないし、お前とデートする理由もないんだが」

「なっ!? 何でそういうことをさらりと言っちゃうかな。わたしにだって心はあるんだよ。何でそう意地悪なことばかり言うかな!」

「まあまあ姉氏、男の子というものは好きな異性に対して意地悪をしてしまうことがあります。それに店内で騒ぐのはあまり良いことではありません。とりあえず落ち着いてください」

さすがに喫茶店で騒ぐのは良くないとアリシアも理解はしているのか、表情は不機嫌そうなままだが声は小さくなっていく。その様子が年上に注意されて大人しくなる年下といった構図に見えなくもない。口に出すとアリシアの怒りが爆発するはずなので言葉にはしないが。

「シヨウが言ったように私達はデートをしているわけではありません。このあとも一緒に過ごす予定ではありませんが」

「シユテルが言うなら信じて……って、やっぱデートじゃん!? ふたりしてわたしのことをからかって悪趣味だよ!」

シユテルはともかく俺はからかったつもりはないのだが。シユテルだけが悪いはずなのにどうして俺にまだ飛び火するのだろうか……。

などと考えていると、誰かに袖を引っ張られた。意識を向けてみると、高町が何やら言いたそうな顔をして立っているのが見えた。

余談になるが今日の高町は髪をツインテールではなくサイドポニーにしている。桃子さんも女の子らしさを心配していたが、身だしなみといった部分に意識が行っているのであれば、同年代よりも異性意識が薄いとしてもあと1、2年もすれば変わってきそうに思える。そこまで心配することはないのではないだろうか。

「どうかした?」

「えつと……シヨウさんはシユテルとデート……デートしてるんですか?」

「いや個人的にしている覚えはないけど。今日は夜にグランツ研究所で俺の従妹の歓迎会みたいなものがあるわけだけど、準備とか従妹に夕方まで予定が入ってたからそれまで時間を潰してただけだし」

俺の言葉に納得したのか、高町はにっこりと笑う。彼女の笑顔を見るのは今日が初めてというわけではないのだが、先ほど桃子さんに言われたことが尾を引いているのか何とか恥ずかしくなってしまった。

「シヨウ……何だか顔が赤くなっているような気がするんだけど。もしかしてなのはを見てドキドキしてるの?」

「にやつ!? なな何言ってるのアリシアちゃん!?」

「何でなのはが慌てるかな。普通ここはシヨウが慌てるところでしょ……まあなのはらしいと言えばなのはらしいけど」

アリシアが言っているのは至極もつともであり、いつもならば問題ない流れである。しかし、今日に限ってはこの流れは悪手だ。こうも過剰に意識されると、桃子さんの話がフラッシュバックしてしまう。

「むむ、慌てるなのはを見てシヨウの顔がさらに赤くなったような……ふたり共、わたしの知らないところで何かしたでしょ!」

「な、何もしてないよ!?! 最近シヨウさんとは会ってなかったし……というかアリシアちゃん、私と一緒に特訓してたよね。私がシヨウさんに会ってるならアリシアちゃんだって会ってるはずだよ!」

「むう……それは確かに」

「やれやれ……仕方ありません、私が説明しましょう。私も今日知ったことなのですが、どうやらシヨウとなのは幼い頃に何度も顔を合わせていたようです。しかもなのはに至っては……シヨウのお嫁さんになると言っていたと」

「——にや!？」

シユテルの言葉に高町の顔は一瞬にして真っ赤に染まり、目を回しながらブツブツと「え? 私がシヨウさんの……」と聞いた独り言を次々と言い始める。

「どうということなのは!」

「し、知らないよ! シヨウさんと出会ったのはついこの間だし……お母さん達と知り合いたいだから小さい頃に会ってたかもしれないけど、少なくとも私にはシヨウさんのお、お嫁さんになるって言った覚えはないよ。シユテル、変なこと急に言わないで!」
「変なことを言った覚えはありません。つい先ほどあなたの母君……桃子さんから聞いたことを伝えただけです」

今にも泣きそうな顔をした高町が視線で真実かどうか訪ねてきたが、俺は何も言うことができなかった。それは必然的にシユテルの言葉は事実であると言っているようなものであり、高町が頭を抱えてしゃがみこんでしまったのは言うまでもない。

このあとの展開は……正直語りたくないのご想像にお任せする。ただ誤解がないようにこれだけは言っておくが、決して笑い声の絶えない楽しい時間だったとは言わな

い内容だった。

第27話 「騒がしくても」

「みんなに会うのも久しぶりだなあ……何かいざ会うとなるとそわそわしてきた！」
のように隣を歩いている俺の従妹は先ほどから独り言を言いながら百面相をしている。

現在の状況を簡潔に説明するならば、俺達はグラントツ研究所内の廊下を歩いていて歓迎会用にセツテイニングされているはずの一室に向かって歩いている。

ディアーチエ達と顔を合わせるのは久しぶりだろうから気持ちを分からなくもないが、別に何年も顔を合わせていなかったわけじゃないんだからそこまで緊張しないでいいと思うんだがな。

おそらくユウキの記憶にあるディアーチエ達と大差はないと思う。性格といったものはこれといって変わっていないのだから。

ただ……背丈とかに關しては変わってるんだよな。男子の場合は中学入学前後からの年齢から一気に伸びるけど、女子は小学生の内にとんどん伸びるイメージがあるし。

俺はちょうど中学2年と年齢的に伸びる時期であり、また頻繁に顔を合わせているこ

ともあって視線の高さなどに違和感を感じてはいない。だが最近あまり身長が伸びていないであろうユウキは違和感を覚えるに違いない。何故ならば

「ユウキ、あなたの気持ちから分からなくもないですが私達に大きな変化はありません。そう身構えなくても大丈夫です」

「大丈夫じゃないよ。シユテルと話してみても性格とかは変わってないだろうなって思いはするけど、絶対みんな大きくなってるじゃん。この前まで僕の方が大分高かったはずなのに今のシユテルは僕と同じくらいになってるし！」

このように数十分前に顔を合わせたシユテルに対しても、未だに文句にも聞こえる違和感をぶつけているのだから。

「ディアーチエはまあシユテルと変わらないからともかく……ふたりよりも背が高いレヴィに会ったらユウキがどうなることやら。何度言っても引つ付けてくるから分かってしまうことだけど、レヴィは大分発育も進んでるみたいだしな。今でもユウキよりあるんじゃない……」

「年上のアミタヤキリエは元から僕より大きいからあれだけ……前々から思ってたけどみんなはすぐ大きくなり過ぎだよ。遺伝子的な問題なのかもしれないけどさ………シヨウ、何かずつと僕の方見てるみたいだけどどうかしたの？」

「いや別に……」

「誤魔化さなくていいからはつきり言いなよ。シヨウがそういう風に言うときは大抵何かしら思ってるはずなんだから」

ここ最近似たようなセリフを言われることが多い気がするが、だからといって思っていたことをはつきりと言うのは良くないだろう。

ここで言わなくてもきつとレヴィに会ってしまえば思ってしまう可能性がある。それに割とユウキは背丈とか身体的女性らしさを気にしている節があるから言わない方が良いに違いない。

というか、そもそも男の俺の口から言ったら面倒なことになる。何でレヴィの胸の大きさを知ってるんだって。俺から触れているわけではないの責められては堪ったものじゃない。

「なら言わせてもらうが……もう少し落ち着いたらどうだ？ あんまりそわそわしてるとシユテルより下に見えるぞ。年齢的にはシユテル達よりお姉さんなんだから」

「なっ……言えって言ったのは僕だけだし、落ち着けて部分だけでいいんじゃないかな。特に最後の年齢的にはお姉さんって、落ち着いてなくても下に見えるような言い方なんだけどー！」

「確かにそのようにも解釈できますね。ですがユウキ、私を含めデИАーチエ達もあなたのことは年上だと思っっていますよ。親しい間柄なので口調は砕けていますが」

「シユテル……」

「そもそも、悪いのはユウキではありません。真に悪いのは……実年齢以上に大人っぽく見えてしまう私達なのですから」

「それって言い回しを変えただけで意味合いは変わってないよね。何で上げて落とすの!?!」

ユウキの心からの叫びが廊下に木霊する。まあキリツとした顔で今のようないことを言われれば、彼女が叫びたくなるのも無理はない。メガネをしていないのにメガネの位置を直す仕草も微妙に腹が立つし。

「ああもう、昔から分かってたことだけど本当シヨウとシユテルってそういうところ似てるよね」

「そういうところ?」

「上げて落とすとというか、人に意地悪なことを言うところだよ」

意地悪?

シユテルの場合はそのように言われても仕方がないとは思うし、俺もたまには言っていると思うが、基本的に俺は事実しか言っていないと思う。現実逃避はしてはいけないと言われるものはずなのに、現実を突きつけるのはいけないことなのだろうか。

「伊達に彼の背中を見て育てていませんから」

「あのねシユテル、それはキリツとした顔で言うことじゃないから。というか、シユテルが強く影響を受けたのはシヨウじやなくてレーネさんの方だと思っただけだ」

「確かにレーネは私やディアーチエ達にとつて師のような存在ですから否定はしませんが……それでもシヨウの影響があるのも事実ですよ。昔も今も可愛がつてもらつていますから」

「どうしてこいつは今のタイミングで可愛がつてもらつているなどと言うのだろうか。しかも意味ありげに。」

「いや……昼間の仕返しだろうっていうのは何となく予想できているわけだが。けどお前だつて頭を撫でられてまんざらでもない反応してただろ。言うなとまでは言わないうがせめて妹分だとか付けて言ってくれよ。今の言い方だとユウキが誤解する可能性が高いだろうが。」

「今も? ……ねえシヨウ、いつたいどういうことかな。昔はみんな小さかったし、シヨウの方が年上だから分かるんだけどさ。今だと事の次第によつては問題があると思っただけだ」

「如何わしい真似をしたつもりは断じてない」

「本当に?」

「本当に」

何でここまで疑われなければならないのだろうか。この前は高町達と親しくしていることを言っただけでロリコンだとか疑われたし、今は今で昔から付き合いがある相手との付き合い方について疑われている。

俺が過去にシユテルに対して……いや異性に対して何かしてしまったのなら疑われても仕方がない。胸を触っただとか、お尻に触れただとか罪を犯した男が疑われるのは当然のことなのだから。

しかし、俺の記憶が正しければそのような出来事はないはずだ。頭に軽く触れたり撫でたりすることはあるが、それはある程度親しくなった相手にしかしていないし、して怒られるようなことでもあるまい。ディアーチェのようなタイプだと照れ隠しに怒鳴る気はするが。

「シユテル、実際のところどうなの？」

「信用する気ゼロだな」

「信用していないわけじゃないよ、確認をしてるだけ。さあシユテル、本当のこと言っちゃって。別に怒ったりしないから」

嘘を言うな。お前、グラントツ研究所では言わないにしても絶対家に帰ってから何か言うつもりだろ。発せられてる雰囲気からして「答えによつてはあとでお話だね」って伝わってくるし。頼むシユテル、ただでさえユウキの歓迎会が平穩に進むとは思えないん

だから厄介事を増やすようなことは言わないでくれ。

「実際のところ……別に如何わしい事をされた覚えはありませんよ」

「本当に？」

「はい、大体彼にそのような度胸があるならこれまでに恋人のひとりくらい出来ていますよ。ちなみにこれは私個人の意見なのですが……ユウキ、あまりしつこいと嫌われるとまでは言いませんが面倒だとは思われますよ」

「それは……そうだけど。……つて、からかい癖のあるシユテルから面倒だとか言われたくないよ！」

ユウキの言葉は至極最もであるが、シユテルは先ほどまでとは打って変わってぼんやりとした顔で聞き流しているようだ。

シユテルはどちらかといえば口数が少ない方なので話し疲れたのかもしれないが、会話が一段落してもいないのにやっってしまうあたり、何ともマイペースというか気まぐれな性格をしていると言えるだろう。こういう性格だから猫には好かれるのかもしれないが。

中身があるとは決して言えないであろう会話を続けている内に気が付けば目的の部屋の前まで到着した。きつとこの奥にはディアーチエが作り出した極上の料理が並んでいるに違いない。俺も料理は人並みに出来はするが、人並みに出来るが故に彼女には

敵わないと思つてしまう。

「ん？　ようやく来……」

「おつそーい！」

ディアーチエの言葉を遮つたのは言うまでもなくレヴィである。極上の料理を前にして俺達が来るのを待つていただけに気持ちは分からなくもない。……分からもないのだが、だがそれでもこれだけは言える。俺に飛び掛かるように抱き着くのは違うだろう、と。

「遅い、遅い、遅いよー！」

「それは悪かった。悪かったと思つてるからとりあえず離れてくれ」

「え、何で？」

え、何で？

そう言い返したい気分になつてしまつたが、相手がレヴィなだけに言つたところで意味がない。分かつていることではあるが、レヴィは一向に異性というものを意識してくれない。

俺が昔から付き合いがある身近な存在なので異性の中でも抵抗がないのは分かるのだが、それでももう少しだけでもいいから異性に対する配慮をしてくれないだろうか。今はまだ顔に出さずに済むが、発育がこれ以上進むとさすがに俺も不味いのだから。

「何で？ ではないわ！ レヴィ、さっさと離れぬか！」

「ええー別にいいじゃん、シヨウなんだし」

「良くないよ！ 親しき中にも礼儀ありというか、レヴィも女の子でしょ。気安く男の子に抱き着いたりしたらダメだよ！」

「やれやれ、まだ歓迎会は始まってもないのに騒がしいことです」

シユテルさん、そう思うなら俺の従妹と王さまを鎮めるか俺に引っ付いている犬っばい女の子をどうにかしてくれませんかね。それがダメにしても……せめてやれやれとか言いつつ、はたから見えて面白がるのはやめてほしいです。主に俺の精神的に……。

「あ、ユキりんだ！」

「え、あつ、ちよっ!？」

レヴィの高速飛びつき型ハグは見事にユウキに直撃。突然のことに加え、人前で抱き着かれるのが恥ずかしいのかユウキの顔は真っ赤である。

ただ先ほどと打って変わってユウキは怒鳴る素振りを見せていない。彼女自身もレヴィとの再会は嬉しいものであり、また抱き着かれています。対象が異性である俺ではなく同性である自分なのが理由だろう。

「久しぶりだねユキりん」

「う、うん久しぶり」

「えへへ……あれ、何かユキりん小さくなってない？」

レヴィにとつては純粋な疑問から生じた言葉なのだろうが、それでもユウキにとつてはクリティカルするものだったらしく、彼女の表情から喜びの感情が消えていく。プラスの感情が溢れる雰囲気になりかけていたというのにどうしてこうなるのだろうか。

「僕が小さくなったんじゃないよ、レヴィが大きくなったんだよ！」

劇場に駆られたユウキは強引にレヴィを引き剥がそうとした。が、手を置いた位置が実に不味かった。ユウキがどこに手を置いてしまったかという……レヴィの胸である。つまり必然的にユウキの両手には発育途上ではあるが確かな膨らみの感触が伝わるわけで……。

「うん？ ユキりん、どうかしたの？」

「何でも……何でもないよ。……身長はまだいいとして……胸まで大きくなって……」

「ブツブツ言ってるし、絶対どうかしてるよ。ユキりん、ねえどうしたのさ？」

レヴィは純粋に心配しているようだが、それがまたかえってユウキは辛いことだろう。

嫌味で言っているのであればレヴィに対して怒ることもできるだろうが……レヴィは悪戯をする時以外は基本的に悪気は全くないからな。キャラ的にも憎めない奴だし、

ある意味ユウキとは相性が悪いかもしれない。

「シヨウ、ボクなんかしちゃった？ ユキりんどうしちゃったの？」

「いや……俺の口からはちよつと」

「じゃあシユテるん」

「すみませんレヴィ……時として沈黙を貫かなければならないときもあるのです」

「王さま！」

「我也答えとうないわ！」

頼りのディアーチエにも断られてしまったレヴィは自分で考え始める。だが頭を抱えながらウンウン唸っているあたり、ほぼ間違はなく答えに辿り着くことはないだろう。今回の答えに辿り着くには男女の性別の違いなどの思春期になれば自然と意識してしまふものを理解していかないといけないのだから。

「みんな、もうそのへんでやめてあげたらん？ 答えるにしても答えないにしてもユウキちゃんを傷つけてるわよ」

「ユウキさん、大丈夫です。ユウキさんはまだ中学2年生じゃないですか。まだまだこれからです！」

「キリエ、アミタ……そうかな？ 僕、まだこれからかな」

「はい、きつとこれから大きくなりますよ！」

アミタは今日も変わらず……ユウキに再会できたことでいつも以上に熱い気がする。それに対して、アミタの妹であるキリエはアミタの方を見ながら澄ましそうでいなさそうな微妙な顔を浮かべている。

「ですよねキリエ！」

「いやー私はお姉ちゃんみたいに『きつと』とか言える素直な子じゃないし、ユウキちゃんくらいの頃にはそれなりにねえ……確かお姉ちゃんは私よりも」

「あわわ！ キ、キリエ、あなたは何を言おうとしてるんですか。ここにはシヨウさんだって居るんですよ。というか、姉とはいえ人のプライベートな情報を言うのはいただけません！」

「お姉ちゃん、そういうことを私に言う前にやる必要があると思うわよん」

「アハハ……そうだよね、僕とふたりを比べるのは良くないよね。遺伝子的に違うわけだし……」

「ユウキさん、落ち込まないでください！」

……うん、この場を端的に言うならカオスだ。

昔もこんな感じだった気がするが、年を重ねて背丈や体型やらが変わってしまっただけに話す内容は和気藹々と聞けるものではない。

というか、その手の話をするのは構わないが俺がいなくてやってくれないだろ

うか。正直男の身としては会話に入るわけにもいかないし、気心が知れている仲とはいえ男女比的に圧力のようなものがあるのだから。そんなことを考えた矢先、不意に扉が開く。

「すみませーん、遅れてしまいました！」

入って来たのはシユテル達同様にグランツ研究所にお世話になつてゐるユーリである。先ほどから姿が見えなかつたので一時的に席を外してゐると思つていたが、今の言葉を聞く限り大方グランツ博士の手伝いでもしていたのだろう。

「もう始まつちやつてますよね？」

「いや、これから始まるうとしてゐるところだ……時にユーリよ、博士の姿がいないようだが？」

「えつと、博士はもう少ししたら来ると思ひます。先に始めてもらつて構わないそうですけど、博士の食べる分は残しておいてほしいそうです」

「ふむ……ならばお言葉に甘えて先に始めるとしよう」

普段のディアーチェエならばグランツ博士が来るまで待とうとも言つていた気がするが、そうしなかつたのは時間的に夕食の頃合ひであり、また先ほどから腹の虫が鳴つてゐる人間が多いからだろう。主に音の発生源はレヴィだが、シユテルや今来たユーリからも可愛らしい音が聞こえた。

まあ俺も正直に言えば何度か鳴っているし、キリエも露骨に顔に出してはいないが空腹は感じているように見える。久しぶりに顔を合わせたユウキが居るのでお姉さんとしての建前を維持しているが、彼女がいなければきつと「おなかすいたああ」と言っているに違いない。

ちなみに今名前を上げていないアミタだが……彼女の腹の虫は彼女が乙女かどうか疑ってしまうほどの音を出してしまうので触れないでおく。

「ん!? お、おいしい……口の中が天国だよ。さすがディアーチエだね!」

「口に合ったのならばそれで良い。たくさん作っておるから満足するまで食べるが良い」

「うん!」

ディアーチエの言葉を皮切りにユウキは会話よりも食事を優先することにしたように、次々と自分の皿におかずの乗せて口の中に放り込んでいく。我が家では見られなかった光景ではあるが、まあディアーチエの料理ならば仕方があるまい。

というか……食べっぷりだけならレヴィの方が格段に上だからな。よくもまああれだけ食べて太らないものだ……あいつを全部体を成長させる栄養になっている気がしてならないが。

「あららん、ユウキちゃんずいぶんと勢い良く食べるわね」

「ディアーチエの料理は美味しいからね」

「それはそうだけど……シヨウくんの家ではあまり食べさせてもらってなかったのかしらん？」

「そんなことはないけど……シヨウの料理よりディアーチエの料理の方が美味しいから。あ、もちろんシヨウのも美味しいんだけどね！」

そんなに必死に言わなくてもディアーチエより料理の腕が下なのは分かっているんだがな。俺はそこまで料理にこだわりとかないし、家族に出す食事くらいの意識でしか作ってなかったから。

人に振舞うという意識でやればもう少し良いものは作れるだろうが、そういう機会に立ち会ったとしてもディアーチエはやてに任せる方が賢明だろうしな。

「別に慌ててフォローを入れる必要はないぞ。俺もディアーチエの料理の方が美味しいと思うし」

「ふん……まあ我としても幼い頃からやってきたのだから料理には多少の自信がある。しかし、菓子作りに関しては貴様の方が上だ。貴様が本気で取り組んだら我よりも上になるのではないか？」

「いや、それはないだろう。何かしらきっかけがあるなら別だろうが、現状じゃ今以上に熱を込めて料理することはないだろうし」

正月だとかクリスマスだとかイベントがある日は普段よりは気合を入れて作るだろうけど、それ以外だと食べられればいいくらいにしか思っていないからな。

そもそも、俺は昔からイベントがある日はディアーチエ達などと一緒に食事をすることが多いかった。故に今以上に料理に対する熱量が上がるとは思えない。手伝いはするので技量的には少しずつは上達しそうではあるが。

「やれやれ、せっかく同年代よりも腕があるというのに向上心のない人ですね。まあ料理に目覚めてデュエリストとして落ちぶれる方が困りますが」

「あはは、シユテルとはまだデュエルしたことないけど今の発言からして根っからのデュエリストだね。僕もデュエリストになったんだから忘れないでほしいけど」

「別に忘れてはいませんし、忘れるつもりもありませんよ。ユウキのゲームへの適応力はこの中でも群を抜いて高いのですから。お望みとあれば、今から1戦交えますが？」

シユテルさんシユテルさん、今からって部分は冗談なんだろうけどそんなに真剣な顔をしてたら相手は冗談だと思って思わないからね。冗談と思われないように冗談を言うてるんだろうけど、付き合いが短かったり久しぶりに会って人間はそれを理解しにくいだろうからせめて冗談のランクを下げてやろうよ。

と心の隅の方で思いつつディアーチエの料理を口に運んでいると、不意に服を引っ張られた。力が働いた場所が低い位置なのでおそらくユーリだろう。

「どうしたユーリ?」

「え……シヨウさん凄いです、何で見てないのにわたしだつて分かつたんですか?」

「他のメンツだったら服を引つ張つたりはあまりしなさそうだし、引つ張つたとしてもユーリほど低い位置を掴まないだろうから」

「むう……わたしだつてこれからですよ」

年齢的に誰よりも身長が低くてもおかしくないのに頬を膨らませるあたり、ユーリも色々と気にするようになってきているようだ。

まあ謝罪に近い形でこれからということ肯定しながら頭を撫でてやると、途端に機嫌が良くなるあたりまだ年頃の女のこととは言えないのだろうか。

「で、どうしたんだ?」

「えつと、その……ディアーチエがついさつきお菓子作りはシヨウさんの方が上だつて言つてたじゃないですか。もちろんわたしもシヨウさんのお菓子は食べたことがあるので味は知っていますし……だから……その」

「今度また食べたいってか?」

俺の問いかけにユーリは顔を真っ赤にしながら頷く。

俺達の年齢でもお菓子がほしいだとか誰かにせがむことはあるのだから顔を赤くするほど恥ずかしいことではないと思うが、まあユーリの性格的には仕方がないことなの

かもしれない。

それに……年頃の女の子とは言えない年齢だが、ユーリは同年代よりも早熟だろうし、年上に囲まれて生活しているだけあって考え方にも影響を受けやすいだろう。たくさん食べる子だつて思われたくない、くらいには考えてもおかしくないな。

「時間があればいつでも作つてやるよ」

「本当ですか？ えへへ、ありがとうございます。じゃあ……その今度シヨウさんの家に行つてもいいですか？」

家に来てもらった方が逆算して作りやすいし、また今の季節的に安全性は高くなる。

しかし、ユーリは体が丈夫ではない方なのであまり外を歩かせたくない。春や秋といった過ごしやすい時期ならまだ良いのだが現在はあいにくの夏なのだから。

「来るのは良いけど炎天下の中を歩かせるのは心配だから俺が持つてきてやるよ」

「そうですか……」

「そんなにしよんぼりするなつて……じゃあ来るのはいい。でもそのときは誰かと一緒に来ること。ひとりで来て体調が悪くなつたら大変だからな」

頭を撫でながら言うとうーりは笑顔を浮かべながら肯定の意志を返してきた。少し恥ずかしいのか顔に赤みがあるのがまた可愛らしい。……数年後、シユテルやはやて、アリシアといった人物に影響を受けて純粹さがなくなつてしまふんじゃないかと思う

と何とも言えない気持ちもなるが。

「あ、ユーリだけずるい。ボクも撫でてよ!」

「お姉さんにもたまにはそういうことしてくれてもいいのよん。もちろん、お姉ちゃんにもね」

「なっ!?! キ、キリエ、あなたは何を言ってるんですか。わわ私はそんなこと……風紀的によろしくないです!」

「仕方ありませんね、ここは私が行くとしましょう」

「ちよつと待ってシユテル、真剣な顔で何言ってるの!?!」

「やれやれ……こうなるとは思っておったが、やはり騒がしい連中よ」

「でも嫌いじゃないだろ?」

「嫌いじゃないですよね?」

「ふたりして聞くでない! ……まあ元気がないよりはマシなのは認めるが」

第28話 「山彦市での出会い」

空には今日も煩わしいほどの光を放つ太陽が輝いている。

施設内や交通機関の中などは空調が効いていて快適ではあるが、それでも外に出れば日光を浴びる時間は確実に存在する。

それだけに夏に外出するのはどうしても必要以上に気力が必要になってしまおう。きつとそれは俺だけでなく多くの者が近い考えを抱くはずだ。予報によれば今日は夜になっても気温が20度後半を維持するらしいので実に外出はしたくない……したくないのだが。

「シヨウ、次の駅で降りますので置き忘れに気を付けてください」

「心配するほどの荷物は持ってないから安心しろ」

この会話から分かるだろうが、俺は今電車に乗って移動している。

隣に座っているのは、涼しげな色合いのワンピースを着たシユテルである。最近は割かしコンタクトばかり付けている印象があったのだが、今日は長時間外出することを想定してメガネを使用している。

それほど視力が悪いわけではないと聞いているので、裸眼でもいいのではないかと

思ったりもするが……シユテルの性格からしてリスク軽減のためにそれはしないだろう。

……するにしても現状で考えれば確実に俺を巻き込むはずだ。例えば必要以上に俺に引っ付いてきたり、よく見えないからいつも以上に接近して話そうとしたりとか。俺とシユテルの関係を疑う人間は割かし存在するため実に避けたいことである。

他よりも距離感が近く、またこうしてふたりで出かけることもあるだけに努力するだけ無駄なのではないかとも思ってしまうのだが。……まあ俺の精神的な疲労を軽減するためには必要な努力なので全くの無駄ではないだろう。

話を戻すが、向かっている先は海鳴市から数駅離れた山彦市というところだ。

理由としてはまだ見ぬデュエリストと戦うためというのが真つ先に挙げられる。以前にシユテルと交わした約束を果たそうとしているのだ。まあ開発側に関わりがある身なので、海鳴市以外のブレイブデュエルの稼働状況を知るというのも理由に入っている。

「やれやれ……今に始まったことではないですが、もう少し可愛げのある返事をしたらどうですか」

人の事を散々からかう奴が何を言っているのだろうか。

感情があまり表に出る方ではないので可愛げないと言われるのはまあ良しとしよ

う。その点は自分も理解している。下手したら俺よりも感情が表に出ないシユテルに言われたくないという気持ちはあるが。

ただこの点を置いておくとしても……年齢で言えばシユテルは俺よりも下だ。飛び級しているので同学年ではあるが、これを踏まえて考えるとシユテルの方がマセていると言えるだろう。故に

「あんなシユテル、可愛げのなさで言えばお前の方が上だと思うんだが？」

「何を言っているのですか。私はナノハにも劣らない可愛らしい外見をしているんですよ。可愛げなら十分にあるはずですよ」

「俺が言っているのは外見の可愛げじゃなくて内面の可愛げだ。ここでそういう返しをしてくるお前は高町と比べると格段に可愛げはない」

格段という言葉を用いたものの高町とシユテルの性格を考えると比較するのも悪いような気さえする。容姿に関しては似ていると言われるふたりだが、大雑把に言ってしまうえば性格は真逆なのだから。

それにも関わらず、シユテルは気分を害したのか顔を背けてしまう。本気で拗ねているわけではないのだろうが、こういうところが時々面倒に思う。

だからといって構わないで放置しておくでアピールしてきたり、遠回しな言い方で構えと促してくる。それはそれで面倒なので……結論だけ述べればレヴィとは違っ

た意味で面倒な子なのである。シュテルとレヴィの面倒を見ているディアーチエは尊敬に値する。見方を変えるとふたりに玩具にされているとも言えるのだが。

「……チラ」

「……」

「……………チラ……………チラ」

チラチラとチラチラ言いながらこつちを見るな。簡潔に言つて鬱陶しい。

これがシュテルではなく高町だったならば、恥ずかしがつたりして顔を赤らめモジモジしていそうなので可愛らしく思えるだろう。しかし、現在俺の視界に映っているのは表情の乏しい顔でアピールしてきているシュテルだ。

構つてオーラのようなものは感じるが、ぼんやりとした顔でこちらを見てくるだけに沸々と胸の内に湧いてくるものがある。仮にデュエル時に見せるような凛とした顔だったとしても、おそらく似たような感情は抱きそうではあるが……ドヤ顔のように思えてならないし。

「あのな……構つてほしいならもう少し別のベクトルでしてくれ。そのやり方だと余計に突き放したくなる」

「そんな……そんなことを言われてしまつてはもつとやりたくなくなるではありませんか」

「何でそうなる？」

「男子は好きな子には意地悪をしてしまうと聞きますし、あなたもそのタイプだと小耳に挟みましたので」

確かに素直になれない奴はちよつかいを出して気を引くような真似をするが、別にそれは男子に限った話じゃないと思うんだ。というか、誰が俺は好きな相手には意地悪をするだなんて言っているんだ。言いそうな知り合いは小さなヒヨコかタヌキあたりしかないけれども。

「誰から聞いたかは知らないが鵜呑みにするな。お前への対応は基本的に素だ。意地悪でやっていることなんてほぼない」

「シヨウ、あなたは分かっていますね。今のような発言をするから意地悪と思われるのですよ」

「何でだよ?」

「やれやれ……仕方がありません、説明してあげましょう。いいですか? 付き合い始めて日の浅いナノハ達は除外するにしても、ここ最近のあなたはディーアーチェ達と比較すると私に対して冷たい気がします」

「……あのさシユテル、それについてはまあ否定できない部分はある。が、それは単純にお前の俺への接し方が他よりも悪いからだぞ」

「おや? 電車が駅に着いたようですね。シヨウ、さっさと降りるとしましょう」

颯爽と歩き始めるシュテルに対して俺は大きく一度ため息を吐いた。今みたいな言動をするから必然的に俺の対応が冷たくなっているのだと理解できないのだろうか。性格的に理解してやっている部分はありそうだが、正直俺が許容できる範囲を見極めているだけに性質が悪い。

まあ……俺がこいつに対して本気で怒れないだけなんだろうけど。

シュテルに対して面倒だとか鬱陶しいと思ったりすることはあれど、俺は子供の頃から彼女と付き合いがある。昔は今ほど茶目つ気がなかつたし、無口ではあつたが氣になつたことなどは素直に言う可愛い奴だつた。

今でも照れたりしたときはあの頃の可愛さが表に出るだけに心の底から嫌いになれるはずもない。

こういうことを思つても口には出さない。故に人からも少し素直になれだの言われるのだろうが、今のようなことを素直に言うのもそれはそれで良くないだろう。

そんなことを考えているなんて知らないシュテルは、俺に早く来いと言わんばかりに立ち止まつてこちらを見ている。

しかし、俺達はまだ電車から降りたばかりである。この場には行き交う人がそれなりに存在しているだ。その中には急いでいる人もおかしくないわけで……たまたまシュテルにぶつかつてしまうこともありえる。今まさに目の前で起きているように

「……っ!？」

「おっと……」

一連の流れが見えていただけに俺はすかさず倒れるシユテルの手を握った。線が細いなどと言われることがある俺だが別に非力ということはない。自分よりも小柄な女子を助けようとして自分まで転倒する、なんてことは起こらないわけだ。レヴィがたまにやるようなタツクルのような愛情表現の場合は別だが。

「大丈夫か？」

「は、はい……すみません」

「別にいいさ」

そう言つて俺達は歩き始める。

電車という快適空間から出てしまっただけに、言うまでもないだろうが再び熱せられている空気が触れてしまっているわけだ。俺はシャツがへばりつく感覚が好きという物好きではないため、1秒でも早く目的地であるゲームセンター《ステーションアズール》に行きたいのだ。

「……………あ、あの」

「ん、どうした？」

「どうしたもこうしたも……いつまでこうしているつもりなのですか？」

こうしている、というのは……おそらくいつまで手を繋いだままでいるのかということだろう。

何故手を繋いでいるかという点、思った以上に人が多かったことに加え、また人につかられたりして転びそうになるのも困るからだ。単純にはぐれてしまうのを防ぐという意味合いもある。シユテルならばレヴィと違ってその心配はない気もするので移動速度を速める意味合いの方が強いかもしれないが。

「最悪……目的地に着くまでだな。予想よりも人が多いし」

「先ほどのことでもあるので理由は理解しますが……そこで最悪という言葉を選ぶのはどうかと思うのですが。別にあなたの言っている意味を間違って解釈しているわけではないですが、何とか癩に障ります。というか、この前からあなたは少しおかしいです。私に対してその……スキンシップの取り過ぎというか、距離感を間違ってますか」

俺の記憶が正しいならばさっきまでこいつは自分に構えとアピールしていた気がする。今の発言が本音ならば本末転倒もいいところだ。

とはいえ、俺も馬鹿ではない。シユテルの発言の理由に見当はついている。

こいつは自分から触れたりするのは問題ないけど、相手からされるのはレヴィとか以外には慣れてないからな。しかも昔から付き合があるとはいえ一応男である俺と触

れているわけだ。頬に赤みが差していることから考えても照れているんだろう。

小さい頃は兄妹のような感じだったが、一般的に女子は男子よりも早熟であると言う。これに加えて、シユテルは飛び級している秀才だ。俺と話が合う時点で精神年齢は実年齢よりも上だろう。

デイアーチエも昔とは違った反応をするようになってるし、あいつは場合によつてはアマタ達よりも女の子らしい反応をするからな。シユテルにも恋愛面で見られるような女の子らしい部分が芽生えていてもおかしくはない。

それだけにここはすんなりと手を放すべきだろう。日頃からかわれる身としては仕返して続けたい気持ちはありはするが、下手をすると口を利いてくれない状態になったりと面倒な展開になるかもしれない。それを考えると無難な選択をするべきだ。

「それもそうだな。こんなクソ暑い日に手を繋いでるのもあれだし、お前はレヴィみたいに迷子になったりはしなさそうだからな」

「……レヴィと出かけると時は未だに手を繋いでるのですか？」

「最近はおふたりで出かけたりしてないが、出かけることがあれば多分繋ぐだろうな。あいつは昔からすぐ引っ付いてくるし、落ち着きがない。そのうえ身体能力が高いから追いかけるのも一苦労だ。挙句に迷子になったりするとすぐに取り乱して最悪泣く……繋いでる方がこつちとしても気が楽だ」

周囲から見た場合はあれこれと疑われるかもしれないが、ただシユテルやディアーチエに比べればレヴィは面倒を見ているだけと思われることが多い。シユテル達とは別の意味で学校では有名なだけにレヴィの性格は割と知られているから。

俺としては今の内に必要以上にスキンシップを取るのはやめてほしいのだが。今はまだいいけど、確実に女らしい体つきに変わっていつてるみたいだし……数年後には確実に男子にとつてよろしくない体になるだろう。ただ性格は変わりそうにないだけに非常に不安だ。

「まあ昔よりはマシにはなってるけどな……なあシユテル」

「何ですか？」

「手を放すんじゃないのか？」

俺はすっかり手から力を抜いているのだが、俺とシユテルの手は繋がれたままだ。恥ずかしいから放してくれと訴えていたはずなのに。

「いえ、大した意味はありません。ただ……あなたに迷子になられては困りますので」

「俺が迷子になるように見えるか？」

「細かいことを気にしないでください。そんなことより早く目的地へ向かいますよ。このままでは無駄に汗を掻いてしまうだけです」

目的地に向かうことは賛成だが……気にするなと言われて、はいそうですかと納得で

きる展開でもないのだが。これがまだ他の人物だったなら心境を推測することも出来るのだが、シユテルだと考えられる可能性が人よりも多すぎて確信めいた答えが出ない。

普段はからかわれたりしているとしても、ここぞというときはシユテルにちゃんと言うことを利かせられるディアーチエはやはり尊敬に値する。

「……何ていうか、お前とふたりで居るとディアーチエの凄さを改めて実感するな」

「どういう経緯でそのような発言に至ったのかは確信がないので追求しませんが、改めて実感する必要もないでしょう。彼女は我らの王なのですから」

「まあ……」

それもそうだが、と言おうとしてふと気が付いた。今シユテルはディアーチエを我らの王と言わなかっただろうか。ここに居るのが俺ではなくレヴィやユーリならば特に問題はないだろう。

しかし……俺はダークマテリアルズに所属しているわけでもないし、ディアーチエとの関係性も主従的なものはない対等のようなものだ。シユテル達と同じ括りにされるのはおかしいだろう。

自分の気持ちに従って指摘しようと思った矢先、タイミング悪く曲がり角から人影が現れ前を歩いていったシユテルが衝突してしまう。

激しい接触ではなかったが、相手の方が背丈があつたようでシユテルの方が飛ばされる。背後に俺が居たこともあり受け止めることには成功したものの、彼女のブレイブホルダーが落下してしまい地面にカードが広がってしまった。

「平気か？」

「はい、大したことでは……」

「紗耶、大丈夫か？」

「う、うん……私は、大丈夫」

視線をシユテルから前に戻すと、そこには1組の男女の姿があつた。長い黒髪の女性は白いワンピースを着ているが、男性の方は上下とも真っ黒……それに加えて同色のサングラスをしている。

俺自身も黒系統の服装を好みのであれこれと言いたくはないのだが、それでもこのクソ暑い時期に長袖はない。もしかすると肌が弱いので人並み以上に日焼け予防をしているだけかもしれないが……だとしても見ている側が熱くなる格好だ。

「あの、申し訳ありません」

「い、え……わ、私の方こそご、ごめんなさ、い！ あ……カ、カードが……、すぐ拾うか、らー！」

長い黒髪の女性は慌てながらしゃがんで散らばったカードを拾い始める。高校生く

らしい年代に思えるが、目元が前髪で隠れているので定かではない。ただ男性の方の背丈や雰囲気からして、少なくとも俺達よりも年上なのは間違いないだろう。

ちなみに余談になるが、シユテルはブレイブデュエルに関することは人一倍熱くなるところがある。故にカードを傷つけるような真似も傷つけられることも許しはしない。今回の場合はシユテルにも責任があるので問題なかったが、もしもわざとそのようなことをする人間と出会っていたら実に面倒くさいことになっていただろう。

「いえお気遣いなく。私の連れと一緒に拾いますので」

「ざらりと人を使う奴だな」

「そういうことを言っても拾ってくれるのがあなたでしょう？」

まあ……それは否定しない。

俺がシユテルの連れであることは間違いないし、相手側だけが悪いわけではないのだ。何もしないで見ているだけというのは逆に嫌になる。きっとそれは相手側の男性も同じなのだろう。そうでなければ同じタイミングで腰を下ろしたりはしないはずだ。散らばったカードはそこそこ数があるのだが4人がかりで拾えば瞬く間に回収できるものだ。だが残り数枚となったとき、不意に黒髪の女性が動きを止めた。

「(ハ)……(ハ)この力、カード!？」

どうやらシユテルが愛用しているアバターカードが動きを止めた理由のようだ。こ

の反応や落ちたものがカードだと分かってすぐさま拾うとしたことから推測するに彼女もブレイブデュエルをやっているのかもしれない。

そう考えればシユテルのカードを見て動きを止めるのも納得が出来るのだ。何故ならシユテルは全国1位の実力者であるのと同時に最強チームに所属している。知名度でいえばデュエリストの中ではトップに等しいだろう。むしろデュエリストで知らない人間はそうそういないのではないだろうか。

「え、え……うううそ、な……何でシユシユシユ、シユテルさんがここんこんなところに!？」

「お、おい紗耶……とりあえず落ち着け……って、おい紗耶!」

シユテルのカードを持ったまま失神気味になってしまった女性に俺とシユテルは固まってしまった。熱中症にでもなってしまったのだろうか……と考えるのが妥当なのだろうが、状況が状況だけに太陽にやられたのか、はたまたシユテルという存在を目にしてしまった故にやられたのかは分からない。

だがしかし、これだけははつきりと分かる。これからの流れが予定していたものとは別のものになるのだと。

第29話 「憧れと感謝は程々に」

現状を説明しよう。

俺とシユテルは、デュエリストの腕を磨きつつ海鳴市以外のブレイブデュエルの稼働状況などを調査するために山彦市に足を運んだ。

だが目的地であるアズールという店に向かっている途中に人とぶつかってしまい、シユテルのカードが散らばってしまう。相手側も拾ってくれたわけなのだが、その人が熱射病にでもなったのか倒れてしまい……今は空調管理が行き届いているアズールのコミュエリアに居る。

俺達としては目的地に着いたのであれだが……それでも今日のような流れでまた来たいとは思わないな。さすがに目の前で急に人が倒れるのは精神的に悪い。

「大丈夫か？」

「う、うん……その、迷惑かけちゃってごめ、ん」

たどたどしさのある話し方をしているが、おそらく先ほど倒れたからこうなっているのではないだろう。見ている限り、この黒髪の女性は人見知りというか内気なタイプに思える。

知り合いで言えばフェイトが最も近いだろう。ただ彼女は慌てたりしなければ話すときは普通なのでこの人の方が内気だろうが。

それだけに……黒づくめの人も大変なことがあったりするんだろな。まあ今回みたいにいきなりぶっ倒れることはさすがに少ないだろうけど。頻繁に倒れてるならさつき倒れたときに俺達と一緒に驚いたりしなかつただろうし。

「俺は別にいいけど……この子達には謝っておいたほうがいいぞ。また倒れるってんならやめてたほうがいいけど」

「だ……大丈夫、なはず。……そ、そのシユシユシユテルさん達、さつきはめ、迷惑かけてごめんなさ、い」

黒髪の女性は深々と頭を下げる。申し訳なさ以外にも凄まじい緊張が伝わってくるが、この人はシユテルのファンなのだろうか。

ファンなら……ぶつかったのがシユテルだって分かって倒れるのも理解できなくもない。シユテルは知名度的にファンが居てもおかしくないし。ディアーチェのように自分のことを踏んでくれと言うような変態チックなファンはいないだろうが。

余談になるがディアーチェは身近な人以外からも王さまという愛称で呼ばれて慕われているわけだが……その愛称故に変態チックなファンが出来ているかと思うと可哀想にもなってくる。あいつが元気がないときはちゃんと励ましてやることにしよう。

「いえ、別に気にしていませんので。私達の目的地もこの店でしたし……：そういうば、まだ名乗っていませんでしたね。私のことは知っているようにお見受けしますが、シユテル・スタークスと申します」

「これはご丁寧に。俺は日向疾風、よろしく」

「わ、わわ私はお小野寺さ、紗耶です！」

何とも真逆の挨拶をするふたりである。まあ小野寺という人はシユテルを前にして緊張しているのだろう。目元は前髪で隠れているが、顔に赤みが差しているし。

「何をぼけつとしているのですか。あなたもちゃんと挨拶をしてください。挨拶もできない子に育てた覚えはありませんよ」

「別にぼけつともしてないし、今からしようとしてたところだ。というか、お前は俺の何なんだ？ 俺はお前に育てられた覚えはないぞ」

俺がお前を育てた、ということならまだ分かる。小さい頃は面倒を見ていたわけだし、現在の性格を形成している要因のひとつになっていてもおかしくないのだから。

「私ですか？ そうですね……：私はあなたの

最大の好敵手

友

でしょうか」

「おかしなことを言われたわけじゃないし、それで別に良いんだが……何でわざわざ違う意味合いまで込めて言った？」

「きちんと理解しているとは、さすがは私の

最大の好敵手

友

です」

うん、だから別の意味合いを込めないでいいから。絶対俺にしか伝わってないし、お前のそういうところを理解出来るようになるにはそれなりの時間を有するからね。初対面のこの人達じやまず理解できないよ。お前がただ言いたいだけなのかもしれないけどさ。

「まあそれは置いておくとして」

「勝手に置かないでください」

「いや置くから、お前のおかげで話が進んでないからね。あとで話は聞いてやるから少し黙ってなさい」

やれやれ、別の街に来て浮かれているのかいつも以上のマイペースさだな。ここが海鳴市であったならこれほど話の腰を折るような発言はしなかっただろうに。近しい人間以外には基本的に淑女的な振る舞いをする奴なんだから。

それにしても……日向って人はともかく小野寺って人は落ち着きがないな。シユテルのファンだからなのか、一緒に居る俺がどういう人間なのか気になってるのかもしいないけど、露骨に交互に見る必要はないと思うんだが。俺達の間を疑うのは学校の連中だけで間に合ってるし。

「えつと、こつちが話を逸らしたのに戻すのもあれなんです……俺は夜月翔って言いませう。お連れの方がさつきから凄まじく俺とシユテルを交互に見ているので説明しておきますが、俺とシユテルの関係はただのクラスメイトなんで誤解しないでください」
「え、あ……べ、別に誤解してたりはしな、い。ただシユ、シユテルさんと仲良しなんだなって思っただけ、で！」

「シヨウ、聞きましたか？ あなたは客観的に見た場合、私と仲良しに見えているようですよ。なのでただのクラスメイトという言葉に関して撤回を要求します」

キリツとした顔で何を言ってるんですかねこの子は。

というか、何でそんなにマイペースに話すことができるわけ？俺が話を進めようとしてるのはお前も理解できてるはずだよな。それなのにどうして構ってと言わんばかりに話しかけてくるのかな。

「……話の続きですけど、今日俺達と一緒に居るのは」

「やれやれ、ここで華麗にスルーして話を進めるとは……親の顔が見てみたいものです」

「あのな、お前は俺の親に何度も会ったことあるだろ……頼むから少し黙っててくれ。ちやんとあとで構ってやるから」

「仕方ありませんね。ここはあなたに華を持たせてあげましょう」

その日本語の使い方が合ってる？

いや、まあ日本語の使い方は置いておくとして……冷静に分析するとこれまでとは違った手で嵌められたような気がしてならない。

俺の方から構ってやると言ってしまった以上、面倒臭がった対応をすればきつとシユテルは多様な言葉を用いて責めてくるに違いない。切り返せる手札が今のところないだけに……考えるのはここまでにしよう。下手に状況を悪化させないために目の前のことから片づけるべきだ。

「えーと……俺達の関係性について話してましたよね？」

「そうだな。まあ今のやりとりを見てたら何となく分かったけど……なあ紗耶？」

「え、あ、うん……ただ、のクラスメイトじゃないと思、う」

うん、俺が意図していた方向に話が進んでいないのは分かった。

にしても……小野寺って人、シユテルに対してはまともに話せてない感があるけど俺にはそこそこ行けるみたいだな。口数が少ない感じだから俺の望んでない答えをあえて口にしたのかまでは分からんが。

「はあ……まあ他のクラスメイトよりも親しいのは認めますが、変な誤解だけは勘弁してくださいよ」

「別に誤解をしてるつもりはないけど……確か夜月くんだったっけ？」

「ええ、そうですけど」

「俺はスタークスさんのことデュエリストだったこと以外これといって知らない。でもデュエルしてるときの雰囲気と君と居る時の雰囲気はがらりと違うのは分かるし、周囲の人間が疑うのも分かる気はする。俺の予想になるけど、君以外にはそこまでお茶目な感じは出してなさそうな気がするし」

確かに周囲の人間と接するときには割かし普通ですけど……親しくなった人物の大半は俺みたいな目に程度の差はあれ遭つてると思えますよ。

ちなみにデュエル中にも普段の片鱗はたまに出ています。スカイドツジのときとかぼんやりと佇んでるときもありますし。小野寺って人がシュテルのファンみたいなのので口にはしないでおきますけど。下手な発言をしてキレられたら面倒だし。

「否定はしませんけど、小さい頃から付き合っているからその分……つてだけですよ」

「へえ、じゃあスタークスさんとは幼馴染なんだ」

「まあ……そう言えなくもないでしょうね」

「ディアーチェならば素直に認められそうなことなのだが、シュテル相手だとどうにも

認めたくない自分が居る。

別にシユテルの事を嫌っているというわけではないのだが……いつも一緒だったというわけではないからなのか、はたまた俺の中の幼馴染というものへのイメージによるものなのか。まあシユテルを見る限り、幼馴染という言葉肯定しろと言いたげな雰囲気はないのでどうでもいいと言えはいいのだが。

「全国1位のスタークスさんの幼馴染と一緒にここに来るってことは……夜月くんも結構強いデュエリストなんだろう？」

「デュエリストなのは認めますが、こいつはこう見えて約束すれば誰とだつて遊びに行ったりしますよ。今回も前にした約束を果たすために来てるようなもんですし」

「シヨウ、今のあなたの言い回しは場合によっては私の印象を悪くする可能性があります」

「本音は？」

「あなたの言い方が何だか癪に障りました。ただ別に撤回はしなくていいです」

「だったら会話に入ってくるのやめてもらえますかね。お兄さんは黒ずくめの人と話してるんだから。」

「……あ、あの！」

「どうかさましたか？」

「ええええつと、その……！ あ、あの……おふた、りにき、聞きたいことが……」
シユテルが話しかけた途端に凄まじい動揺である。音量もどんどん小さくなつて
し……何というかある意味フェイトの数年後の姿を見ているかのようだ。

いや高町達という良い友人に出会えたのだからさすがに今以上に内気になることは
ないか。

余談になつてしまふのだが、そもそも話……シユテルを目の前にしてそこまで上がつ
てしまうものだろうか。シユテルに対して恋心を抱いている男子、などであれば理解で
きなくもないのだが。ただぶつちやけてしまえば、シユテルはとあるゲームで全国で最
も強い中学生。普通の人が聞けば「へえ、凄いじゃん」くらいにしか思われないので
？

まあ考え方によつては、それだけこの人がブレイブデュエルに本気ということなのだ
ろうが。そう考えると開発者側にも関わっている身としては悪い気はしない。

「わ、私……シユシユシユテルさんのデュ、デュエルを見て……その……えつと」

「時間が掛かりそうだから代弁するわ。紗耶は知り合いが開発者側にいるらしくて、ロ
ケテストの時のスタークスさんのデュエルを見たんだ。そのデュエルを見て強くブレ
イブデュエルに惹かれたみたいで……まあ簡潔に言えばスタークスさんに憧れや感謝
の念を持つてることだな」

日向さんの言葉に小野寺さんは何度も頷く。勢い良く首を縦に振るので首を痛めやしないかと不安にもなるが、それはさすがに心配し過ぎだろう。

ちなみに必要のない情報かもしれないが、小野寺さんの瞳は月村に近い青色だ。通常は前髪で隠れているので今のように何度も頷いてくれなければ見ることはできなかつただろう。

「なるほど、そうでしたか。先駆者であろうと心掛けていただけに小野寺さんのような方が居てくれるのは嬉しい限りです。ありがとうございます」

「——っ、いいいいえ、べべべ別に……そ、んなに風に言われるようなの、じゃ!?!」
「いえいえ、あなたのような方が居てくれるからこそ……私を含めたダークマテリアルズは常に頂に居続けデュエリスト達の壁であり続けようと思えるのです」

「シユテル、そこまでにしとけ」
「何故です?」

「この人はお前の言動で一喜一憂している。つまり、お前から色々と言われたら喜びのあまりさつきみたいなきっかけが起きておかしくないわけだ。何より……普段無表情なお前の笑顔はギャップもあつて可愛過ぎるからこの人は昇天しかねん」

また気絶でもされたら面倒なことこの上ない。

それに今日は帰るまでシユテルと一緒にのだからシユテルをグラントツ研究所に送り

届けるまでは何が起こってもおかしくない。故に……可能な限り体力や精神力は残しておかなければ。俺が生きて帰るためにも。

「か、可愛い……そ、そうですね。王者のチームの一員があれこれ言い過ぎてしまうと、貫禄や風格を疑われてしまうかもしれません。我が王たるディアーチエにも迷惑を掛けてしまうかもしれませんし、ここは大人しくあなたの言うことに従うことにしましょう」

……こいつ、照れてる？

いやいやいや、確かに俺はシユテルの笑顔は可愛いといった発言はしたけれども……俺よりも小野寺さんに比重を置いての発言だったと思うのだが。照れさせようと思つて口にした言葉でもないし。

シユテルは俺に対して最近自分に対する接し方がおかしいなどと言っていた気がするが、むしろシユテルの方が俺に対する反応がおかしいのではないだろうか。今のだつてこれまでなら

『可愛い？ 褒めても何も出ませんよ』

『それはナノハも可愛いと言っているようなものですよ。今度彼女に会った際に言っておきましょう』

みたいに答えているはずだし。これが続くようなら……今度ディアーチエにも相談

することしよう。この手のことはあいつを頼るに限る。

「ただ……紗耶の話には続きがあつて、紗耶にはスタークスさん以外にももうひとり会いたいデュエリストが居るんだ」

「もうひとり？ シュテルとのデュエルを見てブレイブデュエルをやりたいつて思ったんなら少なくとも上位のデュエリストでしょうね。アバターの恰好や使う得物の特徴とか分かったりしますか？ ロケテスト時の上位者なら知り合いに結構いますから分かるかもしれません」

「特徴ね……簡潔に言えば、漆黒のロングコートを着てる二刀流の少年だな」

漆黒のロングコートに二刀流。その特徴のアバターを俺は知っている。

とはいえ……世の中は広くデュエリストの数は今ではロケテスト時の比ではない。もしかすると俺の心当たりとは別人の可能性もあり得る。ここはもう少し様子を見るべきだろう。

「も、もつと詳しく言うなら……黒と白の長剣を持つて、通り名は《漆黒の剣士》。多分年齢はシュ、シュテルさんと大差はないと思、う」

「ロケテストの時は噂になつてみたいんだけど、本格稼働してからはスタークスさんと同等の実力があるらしいのに詳細不明。最近になつてまたチラホラ噂が飛び交い始めてるみたいだけ……」

……………アバターの特徴並びに通り名、ロケテストから今に至るまでの経緯。どれから推測しても小野寺さんの探している人物はひとりしかいない。

「どこかのシヨップに所属してるって話は聞かないし……いったいどこの誰なんだか」「いったいどこの誰と言われましても」

「ご、ごめんなさい。シユシユシユテルさん、は毎日のようにたくさんの人とデュエルするから分かりませんよ、ね」

「いえ、そうではなくて……あなた方の話に嘘がないのであれば、あなた方はすでに目的の人物に会ってますよ。今も私の隣に座っていますし」

シユテルが言い終わると、ふたつの視線が静かに彼女から俺の方へと移される。もしも俺がレヴィのようなタイプだったならば、ここで颯爽と名乗りを挙げていただろうが……俺がしたのはバツが悪そうに顔を逸らすことだけだ。

「え……ええええつと、ややや夜、月さんがしししし漆黒の……!?!」

「ふむ……どうやらまだ信じられないといった様子。ならば証拠を見せる他にありませんね。シヨウ、あなたのカードを出してください」

「そこまでしなくても信じてくれそうなんだが。それに……分かった、分かったからそ

れ以上近づくな」

無表情な人間が迫って来るのはなかなか圧迫感があるのだから。もし仮にこれがレヴィだったならば顔を驚掴みしているだろうし、八神堂の主だったならばでこピンやらチヨツプを撃ち込んでいただろう。

ブレイブホルダーから愛用しているアバターカードを取り出してシュテルに渡す。シュテルに渡したのは直接小野寺さんに渡すのが気が引けた、というわけではなく……単純にシュテルとの距離を元に戻すためだ。

「……そういえば、私はあなたのアバターカードを持っていません。予備のカードがあるならください」

「なあシュテル、お前は何のために俺にカードを出させたんだ？」

「問題ありません。会話しながらでもカードを彼女の方へ差し出すことは可能ですから」

それはそうだけど、人に何か渡すときはちゃんと相手の方を見て渡しなさい。人と話すときは目を見て話すことも大切だけど、今に関してはそこまで俺を優先しなくていいから。

「ま、ま……まままま間違いない！ わ、私が探してた……うううそ、まさかこんな偶然って……。し、しかもシュテルさんと一緒にだなん、て!? あわわわ………」

「え……お、おい紗耶！　ここで気絶は不味い……おい、しっかりしろ。気をしっかり持て！」

「……こうなるかもしれないから出したくなかったのに」

「出していなくても同じだったと思いますけどね。さて、彼女が落ち着くためにもいったん私達は離れた方が良いでしょう。何か飲み物でも買いに行きましょう」

「お前……こういう時は至ってマイペースだな」

第30話 「燃える小学生」

何で……何で当たらないのよ！

あたし——アリス・バニングスは現在非常に苛立ちを覚えている。それもこれも理由は目の前に居る漆黒のロングコートを纏った剣士のせいだ。

「このっ！」

相棒であるフレイムアイズを振るって炎刃を次々と放つ。が、どれもこれも漆黒の剣士は軽々と回避する。

ううん……回避するだけならまだいいのよ。あたしがこんなにも苛立ちを覚えるのは、全ての炎刃を紙一重で避けられるからで。

今あたしが相手をしているのは、全国No.1デュエリストであるシュテルと同等の実力を持つと言われているシヨウさんだ。なぜデュエルをしているかというと、1か月後に開催されることになったデュエリストの頂点を決めるイベント《ブレイブグランプリ》のために個人スキルを磨くためだ。

今日は単純になのは達と予定が合わなかったからってのも理由ではあるけど、あたしの周りでフェンサータイプなのってシヨウさんだけなのよね。機会があれば色々教

えてほしいと思っただけに今日はある意味運が良かったんだけど……。
「今の数じゃ足りないってんなら！」

これまでよりもさらに撃ち出す炎刃を増やす。

しかし、シヨウさんは慌てた様子を一切見せることなく、しなるように飛んで来る炎の刃を華麗な動きで回避していく。

同じフェンサータイプでもシヨウさんは、アマタさん達の特訓を受ける前とはいえあつたし達5人をひとりで倒したデュエリストだ。あたしなんかよりずっと強いってのは分かってた。けど……だからって負けてもいいなんてあたしは思えない。

そう思うだけに自分の攻撃が当たらないことにも苛立ちを覚えるし、当てることのできない自分の力量にも腹が立つてくる。

「なら……これでええッ！」

フレイムアイズを大きく横へ振りつつひと際大きい炎刃を放つ。それまでに飛来していた炎刃を回避していたシヨウさんに攻撃範囲外に逃れる時間はない。仮に持ち前の超反応で回避したとしても体勢は崩れるはずだ。そこにラツシユを掛けることが出来れば……

「——ッ！」

黒い閃光が疾つたかと思うと、あたしの放つた巨大な炎刃は一瞬にして弾け飛んだ。

防がれる可能性は十分に懸念していたが、魔法でガードではなく剣で斬られるという行為はなかなか精神的に響くものがある。

というか……舞い散る火の粉が演出を掛けてるみたいで癪に障るわ。これじゃショウさんの引き立て役じゃない。デュエル中なのに一瞬カッコいいと見惚れてしまった自分に一番腹が立つだけだ。

近接戦闘での勝ち目は薄いと思いき中距離から攻撃してこちらのペースに、と思つて戦つていたけど、このままでは勝機はない。

そもそも、前に出て戦わないというのはあたしらしくないわ。でも普通に仕掛けたんじゃ返り討ちに遭うだけ……ヴィータ、あんたのあのカード使わせてもらおうよ！

スキルカードを発動させるとフレイムアイズから凄まじい勢いで炎が噴射される。爆発的な加速を得つつ強烈な一撃を叩き込めるヴィータの愛用技ラケーテンハンマーを発動させたのだ。これが直撃すればショウさんとはいえタダでは済まない。

「ぶっ叩いて終わらせてやるわ！」

「君のそういうところは嫌いじゃないけど……終わるのはそっちだ」

まるであたしの行動を読み切っていたかのように、ショウさんは冷静に剣を構え刀身に魔力を纏わせる。軌道修正できなくもないがそれをすればこちらの攻撃力は一気に激減するはず。生き残れる可能性は高まるけど、ここで逃げるのはあたしの流儀に反す

る。

怖いってビビッてたら先になんか進めないのよ！

気合の込めてフレイムアイズを振るう。炎を推進力として使っている技なだけにあたしの攻撃の中でも最速の一撃だ。

しかし、目の前にある黒光を放つ長剣はこちらの速度は凌駕する。

掻き消えて見えるほどの速さで迫って来る闇色の一撃。こちらの攻撃も着実に相手へと進んでいるのに、まるで次元が違うのだと実感させられる速度差だ。

そのように認識した直後、漆黒の長剣は最大速度に到達しあたしの視界から姿を消す。それとほぼ同時にあたしの意識も刈り取られるのだった。

★

「……負けた……完璧なまでに負けたわ」

デュエルを終えたあたしは、コミュニケーションにある空いていたテーブルに盛大に突っ伏した。

シヨウさんにデュエルを挑む前から実力の差は理解しているつもりだったが、ここまで一方的に叩きのめされると精神的に来るものがある。

何も出来ずに終わったのって初めてのデュエルでヴィータにポコポコにされたとき以来な気がするわ。いや……あのときも格段に実力が上がってる分、ヴィータのときよ

りも自分の無力さを感じるわね。

全国1位の実力を持つシユテルのライバルであり、あたしが所属するチームT&Hエレメンツをひとりで壊滅させられる化け物。そのような認識はちゃんと持っていた。

しかし、あたし達5人がシヨウウさんに敗北を喫したのはアミタさん達やシグナムさんの特訓を受ける前。あの特訓を通してあたし達はさらに強くなったはずだった。

「けど……」

今日の結果だけ見れば自惚れも良いところだ。

あくまで上達したのはチームとしての強さであって、あたし達の個々の強さが一気に強まったんじゃないというのに。

というか……あたしは自分の能力を高めるためにシヨウウさんに付き合ってたって言うたんじやない。胸を借りるつもりで挑もうってデュエル前は思ってたはずなのに

「ああもう、何であたしはすぐに熱くなっちゃうのよ!」

自分の悪い癖だとは思っているのにどうしても直すことができない。勝負事になるとそれが余計に出やすくなってしまっただけにこのままではなのは達の足を引っ張ってしまう恐れさえある。ブレイブグランプリが開催されるまでの1か月の間でどうにかしなければ。

「……っと思っても、性格なんてすぐに変えられるものじゃないし。戦い方を変えれば、

とも思うけど……自分の好みに反する戦い方をする方が逆にストレスが溜まって熱くなる気がするわ。いったいあたしはどうしたら……ひゃっ!」

突然感じた冷たさにあたしは悲鳴を上げつつ身を震わせる。

これまでに似たような経験があるだけに冷たさの正体は何となく分かる。問題なのはいつたい誰があたしにそれをしたかということだ。状況的に出来る人物はあの人しかいないんだけど……

「シヨウさん……何するんですか?」

「難しい顔してたから、ついな。ほら、それでも飲んで落ち着きな」

「ついつて……ありがとうございます」

アリシアはややて、レヴィあたりだったらそれで納得出来てしまう自分が居るのだが、少なくともシヨウさんはあの子達とは違う分類に入る人間のはず。故についやりたくなつたといった理由で納得出来るはずもない。

とはいえ、あのままだったなら負のスパイラルによってあたしの精神は深く沈んでいただろう。それにジュースをもらったただけにあれこれ言うのはあまり良い気分ではない。状況的におごつてもらっているだけに。その分の代金を渡せば言える立場にはなるけど、それはそれで悪い気がする。

「……シヨウさんって今みたいなことするんですね。意外です」

「まあ偶にはね。と言つても誰にでもかんでもするわけじゃないけど……一部の人間に
関してはそのまま居ろつて思つたりもするけどね」

親しくなつた相手にしかやらないつてことみたいだけど、あたしにするのはやめて、
なのはやフェイトあたりにしてほしいものだ。あの子達ならあたしと似たような反応
をするだろうけど、きつと誰にでもするわけじゃないと言われれば満更でもない反応を
するはずなのだから。

そういう意味じゃ……恋する乙女は無敵とか言われるのも何だか分かる気がするわ。
しかし、なのはもフェイトも恋する乙女だと言われれば否定するに違いない。アリシ
アはやて並みに飄々とした態度にしろとまでは言わないけど、はにかみながら肯定す
るくらいにはなつても良い気がするんだけど。

このまま何もアピールせずにそのへんの誰かに取られた日には……慰めるのも面倒
臭そうだし。まあ本気で取り合いが起こつて険悪になるのはそれでそれで嫌だけど。

本当にシヨウさんのことが好きなのか、それとも恋に恋をしているだけなのか……そ
こらへんがはつきりと見えてこない年頃と性格な子達だけに今あれこれと動き回るの
はやめておいた方が良さだろう。

「ところで俺とのデュエルで掴めることはあつたかい？」

「……正直に言いますけど、あたしは何も出来ずに終わつたんですけど？」

「ふて腐れるなよ」

そう言つて俯き気味だったあたしの頭をシヨウさんは優しく撫でてくる。

子供扱いされているようで癪に障る部分もあるが、心地良さを覚えている自分も居る。昔からレヴィイみたいな子と関わってきただけに磨かれたスキルなのかもしれない。

「バニングスはまだデュエルを始めてそう日が経つてないんだ。ロケテスト組から見ても凄まじい勢いで成長してるさ。それに……君はシユテルみたいに勝ち続けることが義務みたいな王者じゃなく挑戦者だろ」

「それはそうですね……それでも負けたらくやしぃんです」

「その気持ちがあるなら強くなれるさ」

シヨウさんは少し強めに撫でた後、何度かあたしの頭をポンポンと叩いて撫でるのをやめる。

……あたしは何で名残惜しいとか思つてんのよ。そりやまだパパ達とかからは撫でたりしてもらふことはあるけど、あたしはもう小学4年生なのよ。撫でられるために何かするよ様な年じゃないでしょ……ああもう、大体シヨウさんの撫でスキルが無駄に高すぎんの上よ！

「多少落ち着いたかと思つたけど……まさかここで睨まれるとは。もしかして……まだ撫でられていたかったのか？」

「なっ——ち、違うわよ！ あたしはレヴィとかとは違うんだから子供扱いしないでよね！」

あたしはレヴィみたいに犬みたいなキャラじゃないんだから。まあ犬は好きだし、家にも飼ってるけど……断じてあたしは犬みたいなキャラじゃないはず。

「どうどう」

「馬でもないわよ！」

「はいはい、分かった、分かったから……とりあえず腰を下ろしな。ここは君の家じゃなくて人の目があるんだから」

ハッと我に返ったあたしはすぐさま浮かしていた腰を椅子へ下ろす。

頬が熱くなっているが、これもそれも目の前にいる中学生のせいだ。そんな想いを抱いているため、今のあたしはきつとシヨウさんを睨んでいるに違いない。

だがシヨウさんは全く気にした素振りを見せない。鋭いか鈍いかと言えば鋭い人なだけにあたしの気持ちは理解していそうなものだけ……理解しているのに涼しい顔をしてそうだと思えるから余計に頭に来る。

「さすがが前にイイ性格してるって言ってたけど、ほんとそれとおおりだわ……って、すみません。そのタメ口で話しちゃって！」

「いや、別に話しやすいならタメ口で構わないけど」

「でも……」

「親しくなれば年齢だとか関係ないさ。口調がどうであれそこに込められた意味が分からないほど馬鹿でもないし……そもそも、俺が昔から付き合ってきた連中に比べればタメ口で話されるくらいどうってことない」

ま、まあディアーチエは礼節とか弁えてるけど口調に関してだけ言えば尊大な方だし、シユテルは話し方は丁寧だけど毒舌というか茶目っ気満載などころがある。レヴィに関しては誰にでも気さくに行つちやうから……あのへんと比べたら確かにあたしがタメ口で話したところでインパクトはないわね。

「……本当にいいんですか？」

「君が断固として嫌だ、ということではなければ」

「分かったわよ、じゃあ好きにさせてもらうわ。あなたの今みたいな言い回し聞くとこつちで話さない方が馬鹿らしくなるし。その代わり、そつちもシユテル達と話すときみたいに話してよね。あたしだけつてのはフェアじゃないっていうか、こつちばかり歩み寄ろうとしてるみたいで癪に障るから」

本当は年下の自分が碎けた話し方するのに丁寧な感じに返されるのが嫌なだけなんだけど。シユテルみたいに誰にでもそういう感じなら気にならないけど、この人は相手によって碎けた話し方をするし。

「バニングスがそう言うならそうしよう」

「それもなし！ 今後はあたしのごときはアリサって呼びなさい。親しくなったらって言うんなら名前で呼びなさいよね」

「なかなか強引だな。まあ君……お前らしいとは思うが。デュエルでもそういうところが出てるし」

「さらりと言われたが上げてから落とすような言い回しただけになかなか引つかかる言葉だ。こういうところがあるからシユテルと似ているだとか言われるに違いない。」

「どういう意味よ?」

「そうやってすぐに熱くなるのがよろしくないって意味だ。個人的にアリサの戦い方は嫌いじゃないが、ブレイブデュエルは突っ込むだけで倒せるほど甘いゲームじゃない。さっきの俺とのデュエルもそっちが負けた最大の原因は熱くなったところだ」

「それは……そうだけど。でもあんなに避けられたら誰だって頭に血が昇ってもおかしくないでしょ」

「惜しいと思うる攻撃はあればまだいいけど、完全に読み切られて回避され続ければムカつくのは当然と言えるはず。それも並行して自分自身に対しても苛立ちを覚えるからあたしは人よりも熱くなってしまおうけど。」

「確かにそうだが、お前ももう始めたばかりの初心者じゃないんだ。チーム戦なら周りが助けてくれたり、協力して意味のある一撃を当てることが出来るだろうが、個人戦では全て自分でやらないといけない。意味のある一撃を当てるためには先を読みながらデュエルを組み立てる力が必要になる」

その言葉を聞いたあたしは冷静にさっきのデュエルを振り返ってみる。

近接戦闘じゃ分が悪そうだから中距離から炎で……って最初こそ考えてはいたけど、途中から完全にムキになってたわよね。相手がどう避けるだろうとかあんまり考えず、避けられないほど攻撃すればいいって感じだったし。

小技がない連続攻撃。決まれば勝負を決するだろうけど、そんなことが起こるのは初心者同士のデュエルくらいのもだろう。あたしを含めたチームT&Hエレメンツが今後臨もうとしているデュエルにそんなものは起こり得ないはず。

目の前のことばかり考えていた者と常に先を考えていた者……先ほどのデュエルの結果がああなってしまうのは当然としか言えない。

「加えて……俺みたいに同じフェンサータイプが相手ならさつきみたいに距離を開けて戦うのも有りではあるが、射撃が得意なタイプ……特に高火力を持つセイクリッドに対しては基本的に悪手でしかない」

「まあ……距離を取って撃ち合ったところで勝ち目は薄いわよね」

「さらに加えると、高町はともかくシユテルからすればアリサは格好の得物だ。性格的にヴィータに近い部分があるしな。シユテルはああいう手合いを倒すことに長ける」

愛しのヴィータと近いものがあると言われるのは嬉しい気分にもなるけど、ここでの意味はおそらく猪突猛進するタイプだ的なものでしょうね。そう考えると全く嬉しくないわ。反論したところで言いくるめられるのがオチなんだけど。

「まあシユテルを除いても同じフェンサータイプである俺にもアリサは相性悪いんだがな」

「どうしてよ？ タイプは一緒なんだから技術的な差はあっても相性は五分のはずじゃない」

「アバターの的なもので言えばな。俺が言っているのは性格的な相性だ」

なるほど、確かにシユテルと似ている部分があるシヨウとは性格的な相性は良くないかもしれない。普段の会話はともかく、デュエル時の冷静さに関して言えばあたしよりも格段に上なのだから。

「ふん……どうせあたしはすぐに頭に血が昇るイノシシですよーだ」

「いじけるなって。俺だって最初はアリサみたいに突っ込んで蹴散らす、みたいな戦法だったんだ。今のお前の戦い方は嫌いじゃない。むしろ好きな方さ」

「え……………いやいやいや、嘘でしょ！ あつ、今の嘘つてのはあたしの戦い方がどうこうって方じゃないからね」

「分かつてる分かつてる……………だが正直なところ嘘じゃない。最初は2本の剣を持って突っ込んで叩きかける。それが俺の戦い方だったんだ。まあそれじゃ上には行けないってことで1本だけで戦うようにしたんだがな。相手をきちんと観察するとか戦い方がもうひとつあった方が切り札的な意味で有利になるだろうし」

そう言われると……………1本で戦っている時よりも2本の剣を操って戦っている時の方が馴染んでいるように思える。

1本の時でもシヨウウの戦い方は攻撃的な方だけど、2本目を抜くと格段に攻撃的になつてくる気がするわ。手数が倍になったってことも理由でしょうけど、何ていうか攻撃は最大の防御を体現しようとしてる感じもするし。

アバターはフェンサータイプと固定ではあるけど、戦闘スタイルが一刀と二刀流……………ふたつあるのはよくよく考えれば脅威だ。それが高い次元になればなるほど、切り替わった時の対応は困難になる。

「ま、俺と同じようなやり方で強くなれてわけじゃないんだけどな」

「でしようね。あたしのアバターには二本目の剣とかはないし、そもそもそつちみたいの実体剣でもないから……………というか、同じやり方でやれたとしても性格的に同じ結果は

望めないでしょうし」

「そうだな。アリサが今後取り組むべきことは、まず最初に考えながらデュエルすることだ。勉強が出来るんなら頭を動かすことは苦ではない方だろ？」

「まあそうだけど……」

「加えて、俺達フェンサータイプは中距離まで戦えるとは言っても本領を發揮するのは近距離。だから敵との距離を詰めるためのステッピンと、自分の距離を保ち続ける立ち回りを磨くことだ。俺の見限り、アリサは正面からぶつかってくれる相手には滅法強い方だが、距離を取って戦おうとする相手からすれば的になりやすいからな」

戦い方に関して指摘されるのはアミタさん達との特訓があつたので初めてじゃないし、遠回しに言われるよりはズバズバと言われた方がマシだと思う方ではあるけど……感情の起伏がアミタさん達と比べてないせいかな、あの時には感じなかったこ感情が湧いてしまう。

けど……言っていることは事実だし、この人はあたしと同じタイプのアバターを使うデュエリストであり、同時に最強の一角でもある。なら言われたことを実践すればあたしは強くなれるはず。強くなれるんだつたら多少のことは目に瞑ってやるわ。

「同じチームに高町やアリシア、フェイトといった絶好の練習相手が居るんだから意識して取り組むといい。そうすれば、プレイスタイルを変えないでも今以上に強くなれる

さ」

「ええ、やってやろうじゃないの。グランプリまでに確実にレベルアップしてやるわ！」
「その意気だ」

「あのね、いま他人行儀な言い方したけどあなたにも手伝ってもらうんだからね。今以上に強くなれるって断言したんだから責任持ちなさい」

「……はは、何ともわがままだな」

「失礼ね、わがままなんじゃなくて甘えてるだけよ。年上に甘えられるのは年下の特権でしょ」

「商売のことやら冷静に分析する奴を年下とは思えないんだけどな。まあ手伝えるときは手伝ってやるさ。ただし、実力差に心が折れても責任は取らないぞ？」

「誰に言ってるのよ、あたしの心はそんなに柔じゃないわ。そのうちボッコボコにしてやるんだから！」

第31話 「ふたりは小悪魔？」

「何ていうか……君に会うのも久しぶりな気がするな」

私にそう言ったのは、私よりも少し年上の中学生。白いシャツの上に黒い半袖のパーカー、下はベージュのズボンと比較的ラフな格好をしている。まあ私も休日なのでワンピースなんだけど。

どうして私とシヨウさんが一緒に居るかというのと、八神堂に行く途中でばったりと会ったからだ。今日はシヨウさんも私と同じように本を買いに行くらしい。

「私は少し前までアミタさん達に特訓してもらってましたからね。シヨウさんが私達の相手をしてくれてたら今のセリフは出なかつたんでしようけど」

「まったく……君はさらりと毒を吐く奴だな。しかも笑顔で言うあたり本当イイ性格をしてる」

何だか毎度のようにイイ性格をしていると言われてる気がするけど、私からすればシヨウさんもイイ性格していると思うんだけどな。必要以上の言葉を言っちゃったり、遠回しな言い方をしたりするわけだから。

「シヨウさんがそういうことを言う人だから言うんです。というか、みんなが居る時は

そういうこと言わないでくださいね。私はシヨウさんみたいに誰にでも冷たい言葉とか言つてないんですから」

「別に誰にでも言つてるつもりはないし、言われてる奴にはそれ相応の理由があると思うんだけど？　というか、何その俺だけにしかこういうことは言わない。俺は特別なだから納得しろ、みたいな言い回し……この短時間で君に対しては言葉を選ぶ必要はないんじゃないかって思えてきたよ」

そう言う割にシヨウさんの口元は笑っているし、纏っている雰囲気も優しい。

私はなのはちやん達と比べると異性と話すのが得意ではない方だけど、シヨウさんに限つてはあまり抵抗のようなものは感じない。多分必要以上に距離を詰めようとしてこないからこちらのペースで進むことが出来るからだろう。

年上の男の人でこんな風に話せるのって恭也さんくらいだったのに……でも恭也さんも普通の人と比べると感情を出す方じゃないし、そういう意味ではシヨウさんと似てるかも。シヨウさんと話せるのは恭也さんでこの手の人に慣れてたからかもしれないかな。

「私は別にディアーチエちゃん達と話すときみたいに砕けた感じで話してもらつて構いませんよ」

「その笑顔の下に何を考えてるか分からないだけに簡単には承諾しなくないところだ

な。月村はアリサと同じようにお嬢様っぽくはあるけど、アリサほど分かりやすくはないし」

まだ言葉を選ばないようにするとは断言していないはずだけど、なかなかひどいことを言っている気がするのには私だけなのかな。でも……それ以上に今シヨウさん、アリサちゃんのこと名前で言ったよね。

私の記憶が正しければ、シヨウさんは私達のことをみんな苗字で呼んでいたはずだ。

なのはちやんのことは高町だったはずだし、私のことは月村。アリサちゃんのこともバニングスって呼んでたはず。フェイトちゃんやアリシアちゃんは前から顔なじみだったみたいだし、苗字じゃ両方反応しちゃうだろうから名前で呼んでたけど。

もしかして私が聞き間違っただけだろうか……いや、さすがに二度もアリサと言われたのだからそんなはずはない。私が思うにシヨウさんは理由もなく呼び方を変える人じゃないし、これはアリサちゃんと何かあったのかな？

アリサちゃんの呼び方が変わったからといってどうこうということはないけど、アリサちゃんの近しい人間のひとりとしては気になる。

「あのシヨウさん、アリサちゃんと何かあったんですか？」

「どうして？」

「今アリサちゃんのことアリサって言ったじゃないですか。前まではバニングスだった

のに」

「ああ……つい先日、1日中一緒に居たことがあってね。主にデュエルをして、そのあと今後の強化すべきこととか話してただけだけど。まあ話してる内にタメ口で話してもいいよって流れになって、そしたら自分だけタメ口なのはフェアじゃないとか、親しい相手のことは名前で呼ぶべき……みたいになったから変わったただけだよ」

アリサちゃんの性格を知っている身としては理解できる流れではある。きちんとした対応も出来るけど、仲が良い相手にはタメ口で話すし。

いつも一緒って感じがするけど、私が知らないところでアリサちゃんも色んな人と交流してることだよ。あまりシヨウさんと仲良くしていると、アリシアちゃんあたりがうるさくなる気がするけど。もしも今は強く出ていないのはちゃんやフェイトちゃんあたりも参加したら……賑やかな毎日になりそうかな。

「なるほど、そうだったんですか……じゃあ私の事もすかかって呼んでくれてもいいんじゃないですか？ ついさつきもつと砕けた話し方していいですよ、って話したばかりですし」

「構わないけど、って言いたいところだけど……君がイイ性格をしているのは知ってるからな」

「……でそういうことを言うシヨウさんの方がイイ性格してます。年下の女の子が歩み

寄ろうとしてるんですから普通に応えてくださいよ」

「唇を尖らせると可愛い顔が台無しだぞ」

「適当な気持ちで言われても嬉しくありません」

と、ムスツとした顔でシヨウさんを睨みただけ……数秒の沈黙の後、私とシヨウさんはほぼ同時に嘔き出した。シヨウさんはそのあと「本当イイ性格してる」と言って私の頭を撫でてくる。

自分が子供であることは理解しているし、シヨウさんが年上なのは変えることが出来ない事実だけ……それでも子供扱いしてほしくない気持ちはある。

……それと同時にシヨウさんから歩み寄ってくれてるみたいでちよつと嬉しくもあるんだけど。

近しい人にしかシヨウさんはこういうことはしなさそうだし、私は別に頭を撫でられるのは嫌いじゃない。むしろ……好きかもしれない。レヴィちゃんといった面倒を見ないといけない子が身近にいたせいなのか、何とも落ち着く撫で方をしてくるのだから。

「もう……子供扱いしないでください。外を歩いてるんですから人の目だつてあるんですよ」

「そう言う割に嫌がつてるようには見えないけど?」

「私はシヨウさんのために言ってるんです。誤解されても知りませんよ?」
「誤解されるにしても兄妹が関の山だろ。クラスメイトに見つかったとしても、さすがに君と恋仲にあるとは思われないだろうさ」

まあシヨウさんは黒髪だし、私もシヨウさんほど綺麗な黒色じゃないけど分類的には黒髪。身長差や年齢差から考えても、周りからおかしな目で見られることはない気がする。

兄妹か……シヨウさんと話しやすいのは私がお兄ちゃんみたいだなって心のどこかで思ってるからなのかな。もしも私にお兄ちゃんが居たらこんな感じになりそうな気はするし。シヨウさんほどイイ性格はしてなくていいけど……。

「……今度は何を笑ってるんだ?」

「別に大したことじゃないですよ。ただ……兄妹に見えるのなら今度からシヨウさんのことお兄ちゃんって呼ぼうかなって思っただけで」

「それはぜひともやめてくれ。今みたいにふたりつきりならまだしも、周囲に誰かしらいたら面倒なことになかなる気がしない……」

確かにシヨウさんによく絡むというか相手をしてほしいアリシアちゃんやはやてちゃん、シユテルちゃんあたりの前でお兄ちゃんとか言ったら大変だろうな。なのはちゃん達の前でもあれこれと言われそうな気がするけど。

「じゃあ、すぐかって呼んでくれますか?」

「はあ……天使の皮を被った悪魔っていうのは君みたいな子のことを言うんだろうな。分かった、名前に関しては善処しよう。その代わり……みんなの前でお兄ちゃんとか言ったら容赦しないからな」

「それでいいですよ、お兄ちゃん♪」

「やれやれ……清纯そうに見えてとんだ小悪魔だ。君に関しては別の意味で言葉を選ばないといけない気がするよ」

小悪魔だなんてひどいなあ。私がここまでやる相手なんてシヨウさんしかいないのに。たまにアリサちゃんとかをからかったりするけど、割とすぐにやめちゃうから。

だけど今日こんな風にしてみても何となくアリシアちゃん達の気持ちがかかったかも。普通に話すのも楽しいけど、こういうやりとりには別の楽しさを感じるし。それに……なんだかんだでシヨウさんはきちんと反応してくれるから優しい人だなあとも思ったりもするけど。

そんなことを思いながら他愛もない話をしている内に目的地である八神堂が見えてきた。

シヨウさんがぼそりとはやてちゃんは地下に居てほしい、なんてことを呟いたのを私は聞き逃さなかったけど、それを咎めるような真似はしないでおくとした。多分私の

勘だけど、そんなことをしなくてもはやてちゃんならシヨウさんの存在を嗅ぎつけそうだし。

「…………ふう」

「ふふ、そんなに身構えなくても」

「顔を合わせる度に何かしらされる身にもなつてくれ。あいつなら店先に現れた瞬間に満面の笑みを浮かべながら、飛びつくように抱き着いてきてもおかしくないんだから」
「確かに簡単に想像できる光景ではありますが、それだけははやてちゃんがシヨウさんのことを好きってことじゃないですか」

「もうくすずかちゃんは何言うとするんや。そないなこと言われたら恥ずかしいやないか」

突如聞こえた声に振り返ってみると、そこには愛用しているタヌキさんパーカーのはやてちゃんが顔を赤らめながら悶えていた。

えつと……結構気配とかには敏感な方だったりするんだけどな。はやてちゃん、いつの間に私達の背後に現れたんだろう。まあはやてちゃんならこういう現れた方をしても納得しちゃつてる自分が居るけど。

「確かにわたしはシヨウくんのこと好きやし……あ、もちろんLikeやのうてLoveの方やで。そのへんの子と一緒にされるんは心外や。何たってシヨウくんどうい

う風に付き合い始めて、そんで結婚して……子供は何人産もうとか、老後はどうやって過ごそうかまで考えとるんやから！」

「別に誰もお前と他人を比べたりしてないし、今のところお前の考えてるような未来は訪れないぞ。結婚するならお前より月村を相手に選ぶし」

「な、なんやて!?!」

はやてちゃんは盛大に崩れ落ちる。前からノリが良い子というのは知っていたけど。やはりシヨウさんを相手をしているときに最も力を入れているよね。

「わたしの方が付き合いは長いはずなんに何ですずかちゃんに負けるんや。いったいわたしの何が劣ってるって言うんや！」

あはは……はやてちゃんは相変わらず元気だなあ。

私じゃこんなハイテンションにはなれないよ。元気や明るさといった部分なら完全に私の負けかな。あと頭の良さとか……こう見えてはやてちゃんってすでに大卒の天才だし。冷静に考えると私がはやてちゃんに勝ってることって身体能力くらいなんじゃ……。

「いや、色々と劣ってるだろ。落ち着きとか落ち着きとか落ち着きとか」

「色々と言った割に落ち着きだけなん!?! とうか、そこだけでわたしはすずかちゃんに負けたんか……シヨウくん好みの料理とか作れるように努力しとるって言うのに。」

……ぐす」

「そのへんの努力をする前に性格を直す努力をしてこい」

「いやいや、性格を変えてもうたらわたしが無くなつてまうやん。いくら好きな人のためとはいえ、自分を曲げる気はあらへんで」

ドヤ顔でそう言い切るはやてちゃんは、直接対象になつていない私でも正直うつとうしいなど思つてしまった。きつとショウさんは私よりもはるかに内心グツグツ煮えかえつていることだろう。

「というか、ショウくんもいい加減わたしにデレてくれてもええんや……ちよつ、無視して中に入ろうとせんといて!? わたし、こう見えて傷つきやすいんやで!」

はやてちゃんの叫びにショウさんはノーリアクションを決め込み、店の中に歩いていく。相手をしてほしいはやてちゃんは必然的に彼の後を追い……疎外気味の私は静かにそのあとを追つた。疎外なんて言葉を使ったけど、私がふたりの世界に入ろうとしなだけなんだけど。

正直に言つてしまうと、あの会話に入つていくのは疲れるつていうのも理由ではあるけど……ふたりのやりとりを見るのつて結構楽しいんだよね。

「なあなあ、わたしが悪かつたからそう怒らんといて。せつかくの可愛い顔が台無しや」
「だったら俺の可愛い顔よりもお前の顔を可愛くしてやる。月村……すずか、悪いがそ

のへんからペンを持ってきてくれ」

「ペンやて!? わ、わたしのおでこに肉とでも書く気なんか!」

「ふん、誰が肉なんて書くか。お前なんかひげを書いて鼻のてっぺんを塗りつぶすだけで十分だ。書くにしてもタヌキって書いてやるよ」

「な、何やろ……ひどいことされるはずなのにそこまで嫌じやない自分がおる」

「いやいやいや、はやてちゃんはそこはちゃんとやめてって言おうよ。はやてちゃんがタヌキ好きだつてのは分かるし、芸人的な扱いに喜びを感じてるのかもしれないけどさ。でもはやてちゃんは女の子なんだよ。シヨウさんのことが好きだつていうならもつと慎みのある女の子になろうよ!」

「さて、楽しいやりとりはここまでにしてお仕事しよか。見たところふたりはデュエルしに来たつて感じやないみたいやけど、今日はどういう本をお探しなん?」

「えつと……私は今日は工学系の本を見に来たんだ」

「へえー、すずかは工学に興味があるのか」

「あ、はい。お姉ちゃんが機械とか好きなんでその影響で……シヨウさんも工学に興味あるんですか?」

「あるというか、俺の父さんや叔母は技術者だからな。知り合いにもその手の人間は多いし……昔から触れる機会は多かったから将来の仕事のひとつとしては考えてるよ」

シヨウさんの言葉に不意に去年学校でやった授業を思い出す。そのときの授業内容は将来の夢について考えてみる、ということ。私はそのときに具体的な職業までは考えきれなかったけど、工学系に進むかなと思った。今もこのまま進めば工学系に進もうと考えている。

「なら私と同じなんです。私は今のところはつきりとした職業までは考えきれてないですけど、シヨウさんはもう考えたりするんですか？」

「いや、俺もはつきりとは決まってるよ。ただ父さん達は最新技術……君もやってるブレイブデュエルの開発に携わった人間だからね。進むとしたらそういう方向になるかな。家にある本もそっち方面の物が多いし……興味あるって顔してるね。別に貸すのは構わないし、持って帰ったりするのが面倒ってことなら家に読みに来ても構わないよ」

「え、いいんですか？」

「まあ君なら好き勝手家の中を散策する、なんてことはないだろうからね」

男の人の家に行くのは緊張するけど、本を読みに行くということであればそこまで緊張はしない気がする。確か聞いた話ではシヨウさんの従妹であるユウキさんも居るらしい。

ちなみに何でユウキさんのことを知っているかというと、彼女がホビーショップT&

日のイベントデュエルを手伝ったりしてくれている存在であり、また爆発的な速度で成長しているデュエリストとしてそれなりに有名だからだ。

「じゃあ……今度お邪魔してもいいんですか?」

「ああ。ひとりで来るのがあれだったなら……高町達と一緒に構わないよ。ただし、うるさそうな奴だけは抜いてくれ」

「あはは……それをするとながあとで色々と言われちゃうんですけど」

「何かを得るためには何かを失うものさ」

それはそうですけど、私からすればアリシアちゃんとかと一緒にでもあまり困らないんですが。困るのはショウウさんになるだけなので……まあお邪魔させてもらうことを考えると簡単に実行できることでもないんだけど。

それにしても……急にはやてちゃんが静かになつたような。一通りショウウさんと会話して満足したみたいに見えたけど、いつもはやてちゃんなら会話に入ってきてるはずだよ。

そう思つてはやてちゃんの方に視線を向けてみると、これまで見たことがないくらいムスツとしている彼女の姿が見えた。

「は、はやてちゃん……どうかしたの?」

「べ・っ・に……どうもしてへんよ。ただショウウくとすずかちゃんや仲良しさんやなつ

て思っただけや。いつの間にか呼び方も月村からすずかに変わつとるし、あつさりとお家にお呼ばれされるんやから」

「おいおい、ふて腐れるなよ」

「ふて腐れてへんもん。ただ年相応に自分の気持ちを表しとるだけや」

今までにはやてちゃんの色んな感情を見てきたけど、ここまで拗ねてるといふかいじけてるのは初めてだ。いつもはなんだかんだで冗談だつたりするのに、今回に限つては本気だということが分かる。

はやてちゃんでもこういう顔するんだ……私とシヨウさんが仲良くしてるのを見て嫉妬したつてことだよ。それだけはやてちゃんはシヨウさんに真つすぐなんだ。もしかすると普通の振る舞いも恥ずかしいのを隠すための演技だつたりして……。

「イチヤイチヤするんやつたら、よそでやってくれへん」

「大卒なんだからもう少し大人になつてほしいんだがな。俺はあまりお前のそういう顔は好きじゃないし……納得できない部分もあるが、俺が悪かつたよ」

シヨウさんは大きなため息を吐くとはやてちゃんに近づき、そつと手を彼女の頭の上に置いて軽めに何度か叩いた。

だがはやてちゃんの表情に変化はない。そのためシヨウさんは優しく撫で始める。すると少しづつはやてちゃんの顔に明るさが差し始め笑顔に変わった。言い方は悪い

かもしれないけどチョロくはないだろうか。

でも……私ははやてちゃんにはチエスを使った特訓をしてもらっただけに頭の回転が良いのは知ってる。だからここに至るまでを計算でやってる可能性は十分にありえるんだよね。

もしもそうなら……はやてちゃんこそ本当の小悪魔だと思う。アバターやスタイルとの出会いは運命つて前に言つてた気がするけど、はやてちゃんのアバターはR・O・G。その背中には羽があるわけだけど……もしかして何か繋がりがあつたりするのかな？

「しやーないなあ、今回は水に流すことにしよか。その代わり、すぐかちゃんがシヨウくん家に行くとき一緒に行かせてもらおうで」

「はあ……好きにしろ。ただし、好き勝手動き回るなよ。俺ひとり生活してるわけじゃないし、レーネさんの部屋にあるものを壊したら一大事だからな」

「あんなあシヨウくん、わたしかて時と場所に合わせて行動は変えるで」

「だつたら……いや、言つたところで無駄か。言つて聞くようなら苦労なんてしてきてないし」

「ここら、ため息ばかり吐いてると幸せが逃げてまうで」

「あのな……誰が吐かせてると思つてるんだ？」

「そこは問題あらへん。シヨウくんから出た幸せがわたしがもらつとるから結果的にプラマイゼロや」

「いや俺からすればマイナスだから」

あはは……こうやってみると私なんかよりもずっと仲良しに思えるんだけどな。やきもちを妬いたりする必要はないと思うんだけど。

ただはたから見た場合、言つては悪いけど私の場合よりも兄妹に見える可能性はある。

とはいえ、今の私に出来ることは見守ることだけだし……しばらくは今の立場に居ることにしようかな。今後のことはそのときになつて考えればいいというか、考えるしかないだろうし。

第32話 「金色の姉妹」

世の中にはあまり理解出来なかつたり、共感できないことがそれなりにある。

私にとつてその代表と言えるものは恋愛だ。人を好きになるということは素敵なこ
とだと思うし、いつかは自分も誰かを心から愛したいと思う。

しかし……目の前に居る人物を見てると複雑な気持ちになるのが現状なのですが。

「はあく……一向に進展しない」

私の前で盛大にだらけている……いえ、突っ伏しているのは私と幼い頃から寝食を共
にしてきた人物。簡潔に言ってしまうえば、私の双子の姉だ。名前は黒崎フアラ、綺麗な
長髪と整った顔立ち、それに抜群のスタイルと妹の私も素直に認める美少女……なの
が。

学校といった場所では真面目ですが冗談も言ったりする社交的な感じに振舞って
いますが……今のように近くに私しかいないと途端にだらしなくなるから困ります。学
校の者に見られれば落胆されたとしてもおかしくないですし……そもそも、喫茶店に居
るのでから突っ伏すのはやめてほしいのですが。

「セイ、私どうしたらいいのかな？」

「素直に告白でもすれば良いではないですか」

「なっ——そそそんなこと出来るわけないでしょ！　まだそんなことが出来る仲じやないし、物事には順序つてものあるんだから……いつかはしなきゃって思うけど」

頬を赤らめながら髪の毛を弄る姿は、私の目から見ても可愛いと思える。大抵の男子なら一目惚れをしてもおかしくないのではないだろうか。この手の話になった時に毎度のように見ていると可愛さよりも鬱陶しいというか、苛立ちのような感情の方が勝るのが現実ですが。

「いつか、いつかと……そんなんだからフアラは一向に夜月と仲良くなれないですよ」
「し、仕方ないじゃない。セイみたいに夜月くんと一緒にクラスってわけでもないんだし、話すきつかけとかもないんだから」

「はあ……」

私の性格が男勝りなのか分かりませんが、誰かと仲良くなりたいたいと口にするのに言うだけでこれといった行動を起ささないのはどうかと思います。恥ずかしいのは分かりませんが、自分が動かなければ何も変わりはないというのに。

昔はフアラのようにになりたい……などと思うこともありましたが、今となつては一卵性ではなく二卵性の双子で本当に良かったと感じます。髪色に関して同じ金色ですが、私はフアラよりも中性的な顔立ちをしていますし。

ただ……食べているものは同じはずなのにどうして差が生まれてしまうのでしょうか。私はスレンダーな体型をしていますし、フアラも一見そのように見えるのですが……着やせするタイプ故に脱ぐとなかなかのものがあるのが現実。フアラの方が女性らしい顔立ちをしているのは認めますが、同じ日に生まれた姉妹なのですからそこに差を付けなくても良いものを。

というか……なぜ私はフアラとふたりで出かける際は男性らしい恰好をしなければならぬのです。最初はフアラに悪い虫が近寄ってきてても困るので承諾していましたが、こう精神的にストレスを感じさせられることが多いと嫌になってきます。

「まったく……フアラは女々しいことこの上ない。告白してくる男子は大勢居るのですから、いつそのこと誰かと付き合ってみれば良いのではありませんか」

「なっ……セイには色々と相談しているし、自分が女々しいのは認めるけどそういう言い方はないんじゃないかな。大体セイは好きな人がいないから私のことを女々しいとか言うのよ」

「確かに私には好きな人はいません……が、あなたが夜月を好きになったのはいつのことですか？」

今季節は夏。フアラが私に夜月のことについて話すようになったのは今年の春頃……少なくとも1年の4分の1ほどの時間は流れているわけです。それだけの時間が

ありながら関係性に何も進展がないというのは、本人の努力が足りないばかりか何もしていないのと同じではないのでしょうか。

「好きだ好きだと言うのなら何かしら行動に移したらどうなのですか。何もせずに仲良くになりたいなどと矛盾していると思わないのですか？」

「うう……だって」

「言い訳なんか聞きたくありません。そもそも、なぜ夜月なのですか？ ファアラだって彼の周りにシユテル・スタークスやデИАーチェ・K・クローデИАといった存在が居るのは知っているでしょう」

聞いた話によれば小さい頃から付き合いがあるといいますし、また学校でもよく話しているところを見ます。親密さで言えばファアラとは雲泥の差があると言えるでしょう。

ちなみに夜月は1学年下のレヴィ・ラツセルとも親しいようですが、彼女の場合は友人としての枠よりも上に行く気がないので今回は口には出さないことにします。

「彼女達は飛び級で私達と同学年になつていますから外見的な魅力ではファアラに軍配が上がるでしょうが、それも数年後には同等……下手をすれば逆転される可能性もあります。長年の片思いが成就する、という物語は人に感動を与えるものではありませんが……ファアラで考えた場合、長期戦になればほぼ失恋するでしょうね」

「いつもどおりのトーンで失恋だとか言わないでよ！ 私だってそれくらい分かって

る、分かってるわよ。でも仕方ないじゃない、気が付いたら好きになってたんだから。恋は理屈じゃないの!」

恋は理屈じゃない……確かにそうなのかもしれない。でも今の私にはやはり理解できない言葉だ。

故に……今のままでは私とファラが理解し合うのは難しいのでしようね。私が誰かに恋をするか、それともファラが変わるか。いずれにしろこのままこの話を続けるのが得策ではないことは確かです。早々に切り上げることしましょう。

「やれやれ……そこまで言うのなら多少なりとも進展させてもらいたいものです。現状では私以下なのですから」

「言われなくてもそのつもり……ねえセイ」

「何ですか?」

「今何て言った? 私よりもセイの方が夜月さんと親しい、みたいなこと言われた気がしたんだけど」

目の前に居るファラはにこやかに笑っている。

しかし、そこにあるのは嫉妬めいた黒い感情……笑っているのに笑っていない顔というのはいかような顔のことを言うのでしょうか。

もしもこれを学校の者が見たら走り去るとまでは言えませんが、少なくとも怯えるで

しょうね。少し前までは怒るときは怒ってますよと言わんばかり顔だったはずなのに。なぜこうもより怖い方へ進んでしまったのか。夜月への気持ちが原因なのなら……：将来的に付き合い始めた場合、夜月の身が心配でなりません。

「確かに言いましたが……それが何か？」

「何か？　つてことはないんじゃないかな。セイは私の気持ち知ってるはずだよね？」

なのに私よりも夜月さんと仲良しつてどういうこと？　いつからセイはそんなに性格の悪い妹になったのかな？」

「誤解しないでください。私はあなたと違って彼とは同じクラスなのです。故に顔を合わせれば挨拶くらい交わします。あなたよりも親しいのは当然でしょう」

私の言葉に理解が及んだのかフアラから黒い何かは消滅する。どこか怯えたような素振りもありましたが、それは気にしないでおくことにしましょう。私だって人間なので、ですから姉が愚かな発言をすれば目つきが鋭くもなるのですから。

「うー……昔はお姉ちゃんお姉ちゃんって私のあとを付いて回る可愛い妹だったのに」「そうやってすぐにだらけなくてください。それと勝手に人の過去を作らないでもらえますか。私にはそのような記憶はありません」

「ぐす……最近のセイはお姉ちゃんに優しくくない。前はもつと甘やかしてくれてたのに」

なぜ私はこれといって尊敬が出来るところがない姉にこのように言われなければならぬのでしょうか。

私の記憶が正しければ……学校がある日は毎朝のように起こしてあげていますし、親が不在の時は料理や掃除も私がしているのです。それに今日のように聞いても何の面白みのない恋愛話に最後まで付き合おうとしているのですから……十分に甘やかしていると思うのですが。

「ああー暑かった。毎日のように思うことだけど、やっぱり日本の夏は暑いね」

「はいはい、話はちゃんと聞いてやるからまずは空いてる席に座れ。入口で止まるのは邪魔になる」

「む……そうやっていつも子供扱いする。そんなこと言われなくても分かつてるよ」

と、不意に声が聞こえた。喫茶店に居るのだから普段なら聞き流すところですが、聞こえてきた中に先ほどまで話題になっていた人物の声が混じっていただけに、私とフアラの視線は自然とそちらに向く。

やはり夜月のようですね。まあ同じ街に住んでいるのですからこういうこともありえるでしょう。隣に居る少女は見たことはありませんが。

雰囲気的に夜月と小柄な黒髪の少女はそれなりに親しい間柄のように思える。個人的に少女の顔立ちは夜月と似ている部分があるように思える、似ていないと言われれば

似ていないとも言える。髪の色や背丈の違いで見れば兄妹のように見えなくもないが……。

「何なのあの子……ちよつと夜月さんと距離感近いんだけど」

フアラの機嫌が凄まじく悪くなっていることから察するに妹という線は捨てるべきだろう。恋する乙女なだけに特定の人物が関わる判別に関して私よりも上なのだから。

夜月達は私達の居る席から見ようと思えば見える席に腰を下ろし、店員にそれぞれ注文する。

「シヨウ、今日も楽しかったね。明日はどこに行こつか？」

「今日はまだ終わってないし、明日のことは明日決めればいいだろ」

「今の内に決めてたら明日の時間を有効に使えるんじゃない……もしかして、明日はシュテル達と何かあるの？ それともなのはちちゃん達？」

「高町の名前を出した瞬間に表情を変えるのやめてほしいんだが。何度も言ってるが別に俺はロリコンじゃない」

店内には夜月達の他にも客が大勢居るので何を話しているのかまでは聞き取ることには出来ない。けれど私は夜月と挨拶程度ではあるが会話をする機会があるだけに、普段よりも楽しそうにしているのは分かる。

「ねえセイ……あの子、夜月くんのこと下の名前と呼んでたわよね？」

「私はよく聞こえませんでしたからその問いには肯定しかねます」

「呼んだのよ。しかも……くん付けとかじゃなく呼び捨てで。あの子何なのかしら……今日も楽しかったね？ 明日はどこに行こうか？ まるで毎日のようにデートしてますって発言してるんだけど」

この人の耳はいつたいたいどうなっているのだろうか。店内には夜月達より格段に大きな声で話している客も居るといふのに……。

まあ……それはどうでもいいとして、私は一足先に帰ってはダメでしょうか。正直今のファアラの相手はこれまでの経験から面倒な状態にあると判断できるだけに相手したくありませんし。

「そういう割には……結構なのはちゃん達と仲良くしてるみたいだけど？ あの子達が良い子なのは付き合いの短い僕でも分かるけど、小学生に色目を使うのはどうかと思うなあ」

「いつ俺があの子達に色目を使った？ ……まあお前みたいにこういうことを言ってくる奴よりはあの子達の方がマシではあるが」

「なっ……僕だってシヨウミたいにすぐ意地悪なことを言う子よりあの子達の方が良いよ。そういう性格だから未だに彼女のひとつも出来ないんだ！」

「彼氏が出来たことない奴に言われても全く心に響かないんだが」

何やらケンカが始まったようにも思えますが……私の姉にはイチャついていようにはしか見えていないようですね。どんどん表情が険しくなっていますし、本気で先に帰りたくなってきました。ただ普通には帰ることは出来ないでしょう……夜月に押し付けられればチャンスはあるかもしれません。

あとでフアラから何か言われる可能性はありますが、夜月と話せるチャンスを作つてあげたことになるのですから文句ばかりは言われなくていいでしょう。そのチャンスを活かさずに終わった場合は泣きながら怒られる気がします、それで今回の恋が終わればそれはそれで収穫はあります。黒いフアラが出て来なくなるわけですし。

……と考えるところではありますが、私は誰よりもフアラという人間を知っています。迂闊な行動をすれば今よりもさらに面倒なことになりかねません。そう考えると聞き役としてこの場に居座ることの方が無難勝つ賢明な判断のように思えます。

「ねえセイ、あの子は夜月くんの何なのかな？」

「私を知るわけじゃないでしょう」

「だよね。セイが知らないんなら彼女つて可能性は低いだろうし、同じ学校の子でもないよね。あれだけ夜月くんに馴れ馴れしく接してるなら学校では目立つはずだし、というか私が知らないわけないし……スタークスさん達の関係者？　でも髮色的に姉妹つて感じじゃないわよね。本当あの子何なの？」

私からすればあなたの方が何なのとりたいのですが。現状ではあちらの黒髪の子の方が夜月と親しいのは明確。対してファラの方は挨拶さえ交わしたことがないと言っても過言ではないのですし。

「もしかして他校の子？ まあ夜月くんはカツコいいし、他校の女子が目を付けてもおかしくはないけど……でもパツと出てきた……しかもどの馬の骨とも分らない小娘が夜月くんに馴れ馴れしくするのはおかしいわよね」

「ファラ、さすがに話したこともない相手をそこまで貶すのは人としてどうかと思うのですが……」

「え？ 別に貶したりしてないよ。私はただ自分の気持ちを素直にセイに言ってるだけだもの。別にあの子に対して言ってるんじゃないわ」

あの子から全く視線をずらすことなく言われても説得力がないのですが……。

というか、この短時間でファラの中の何かが1段階進化したように思えてならない。ああ……なぜ私はこんな姉を持つてしまったのだろう。こんな姉と一緒に恋愛というものが良いものとは全く思えてこない。

「ああもう、ほんとシヨウつてあれを言ったらこう言うよね。僕はまだ従妹だから良いけど、他の子にもそんな風にしてたら嫌われるよ」

「安心しろ、相手によって言葉は選ぶ。ここまですつちやけて言うのはお前やシユテル

達くらいだ」

「……何だろう、親しい関係だって言われてるんだらうけど素直に喜べない」

何やら元気に話していた少女が大人しくなったように思えますが……赤面はしていないようですし、少なくとも夜月が齒の浮くような言葉を言ったわけではないようですね。

もしもそんな言葉を言っていたなら……私は何も言わずにこの場を去る。姉が周囲に迷惑を掛けるだろうとか、あとで姉があれこれと言ってくるだろうと思いますが関係ありません。私は私の身を守るためにこの気持ち大切にします。

「まあいいや。じゃあ明日も暇だったなら今日みたいに僕と一緒にどこかしらのシヨツプに行こうね。グランプリまで時間もなくなってきたるし」

「はいはい、分かった分かった」

「やる気が感じられないんだけど！ もう……少しは僕がカッコいい従兄だって言えるようになってよね」

「あんなユウキ……俺は自分を偽らない」

「言葉自体はカッコいいけど、今回の場合はカッコ悪いから！」

少女の元気が戻ったようですが、怒っているように見えるだけに……私にどう見えたところでフアラからすれば結果は等しい気がします。あれこれ考えるだけ無駄な気さ

えしてきました。心を空にして流れに身を回せるほうが楽かもしれません。

そう思いながら意識をフアラへと戻すと、そこには先ほどと打って変わって表情の和らいだ彼女の姿があった。いったいどうしたというのだろうか……。

「うん？　どうかしたのセイ？」

「いえ……大分落ち着いたように見えたので」

「ああうん、ちよつと取り乱してたもんね。でももう大丈夫だよ。あの子、夜月くんの従妹みたいだし。従妹ならあの距離感でもおかしくないよね……まあ私の見る限り、一方通行な気持ちがありそうだから要注意ではあるけど」

私は別に悪くないのですからその笑っていない笑顔を向けなくてください。というか、そこまで人の気持ちを理解できるのならもつと違う方向で使ったらどうなのですか。そうすれば夜月との関係にも変化はある気がするのですが。

「そういうえば……シヨツプに行こうだとかグランプリだとか言ってた気がするけど、いったい何のことなのかな？」

「それは……多分プレイブデュエルというゲームに関するのだと思います。夜月はそのゲームの関係者に知り合いが多いと耳にしたことがありますので、イベントの手伝いなどをしてもおかしくないでしょうし」

「なるほど……ねえセイ、そのゲームって誰でも出来るのかな？」

「出来るのではないですか。子供から大人までやっているそうですし……もしや」

「うん、そうだよ！ 私もそれをすれば夜月さんと共通の話題が出来るわけだし、そうなれば関係も進展しやすくなるよね。学校で偶然そういう話をしてるところに混じって行ったり、シヨップで偶然会ってそれで……えへへ♪」

何を想像しているのか分かりませんが、おそらくあなたが今考えているような展開にはならないと思いますよ。というか、今すぐその恥じらいのある笑顔やめてください。この流れで見ると最高に不快です。

「よし、そうと決まれば明日から私達もシヨップに行くよ！」

「いやいや、何が決まったのですか？ そもそも、何故私まで一緒に行くことになっていくのですか？」

「だってセイ暇でしょ？ 付き合ってる男の子とかもいないし」

実際に交際している相手はいませんし、明日は予定が入っていないので否定はできません……が、それでもこの愚姉に言われるのはムカつきます。

とはいえ、ここでひとりで行けと言ったところで1日中行こうと駄々をこねられるのが関の山。それにひとりで行かせることに成功してもそれが原因で人様に迷惑でも掛けられたら……。

「……分かりました。ですが行くのはやることをやってからですよ」

「うん、もちろんだよ。ありがとうセイ、大好き！」

「分かりました、分かりましたから暑いので引っ付こうとしないでください！」
「姉妹のスキンシップなんだから照れなくても」

「別に照れてなどいけません。単純に鬱陶しいだけです」

第33話 「王さまと一緒に」

ブレイブデュエル正式稼働後初の大型イベント《ブレイブグランプリ》の開催は日に日に近づいてきている。まだ時間的には余裕があるけど、優勝候補はデュエリストの筆頭であるシユテル達のチーム《ダークマテリアルズ》だろう。

私達もアマタさん達との特訓のおかげで力量は付いてきている。でも私達は常に全力全開でデュエルに臨んでる。多分はたから見た場合、シユテル達みたいに余力があるわけじゃない。ヴィータちゃんが率いる八神堂の人達も強者揃いだし……今のままじゃきつと優勝には届かない。

「うーん……どうやったたら今よりももっと上手くなれるかな」

私のアバターカードはシユテルと同じセイクリッドタイプ。他のアバターよりも火力と防御力に優れてる。そこを活かせるように日々デュエルに励んではいるけど……最近は何となく悩んでるというか、みんなと比べるとあまり成長出来てない気がする。

フェイトちゃんやアリシアちゃんは前々から頼りになる存在だったし、私よりも経験があるから実力が上でも不思議じゃない。でもアリサちゃんやすずかちゃんとは同じ日に始めた。ただどこも最近のふたりの成長は……特にアリサちゃんの成長の速さは

タイプの違いから見ても目を見張るものがあるんだよね。

聞いた話じゃ頼れる先輩に面倒を見てもらってることだけ……それって絶対シヨウさんのことだよ。私達の周りでアリサちゃんと同じフエンサータイプってシヨウさんくらいだし。それにシヨウさんの実力なら的確なアドバイスをしてくれるだろうからアリサちゃんの成長速度も納得できる。

「……………何かもやもやする」

チームメイトとしてアリサちゃんの実力が上がるのは喜ばしいことだ。

でも……その何ていうか……アリサちゃんだけじゃなくないかな。私だってシヨウさんとデュエルしたいし、手取り足取り教えてもらいたいのに。

——って別に手取り足取りといっても別に変な意味じゃないからね。そその丁寧な教えてもらいたいわって意味であって直に触れ合いながらみたいなことでは全くなく……！

「……………何を百面相しとるのだ？」

「にやッ!？」

聞こえた声に反射的に反応すると、そこにはどことなく呆れた顔をしたディアーチェの姿があった。日頃は制服姿を見ることが多いけれど、今日の服装は落ち着いた感じの私服だ。だけど今の私はそんなことを気にしている暇はなく……

「デデダイアーチェ、いつからそこに!」

「今しがただが……何をそんなに慌てておるのだ? 顔が赤いようだがもしや熱でも

……」

「ううん、大丈夫! 大丈夫だから心配しないで!」

シヨウさんとあんなことやこんなことをしたいな、みたいに考えてたとか言ったら絶対にダイアーチェから真昼間から何を考えておるのだ! って怒られる。というか、それ以前に恥ずかしすぎてそんなこと言えるわけがない。

「なら良いが……本当に大丈夫なのだな?」

「う、うん」

「そうか、ならばこれ以上は何も言わぬことにしよう。だが今後外出中に体調が悪くなったなら迷わず周りを頼るのだぞ。貴様が倒れた方が周囲の者は心配するのだからな」

私達と比べると尊大な口調で話すダイアーチェが王さまといった愛称で呼ばれて慕われるのは、きっと今みたいに周囲のことを気遣うからなんだろう。

素直じゃなさそうな一面があるように思えるけど、こういうときはアリサちゃんと違つてすんなりと言えるんだ。アリサちゃんだったら別にあんたのためじゃないんだから、とか顔を赤らめながら言いそうだし。

「今度は何を笑っているのだ？」

「ううん、別に何でもないよ。ディアーチェは優しいなって思っただけで」

「な、何を言っているのだ貴様は。別に我は優しくなどしておらぬ。優しいというのは貴様のことをいつも心配しておるくろひよこのような者のことを言うのだ！」

くろひよこつて確かフェイトちゃんのことだよ。確かにフェイトちゃんはいいつも自分よりも周りを気遣うから優しい。

でもディアーチェも優しいと思うんだけどな。アマタさん達との特訓だつてディアーチェがお膳立てしてくれたからスムーズに進んだようなものだし。けどこれ以上言うど怒りそうだからやめておこう。

「確かにそうかも……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～、ディアーチェがひとりつて珍しいね。何か用事でもあるの？」

「いや別に用事と呼べるようなものはない。今日は単純にひとりの時間を過ごしておるだけだ。同じ場所に住んでおったり、同じ学び舎に通つてはおるが、我らにもそれぞれの付き合いや趣味といったものはあるからな」

「そっか、それもそうだね」

「貴様こそ何をしておるのだ？ そちらも珍しくひとりのようだが」

「まあ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～簡単に言えばディアーチェと同じかな。アリサちゃんやすずかちゃんは習い

事があつたりするし、フエイトちゃん達はお店の手伝いがあつたりするから。だから私は翠屋に行つてまつたりと過ごしながら今日の予定を考えようかなつて」

自分の家で考えてもいいけど、家に居るとお兄ちゃんやお姉ちゃんや劍の修行をしなかつて誘つてきたりする。昔から度々教わつてきたから嫌ではないけど、今は迫りつつあるブレイブグランプリのことを優先して考えたいのが素直な気持ちだ。

とはいえ、翠屋が忙しそうなら手伝おうかなとは思ふけど。翠屋の手伝いをするのは嫌いじゃないし、翠屋の娘でもあるしね。今はまだはつきりとは分からないけど、将来的に翠屋を継ぐことは十分にありそうだから手伝いをして損はないから。

「貴様も翠屋へ行くのか。ならば我と同じだな」

「え……ディアーチェも？」

「その意外そうな反応は何だ？ 我とて喫茶店のひとつやふたつ行くことはある。まあ行くとしても翠屋ばかりだがな。桃子殿の作るお菓子はこの街でも別格の美味さ故……」

そういう風に言つてもらえるのは娘として嬉しく思うけど、他にも美味しいお店はたくさんあると思うんだけどな。まあディアーチェはグランツ研究所の台所を任せられてるし、それに見合つた腕前があるから味覚も私より優れてるのかもしれないけど。

「じゃあ一緒に行かない？」

「貴様とか?」

「だってあんまりディアーチェとこうして話したことってないし、せつかくの機会だから色々と話してみたいんだけど……ダメかな?」

「む……まあ目的地も一緒だからな。別に構わん………こやつ、シユテルとはあまり似ておらぬと思っておったが、頼みごとをする時の目遣いは似ておるのだな」

「何かブツブツ言ってるみたいだけど?」

「気にするな。ひとりで過ごそうと思っておった心を切り替えておっただけだ。他意はない」

ディアーチェの場合、別に自己暗示みたいなことしなくても気持ち切り替える気がするけど……本人が他意はないって言ってるんだから信じるべきだよ。陰口を叩くようなことをした覚えはないし、ディアーチェは陰口を叩くような性格でもないんだから。

そう思った私はそれ以上ツッコむことはせず、ディアーチェと一緒に歩き始めた。制服姿ばかり見てきたので私服姿のディアーチェはやっぱ新鮮に思う。でも何ていうか、はやてちゃんを着てそうな服だから見慣れてると言えば見慣れているような……。性格はともかく、ふたりって見た目はそっくりだよ。

「先ほどから何やらこちらを見ているようだが、我の顔に何か付いておるのか?」

「う、ううん……制服着てる印象が強かったからちよつと」

「ふむ。別に制服でも良かったのだが……まあ偶にはな」

「偶について……学校がない日は制服は着なくてもいいと思うんだけどなあ。ディアーチエだって可愛い服着たいと思うでしょ？」

「べ、別に可愛くなくても……まあ周囲の目を気にしないわけでもないが。とはいえ……私服で街をうろついて小鶯にでも会おうものなら」

目に見て分かるほどげんなりするディアーチエを見ると、彼女の考えていることが嫌でも想像できてしまう。

はやてちゃんって私とかにはそうでもないけど、一部の人にはお茶目な一面を出すよね。具体的に言えば、ディアーチエとか……あとはショウさん。……前から交流があるのは分かるけど、あの距離感で話すのは女の子としてどうなのかな。兄妹みたいなものだって考えれば納得できなくもないけど、はやてちゃんを見ている限りお兄ちゃんとして見ている気はあまりしないし。

「あはは……はやてちゃんもディアーチエともっと仲良くなりたいたいんだと思うよ」

「それは分かっている……が、あやつの接し方は過程を飛ばし過ぎであろう。この国には親しき仲にも礼儀ありという言葉があるのだから、もう少し段階を踏んで距離を詰めるべきなのだ」

「言うとおりだとは思うけど……」

はやてちゃんも八神堂の店長をしているとはいえ、年齢的には私とそう変わらないんだよね。

だから誰かに甘えたいとか、スキンシップを取りたいという気持ちは分かるわけ……私も割とみんなとの距離感近い気がするし。まあはやてちゃんみたいに突発的に抱き着いたりはしないけど。

このままディアーチエの愚痴を聞いてあげてもいいけど、せつかく一緒に居るんだからもつと別なことを聞きたいな。例えばブレイブデュエルのこととか……あとはシヨウさんのこととか。昔から付き合があるらしいし……よし、それとなく話を逸らして行こう。

「えつと……聞いてて思ったけど、ディアーチエって私よりも日本語にうるさいというか詳しくそうだよ。私とか親しき中にも礼儀ありって言葉は知ってても、すんなりと口から出てくることはあまりなさそうだし」

「私もあまり使おうとは思わんがな。四字熟語やことわざを頻繁に使って話す者を好む者はそうはおらんだろうし。まあ貴様よりも日本語に詳しいのは認めるがな。飛び級しておるとはいえ、我は中学生だ。小学生の貴様より詳しくなければ笑われてしまう」
確かに小学生よりも勉強ができない中学生というのは一般的にはないだろう。た

だ年々勉強する範囲とか変わってるらしいし、一部分なら話は違ってくるのかも。

ただ……たとえディアーチェと同じ学年だったとしてもテストで勝てる気はし
かな。理系はともかく文系はあまり得意じゃないし。

「それもそうだね……でも確かディアーチェとかシユテル達って留学生なんだよね？」

会った時から今の感じだったから疑問に思わなかったけど、改めて考えると日本語上手
だよな」

「まあ我やシユテル達は幼い頃はシヨウの叔母君……レーネ殿というのだが、その方に
色々と教わって育ったからな。今ではないに等しいが……あの頃はレーネ殿が空いて
おらぬ時はシヨウにもあれこれと聞いたものだ。最も聞いておったのはシユテルだっ
たような気がするが……何だその顔は？」

「え、いや……その、ちよつと羨ましいなと思って。お母さんから聞いた話なんだけど、
私も小さい頃にシヨウさんとかシヨウさんのご両親に会ってたらしいんだけど、そのと
きの記憶が全くなくて」

「それは無理もない話であろう。我とて覚えておるのは物心をつけてからのことだけ
だ。それよりも前に会ったと聞いたことはあるが私の記憶にはない。シヨウならば覚
えておるかもしれないが……物心をつく前の話なぞ聞いても恥ずかしい思いをするだろ
う。聞こうとは思わん」

た、確かにお母さんから聞いた話だと私はシヨウさんのお、お嫁さんになるとか言つてたらしいし……シヨウさんと年齢差を考えると、下手したらまだオムツとかしてる時の私を見られてる可能性もあるんだよね。そのときの話なんて聞いたらその場に留まつていられる自信ないよ。

「うん……とは言つても個人的に気になりもするんだけどね。シヨウさんとはなんだかんだで顔を合わせる機会もあるわけだし。昔の話をされたときに分からないのもね……どうせ話すのなら楽しく話したいし。それに……みんなの居る前でお母さんから突然バラされると慌てそうだから」

「ふむ、一理ありはするが……それにしても、貴様は……その、なんだ」

「何？」

「い、いや……別に何でもない。気にするな」

「えー、そういう風に言われると逆に気になっちゃうよ」

これがシヨウさんに絡んでる時のシユテルやはやてちやんだつたら……触らぬ神に祟りなしということに気にしないでおく。

でもダイアーチエつて一部を除けば割と何でも言いそうな感じがするし、言い淀まれると気になるのは当然だよ。言い淀むつてことは人を喜ばせるような言葉ではない可能性もあるけど……

「ええい、なぜ抱き着いてくるのだ。我はちびひよこやくろひよこではないぞ！」
「にやはは……ごめん、つい」

「つい、ではない。まったく……人懐っこいことは悪いことではないが、もう少し相手を選ばぬか。……もしや貴様、異性にもそのような振る舞いをしておるのではなからうな？」

「し、してないよ！ シュテルやはやてちゃんみたいにシヨウさんに抱き着いたりできないもん。……恥ずかしいし」

その……してみたくないのかと言われたらしてみたいとは思っちゃうけど。シュテルやはやてちゃん達が抱き着いてるところを見たら何ていうかもやっとした感じがしたり、羨ましいみたいいな気持ちが芽生えなくもないけど。

でもシヨウさんとは顔を合わせるだけで緊張するときはするし、優しくされたりすると顔が凄く熱くなるのが現状。触れ合ったりしたら……考えただけで恥ずかしくて死にそうだよ。嬉しくもあるけど。

「……誰もシヨウとは言っておらんのだが？」

「え、いや、その……!？」

「貴様……前々から思っておったが、シヨウのことを、すすす……好いておるのか？」
「ななな何言ってるの!? べ、別にシヨウさんのことをそんな風に思ってるんか……」

ブレイブデュエルを教えてくれた人だから身近な人ではあるし、好きかと言われたら好きではあるけど。そういうディアーチェだってシヨウさんのこと好きなんじゃないの？」

「なっ——貴様の方こそ何を言っておるのだ!? 別に我はシヨウをそのような目で見ておらぬ。昔から付き合ひがあるが故に親しいのは認めるが、断じて勘繰られるような仲ではない」

「いやいや、勘繰られる仲だと思ふんだけど。割かし言動にシヨウさんのこと分かつてますよ感があつたりするし。まあ昔から付き合ひがあるから性格を分かつてるだけかもしれないけど……どうでもいい相手のことを考えて顔を赤くしたりするかな。」

「何だその疑つておるような目は。仮に、仮にだがもし貴様の思ふようなことが現実であつたとしても貴様には関係のない話であろう。別にシヨウのことをどうとも思つてないと言つたのだからな！」

「それは……! ……そうだけど。……ねえディアーチェ、これ以上この話をしたところでお互い得はしないし、翠屋も見えてきたから別のことを話そうよ」

「うむ……せつかくシユテルや小鴉らがおらんのだ。ゆつくりとした時を過ぎすとしよう」

第34話 「憧れの人」

「……何度食べても素晴らしい味だ」

と、目の前に座っているディアーチエが口にする。

ここに至る経緯を説明すると、私とディアーチエは翠屋に到着してそれぞれ注文をした。まあ飲み物が違うだけで頼んだのはお互いシュークリームなんだけど。お母さんのお菓子は何でも美味しいけど、やっぱりシュークリームが1番だし。

「ディアーチエもそんな風に頬を緩めて食べるんだね」

「む、人の食べている姿をあまり見ると……というか、貴様は私の事を何だと思っておるのだ。確かに同年代よりは料理ができると自負はしておる。故にそれなりに味覚も優れていると思うが、我よりも優れた腕を持つ人間は世の中に五万と居るのだ。まあこれほど美味なシュークリームを作れるパティシエはそうは居らんだろうがな」

「そこまで褒められると……何か娘として恥ずかしいね」

「何を恥ずかしがることがある。桃子殿は母親としてもパティシエとしても優れたお方ぞ。誇っても良いくらいだ……私の母君もあのような方であったなら」

何だか頭を抱えてるけど……ディアーチエのお母さんって悪い部分でもある人なの

かな。ディアーチエの性格的に言葉遣いはあれかもしれないけど、良いお母さんな気がするんだけど。

「会ったことはないからあれだけど、私としてはディアーチエのお母さんだから良いお母さんな気がするよ」

「いや、まあ……良い母君ではありはするのだが。その、なんだ……意外とユーモアに溢れる人でな。顔を合わせる度にシヨ、シヨウとの関係は進んでおるのかなどと聞いてくるのだ」

「それは……うん、大変だね。私も何となく分かるよ。私のお母さんもたまにだけとそういうこと言ってくるし」

「ふむ……母親というのはどこも似たようなものなのかもしれないな。子供の恋愛にすぐ首を突っ込みたがる」

まあ義理とはいえ将来的に自分の子供になるわけだから気になるのは分かるけどね。ただ私達はまだ結婚とかできる年齢でもないんだから首を突っ込むのは早いと思う。

その……誰かと付き合い始めたりしたらアドバイスとかほしいけど。その前に仲良くなるためにどうしたらいいのかって相談に乗ってほしいとも思うけど。

「そうだね。でも……私はお母さんみたいになりたいって思ったりもするよ」

今言っていたように子供の恋愛に首を突っ込むような発言をする親にはなりたいた

は思わないけど。でも自分が母親になったりしたら気持ちにも変化はある気がするし、そのときになってみないと分からないかな。まあまだ時間はあるんだし、今は深く考えないようになろう。

「まあ子供が親に憧れるのは無理もない話だからな。基本的に良い親であれば尚更……我には母君以外にも目標としたい方が居たりもするが」

「え、だれだれ？」

「そこまで食いつかれると逆に話しにくいのだが……まあいい。我が母君以外に目標としておるのは明華殿だ。貴様は昔の記憶はあまりないと言っておったから補足するが、明華殿というのはシヨウの母君だ」

シヨウさんのお母さん？ ……小さい頃にシヨウさんだけうちに来るってことはないだろうし、多分会ってるんだろうな。シヨウさんとの記憶も忘れてるだけに明華さんって人の顔もまったく分からないけど。

「へえ……ねえディアーチェ、シヨウさんのお母さんってどういう人なの？」

「簡潔に言ってしまえば……」

そのとき、店内に客の来店を知らせるベルが響いた。別におかしなことじゃないので私は気にしなかったけど、向かい側に座っているディアーチェは入口の方を見たまま固まっている。

シユテルやはやてちゃんでも来たのかな、と考えもしたけど、ディアーチェの顔を見る限りそのふたりではないようだ。もしもそのふたりならここまで驚いた顔はしないだろう。

振り返って確認してみると、そこにはひとりの女性の姿があった。

肩に掛からない程度に整えられた綺麗な黒髪、作り物なんじゃないかと思うほど整った顔立ちと鋭さのある目は人の目を惹きつけるのと同時に近寄りたがたい雰囲気を出している。背丈は長身ですらつとしていてるけど、女性の象徴的な部分はきつちりと出ている。黒のジャケットとパンツスタイルということもあって、女性だけど実にカッコいいと思える人だ。

「あまり人が居なさそうな時間帯に顔を出したつもりだが、そこそこ繁盛しているようだな……ん？」

こちらの視線に気が付いたのか、黒髪の女性の視線が私達の方へと向く。睨まれるのではないかと思つたのもつかの間、彼女は逆に優し気な笑みを浮かべた。クールな外見も相まって破壊力抜群である。きつとギャップというのはこういうことを言うに違いない。

「誰かと思えばディアーチェか。こうして顔を合わせるのは久しぶりだが……やはり子供の成長というのは早いものだな。前に会った時よりも綺麗になった」

「え、えつと……きよ、恐縮です」

「何をかしこまっているんだ。他人行儀な間柄でもないだろうに」

そう言つて女性はディアーチエの頭を撫でる。私の知るディアーチエなら恥ずかしかつてやめてほしいと騒ぎそうなところだが、今回に限つては赤面はしてるけどされるがままになつてゐる。いつたいこの人は誰なんだろう？

「おや……ああ、なのはちゃんか。久しぶりだね」

「えーと……あの」

「その様子だと覚えてはいないか。まあ無理もない、私がなのはちゃんに会つたのはずいぶんと前のことだからな。私は夜月明華、よろしく」

「あ、高町なのはです。こちらこそ、よろしくお願いします」

頭を下げるのと同時にある考えが頭を過ぎる。

あれ……明華つて名前どこかで聞いたような。それもほんの少し前に……それに夜月。もしかして……もしかしてだけど、この人つて……。

「まままさか、シヨウさんのお母さん!？」

「うん？ 確かに私にはシヨウという息子がいるよ」

「あ、あの……いつもシヨウさんにはお世話になつてます!」

なななんどこんなところにシヨウさんのお母さんが居るの!？」

いやいや、前にシヨウさんがシヨウさんのお母さんは私のお母さんと友達だ……みたに言ってたよね。って、冷静な自分が居るのがまだ救いと言いますか……。

というか、シヨウさんのお母さん綺麗過ぎるよ！

シヨウさんはディアーチエ達みたいに飛び級してないはず。……これが中学生の子供が居る母親なの？ 私のお母さんもいつまでも変わらないね、とか言われるし、フェイトちゃん達のお母さんとかも若いけどさ。シヨウさんのお母さんはその中でもトツプなんじゃないかな。シヨウさんを産むのが早かっただけかもしれないけど。

それにしても……何でか直視できない。

緊張してるのはあるけど、それ以上に顔立ちとかにシヨウさんと似てるところがあるせいとか何とも言えない気持ちになる。それを抜いても普通にカッコいいし。カッコよさがなくても綺麗というか……自分が何を考えてるのか分からなくなってきた。

「ふふ、そんなに固くならなくて構わないよ。まあ礼儀正しい子は嫌いじゃないがね」
そう言つて明華さんは私の頭を優しく撫で始める。お母さんとかに頭を撫でてもらうことはあるけど、それとは違って……でもどこか似てて気持ちが落ち着く。明華さんもお母さんもパティシエだから香りが似ているのかもしれない。

「あら……明華じゃない。久しぶりね、急にどうしたの？」

「久しぶりだな桃子。どうしたと言われてもな……仕事でこつちに来ているんだが、少

し時間が空いたから立ち寄っただけさ」

フロアに顔を出したお母さんが会話に入ってきたこともあって、明華さんの手は私の頭から離れる。名残惜しい気持ちがないわけじゃないけど、明華さんが会いに来たのはお母さんだろうし、私には私のお母さんが居るんだから何も言ったりしない。

「というか……いま口に出したりしたらお母さんがいじけるか、もしくははからかってくるに決まってる。ただでさえ、最近はず〜ショウさんの名前を出してなのを弄ってくるし。あまり自分からボコを出さないようにしないと。」

「そうなの。ふふ、たまに電話とかで話してはいるけど顔が見れて嬉しいわ。……ちよつと？せたんじゃない？」

「痩せたんじゃないが暇を見つけて少しやっているからな。前よりも自分の時間が持てるようになったから、昔ほどではないが暇を見つけて少しやっているからな」

「ならいいんだけど……やり過ぎて昔に逆戻りしないようにね」

「私も昔ほど若くはないし、今や中学生の息子が居る母親だ。そのうえ仕事だつてあるんだから逆戻りできるほど体は苛められんさ」

お母さんや明華さんは普通に話してただけなんだろうけど……何ていうか、私の目からすると明華さんとはかくお母さんはいつもより若く見えるような。雰囲気的にお母さんって感じよりも明華さんの友達って感じが強い気がするし。

「本当かしら?」

「疑われるのは少々心外だな」

「そう言うけど、シヨウくんは今こつちでレーネさんと暮らしてるでしょ。明華の旦那さんがどういいう人か知ってはいるけど、明華の能力を考えると彼ひとりくらい問題ない気がするし……まあそんなことよりシヨウくんとの仲の方が心配なだけだ」

え……シヨウさんと明華さんの仲って悪いのかな。前にシヨウさんが明華さんの話をしてた時はそんなに嫌そうな顔はしてなかったというか普通に話してたと思うけど。

「シヨウくんとはもう会ったの?」

「いや会ってはないし、会う予定もない」

キツパリ言っちゃった!」

私はシヨウさんのこととか明華さんのこととかまだ知らないところはたくさんあるけど、でも普通離れて暮らしてる子供とは会いたいと思うのが親なんじゃないのかな。明華さんの表情まったく変わってないというか、至って冷静なだけだ。

「あなたね……こつちに顔を出してくれるのは嬉しいけど、昔と違って今は別々に暮らしてるんだから時間があるなら会いに行くべきでしょう」

「桃子の言うことも一理あるが……日本でレーネと暮らすと決めたのはあの子だ。それにあの子ももう中学生、他の同年代よりは反抗的な性格はしていないと思うがそれでも

年頃だ。あまり構い過ぎるのはかえって煙たがれるだろう」

「それは……」

「心配するな。今度またこっちに来るつもりだ。そのときは今回と違ってゆつくりと出来るはずだ。あの子とはそのときにちゃんと話すさ」

明華さんの浮かべたクールだけど優しい笑みを見れば、シヨウさんのことを大切に思っているのは十分に理解できる。お母さんも安心したのか、時間があるのならゆつくりしていつてと言つて仕事に戻つて行つた。

「さて……なのはちゃんにディアーチエ」

「は、はい！」

「な、何でしょう？」

「私は今日中に飛行機に乗らなければならぬわけだが、それもまだ時間がある。ひとりで過ごしても良いのだが……最近の息子のことも知つていそうなふたりとこうして出会えたわけだ。よければ相席させてもらいたいんだが？」

私としては断る理由もない。むしろ私の知らないシヨウさんのこととかを聞けるチャンスでもあるし、今後また顔を合わせることもあるだろう。

ディアーチエも同じ判断に至つたのか、私達は顔を見合わせるのと同時に視線を明華さんに戻して肯定の返事をする。明華さんは笑顔でありがとうと言いながら空いてい

る席に腰を下ろした。

「何やらふたりともずいぶん緊張しているようだが……まあ無理もないか。私は桃子のように話しやすい大人ではないからな」

「い、いえ別にそのようなことは。その……急だったもので何を話したら良いのかとあれこれ考えているだけですの」

「私も……何を話したらいいのかなと思っっているといますか」

「それもそうか……と言っても、さすがに私と君達とでは普段話す内容も違うだろうからな。私達の共通の話題となると……真っ先に浮かぶのはシヨウか」

シヨウさんの名前が言われた瞬間、私の顔は一気に熱くなった。デИАーチエの顔も赤くなっている。

た、確かに共通の話題ではあるけど、いくら何でも直球過ぎるというか……シヨウさんのお母さんに話せるほどシヨウさんと何かした覚えもないよ。シヨウさんとしたことなんてブレイブデュエルとかブレイブデュエルとかブレイブデュエルとか……ブレイブデュエルに関することしかやってる気がしない!?

「ああ明華殿、シヨウの話は……その、本人から聞けば良いではないですか」

「そのとおりではあるし、実際にちよくちよく電話はしている……が、あの子は必要以上のことを言おうとはしないからな。別視点からの話も聞いてみたいと思ってもおかし

くないだろう？ 特に君達ふたりの話は個人的に興味があるからね」

「どういう意味です？」

「簡潔に言えば……ディアーチエはシヨウウの許嫁にという話が出てことがあるし、なのはちゃん小さい頃にシヨウウのお嫁さんになると言っていたからかな」

「さらりとだけど強烈な一撃に私とディアーチエの顔は爆発的に赤味を増す。シヨウウさんもさらりと何かしら言うことがある人だけど、明華さんは大人の余裕もあるせいカシヨウウさんよりも格段に鋭い。」

「そそその話はすでになかったことになってはありませぬか。べ、別に我はあやつのことなど何とも……というか、貴様はそのようなことを言っておったのか！」

「何でここで私の振るの!? わ、私の場合は今よりもずっと小さい頃の話だし、小さい時って誰かのお嫁さんになるって割かし言うよ。そもそも私はそのときのこと覚えてないし！ あ、明華さんも急に変なこと言わないでくださいよ！」

「ああ、そうだね。すまないことをした」

「本当にそう思ってるのかな。何だか笑ってるような気もするし、内心ではあれこれ考えてるんじゃない……突いたら余計に大変なことになりそうだからこれ以上は言わないでおくけど。」

「あの子のこと以外で話すとなると……うーん、私はあまり話題が多くない方だからな」

「えーと、じゃあブレイブデュエルのことか」

「ブレイブデュエルか……話せなくはないが、私は開発に関わった人間でもないからね。実際にしてみたこともない。まあ機会があればしてみようとは思いますが」

「ではお菓子のことなどはどうでしょう？　私は料理や菓子作りをしておる身ですし、こやつも翠屋の娘なら手伝いをすることもあるはず。機会があれば菓子を作ることもあるでしょうし」

「それは構わないし私としても話しやすい内容ではあるが……デИАーチエはともかく、なのはちゃんにあれこれ教えると桃子からあとで小言を言われなにか心配になるな。私と桃子とでは作り方が違うものもあるだろうし」

「大丈夫です、私あんまりお菓子作らないので！」

「あのな……それは力強く言うことではないぞ」

第35話 「真夏のデート？」

は、はい、皆さんごきげんよう。

グランツ研究所の美人姉妹の妹ことキリエ・フロリアンよ。長いこと出演がなかったけど、別にサボってたわけじゃないからね。私はなのはちゃん達と違って高校生だし、グランツ研究所のお手伝いとか色々あるの。そう色々だね♪

さてさて、冗談はこのへんにして話を進めましょうか。

今日とはある休日、ブレイブデュエルが本格稼働してから初めての大型イベント『ブレイブグランプリ』も日に日に迫ってきてるわ。真夏の暑さにも負けなくらいに多くのデュエリストが今日も来るべきその日のために腕を磨いてるに違いないわね。

け・れ・ど……今日はグランプリの話じゃないの。だって私は今日はシヨウ君とデートなんだから。まあお姉ちゃんもいるんだけど、そのへんは気にする必要はないわ。だって私はお姉ちゃんと違って欲望に素直だから！

「ねえシヨウ君、お姉さんアイスが食べたいんだけど〜」

「なっ……何をやっているんですかキリエ！」

「見ての通りシヨウ君の腕に抱き着いてるだけよん」

もうお姉ちゃんだったら自分が抱き着いたわけでもないのに顔を真っ赤にしちゃって可愛いんだから。もつといじめたくなっちゃう。

それにしても……あんなに小さかったシヨウ君がこんなに大きくなるなんてね。今じゃ私が見上げないといけなくなっちゃったわ。まあ私としては小さくて可愛い子も良いけど見上げる方が好きかしら。背伸びしながらキスとか乙女として憧れちゃうし……

「そんなの見れば分かります。いいから離れてください！」

「もう、そんなに怒ってるとしわが増えるわよ」

「え、そうなんですか!? ……って、誰が怒らせてると思ってるんですか!」

そんなの私に決まってるんじゃない。けれど私としてはシヨウ君の彼女でもないお姉ちゃんからあれこれ言われる筋合いはないと思うのよね。まあ私もシヨウ君の彼女じゃないんだけど。だからシヨウ君から言われるのは仕方ないわ。言われても素直に聞くとは限らないけどね。

「アミタ、周りには人も居るんだから大人しくしてくれ」

「え、私が悪いんですか!」

「いや、悪くはないけど……アミタが反応すればするほどキリエが面白がるだけだから」
さすがはシヨウ君、お姉さんのことよく分かってるわ。お姉さん嬉しくなっちゃう。

だから……もつと強く抱き着いてみたり

「なあキリエ」

「何かしらん？」

「何でさつきよりも引つ付くんだ？」

「それは、シヨウ君がお姉さんのことよく理解してくれてるからそのお礼みたいな」

シヨウ君だつて年頃の男の子なんだから嬉しいくせに。自分で言うのもなんだけど私つて可愛いし、スタイルだつて良いんだから。つまりW・K・S……うん、そろそろ引かないと危険ね。シヨウ君の目が段々冷たくなつてきたし。正直に言うとなつとゾクゾクもしちゃうんだけど、さすがに嫌われる方が嫌だから。

「まったく……シヨウ君も恥ずかしがり屋さんね。男の子なら嬉しい状況でしょうし。ちやんとある胸だつて当たつてるんだから」

「一般的にはそうだろうがキリエみたいに毎度の如くされると何も感じなくなるんだよ。人間は慣れる生き物だからな」

「うん、ちよつと待つてくれるかしら。何だかその言い方だと私がする行為が良いものじゃなくて悪いものみたいに聞こえるんだけど」

「良いか悪いかで言えば悪いだろ」

バツサリ!?

ひ、ひどいわ……私がただシヨウ君のことを誘惑してるように見せかけてお姉ちゃん
が反応するのを楽しもうとしているだけなのに。でもこの程度で挫けるキリエ・フロ
リアンじゃないわ。

「もうひどいわねん、確かに周囲への配慮とか道徳的に悪いかもしれないけど……男と
しては悪くないでしょ？」

「いや悪いけど」

「そ、即答!」

え、な、何で……私って美人だし体って十分に魅力的よね。あんまり自分でそういう
こと言うのも正直なところどうかと思ってるけど、周囲からは可愛いだとか綺麗って言
われたりすることもあるわけだから多少なりとも自信を持っていいはず。なのにどう
してシヨウ君からは不評なのかしら……

いったい私の何がいけないのかしら……確かに普段はふざけてばかりだけど、この前
シヨウ君は私に私の良いところはそれなりに知ってるとか言ってくれたわよね。それ
に毎度の如く抱き着いたりしても本気で嫌そうにはしないというか、なんだかんだで相
手はしてくれるわけだから嫌われてはいはず。

なのにどうして……単純に私がタイプじゃない？

うーん……何故かしら心がズキズキと痛むわ。まるで昔可愛がっていた男の子から

「もう子供じゃないんだからお姉さんぶんなよな」つて言われたみたい……例えてみたけど、これは何か違うわね。冷静に考えるとこの子も思春期を迎えたんだ、とか私のこと異性として見てるのねって思いそうだし。

「お姉さん悲しい……そんな風にシヨウ君を育てた覚えはないのに」

「育てられた覚えはないからな」

「ガク……ねえシヨウ君、せっかくのデートなんだし手くらい繋ぎましょうよ。ね？」

「ななな何を言ってるんですか!? い、いいですかキリエ、そういうのはこ、恋人同士がすることです。シヨウさんとキリエはそういう関係じゃないんですからするのは風紀的にもよくありません！」

はあ……我が姉ながらこの純情ぶりは可愛さを通り越して呆れてくるわ。本当は自分だってシヨウ君と手を繋いだり、腕を組んだりしたいくせに。顔の赤さから考えるとそこを通り越して昼間から考えちやいけなレベルまで到達してる可能性もあるけど。やれやれ、基本的に素直なくせに何でシヨウ君への想いは素直に言えないのかしら。これじゃあ、いつまで経っても進展しないって言うのに。

私の見立てが正しければ、お姉ちゃんがシヨウ君を好きになったのは今に始まったことじゃないわ。あれは遡ること10年ほど前、シヨウ君がまだ物心ついた頃の話。シヨウ君と私達姉妹は一緒に遊ぶというか、私達がシヨウ君の面倒を見ていたわけだけど、

そのときにお姉ちゃんはこう言ったわ……

『わたし、おおきくなったらシヨウくんのお嫁さんになります!』

正直私も小さかったからどういいう経緯でそんなことになったのかは覚えていない。ただ主動だったのは私達姉妹でしょうからおままごとでもやっていたんじゃないかしら。それで1日中遊んでシヨウ君のことが好きになってしまったお姉ちゃんはそういうセリフを口にしたんだと思う。

まあここだけ聞けばよくある昔話になるわけだけど……お姉ちゃんは今でもそのときのことを鮮明に覚えているというか、あの頃からずっとシヨウ君のことが好きなのよね。前にそのことに触れたら過敏に反応してたし。

ああ……何て純情なお姉ちゃん。純情すぎて高校生とは思えないわ。なのはちゃんやフエイトちゃん達にこの手の話をしたときくらい大人としての余裕がないし。今まで事あるごとに背中を押してきたけど全く効果がないのよね。私のやり方が悪いのかしら……仮にそうだとしても8割くらいはお姉ちゃんに責任があるはずだわ。

「キ、キリエ……急に黙っちゃいましたかどうかしら? もしかしてお腹でも痛いんですか?」

さつきまで怒っていたのに何て優しいお姉ちゃんなの……やれやれ、もういつそのことシヨウ君から告白させるように動こうかしら。お姉ちゃんは私と違って真面目だか

らシヨウ君も邪険にはしないし、好きか嫌いかで言えば好きな方でしようから。

というか、お姉ちゃんはこんだけ分かりやすいんだからシヨウ君に察しなさいと言いたい気分ね。でもシヨウ君は別に鈍い子じゃないしお姉ちゃんの気持ちに気が付いてるんじゃない……それで知らない振りをしているとしたら、もしかして好きな子が居るということ？

……ありえない話じゃないわね。不思議なことにシヨウ君の周りには美少女が揃っているし。まあその大半は年下なんだけど……もももしかしてシヨウ君は年下好きなのかしら。でも大体の子は小学生だし、それが好きということはロリコンということに。

でもそう考えると私やお姉ちゃんに見向きもしない理由の説明は出来るわ。単純に昔から馬鹿やってきたせいで私達を異性として見ていないだけという可能性ももちろんあるんだけど。くっ……お姉さんをこんなに惑わせるなんてシヨウ君あなたって子は何てひどい子なの。

「大丈夫よお姉ちゃん、このあとのデートプランを考えていただけだから」

「なっ……私も居るんですからこ、これはデートなんかじゃありません。というか、何でそうあなたはいつもいつもそうなんですか。私の心配を返してください!」

「そっちが勝手にしたのに返せだなんて横暴ね。大体お姉ちゃんは頭が固すぎるわ。年

頃の男女が一緒に出掛けてるんだからこれはデートでしょ。ただシヨウ君が両手に華つただけで……お姉ちゃんだってデートって思った方が楽しいでしょ？」

「そそそれは……いい、いえでもデートとは本来1対1で行うものであって。……しかし、私達は知らない仲でもないですし、何より自分の中でそのように思うのは自由。ということ……ああでも！」

ほんと……お姉ちゃんは可愛いわね。お姉ちゃんを見ているシヨウ君は「今日もアミタは元気だな」くらいの顔しかしてないから可哀そうにも思えてくるけど。

というか、お姉ちゃんはシヨウ君のどこに惚れたのかしら。今では背も高くなってるし、顔立ちも男らしくなってそこそこにイケメンだとは思うけど……お姉ちゃんが好きになったのは私達よりも小さい頃。今と違って素直で可愛かったのは認めるけど、気持ちとしては弟に向けるそれになるのが普通じゃないかしら。我が姉ながら不思議だわ……

「キリエ、アミタが好きなのは分かるがあまりからかってやるなよ」

「それは無理な相談かしらん。だってこれが私とお姉ちゃんのスキンシップだから。というか、あんまりストレートにお姉ちゃんが好きとか言われると私がシスコンみたいに聞こえるから遠慮してほしいわね」

「シスコンの気はあると思うんだが……」

「な、何を言ってるのかしら。そんな根拠……」

……

……あれこれ見られてきただけには言えないわね。よくよく考えてみると、私ってシヨウ君に結構恥ずかしい姿を見られてきてるんじゃないかしら。

お姉ちゃんとかケンカしちゃってなかなか仲直りできずに泣いちゃった時とか……熱を出したときに人恋しくなつて寝るまで手を繋いでとか言っちゃった時とか。それに……

『何でキリエは花を育ててるの?』

『それはわたしの担当だからよん。正直面倒臭かったりするんだけど……』

『そっか……でもずっとやってるんだからキリエは偉いよね。それに……おれはキリエは育てた花好きだよ』

『え……』

……何であの時のことを私は思い出しちゃってるわけ!?

いや確かにあの時のことは私とシヨウ君だけの思い出ではあるけど、まだシヨウ君が小さい頃の話なのよ。身長だつて私だつて低いし。なのに何であの時の私はD・T・M

——ドキドキでトキメキがマックスなの!?

というか、何で今ドキドキしてきてるの。落ち着け、落ち着きなさいキリエ。あなた

は妖艶さが売りなお姉さんでしょ。年下の男の子に負ける女じゃないわ。

「キリエ？ ……何だか妙に顔が赤いが」

「な、何でもないわ。夏空の下、外に出てるんだから体温が上がってるだけよん！」

何で見透かしたかのように優しくしてくるの。普段は冷たいというか、無関心を決め込んだりするくせにこういうときだけ……昔から居てほしい時には居てくれる子だったけども。

ああそうよ、そうですよ……あれこれ何でお姉ちゃんが惚れた理由が分からないとか言っただけど、どこに惚れたのかなんて分かってるわ。私にとつても最も付き合いの長い男の子なんだし……

でも……私の中にあるこの気持ちはお姉ちゃんのと違う。

シヨウ君は私にとつて弟みたいな子……それは今も昔も変わらない。どんどん男らしくなっていくから私自身もその変化に戸惑ってるだけ。決してお姉ちゃんと同じ気持ちなんかじゃないわ……そう、決して。

だって私はお姉ちゃんをシヨウ君とくっつけようと考えるんだから。まあシユテル達でも良いかなって思ったりすることもあるけど、やっぱりお姉ちゃんは血の繋がった家族だしそこは鼻肩しないとね。

「本当か？」

「本日も本当よん。というか、そんなに女の子の顔を覗き込むのはどうなのかしら。あんまり覗き込むようだとお姉さんが君の唇を奪っちゃうわよ♪」

「だ〜か〜ら〜あなたは何を言っているんですかキリエ！ 私はあなたをそんな風に育てた覚えはありませんよ。というか、私の目が黒いうちはそういうことは許しません！」

「じゃあお姉ちゃんがする？」

「ななななな……し、しませんよ！ 人の目だつてあるんですからー！」

「あらん、それは周りに人がいなかったらすることかしら？」

「——っ!? キリエ、いい加減にしないと怒りますよ！」

あのねお姉ちゃん、理解が追いついていないようだから言つてあげるけどすでに怒つてるわよ。

まったく……さつきから風紀を気にするような発言をしているのにそれじゃダメじゃない。風紀お姉ちゃん《あみたん》の称号が泣くわよ。この場合は称号じゃなくて愛称かもしれないけど、まあ細かいところは置いときますよ

「怒ると可愛い顔が台無しよん」

「怒らせてるのはあなたじゃないですか。それにキリエから言われてもあまり嬉しくありません！」

「あまりつてことは少しは嬉しいのね……仕方ないわ、ならショウ君から言ってもらうことにしましょう」

「おい、さらりと人を巻き込むな」

「あら、その程度でそんなこと言つてると今日一日持たないわよ。だって今日は水着だって買いに行く予定なんだから」

「え……ちよつ、キリエそんなこと私は聞いてませんよ!?　そもそも、今日の予定は買い出しのはずです!」

「夕方までに戻ればいいんだから色々と回れるじゃない。今は夏なんだし水着を使う機会はあるでしょ。そ・れ・に……お姉ちゃんだって新しい水着ほしいんじゃない?」

「う……それは」

「ここで言葉を詰まらせたあたり、私の見立て通り去年よりも大きくなつてたみたいね。まあ私が大きくなつてゐるんだからお姉ちゃんが大きくなるのは必然とも言えるんだけど。え……どこがかって?　やくん、そんなの胸に決まつてゐるじゃない♪」

「というか、お姉ちゃん考えてみなさい。今日は合法的にショウ君を連れ回せるのよ。お姉ちゃんだってショウ君と水着を選んだりしたいでしょ?」

「そ、それは……でもとても恥ずかしいです」

「まったく……見せたいくせにへタレなんだから。まあ水着は別としても服とかだつて

一緒に見て回れるんだから色々とやれることはあるのよん」

「な、なるほど」

「というわけで……今日のシヨウ君とのデート、一緒に楽しみましょうね」